

dies in オーバーロード

ark night

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロードにおいて転移するギルドが全く別の、なりきりプレイギルドだったらどうだろうという二次創作です。

構成はプレイヤー人とNPCのギルド、その他プレイヤーは回想にのみ登場します。

転移するギルドはAnimes iraeに出てくる黒円卓裏切りチーム含めた主人公勢です。dies iraeの続編、神咒神威神楽に出てくる夜都賀波岐メンバーです。

積極的にネタばれしていきますので、むしろアニメのdies iraeをネタバレした状態で楽しみたいという方向けに書けたらと思います。もちろん、知っている方でも楽しめるようにあまり無駄に設定を語ったりはしない方向で。

なお、ナザリックの登場予定はありません。頭いい要因として誰からも忘れられていたシュピーネを登場させますので、要望があれば戦神館メンバーも出していこうかなと思っております。

どこかで見えたことがあるような未知をお楽しみいただけたら幸いです。

感想をくれると作者が大喜びします。なお、オバロのアインズ様冒険者になる編に相当する話で4人チームを組んでもらおうと思っております。主人公以外の3人の希望を活動報告の方に書き込んでもらえると助かります。

書きやすいのは櫻井一家チームか玲愛、司狼、本城の学園チームで

しょうか。これに限らず好きな組を書き込んでください。ただ戒、司
狼、マキナのホモチームはトップを取ろうが書く気はありません。

目次

プロローグ	1
第1話 戸惑い	4
第2話 取り合い	9
第3話 模擬戦	13
第4話 風呂	17
第5話 驚愕	21
第6話 会議。	28
第7話 姉妹愛	34
第8話 死者の村	41
第9話 カルネ村	48
第10話 模擬戦	58
第11話 ニグンとゾンビパニック	64
第12話 冒険へ	70
第13話 初めての依頼	80
第14話 決別と出会い	90
第15話 カルネ村の新たな装い	98
第16話 森の賢王	106
第17話 魔女の散歩	115
第18話 蜥蜴人たちと恐怖	125
第19話 蜥蜴人の男たち	134
第20話 盗賊団	140
第21話 ブレイン・アングラウス	151
第22話 ブレインVSガゼフ	160
第23話 エ・ランテルの惨劇	168

第24話	現代チート	174
第25話	ミスリル昇進	184
第26話	カルネ村襲撃	194
第27話	人類の守り手	201
第28話	天魔大戦	207
第29話	古典的推理トリック	214
第30話	パンゲアゲーム	221
第31話	ツアレニーニャ	234
第32話	裏社会崩壊の足音	241
第33話	善意と悪意の境界	248
第34話	善意のすれ違い	253

プロローグ

言わずと知れた D M M O R P G、ユグドラシルへ Y g
g d r a s i l、日本で大人気を博したそれが今日終わる。先駆け
というのはそれだけで意味を持つが、しかし時間を経れば陳腐化は免
れない。ただのありふれたものの一つとして埋もれるのだ。

……もつと綺麗なグラフィックを。

……もつと素早い反応を。

……もつと未知を。

新しいゲームが発売され、そちらに人が流れていくのは必然でさえ
あった。それゆえ人が減り、人が減ったということは収益も減り、つ
いにはサービス終了の憂き目にさえあってしまった。

「……まあ、来ねえわな」

そう呟いたのはギルド『夜都賀波岐 in グラズヘイム』の主、著作
権が切れたのをいいことに過去の作品の主人公そのままの名前、グラ
を使用してプレイしている男である。

「そりゃま、他のゲームの方が再現度高くなるだろうし？ 大体過疎
化してるゲームは面白くもなんともねえだろうさ。けど、メール送っ
たんだから最終日くらい来てもいいじゃねえか」

言っているのは藤井連そのままのグラであるが、口調はむしろそい
つの親友である遊佐司狼に近い。なりきりプレイというのものもあるが、
一人でやっても面白くないだろう。だからこれは男本来の口調とい
える。

「ま、いいや。どうせもう残りは5分だ。せつかくだから玉座に行く
か」

ここは神咒神威神楽というエロゲに出てくる敵役『夜都賀波岐』を
イメージしたギルドである。そこには詳しい見取りがないどころか、
そもそも人間が住めるようなところではない。首魁、天魔・夜刀によ
る軍勢変性により神となった者たち。

……神々の居城といえは聞こえはいいが、実態は死にかけを時間停

止で無限に引き延ばしているだけ。生理などというのは存在するはずがないだろう。神にもないだろうが。というか、普段は眠りについていないのに近くて、外敵が己の領域『黄昏』に入ってきたときのみ目覚めるような存在だ。ただ空間があるだけの場所だとしても不思議はない。

だから、ここは円卓ロー前作の *dies irae* に出てきた聖槍13騎士団の居城を模した場所。

「*Verweile doch, du bist so schön!*」

時を止めた。ワールドアイテム、時間狂いの呼び声の能力……第10階位タイム・ストップを永久展開するアイテム。もちろん、名前は全く別の元ネタである。

実のところ、強いかどうかといわれると微妙である。単に自分がロールしているだけで本質的にはユグドラシルとは全く関係がないのだ。そもそも使用にも詠唱は関係なく、ショートカットキーを押しただけだ。

藤井連の能力の本領である加速の効果は全くない。当たり前だ、それをしたければ別の魔法が要る。

「しかも、別に本当に時を止められるはずもない。ユグドラシル終了までの時間を引き延ばすことなどできるわけがないのになー」

思い出を回想する。昔は面白かった。懐古的な意味ではなく、単に強力なイベントボスを協力して倒すのが楽しかった。あの時は仲間がいた。

ああ、特に「黄金」が人気があつて一時期同じ顔が3人あつた。しかも、名前欄のところも「か」「かそれとも何もないかで、本当に区別しずらくてーしかも物理攻撃特化、範囲攻撃特化、魔法攻撃特化とガチビルドではあつてもそれぞれ違ったものだから、勘違いしやすくて。ああ

「ウィルヘルム、黄金を敬愛するお前が見間違えてどうするよ。違う方に回復アイテム投げて、その隙に落ちて……あの時は本当に大変だったな」

まあ、敬愛とかそういうのは設定だ。キャラを被ることもあれば、素で話すこともあった。楽しかった。

ただー今思えば、俺が続けていたのは幸運だったから、それだけな気もする。単純に超レアアイテムを手に入れて俺tueeして、いやガチ勢には普通に負けまくったけど。ワールドアイテムなんて貴重なものを手に入れられた、他のゲームではそんな幸運には恵まれなかった。

こいつほど熱心に遊んだゲームがほかにないから、という試行回数の問題かもしれない。本当にこのゲームそのものに愛着があったのかは疑問だ。それでも

「終わるのは悲しいな」

残り10秒。皆で一生懸命作ったNPCたちを見回る時間はない。スクショを取ってあるから、そちらで見ればいいとしても。ああ、そうだ。せつかくなら、あのセリフで締めようか。最後まででもなりきってみよう。

「時間が止まればいいと思っていた」

「今が永遠に続けばいいと思っていた」

「この日常が終わってほしくない」

「この瞬間を引き伸ばしたい」

「いつか終わると分かっている——」

「じゃあ終わってしまえばいいなんて、思うわけがないだろう」
目を閉じて。

第1話 戸惑い

「――は？」

時間は合わせた。セリフが終わるのと同時にユグドラシルは終わったはずだった。俺が見ているのは無味乾燥な自宅の壁のはずだった。なのに。

「終了延期か。まったく、つまらないことをする」

目の前にあるのは変わらず円卓の机。考えられるのは延期くらいだろう。何かトラブルがあって終了時刻が引き延ばされた。興がそがれたな、面白くない。

「興冷めだ。ああ、まったく明日も仕事があるのに――こんなやるせない気分で眠れるか。すつきりしないな、絶対」

まあ、あれだ。運営のトラブルはいつものことで、サービス終了後までプレーヤーが付き合う必要もないだろう。こんな気分だが、さつさとヘッドホンを外して寝るとしよう。

「あれ？」

感触がない。

「なんだ？ リアル側の感触をいじるのは違法だろ。なんで何もないんだ」

頭をガシガシやる。すると気付く。感触がある。もちろんヘッドホンのそれではない。髪の毛の感触、さらさらと流れるその感触は仮想現実ではありえない。というか、現実のそれとは髪型が違う、髪質が違う。触覚をいじるのは違法だし、そもそもそんな感触の再現なんてデータ量的に不可能だろう。

「……これは」

弄って違法なのは触角、そして味覚。指をなめてみると味がする――気がする。いや、指なんかには味はないだろ。アイテムボックスからポーシヨンを取り出す。血のような色の低級ポーシヨン。

「え、飲むのか。これ」

と思ったが、飲み干す。……えも言えぬ味がした。なんだ、この味。

本気で言いようがない。まずくはないーがおいしいわけでもない。本当にいわく言い難い味でリアクションに困る。とはいえ、いつものゲームとはわけが違うことは確認できた。ゲームでは単に動作するだけだ、味などない。

「これ、のんびりしてる場合じゃねえな」

まずい。とんでもなくまずい状況だ。何が何だかわからないが、通常の状況じゃない。ああ、オリジナルの藤井連は日常を大切にしているキャラだったが、彼同様に俺の日常もぶっ壊されちゃったらしい。

ここは、とにかくNPCを確認するか。仲間として使えるかどうかは重要だ。一人で複数のプレイヤーなど相手にできるものではない。基本的にNPCはプレイヤーには勝てないことを前提にビルドしてあるし、思考ルーチンは同じレベルなら勝てるくらいには単純。単純なNPCにもできるようなことをやらせたために、はつきり言ってギルド戦以外では雑魚である。つまり1対1なら勝てる。

その役目は大体三つ。一つ、デバフをばらまいて嫌がらせ。二つ、超位魔法ぶっぱ。三つ目、ただの楯。

接触するべきは一つ目だ、単純戦闘力が低い奴。ただのサポート役なのだから当然の話だが、以前NPC暴走イベントがあったことを考えるとその方がいい。そいつと一対一が適当か。ちよūdい具合に侵入者迎撃用の陣形そのままだ。変えるのが面倒でそのままにしたと言えるが。近いのは……ルサルカか。

NPCに何かあれば異常のことがわかるかもしれない、などと期待して。

「……」

無言で通路を歩く。鳥居が無限に並んでいるようで、そのままワーブゲートみたいな通路だ。黒く淀んだ部分を触ってみる。SFならこういうのは変なところに飛ばされるものだがー石の感触がした。ただのデザインでしかない、当たり前か。そして、そこにつく。

「ルサルカ、こちらに來い」

話しかけたわけではなく、ただのキーワード。NPCならキーワードで動くはず。動かないならギルド機能がおかしくなってるし、襲い

掛かってくるようなら……運営のイベントか？ 終了を延期してま
ではありえないか。

「はあい。なにかしら、レン君？ 寂しくなっちゃったのなら、あたし
が温めてあげましょうか。ベッドの中で、ゆつくりとーね」

小さな体で、それに反した薫るような性的な笑みを浮かべた彼女は

……

「ウエディングドレスう!？」

ウエディングドレスを着ていた。誰だ、やった奴。つうか、なんで
しやべれる!？ そんなくねくねしたポーズデータ実装した覚えはな
いぞ。

「あ、これハイドリヒ卿にもらったの」

あいつか、というか来てたのか。顔出せよ。よくこんなビラビラな
服をデザインできたものだ。俺なら絶対やらねえ。

「あー。で、ルサルカ。何か変わったことはないか?」

「変わったこと? うーん、ちよつと思いつかないわね。何かあった
のかしら。どいつもこいつもかわりやしないわよ。ま、シロー君なん
て何考えてんだか分ないけど」

くすくすと笑いながら答える。なんだ、こりゃ。ありえないーN
PCが受け答え? しかも、この場にはない人間まで引き合いに出し
て。そんな超高性能AIを実装したゲームなどあるはずがない。

「ルサルカ、お前。俺のことをどう思う?」

ありえないのは分かった。ならば、敵意のあるなしでも判別してお
こう。こいつらの設定は軍人だ、しかもこいつに限っては魔女。設定
通りならば、しがたいサラリーマンの身で見抜けるとも思えないが。
「え〜? レン君をどう思うか、ね。それは、えつと〜。なんていうか
〜、運命の人みたいなく」

ものすごく甘ったるい口調で言う。好きなやつは好きなのだろう
し、実際そういう声を出すエロゲのキャラは好きだった。けれど、限
りなく現実に近い“こころ”で聞くと……

「お前……勃たたねえよ」

なんとというか、きもちわるい。というか、俺自身はこいつに何もし

ていない。いや、ゲームの中で作成したか？　ともかく、好意が元をたどれば元ネタにしか行きつかない。理由のない行為など気持ち悪いだけだ。いや、元ネタ的にただやりたいただけか。

「ひどっ！　うう、レン君はあたしなんていららないんだ。愛を囁いておいてポイ捨てなのね」

さめぎめと泣き始めた。見た目は中学生といつてもいいくらいのコイツが泣き出すと、なにか悪いことをした気になってくる。というか、こいつはどっちだ？　元ネタと同じ存在なのか、それともそう振舞っている。NPCなのか。魔女という属性を考えると涙など素直に信じられはしないが。

「ああ、悪かったルサルカ。ほら、立て。調べなきやいけないことがあるんだよ」

手を差し出す。

「うん？　調べなきやいけないことって何かしら」

手を取って、ケロリと立ち直りやがった。やっぱり魔女だな、こいつ。ていうか、やべえ。握った手が超柔らかでやばいんですけど。なんかいい匂いも漂ってくる気もする。リアルじや女の影なんて周りになかったから、慣れてないんだよな。やべえ。

「……何をしているのかな、藤井君。それに、“マレウス”」

マレウス、と強調して呼ぶ。引つ掛かりを覚える。いや、設定にも書いたか。そう、皮肉で呼ぶときは名前じゃなく魔名で呼ぶ。なぜなら魔名そのものが皮肉だ。神様の呪いと言い換えてもいい。もっともルサルカに限っては大体魔名で呼ばれてたが。

「あたしはレン君に話しかけられただけよ。ちよつと仲睦まじくしていただけない。嫉妬は見苦しいわよ、ゾーネンキント」

ゾーネンキント、それは現れた彼女ともう一人……彼女の中にある人物を指し示す魔名。この彼女は氷室玲愛とイザークの融合個体である。太陽の御子などと呼ばれても、それはただの生贄。先に挙げた三つの例外、単なるロールプレイのために作ったレベル1の^{NPC}人形。というか、100レベル以外なんてあってもなくても同じだから、ギルドの余ったレベルは原作キャラ再現枠として適当に使っている。

「それで藤井君の役に立てたの？」

「うーん。それは、ねえ。これから役に立とうと思ってるの。主にベッドの中で」

「いい加減にしなさい、ビッチ。ちよつと人気が出てくるくらいで調子に乗るんじゃないわよ、今の世は処女を求めているの」

「むぐ。それを言うならあんただって処女ないじゃない」

「私のは儀式で破られただけ。藤井君以外の男に体を許したことなんかないわ。100年以上やりまくってたあなたとは違うの」

「なんですつてエ」

口論が繰り広げられる。レベル1とレベル100だが、その先輩は^{レベル1}強気だ。というか、あの姿を見ていると勝てる気がしない。そういえば、元ネタの藤井連もこの人には敵わなかった。

そして、それを見えると思います。夜都賀波岐として集まった者たちを繋ぐ絆には表と裏があった。

表――女神の世界を壊した天狗道に対する憎悪。

そして裏――藤井連に対する思慕。男もいるし、この場合は思慕と言うには恋愛感情じみていて正しくないかもしれないが藤井連の総受けなのは変わらない。そして、それは陣営が割れる原因にさえなった。

これは……もしかすると痴情のもつれで俺が刺されるかもしれない。割と切実に。リアルでは女と付き合ったこともなかったのに。

……これは、どうしよう。童貞に女の扱い方など期待するべくもなく。

第2話 取り合い

「——あなたたち、それくらいにしておきなさい」

現れたのはキリストくたばれとしか思えないほど豊満なおっぱい。でかい。ではなく、穏やかな笑顔と泣きボクロが特徴の女性。軍服のスカートには腰までのスリットがある。エロ……リザ・ブレンナー。「なによー。バビロンへ大淫婦、もしかしてあなたも狙ってるの？」

残念でした、あなたの好みと違ってレン君は生きてる系の男よ。どっちだろうが、あげないけど」

「リザ、邪魔しないでほしい。私はこのビッチをポイして藤井君とベッドとしつぽりするの」

頭が痛くなる会話だった。

「リザ、どうしてあんたがここに？」

一応はシスターと呼ぶべきかもしれないが、いやーあれはただの偽装身分だろう。この場においては正しくない。そもそも、ルサルカ以外は軍服、ナチスの親衛隊服を着ているのだから。

「玲愛が藤井君に迷惑をかけてるんじゃないかと思って」

ふわりとほほ笑むさまは、妙齢の色気を感じさせる。……とはいえ、童貞にとつてはちよつと怖い。こう、リア充的な雰囲気か溢れている。

「じゃーそのゾーネンキント連れてどっか行ってくれろ？ あたしはレン君としつぽりするから」

「あなたも、藤井君に迷惑かけないの。かわいそうに、困ってるじゃない。彼みたいな誠実な人には、あなたみたいな中古品はふさわしくないのよ」

さらりと毒を吐く。この辺は血筋だろうか。玲愛とは姉替わりで、その実曾祖母というわけのわからない関係がある。孫にはいろいろ思うところはあったようだが、今では溺愛しているー設定。

「……バビロン、言ってくれろじゃない。そっちからやろうと思ってたけど、あんたからでいいわ」

「あら？ 何か気に障ることを言ってしまったかしら。だとしたらご

めんなさい、本当のことを言ってしまった」

「……つむがー!」

ルサルカはだんだんと地団太踏みしめているが、殺気は本物だ。……いや、怖いんですけど。藤井連ならそりや普通に入って行けたかもしれないが、俺には無理だ。

「あー。その辺でやめてくれないか」

と、こんな風に言うしかない。多分、かなりの中二病が入った藤井連ならかつこよく止められたのだろうが。

「ま、その辺でやめてやったらどうだい姉さん方」

またもや乱入者。1対1で会おうとか言う話はどこに行ったのか。というか、会話についていくだけで精一杯なんだが。さすがになりきりプレイするほど好きなゲームの設定をそうそう忘れてたりしないが、しかしその設定で話すとなれば疲れる。

——女同士で争われてはなおさら。

「司狼、それと本城か」

「やつほー。おひさ、蓮君。元気してた?」

「ああ、問題ない。それで、何かー」

「何かあったか、なんて俺の方が聞きたいぜ。蓮、お前さんなんでまた境界を強めたんだよ。しかも、まだ解除してねえだろ?」

「……」

黙った。というか、それに即答できるほど賢くはないんだ、俺は。ワールドアイテムを使用し続けていたのは単に解除を忘れていたから。だが、それをどう言えればいい。まあ、こんな感じかな。

「異常があった。何か知らないか?」

「おいおい、しっかりしてくれよ。ぜんぜん、まったく大丈夫じゃねえじゃねえかよ。だが、わりいな。俺はお前の言ってる異常がよくわかんねえ」

「うん、いつも通りだと思うけど。それとも、あいつの波動が強くなった?」

あいつ? そうか、波旬か。夜都賀波岐で何かあるとすれば、それは第六天波旬のことに他ならない。だが、それは設定だぞ。ユグドラ

シルでやっていたこととは違う。だが、設定文にはそれも書かれている。こいつらの世界はユグドラシルか、それとも新座世界か……どちらだ？

「いや……むしろ逆だな。天狗道の気配を感じない」

と言っておく。実のところ、俺は天狗道の気配など知るわけもないのだが。だって、俺は藤井連などではないのだから。

「そりゃ、いったい何を言いたいんだ。蓮」

「そうね、それならなぜ広がらないの？」

広がるー藤井連は流出位階に達している。言ってしまったえば、ただ居るだけで全並行世界規模を固有結界で覆いつくしてしまう生態を持っている。意志で止めることはできない。そんなもの設定で、持っているワールドアイテムにもそんな力はないが。

「分からん。だが外を調べなければいけないようだ。……シユピーネ！」

呼んだのは形成（笑）。ブリーチで例えれば隊長格しか登場しないのに平隊員レベルの奴がいて、始解○とか言われるようなものだ。もちろん弱いーが、こいつの本領は情報収集であり、この場には適切だ。

「は、ここに。どうされましたかな、ツアラトウストラ」

来た。来るかどうか不安だった、がどうせレベル1だからどうでもいいとも思っていた。夜都賀波岐に居場所がない奴だし。外の世界は危険かもしれないが、どうせカルマ値ー100の殺人鬼だ、死んだところでかまうまい。

「外に行き、情報を収集してこい。知的生命体が居たら交渉して連れてくるんだ。要求は全て飲んでも構わない」

「……ほほう。知的生命体ー細胞であろうと、ですかな」

「見分けがつくのか、お前に？」

波旬の法に生きる者。藤井連たちが細胞と呼ぶもの、“人間”……今や土蜘蛛と貶められた彼らに代わる新人類。自愛しか持たず、他者への愛を知らぬ奇形。とはいえ、それも新座世界の概念。“ここ”は神座世界か、ユグドラシルであるのか。

「なるほど、一目見るくらいではわかりませんな。では、丁重に連れてくるとしましょう」

お辞儀をして去っていく。

「なあ蓮、あいつでいいのか？」

「あいつならどうなっても問題ない。この黄昏に異常がないかを確認する方が先決だろう」

黄昏。ギルド『夜都賀波岐ingグラスヘイム』の砦などと言うよりこちらの方が正しいだろう。プレイヤー同士ではそう呼んでいたが、設定には書いたっけか……？

「ああ、だからあいつを追い出したと」

俺はシュピーネを異物などと思っただけではない。けれど、藤井連ならばどうだろう。ただ忘れていただけという可能性もあるだけに何とも言えない。

「別に、そこまで考えていないさ」

「へー、あっそ。まあいいんじゃない？ けど螢の奴はきつとお前さんを待つてるぜ。ほら、ハーレム作るにも男の流儀があるだろ。こまめにかまってるやらないとスネちまうぜ」

「そうなのか？」

こいつは女を扱うすべをー知ってるそうだな。めちやくちや遊んでそうな男だ、不能だが。とはいえ、俺自身の設定はマリイに一途ということだからな。……創作の人物に会ったことなんて、もちろんないのだが。NPCとして設定したこともない。さすがにそれは原作崩壊すぎるだろう。

「はっは。これだ、色男は違うねえ」

「うるさい、黙れ不能」

「……後で会ってくる。俺は自分の部屋に戻って装備を確認してくる」

そう言って、逃げた。

第3話 模擬戦

スクロールによって隠ぺい魔法のかけられた闘技場では、いくつもの爆音が咲いていた。それはまるで戦場めいた地獄の現出。その悪夢を作り出しているのはたった二人であるのだ。

「——つぐ」

魔法で加速、爆風から逃れる。けれど、そこにはすでに爆撃が——
トリプレットマジック
三重化魔法で逃走先に置いておいたのか！

「その程度か、カメラード戦友」

鉄のような重い声。

「さすがだな、ミハエル。長い間お前とは戦っていないが——」

嘘だ、NPCなどと戦ったことはない。というか、見間違えたにもほどがある。“これ”がただの拠点防衛用NPCであるものか……！
強力、凶悪。言い方は何でもいいが、技量の極限という設定がこれほどまでに厄介だとは。

「刹那ですらない予行演習、何の意味があるかは知らん」

ずんずんずん、と戦車の砲撃じみた魔法が叩き込まれる。第10階位魔法、それくらいでなければ模擬戦といえどダメージ判定に成功すらしめない。魔法もアイテムも効果は変わっておらず、負けたところで1ダメージ負うだけだ。だが、即座にダメージを計算して威力の低く範囲の大きな魔法に切り替えてくるとは……本当に初めてかよ、お前。

「やはりお前は強いな！」

この性能はNPCではない。それを完全に確信できた。ビルドが滅茶苦茶（PK戦では）だが、それをプレイヤーアスキルで補っている。俺がPK戦用のビルドでなければ落ちていた。というか、ダメージを与えるためには最低限それだけ必要などなぜ知っている？ 加速加速加速、全てを避けきる。模擬戦ではダメージを喰らえば、即座に負け。

「が、お前に意味があるというのならばそれでいい。俺が動く意味も

あるのだろう」

ここまでの戦闘能力は普通の人間に出せるようなものではない。というか、ぶつちやけワールドチャンピオンでよく見る動きである。だからこそかわせると言っているいいー設定が反映されている。最強の兵士、しかもユグドラシル流にアレンジまで。しかし、俺が使えないように彼も原作の固有能力を使えない。歴史あるものを終わらせる幕引きの力はない。

「そうだな、確かに意味はあった」

装備を確認できた。戦えることを確認できた。そして、俺たちは原作の人間たちではない。もしかしたら魂が混ざっていることもあるかもしれないが、俺たちを縛る理がユグドラシルである以上、それを模しただけの別人とみるのが正解か。

ああ、確認できた。それはよかった。ならば、次は勝つことを考えよう。なあ、戦友ー俺はどうにも負けず嫌いらしいぞ。

——俺が狙うのは一撃必殺。常にそうだった。ユグドラシルの戦いにおいて、俺はそう選択した。小太刀を魔改造したマルグリット・ボワ・ジュステイス罪姫・正義の柱はクリ特攻。

例えば炎特攻なら、火属性の相手を攻撃したときに1.5倍になるとしよう。そして、俺のはクリティカルが出たら、もとの1.5倍にさらに1.5倍かけの倍率ドン。合わせて2.25倍だ。

しかもデータクリスタルを積みまくってたからそれどころの威力じゃないぞ。“触れれば不死すら殺す”女神の力を反映した聖遺物に比べれば見戯に過ぎないが、当たれば痛いぞ。

「……行くぞ戦友、身体はもう温まったのだろうか？」

「ああ、決着をつけるぞ」

バフはかけ終わった。ミハエルもこれ以上弾をばらまいても俺の有利になるだけだ。やはり戦術面も完璧か。一瞬にかける、やはり戦いとはそういうものだろう。

「……ッ！」

加速加速加速、最大にまで高まった速度で一直線に首を狙う。この段では技巧など必要ない。タイミング？ 迎撃？ そんなもの、反応

することもできない刹那に決着をつけなければ関係のない話だろうが……ッ！

交錯。

確かに当たった感触がして。模擬戦が終わり。

「ぐっ……！」

腹に苦痛。最後の一撃が当たっていた？ いや、それよりも模擬戦で負うのは1ダメージのはず。最大HPの千分の1でこれほどの苦痛だとーいや、ステータスバーはないが感覚でわかる。半分ほど削られた。

「ミハエル」

「……すまん」

彼は平気そうだ。当たったはずーならば模擬戦の効果か。そうか、模擬戦で彼が喰らったのが1ダメージ、そして俺は模擬戦が終わった状態で喰らったというわけか。

「気にするな、そして貴重なことが分かった。それはそれとして模擬戦は俺の勝ちだな、ミハエル。2勝1敗だ、勝ち越しだな」

俺はそう口にする。他の1勝1敗がどこでカウントされたものかも気付かず。

しかし、重要なことは分かった。フレンドリーファイヤが解除されている。むしろ同じギルドであるならば、模擬戦でないとダメージを与えられないのだ。その縛りが今やない。利用して超位魔法で吹き飛ばしまくっていたものだが。

「いや、この命に代えても贖いを」

「何を言ってるんだ？ それよりもフレンドリーファイヤが解禁されているようだが、何か知らないか」

そんな殊勝なことを言うキャラではなかったはずだ。……もともとNPCだからか？ まあ、そんなことはいいさ。お前もあいつらと変わらず俺の大切な刹那^{仲間}だミハエル。

「申し訳ない、味方はさけるように撃っていたはずだが」

「そうか、ありがとう。いい実験になった。お前も休め、ミハエル。俺は休む」

ポーションを飲んだが、まだ体が重い気がする。……風呂にでも入るか。

第4話 風呂

そして、風呂に入ってリラックスしていたわけだが。

ああ、ちなみに風呂とかそういう施設は一通りある。ドラマCDのギャグ版ヴェヴェルスブルグ城のノリで色々つつけまくったからだ。あの時は素材集めに付き合わされて大変だったが、こうなつてくると感謝するしかないな『獣殿』さん。

「水をたっぷり使う贅沢……ただのダイブじゃ絶対に味わえないこの至福……はあ」

俺が住んでたところでは風呂桶一杯の透明な水ですら庶民の手には届かない。大地や空気を取り返しがつかないほどに汚染されていたのだ。だから人が何人も入れるような風呂なんて、それこそ企業連の重役という天上の住人のやることだった。

「ああーこれだけでももう、何もかもどうでもよくなるう」

とろけそうだった。男のそんなん見ても需要はないだろうが。いや、藤井連は女顔だからあるいは……？ 今は俺の顔だ、いやなことを想像した。

「しっかし、ここまではつきりと感じられる。考えられるのはーこれが俺の阿片窟か」

正田卿の信者ならば麻薬と聞いて思い浮かぶのは阿片と桃の香りであるはずだ。論理的に考えれば、一般のダイブ型ゲームでこの気持ちよさを表現するのは不可能である。こんなものを知ってはリアルに帰つてなど来られない。ならば、可能性があるのは幻覚だろう。文字通りの電子ドラッグでのトリップ。

末路は廃人か、それとも実験対象としてどっかの研究機関の被検体にでもなるか。どこかの企業が流した、もしくは管理が甘くて拡散してしまったものだろうがー運悪く引つかかればもう表世界に居場所はない。庶民の地位などそんなものだ。犯罪に巻き込まれれば、どこまでも堕ちて誰も助けてなどくれない。

絶望的な気分になる。……けれど、こうあるべきと思うところまでは落ちていかない。絶望が薄い。そんなもんか、と思う程度。もしか

したら

「俺はここを受け入れ始めている……?」

昔の小説に交通事故にあった人間が、夢の中で開発中だったゲームのリアル版で遊び続けるというのを見たことがある。そいつはリアルに帰りがかったのだろうか。それとも、自分の作ったゲームの中で遊び続けたかったのだろうか。

……俺はどうだ? 動き始めたNPCたちとともに、時の止まった黄昏の中で永遠に――

「どきなさい、足引きBBA。藤井君はあなたの垂れ乳に興味ないのよ」

「ふぎけないですよ、あたしの胸のどこが垂れてんのよゾーネンキント。あんたの貧乳こそ誰も興味ないわよ」

声ーールサルカと先輩。え? これは、入ってくるつもりなのか。脱衣室にいるとは、そういうことだと容易に想像がついて。もしかして、女の人の裸見れるの。生で? え、まじ?

「残念でした。私は学園の裏ミスなので、私の裸に興味ある人はたくさんいるよ。見れるのは藤井君だけだけどね」

「はん。それを言ったら私なんて、数えられないくらいの人を相手してきたのよ? 蓮君だって満足してくれるはずだわ」

雲行きが怪しくなってくる。背筋が寒くなった。おかしいなー温泉入っててぼかぼかのはずなのになー。

「中古ってことをそんなに誇らしく語られてもね」

「……ツゾーネンキント!」

「やだやだ。怒りやすいから、年増って」

女の争いこええ。なんか脱衣所の方に黒々としたオーラが見える気がするよ。

「おいおい、姉さん方。ここは男湯だぜ、女人禁制だよここは」

司狼か。……ああ、うん。邪魔されたとか思ってたないぞ。ああ、うん。助かつ……た?」

「ま、そういうこと? 退散してくれると嬉しいんだがな。ま、関係ねえがな」

しゆるしゆると音がする。全然、まったく色っぽくなんかない。男のストリップとか誰が興味あるよ。

「遊佐君、最低」

「え？ ホントに脱いじやうの？」

底冷えする声と嬉しそうな、正反対の声。

「ま、そういうわけで蓮としげこむのは俺ってことでよろしく」

……残念がつてなどない。本当だぞ？

「よ、蓮。マキナと戦ったみたいだな。あいつに勝っちゃまうとはさすがだな」

マツパだ。まあ、風呂だから当然か。嬉しくもないし、特に見るベキもんでもないが話には相槌を返す。

「ああ、あいつは強かった」

「ま、うちで強いのはマキナと戒の奴だな。戒とも戦うのか？」

「どうだろうな。ただ、俺の技量――剣士としての技量は低い。一撃必殺狙いの暗殺者だからな……この世界に敵がいるならば新しい力を得るのも悪くない」

「そういうもんかね。お前さんに勝てる奴なんざいねえよ」

「……本当にそう思うか？」

狂信？ 励ますならともかく、こんなことを言うとは。嫌われ者だからこそ、言えることがある。信じるという言葉のもとに鵜呑みにしない、そういうこと。嫌われ者を買って出ても現実を見せる。こいつはそういう者のはずなのに。

「ああ、俺たちはお前を信じてる。負けねえさ、絶対」

それは、遊佐司狼の――天魔・宿讎の言っているいいセリフではない。やはり、ここは神座世界でもないし、本人でもないのだろう。設定だ、ユグドラシルのNPCが設定を取り込んで生まれたもの。

――けれど、偽物という点では俺と同じだ。

「ああ、負けはしない。例えあの最悪が相手でも、俺は俺の大切な利那お前たちを守る。守ってみせる」

「おお、頼りになるね。ところで、大将……一献どうだい？」

その手に持っているもの。盆に乗っている特徴的な形の容れ物は

もしかしてー

「酒か？」

がぜん、興味が出てきた。よくやった、司狼。

「おおよ、日本酒のいいのだけ。城の貯蔵庫からかつぱらってきた」

それは、まあなんともしららしい。言い方で笑ってしまう。ここは俺たちのギルド、奪うも何も無いものだ。

「お前、ワルだな」

「おいおい、昔は俺とお前とバカスミで不良三人組だったじゃねえか」

「いや、お前の悪評だろそれ」

「いやいや、お前だって乗り気だったじゃんよ。忘れたとは言わさな
いぜ」

「いやいやいや。お前、あの時のこと忘れたんじやないだろうなー」

そう、ありもしない思い出を語り合う。飲んだことのない本物の酒の味に震えながら。

第5話 驚愕

そして、円卓へ。

〈どうだ、シユピーネ〉

別に円卓でなくてはならない理由はない。どうせ『メッセージ／伝言』の魔法だ。自室で寝てても問題ないが気分というやつだ、もしくははじめか。部下の報告を聞くからにはちゃんとしなければならぬ。い。

〈はい。あなたのおっしゃっていた異常というやつがよくわかりますね。山脈が消えています〉

〈……なんだと？ 山脈がーでは、俺たちの黄昏はどうなっている〉
〈見る限り異常はありませんね。ただ、私は高位の捜査魔法を会得しているわけでもないので後で再調査する必要があるかと存じますかね〉

〈異常はない。と、言う〉

〈周辺の山脈が無くなっているのですよ。ウイグリード山脈が、黄昏のあるセスルームニル山を残して消滅しているのです〉

〈馬鹿な……いつのまに、どうやってー〉

ユグドラシルにそんな魔法は……いや、『ウイツシユ・アポン・アスター／星に願いを』なら可能だな。する意味はないが。確か、ウイグリード山脈に残っているギルドは俺たちのギルドのみ。他はメンバーがログインしなくなったことで資金不足、消滅したと記憶している。

〈あの最悪がやった、ということはありませんかね？ もし、そうであるならーさっさと逃げたいのですが、私〉

〈それはない。気配はなかった。山脈の跡地、今は何が広がっている？〉

波旬、むしろあれは山脈なんてものは小さすぎて、それだけ壊すのは無理かもしれないが。並行世界単位でぶっ壊す潔癖症だ、あんなものを相手にすることは考えたくない。そして、考える必要はないだろう。俺たちはユグドラシルの法則に縛られている。そして、あの最悪

は縛られることなどありえない。

〈草原ですよ、ツアラトウストラ。何もない草原が広がっています〉

〈……そうげん？ モンスターの構成はどうなっている〉

〈モンスターなどと言えるようなものは。精々が小さな爬虫類や虫など。牧歌的とは、こういう光景を言うのかもしれないね〉

〈……さしあたっては、周辺に脅威になりえるものはないと？〉

〈見た限りですとね。しかし、目立つようなことをすれば別かもしれない
ません〉

〈そうだな、あまり目立つことはさげたい。天狗道の領域でなくとも、危険な場所であるということもある。村人でさえ三騎士レベル、というのは考慮に入れておくべきだ〉

〈おっしやる通りで。ですが、そんなことを考えていると怖くて逃げだしたくなりますな〉

〈どこへ逃げると言う？ 俺たちの生きる場所はここだけだ〉

〈……ああ、おっしやる通り。真におっしやる通りですとも、ツアラトウストラ。それで、私は今後何をすれば？〉

〈引き続き探索を。ああ、そうだなー怖ければ逃げてもいい。伝言／メッセージは忘れるな〉

〈了解しました。では、不肖このシユピーネ引き続き探索任務を受けさせていただきます〉

切れた。

「…………ふう」

ため息のような声が自然と出る。ああ、考えながらしゃべるのは苦手だ。俺はそんなに頭がいいわけじゃない。そんな、聞いてすぐに理解するなどできやしない。とりあえず、重要なことをメモに書く。

・ ウイグリード山脈、消失

・ 周囲に知的生命体の影なし

・ 魔物の影もなし

これは、かなりのイージーゲームかな？ なんて思えど、山脈の消失なんて事実もある。とはいえ、フレンドリーファイアが解除された。つまりは破壊不能オブジェクトも解除されたのではないだろう

か。超位魔法の火力なら文字通り吹き飛ばすことも可能だろう。

——では、何者かが超位魔法で消し飛ばした？　しかし、それも意味が分からない。やる意味が分からないし、それを俺たちに気付かれることもなく実行するなんて……

保留だ、保留。大体情報が少なすぎて推測どころか憶測になっている。考えがまとまるわけがない。こんな時は——

「食いもん食べて憂さを晴らそう」

うん。我ながら、いい考えだ。俺がいたところでは天然ものなんて手に入るものではなかったが、人工甘味料まみれのスティックなら売っていた。……単に甘いだけの代物でもあっちにいたときは、それしかなかったからおいしく感じた。

「だが、今の俺にはこれがある」

バーを取り出す。ナッツバーだ。ユグドラシルでは単に味もなく、効果もないフレーバーアイテムだったが、今は違う。食えるのだ。天然物のナッツを。天然物の小麦と砂糖をふんだんに使った代物。……あの酒はうまかった。ならば、これとてうまいのは天下の道理であるだろう。

「いただきます！」

そう、手を合わせて——

「藤井君、そんなものは食べなくていいよ」

どすん、と置かれた皿に粉碎された。

「おま……おま、おま、おま……」

呆然自失、言葉にできない。楽しみにしていて、今まさに味わおうとしていたそれが——消えてなくなつた。

「愛情手料理、食べてくれると嬉しいな」

そう言つて、皿の上の“もの”を指し示す。それは、まさに「……炭？」

炭であつた。漫画肉の形をした炭と言えばわかりやすいだろうか。完全に炭化していた。……すでに食べ物ではなかった。さすがに食料事情が悪かつたとはいえ、アークロジでも炭を食つて生きているものなどいない。というか、食えるのこれ？

「おいしくなーれって、たくさんやったよ。気付いたら焦げてたけど、それは全然問題じゃないよね。愛があれば、へいき」

おそろおそろ炭に手を伸ばす。かつて肉であったそれを持ち上げて、かみつく気は起きずに皿に戻す。少し取って見ようかと思つて端つこの方を持つてみれば、塊が浮いた。……堅い。硬いじゃなくて、堅いだよ、石だよ。

「……てへぺろ」

先輩の方をじつと見ると、無表情で舌を出した。かわいい。ではなく、炭をどうするかが問題だ。食べて生き残れるか。人体に有害な炭の量はバケツ一杯とか聞いたことがあるが、量的には似たようなものだろう。

「ぎ、食べて」

三度見ても、帰ってくる答えはこれである。もはや、覚悟を決めるしかないようだ。ほぐすのではなく、てこの原理を使ってへし折る。そうすることでようやくこの料理だった代物を一口サイズにできた。

「……ごくり」

持った感じ、完全に炭だ。もちろん、折った感じも炭だった。匂いも炭である。完全無欠に炭でしかなかった。覚悟を決めて、おそろおそろ“それ”を口にー

「何をやっているんですか。男の人を夢中にさせるにはまず胃袋を掴めとよく言われますが、それは何もノックアウトして病院送りということではないんですよ。玲愛さん」

どことなくお調子者の感じがする声。これは。

「ベアトリスか。なぜここに？」

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれました！ 実はですね、ここで面白そうなことが起きると女の感が……おっと。もとい、螢が愛する人のピンチを感じたのではせ参じたというわけですよ、はい」

「……螢か。お前も元気そうだな」

「え……ええ。体調は悪くないわ。実をいうと、ベアトリスにいきなり連れてこられて……まだ状況がよくわかってないのだけど」

「いや、助かった」

持った炭を戻して横にやろうとする。ガードされた。

「ふふん。本物の愛妻料理というものを見せてあげますよ。……愛情込めたのは螢ですが。それはさておき、これをどうぞ」

じやらららら、と口で言っただけ料理を置く。

「これは……」

料理だ。しかも、天然もの。よくわからないものを押し固めた巷のものとは違う、本物。

「ええと、私も手伝ったわ。一応」

そう、螢が言うが……螢の料理レベルも先輩と変わらないはず。逆説的にあのレベルになっているのではと思うが。

「まあ、ほとんど私が作ったんですけど。でも螢だって皿を並べたりお野菜を洗ってくれたりしましたから。きつと愛情が詰まっているはずですよ！」

「ああ……まあ、お前が言うならそうなんだろうな。——いただきませう！」

食べる。

「うん。まあ、普通に食べれるな」

感動するかと思った。とはいえ、これは——普段食べていたものの延長線上、最高級品な程度だ。そりゃあ、あれに比べればよほどましだし毎日食べれる味だが……普通としかいいようがない。

「ふっふっふ。どうですか、うちの螢は。そんな料理もできない不思議系キャラより螢の方がずっといいですよ。ほら、男の人ってバカな子の方がかわいいって言うでしょう!?!」

「……ベアトリス。あなた」

螢がじとつとした目を向ける。

「まあ、お前の頭の出来はともかくとしてだな」

「……藤井君!?!」

「まあ、いいさ。俺たちは全員異形種で、しかも疲労、食欲無効の指輪をつけている。食料のことは特に問題ないだろ」

「いや、まあそれはそうですねーおいしくないんですか？ うーん、だれが作ってもこんなものだと思いますけどねえ」

ばん、と扉を開いてルサルカがさっそうと登場する。

「ふっふっふ。真打登場！ あたしの手料理を食べてむせび泣くといいわ。豪勢にシュヴァイネブラーテンを作ってみたの。うふん、蓮君、手料理の出来る女って好きかしら？」

と、皿に乗った肉料理が出てくる。シュヴァイネブラーテン……要するにローストポークだ。肉の塊にうまそうなソースがたっぷり。

「……確かにおいしい。これは、妨害工作を実行すべきか」

「って、ちよつとゾーネンキント！ なに蓮君に作った料理食べてんのよ。あんたの分はないっての」

「……悔しいですが、確かに美味しいですね。何が違うんでしょう」

「これは、色々と負けね。後で戒兄さんに聞いてみようかしら」

「ヴァルキュリア!? レオン!? だから、食うなっつうに！」

カオスだ。

「あー悪いな、ルサルカ。俺ももらうぞ」

さすがに喰い逃すのは色々と惜しすぎるだろう。女の子の手料理で、しかも本物の肉だ。ルサルカが持っている皿から直接肉を取り、口に入れる。……持つてるだけで柔らかいぞ、これ。

「……」

言葉も出ない。なんだ、これーうますぎるだろ。肉がほろほろと崩れて、ソースが絡む。そして、このソースがまたうまい。肉のうまみと混ざり合って、しかも飲み込むときの触感まで楽しめる。

「ご馳走様、うまかったぞ、ルサルカ。また作ってくれ」

「うん、蓮君のためならいくらでも作ってあげるわ」

ふわりとほほ笑む。……ドキツとした。幸せそうに笑う顔がなんとも可愛くて。

「ちよつと、これまじいんじゃないの？」

「そうですね、これ蓮君の胃袋を掴まれちゃったんじゃないでしょうか。螢、ピンチですね。私には相手がいるのでどうでもいいですが」

「ちよつとベアトリス、そういう自慢はよそでやってくれない？ それと氷室先輩、このままだと色々やばそうなので手を組みませんか。正直、うちのベアトリスは女子力では頼りにならなさそうなので」

「うん、ベア子は色々アホの子だよ。しかも、一本筋が通ってそんな感じでむしろ女子にもてそうな感じだね。料理は食品サンプルみたいだったけど、正直女の子らしい繊細さって似合わないよね」

「ええ、実際に女の子にはもててましたから。ただ、あんなんでも男子に告白されたことはあるらしいですよ」

「それは意外だね。でも、顔はいいからそういうこともあるかな。私は校舎裏に呼び出されてもガン無視したから、数を数えてもしようがない気がするけど。それと、手紙もたくさんもらったよ」

「氷室先輩、それ捨てましたよね？ さすがに読まずに捨てるのはどうかと思えますよ。断るときはバツサリと面と向かって断るのが筋というものではないでしょうか」

「よくわかったね。でも、その考えは男前すぎると思うよ。さすがベア子の後継者」

「それ褒めてませんよね。あと後継者って何ですか。私はベアトリスのような勘違い一直線系女子にはならないわ。大体氷室先輩ってー」

「お前ら、少し黙っててくれ」

かましいい。

「そういう話はあとでやってくれ。外に捜索に出しているシユピーネから連絡が来た。今、メッセージを送ったから全員ここに来るはずだ。会議をすろぞ」

第6話 会議。

そして集まる。会議室の中央の円卓、それぞれの場所へと座る。同じところに二人なんてギャグはすることなく、並んで一歯抜けた時計の形を作る。

「藤井君、忠誠の議をするね」

「……は？ 先輩が何やら言い出した。」

「第二位『死を喰らう者へトバルカイン』櫻井戒、御前に」

立ち上がり、頭を下げる。

「第三位『神を運ぶ者へクリストフ・ローエングリーン』ヴァレリア・トリファ、御前に」

次々と。

「第五位『獅子心剣へレオンハルト・アウグスト』櫻井螢、御前に」

「第五位『戦乙女へヴァルキュリア』ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン、御前に」

「第六位『太陽の御子へゾーネンキント』氷室玲愛、御前に」

「第七位『鋼鉄の腕へゲッツ・フォン・ベルリツヒンゲン』ミハエル・ヴィットマン、御前に」

「第八位『魔女の鉄槌へマレウス・マレフィカルム』ルサルカ・シユヴェーゲリン、御前に」

「暫定第八位『狼を司る者へゲオルギウス』遊佐司狼、それとおまけの本城恵梨依ね、御前に」

「第十一位『大淫婦へバビロン・マグダレーナ』リザ・ブレンナー、御前に」

忠誠、首を捧げる。藤井連の特性はギロチン。つまりは命を差し出すということ。

「第13位代行『超越する人の理へツアラトウストラ・ユーヴァーメンシユ』藤井連。ああ、理解しているさお前たちの想いを。この黄昏で共に生きていこう」

ボスっぱく見えるよううなづいて見せた。

まあ、しかしアレだな。カオスだ。とりあえず全員水銀の被害者というわけだが。魔名なんてものはあいつ……親父殿の呪いでしかないのだから。同じ席が二人いたり、本物がいるのに暫定がいたりとーまあ、ループ世界で繰り返した結果なのだからしようがないとしても。

「さて、俺たちの置かれた状況を確認しよう」

「ええと……どなたか攻めてくるのでしょうか？ 襲撃は昔は散発的にありましたが、今は落ち着いてるのではないのでしょうか」

トリファ。着ているのは、全員黒いSS服で、ゆえに当然彼もまたトレードマークの神父服を着ていない。それでも同じ顔のラインハルトと区別できるのは、まあ苦勞がにじみ出ているおかげであろう。「ああ、ギルド戦じゃない。今は異常事態が起きていると俺は確信している」

「それは、何か言えないことでしょうか」

さすがだな。信用できないシユピーネを除いては唯一とっていい頭いい枠だ。おそらく頭の中身は俺とは異次元レベルであろう。と、いかなぜ一言で言いづらいこととまでわかるのだ。

「ああ、言葉にはできるほど理解できていない。アレの気配を感じないことと言いーシユピーネの話も、どうなっているかはさっぱりだ」

「ほう、彼ですか。調べ物をさせたので？ 彼を、いえ以前までであれば我々が外に出ることはなかったというのに」

「ああ、それこそ異常事態だな。俺も遠隔視の鏡へミラー・オブ・リモート・ビューイングで確認したがな。ウイグリード山脈が消えているそうだ」

「……なんですと!?!」

言葉には出さないが他の面々も驚いている。

「それって、超位魔法で吹っ飛ばされちゃったってことかしら、蓮君」「いや、平原が広がっている。吹っ飛ばしたものは思えないな」

「なるほど。平原が広がっているのであればー魔法で耕して草を植えるなどという無駄なことをする意味はありませんし、我々が気付か

ないのもおかしい」

「そういうことだ。全員、警戒し自分の領域を精査してくれ。違いがあれば俺にメッセージで報告すること。俺からは以上だが、他に何かあるか?」

「平原ということであれば、防御面が心配ですね。テレジア、隠ぺい魔法はどうなっていますか?」

隠ぺい魔法? あれを展開しているのは我がギルドに所属するレイドボス、無理やり名前を変えた天魔・常世のはずだがー設定か! 設定にはあれと先輩は一つの存在だと書いた。もちろん、ユグドラシルでは意味がない。ただのレベル1とレイドボスだったが……あれと一心同体ということは、先輩はステがレベル150相当で、しかも体力は数倍か!? ——とんでもないものが生み出されてしまったようだ。

「うん、問題ない。今も隠しているー藤井君、山ごと隠した方がいい? 言われた通り拠点だけ隠ぺいしているけど」

「ああ、山ごと消してくれ。……それと、ダミーを作った方がいいか」
「なるほど、それは名案です。いきなり消えれば調べようとする輩もいるでしょう」

輩……ね。人間など、いるか? まあ調べてみなければわからないが。

「そうだな、ルサルカ頼めるか?」

「え? うーん、蓮君の頼みならやってあげたいけど……山なんて、何日。ううん、何カ月もかかっちゃうわ。それでいいならやるけど」

「スクロールを渡す。第10階位魔法を使えるならどうだ」

「ああ、それならいけるわ。真の姿を開放してちやちやっとうわね」

「ああ、頼む。では、解散」

そして、一日。他の奴らが色々構ってきてくれたが、それは割愛。

「……ねえ、ベアトリス。本当にいいの?」

調査命令は外にまで及んでいない。というより、言外に外に出るな

という命令が入っていた。それを分かったうえで――

「螢、ちゃんと領域の調査は終えました。そして、領域内の調査を終えたら次は外と相場が決まっているでしょう」

それは屁理屈と呼べるものだった。

「そうだね、それにシユピーネは信用できない。ここで嘘をつく意味はあまりないが、これからは別だ。信頼は美德だけど、それに足をすくわれることもある。それに、あまり藤井君に手間をかけさせるのもよくないからね」

戒も同意する。真面目ではあるが、拘泥してはいない。何かあれば独自に行動する積極さを持っている。もともと、それは独断専行とも呼べるが。

「戒兄さんまでそんなことを言うの。……はあ、分かったわ。付き合う」

観念したようにその足を進める。その姿は軍人然としたキビキビしたものだが、その速度は人のものではなかった。人外の“軍”――その行進。痕跡すら残さずに深い森を踏破する。

「……見つけた」

地面の一点を見て足を止めた。

「え？ 何かあったの、戒兄さん」

「ああ、足跡です。新しいですね、ここ数日といったところですか」

「……私にはその辺の地面と違いが判らないわ」

「そこらへんは経験ですね。軍人として森を何日も泥まみれになって駆けずり回れば分かってきます。この辺はコンクリートジャングルでは勘を養えませんかからね」

「そうなの。で、この足跡は？」

「一人分ですね。軍人ではないです、そもそも軍人が一人で行動するのは考えにくいですし、なによりこれは素人そのものの足跡です」

「なら、近くに村があるはずだね。僕らの黄昏を攻める中継地点になるかもしれない。注意しようか」

「そうですね。まあ、気楽にやりましょう。別に無限の背負い袋と疲労無効の装備があれば中継地点なんて関係ないですから」

「……二人とも、気が抜けてない？ 私たちがやることは周辺の威力偵察でしょう。敵はレベル100の可能性がある。本当の姿にならずとも余裕だと思うのは傲慢ではないかしら」

「違いますよ、螢。レベル100とか言っちゃうからには、敵がレベル200の可能性も考慮しなくてははいけません。そういう風にガチガチだと相手も緊張しますから。へらへらとしてるくらいでちょうどいいんです。いざという時だって、その方が動けます」

「こちらの戦力を過大評価させて譲歩を引き出すのは相手の情報を知ってからだよ。初対面の敵には過小評価してもらおう方がいい。油断するからね」

「そうね。言われてみればーチンピラでもあるまいし、コケ脅しする必要もないわね」

螢が関わった人間はチンピラが多い。というか、彼女はチンピラを殺して技を磨いてきたすら言える。同じく不死とはいえ、100に届きそうだったベアトリスとは魔人の年季が違う。戦争中ではなかったから、燃料補給のためにチンピラを殺し回った。ここにはいないが、元仲間にもチンピラとしか言えない奴がいた。実を言えば、螢の青春のほとんどはチンピラとかかわって過ごしてきたと言っているだろう。だから、それに染まってる部分はないでもない。二人とは幼くして死に別れたのであるし。

「ー声か」

緊張しているのはマイナスとはいえ、それで鈍るほどナマクラではない。一瞬で方向を確かめる。

「悲鳴ですね。さてさて、盗賊ですか。それとも殺人鬼ですかね。どちらにせよ、騎士として放つてはおけませんね」

危険な光。そもそも彼女たちの原動力は波旬への憎しみだ。すべてを上回るそれに振り回される性質を持っている。……このときも、助ける気などさらさらない。アレの眷属など、全て焼き尽くす。慈悲などありえない。

「そうだね、ここは黄昏に近い。森もあるし、見える位置でもないが騒ぎを放置しておくわけにもいかない」

そして、それは戒とて同じであるのだ。螢も、それを許すことにはできない。文字通り、8000年かけても薄れない憎悪。——そういう、設定。

「……………ちー！」

殺気をまき散らし、音もなく駆け抜ける。

第7話 姉妹愛

幼い姉妹を剣を持った鎧の男が追いかけている。

「……見つけた」

通る声は出さない。螢もまた軍人教育は受けている。トリファからの正規のものではないとはいえ、だからこそ逆に一部に偏っていてそこは強い。

「軍人ですかね。鎧とはまた、なんとも時代錯誤な」

「魔法がかかっているものなら外見は関係ないだろう。……とはいえ、魔法はかかっていないように見えるが」

「そうね、力は感じない。紋章が入っているわ、見たことがない」

「藤井君なら分かるかな？ ただ、彼もギルドのすべてを把握しているわけじゃないだろうし。それに、他の何かという可能性もある」

「何より、彼は弱すぎる。恐怖感を与えたいだけだとしても、まだやりようはあるでしょうに」

魔人である彼女たちから見れば、男のそれはよちよち歩きとしか呼べないものだった。鎧の重さに振り回されてるし、剣だってまともに握れていない。まあ、単純に上を求めすぎているというだけの話だが。超人基準で見られたら、人間はそりや見劣りしてしまう。

「待てや、おらア！ 逃げてでも無駄だぜ、嬢ちゃんたちイ」

なんて、チンピラみたいなセリフを。

「いや！ そんなことさせない。ネムだけは、ネムだけは守るんだから！」

そう言っつて、握りしめた小さな手を引いて速度を上げる。あくびするような速度、けれどこれが人間で、幼い彼女には限界で。

「ひやははは！ そら、速く逃げねえと死んじまうぞお！」

斬りつけた。ただの布に防御性能などない。……浅い。あれでは人は死なない。けれど、森の中では命を失いかねない。出血が体力を奪い、助けがなければそのまま野垂れ死ぬ。

「——ツキヤア！」

倒れこんで、それでも妹を守るように抱え込んで。

「……あれ、妹を命がけで守る自分がカッコいいとでも思ってるのかしら」

「そうだね、螢。あの男こそ、人間らしい人間だと言える。まあ一人芝居のアレもそれらしい。どうせあの娘も変わらない」

絶対零度に達する冷ややかな目を向ける。「人間」に対する憎悪。坊主憎けりや袈裟まで憎い、なんて言葉があるが袈裟を着てれば立派な仏教徒だろう。そりゃあ憎い。

そして、人間と言ったものー彼らを土蜘蛛と貶めた恥知らずどもは、神を崇める信徒ですらない。神とは満天下をその渴望によって染め上げたもの。つまりは神こそ生物の生みの親であり、人間は一番近いだけの似姿。波旬の細胞。自由意志などない哀れな人形。『袈裟』どころではない爪の先つば、髪の毛の一本。

「ええ、どうせその女も同じでしょう。妹を愛する自分がカッコいいと思ってるだけ。その妹を殺してあげれば、そこらへんに打ち捨てるわ。いくらでも見てきた」

「あの男も、少女も変わりはない。だが、弱いな。正規の軍人かチンピラか知らないが、あの程度でチンピラができるなら、一般人はそう強力な力を持っているわけでもなさそうだ」

「そうは言っても、戒。あれが細胞なら力を供給されるかもしれない。油断はできないと思いますよ」

「どうだろう。限界はあるはずだ、アレは限界を超えて破裂しようがむしろ都合かと思うだろうからね。早々に自滅するならばそうそう脅威ではないはず」

「……ま、なんだかんだ言っても確かめてみないことには始まりません。それに、騎士として幼子を殺す輩は見逃せません」

男は下種な笑みを浮かべて剣を突き立てようとして。ああ、いつまで時間をかけているのだなどと思う。

「そこまです、下種め。……あれ？」

普通の斬るというよりは叩き切るだけの拙い手作りに見える歪んだ剣はー電を模した細剣に受け止められる。そして、それは帯電さ

えしている。一目瞭然、武器としての格が違いすぎる。

「ギーかふっ」

彼は電撃に打たれて死んでしまった。

「ええ……いやエフエクトですよ？　なんで、これくらいで死ぬんですか。攻撃力なんてないも同然なのに」

と、そんなことを言う。弱いのは分かっていたが、それでも。実際のところ、それは伝説級ヘレジエンドというもはやオーパーツに等しい武器であった。それでもまあ、信じられぬ弱さだったのだが。

「い、今のうちにーきゃあー！」

この人は危ない。殺気なんてもの、エンリには分からないがそれでも悪意くらい感じ取れる。そう、これは……あとまわしにしてくれただけ。

「逃げられると思ったの？　やつぱり現実が見えていないのね」

後ろにいた人。……いつのまに？　刃が喉元に当てられる、動いたら死んでしまう。それにこれーこの剣、変な形してる。でも、きれいー血に汚れるのを罰当たりだなんて、場違いなこと考えてしまうくらい。

「あれは弱すぎて死んでしまったから、あなたに聞くことにしたわ。あなたたち、何なの？」

「え？　え？　え？　えー」

「答えて。手加減してもらえないなんて勘違いは……ああ、するか。お前たちに現実の認識などというものを期待しても無駄というのはよく知っている。どうせ都合のいい妄想の中に逃げ込むだけだったな」
ぐり、と突き付けた刀で顔を上げさせる。喉元がわずかに切れて血が滴る。あの騎士たちとは温度が違う、生理的な嫌悪とは程遠い、本能的な寒気。まるで、象を目の前にしたアリ。そして、それは自分を踏み潰そうと足を上げている。

「ッお姉ちゃん！」

「大丈夫、大丈夫だから」

幼子は妹をしつかりと抱きしめて震えるのを隠すようにする。無駄？　当たり前の話だ。けれど、それだけは嫌だ。いや、いや、い

やーそれがエンリを動かす全て。ネムだけは死なせたくないという想い。

「その女、何者だ！ 王国の者か？ なぜこんなところに手練れがいるんだーというか、何してるんだ……？」

先の男の仲間らしき二人組が現れる。追っていたのは一人だけではない。でも、それは犠牲が増えただけ。

「では、君たちからも聞くことにしようか。お前たちは何者だ？」

そして、男たちは後ろからの声を聞くことになる。全く気付かないうちに後ろを取られた。実力差が歴然としすぎている。

「はー。ギャアアア！」

聞こえたと思った瞬間に激痛。腕も足もまるで満遍なくのこぎりで削られているような。

「すべて腐れ。塵となれ。何者でもないお前たちにはふさわしい末路だ。実を言うと僕はお前たちのような塵屑をあまり目にしていないんだ。できれば早めに答えてくれると嬉しいんだが」

彼らは動けない。そもそも動く“もの”がない。手も足も腐り落ちて地面のしみになった。絶望、などというものを理解できるだけの強さを持たない彼らは現実を受け止められない。とりあえずのーー言えと言われたことを思い出して言う。

「俺たちは帝国の手のものだ！ 鮮血帝から命令されて国境沿いの村を襲撃している。鮮血帝にこのことを知らればどうなるか理解しているのか！」

「……へえ」

さらなる悲鳴。彼らの精神を焼くその正体は腐食。肉ごと腐らせる腐食で神経が直に侵され激痛を発している。……四肢切断よりもよほど酷い状態となっている。実際、さっさと切断しないと命に關わる。

「あ……たす……たすけ……ママ……」

ヒューヒューと細い息の中から助けを求める声。もう一人はウソがばれたら自分もこうなってしまうのかと恐れて。

「分かった。言う！ 言うから、俺だけは助けてくれ。そう偽装して

いるだけで所属は法国なんだ。黒粉を潰す作戦の一環として国境沿いの村々を襲撃して、帝国の仕業に見せかける指令を受けている。なあ、本当のことを言ったんだ。助けてくれ。命だけは」

「自白した。けれど、それが本当かなんて戒が知るはずもない。拷問のテクニクとして先を促す。」

「なるほど。……それだけか？ 言っていないことがあるだろう」

感情のこもらない瞳を向けられて。

「本当だ。嘘じゃない、神様に誓った方がいい。ああ、そう言えば上層部は王国を滅ぼそうとしているらしい。だから、この作戦行動もその一環かもしれない。そうだ、上は黒粉を生産する王国に見切りをつけたんだ。どうせ、そいつらだって黒粉の生産にかかわってるに決まってる。そうだ、トブの大森林なんか辺鄙なとこに住んでるのはそのために決まってる」

「もういい」

腐り堕ちた。固有名詞が多くてわかりづらいことこの上ない。しかも途中から憶測になっていったし、自身で思い込みを助長していた。あれでも監禁すればもつと情報は吐かせられる。そもそも一般常識でありそうな“黒粉”や“トブの大森林”も何のことかわからないのだ。それでも

「すべて腐れ。消え失せろ。貴様らの顔など見ていたくもないんだよ」

慢心という病。なまじ強力な力を持っているからこそ、足元を気にしない。その場の感情に突き動かされてしまう。

「――ひ」

だが、それを見ていたエンリにとっては神の仕業に等しい。魔法も使わず……実際は使っていたのだが、ただ見るだけで屈強な帝国騎士を殺してしまった。そして、彼らは自分のことを汚らわしいものを見るような目で見てくるのだ。

「あ……ああ。ああああ」

心のすべてが恐怖で塗りつぶされる。きっと、剣を突き付けているこの人も化け物なのだ。森の賢王などよりも、ずっと強いのだろう。

「ねえ、助けてあげましようか?」

そう、切っ先を突き付けてくる化け物がささやいた。

「それ、縊くびったら見逃してあげる。悪い話ではないと思うのだけど、どうかしら?」

……くびる?

「ああ、その細腕じゃ無理かしら。なら、これを上げる」

ナイフを放る。つまりは殺せと言うこと? ……ネムを。

「解説すると、縊くびるといふのは首をねじ切るといふことよ。あなたたちでは、その程度でも死ぬのでしょうか?」

それは、たぶん噂に聞くアダマンタイト級でも死んでしまうと思う。下を見て、私を不安そうに見上げるネムと目が合って。

「……逃げて」

そう、ささやいて。ナイフを取る。

「逃げて! ネム」

妹を放し、背中を押す。せめて一太刀。たった一秒でも時間を稼げれば。

「もういいですよ、螢」

いつの間にか後ろにいた女の人が、彼女の腕を抑えていた。エンリの手からはナイフが消えている。いつの間にか取ったのか。

「彼女たちは違います。細胞は恐怖しません」

「……ベアトリス。そうね、あなたがそう言うなら見てみようかしら」
化け物に瞳を覗き込まれる。恐怖に身がすくむ。けれど、見返した。きつと、その方が時間が稼げる。

「お姉ちゃん!」

え? そんなー

「ネム!? なんて。逃げなかったの……」

目の前が真っ暗になる。すう、と力が抜けて。

「確かに、自愛の塊には恐怖を耐えるだけの器がない。立ち向かう気概などあれらに持ちようもない。それを前にした時には現実から目をそらすか、壊れるか。なるほど、確かに――この子はあれらとは違うわね」

抱き留められた。すう、と意識が暗黒に落ちていく。

「まあ、いいでしょう。ただ黄昏を荒らされるわけには行かない。そちらの法国兵の仲間だけ殺しておくことにしましょうか」

「いや、ベアトリスと螢は藤井君に報告してきてほしい。細胞どもを相手にするのは僕一人で十分だ」

「……戒兄さん。攻めるのなら少なくともツーマンセルは組むべきじゃないかしら……いえ、これは!」

三人、弾かれたようにそちらを見る。その方角は正確にカルネ村の方角を指し示していた。

「バビロン、何をするつもりだー?」

第8話 死者の村

「ああははー」

無力な村人を哄笑する。どうせクスズもだ。なにか事実があるわけでもなく、彼はそう確信して村人に剣をふるう。上から言われた通りに任務を果たすしかないのだ。それは物理法則とは違って、人の世の法則であることには変わらない。

「馬鹿が！ 鍬くわなんか持ち出して何の意味がある」

だからこそ、己が殺している村人たちはクスズだと確信するのだ。で、なければ救われない。己がやっているのは人類を救うためのお仕事なのだ。それが何の力もない村人を殺さなくてはならないとは。

無辜の一般人だと？ そんなわけがあるか。俺が、罪のない人を殺すような真似などするものか。だからこいつらは罪人なのだ。そう、王国の罪と言えば黒粉だ。人を墮落させて殺す麻薬……こいつらも生産に関わっているに違いない。なぜならば、俺が断罪しているのだから。

「死ねー」

俺はこいつらを殺す。老若男女、関係がない。そうだ、人類のためにそうするしかないのだー

「おい、そろそろ中央の広場に集めた村人どもに火をつける時間だ」

「そうか、包囲を完成させなきゃな」

火は嫌いだ。小さなものともかく、人を焼く大火は。まずは悲鳴ーそして、せき込む音とだんだん弱くなっていく声。悪夢の光景としか言えないだろう、それは。しかし、悪魔どもを倒すためにはそうしなければならぬ。ああ、人類の守護者も大変だ。

「最後の詰めだ。追い込みにかかるぞ」

「ああ、きちんと10人程度は逃がしている。なんでそうするのかは知らんが、指令だしな。そして、もう何人かは村の外に出ている」

「ああ、なんで逃がすんだろうな」

「知らん。上の考えなんて分かるものじゃないだろう。所詮兵士の俺

「私たちは命令に従うしかないさ」

「お、逃げたやつだ。殺すか？」

「そうだな、あまり多く逃がすのもよくないだろう」

そいつに、目を向けた。この男たちは油断している。己たちは絶対の勝者、村人が向かってきたところで物の数はないと不遜にも。自分など、弱い人間の一人でしかないと知っていたはずなのに。ここでは敵なしと己惚れる。

「ーアアア」

足を掴まれた。この期に及んでも、死にかけが何の意味もなくつかんでいるだけで問題なんかあるわけないと。腕でも切り飛ばしてやるかなんて、のんきに。

「うるさい、死ねよ悪人」

剣を突き立ててー弾かれた。

「……は？」

見間違えか？

「が！ あぎー」

握りつぶされた。……馬鹿な、俺を着ているものを何だと思ってるんだ。鉄の塊だぞ！ 鎧なんだ。人間にこんな力がーッ！

「こいつ……ヤバイぞ。殺せ！」

「あ、ああ。……うわ、こいつ刃が通らねえ」

ガンガンと叩きつけ、それでも“それ”は離れない。目が合った。そう、この目は彼は何度も見ている。強いわけではないが、放置しておくわけには行かない人類の敵。何度も何度も砕いてきたのだ。

「こ、こいつーアンデッドだ！ アンデッドが出たぞ！」

そう、もしかしたら人間よりも見た目。生を恨む不死者の目。——アンデッド。その燃えるような憎悪に射すくめられ、たまらず叫んだ。

「……ひいいわあああああ！」

合唱する。彼の呼び声と呼んだのは背筋を凍らせるほどの色気という猛毒。魂すら引き釣りこむ大淫婦の歌声。“それ”は朗々と響いて、世界を犯す。

愛しい人よ 私はあなたに口づけをしました

Ah! Ich habe deinen Mund geküsst, Jochanaan.

そう 口づけをしたのです

Ah! Ich habe ihn geküsst deinen Mund,

とても苦い味がするものなのですね

es war ein bitterer Geschmack auf deinen Lippen.

これは血の味?

Hat es nach Blut geschmeckt?

Nein!

いいえ もしかしたら恋の味ではないかしら

Doch es schmeckte vielleicht nach Liebe

ああ、ヨカナン ヨカナン あなたばかりが美しい

Ah! Jochanaan, Jochanaan, du warst schön.

どこからか響く男を死へと誘う淫婦の声。魂を煮溶かされるような甘い声が死者の魂を動かした。

「—— Yetzira^形h^成 —— Pallida Mors
《蒼褪めた死面》」

響く声が死者の軍勢を形作る。

「わあああああああ!」

意味が分からない。死霊術者……馬鹿な、なんでこんなところに!?

こんな寂れたような村にこのような凄腕がいるなど信じられるものではない。

「アンデッドだ。隊長の指示を——」

「待て、助けてくれ足を掴まれてるんだ!」

「うぐーくそっ」

他の騎士たちが固まっていそうなところに逃げ出した。動きが緩

慢とはいえ武器が通じない。助けられない。ここで動かなければ死者に掴まれてにつちもさつちもいなくなる。

「……すまん！」

「おい、待てよ。待ってくれ。俺を見捨てないでくれよ、おい。ふぎけんな！ ふぎけんなよテメエ、呪ってやる！ 呪ってやるからなアア」

恨み言を背に、ひたすら走る。

「……た、隊長——」

やつとのことでしたどり着いたそこは、怒号が響いていた。

「お前、銀が通じないってどういうことだ!？」

……銀。対アンデッド用の装備では銀の武器が有効だ。とはいえ、銀それ自体は武器にするには柔らかすぎるし価格も高い。だから、液体の銀を塗って対処するのが高レベルの者では常識である。それが通じない。お手軽な分威力は抑えめとはいえ。

「効かないんだからしょうがないでしょう!？ それより、ここから早急に逃げるべきです」

「任務を放棄するつもりか！ それで俺の評価が落ちたらどうしてくれる!？ なあ、お前に責任がとれるのかよ、ああ!？」

「今はカルネ村にゾンビが発生したことを本国に伝えるのか先決かと存じます。あれには銀の武器が通じない。新種かと思われませんが」

「お！ おお、そうだな。本国に帰還しなくてはな。よし、報告するのは俺でなくてはいかん。お前ら、絶対に俺だけは逃がすのだ。報告義務があるからな、うん」

「た、隊長——丘に女が！」

「は、女……それがなん……」

言葉を失った。男を虜にする魔性の色気。死地にいることを忘れさせるような、絶世の美女。しかも、格好がすごい。痴女としか言えないようなものであるのだ。尻も横乳も見え放題。身体を紐で縛ったような。

そして、びちゃびちゃという音と真っ赤な液体が目の前を染めた。……呆けているうちに屈強な仲間が殺されてしまった。殴りつけら

れた、ただそれだけでトマトのようにぶちまけられた。

「つひー ひいー」

女を見ると、微笑んでいる。抱き締めるように手を伸ばして。多くのゾンビが現れた。彼らはあずかり知らぬことだが、このアンデッドたちは死の騎士ヘデス・ナイト。レベルにして40のモンスターである。聖典でもない彼らにはただの一体でも相手にできはしない。

「つわああああー」

指揮も何も放り出して逃げる。ある意味では正解だったかもしれない。けれど、アンデッドの動きの鈍さはしよせん、舞台装置ー恐怖を煽る魔性の技でしかない。そして、魔性は心を砕く術を心得ている。

「つがー」

世界が回った。遅れて衝撃。わけがわからないうちに、激痛が身をさいなむ。事態の把握よりも先に、生への渴望が心を焦がす。逃げようとして、ざりざりと地面をかく。這いずろうとして、前に進まない。

アンデッドが殴っただけであるが、早すぎて何が起こったのかわからない。敵の動きが鈍かったのはゆっくり動かしていただけである。本来の速度を出せば逃げ出すことも許さず地に伏せられるのだ。

「……やっぱり、あなたたちはそうなのね。何度も見た。その自愛に狂い現実を見ないその性質、おぞましい。波旬の細胞めら、せめて速やかな死が救いと知りなさい。どうせ、あなたたちが残すものなど何もない」

よく通る声。悲鳴の中、小さな声がなぜ聞こえるのかと疑問に思う余地もなく。

「あ、そうだ。お金あげます！ お金！ 領地に帰れば、いくらでもあげますから！」

「金、ね。それがあなたの全て？ 俗ね。下種だわ、あれの継嗣けいしである以上、現実を認識することなど不可能と知ってはいるけれど」

「あ、あああ！ そうだ、お前ら俺を助ける。報奨金を出す！ お金！」

「あなたたちに信頼などというものは成立しない。とはいえ、だから

信じられるものは金でしかないんで、薄っぺらすぎて不快にすら感じる。その薄汚い口をさっさと閉じなさい」

「ああああ！ お金、お金……金、あげましゅから、たしゅ……」
がすがすと、鍬や農具を突き立てられて絶命する。

「――滅塵滅相。一人も生かして返さない」

極大の神威が放たれる。彼女とてレベル100、本性の姿を出さなければ力を発揮しきれないとはいえ――彼らほど弱い人間から見れば、それは神に匹敵する存在に他ならない。

「ぐー陣形を組め！ 本国への帰還を最優先する。女は放つておけ、どうせ攻撃は届かん」

副官であった彼が主導を握る。弱い人間、指揮官が倒されたら次が引き継ぐのが当たり前で、戦場では日常茶飯事とはいかなくともよくあること。そして、彼は実際有能であった。

「固まれ、駆け抜けるぞー！」

判断は間違っていない。あのアンデッドの動きはのろい、速度を上げられるのは一瞬だと判断した。希望的観測ではあるが絶望的な局面において希望を見出しそれにかけるのは指揮官にとって必要な能力だろう。

……そう、間違っていないのだ。単に、相手が規格外で、当たり前前に戦力が足りなかったというだけの話。判断が正しかろうが、圧倒的な暴虐の前には関係がない。嵐を前に木の葉が多少動いたとてただの誤差、何の意味もない。

「うおおおお、ギリトー！」

「ぎゃあああ、助けてくー」

「おい、タヤツキ！ 左はーくそ、いねえ！」

一人一人抜けていく。攻撃が通じない敵、そして彼らがいたのは中央広場付近なのだ。駆け抜けて村を脱出するまでの道が遠い。歩数にして100歩もいかない距離が、まるで断崖の向こうのように果てしない。

「あー」

最後の一人、仲間をうまく使って立てにしていた彼が、ついに最後

の一人になって殴られてしまう。そう、これは間違えたとかそういう話ではない。ただ戦力が足りなかったというだけの話。

「汚らわしい。見ていたくもない……消えろ」

血の痕になるまで執拗に叩き潰された。幸運だったのは、最初の一撃で絶命したということだろう。

そして、死者の群れの群れを統率する大淫婦が怯え隠れる村人たちに目を向けた。

第9話 カルネ村

「これは、どういう騒ぎかな。バビロン」

戒の後ろには螢と、エンリとネムを小脇に抱えたベアトリスがいる。あの後、そのまま運んできた。

「これはこっちのセリフなんだけどね、戒。勝手に飛び出てきたでしょう、あなたたち」

「必要なことだったと思っっている」

「それなら一言くらい話してから行きなさい。あら、その子……怪我してるわね」

「ああ、法国とかいうところの兵らしい」

「そう、まあどの誰だろうと変わりはしないけど。そうね、助けるといふならこれを上げるわ、お嬢さん」

赤い液体を差し出した。それは透き通ったガラス瓶で、美しい意匠まで施されているものだから落とさないか緊張してしまう。どうか、受け取っていいものなのだろうかと――不安そうに見上げて。

「……それは」

「藤井君から預かったものよ。言ったでしょう、一言くらい言ってから行きなさいって。でも、そうね。藤井君はこうなることも見通してたのよ、きつと。それで、とりあえず生き残りはこちらをうかがっているけれど、全滅させないでよかったみたいね」

「どういふことかな、バビロン」

「彼らを救うに足るものだどあなたたちが判断することくらい、彼にはお見通しだったのね。このポーションも、彼らを治すためのものでしょう。人間というものはすぐに死ぬ」

実を言うと、ポーションを満載した無限の背負い袋を持たせたのは単にリザが回復手段を持っていないからというだけだったりする。彼らが信じる彼はそんなに頭がよくない。外に出ると言われて、はいわかりましたと許可を与えただけなのだ。そこに思惑など何も無い。

「……あ、あの〜」

エンリは渡されたものを手にもって、落ち着かなさげにしている。まあ、こんな高そうなものを渡されて、ぐいっと飲んでしまえと言われても村娘にはきつい。

「とにかく、兵は全員殺したということだな？」

黒い靄が現れ、蓮が登場する。ただ見ているだけではなく、転移からの首狩り戦術を実行しようとしていたのだが、相手は弱すぎて何もすることがなかった。

「そして、残った村人か」

隠れている村人たちを見る。……実を言えば、兵を何人か残して欲しかった。一般常識について、拷問でも何でもして聞き出そうと思っていた。拷問では情報の確度が落ちるが、それは隔離して何人か分の突き合せれば問題ないだろうと思つて。

（人間を拷問するのも、殺すのもまったく良心が痛まない。外見は人間でも、もはや異形種となり果てたか）

「お前、さっさと飲め。痛いだろう」

とはいえ、この村娘の考えていることくらいは分かる。そういう点ではまだ人間なのかもしれないが。まあ、ここは強制するくらいの方がいいだろう。許可という形で渡されると、さすがに踏ん切りがつかないから。

「……ひー、はい、はい」

飲み干して、傷が治ったことに目をぱちくりとさせる。そして、それを見たことで村人たちが出てくる。目を向けられた男が嫌々前に出てくる。

「あの……助けてくれた、んですよね？」

疑問形だが、まあそりゃそうだろう。アンデッドはまだ消えていないし、それが村人の死体から作られたとなればなおさら。

「そうなるかな。目障りだっただけだ、気にするな」

この男は村長なのだろう。押し付けられるように前に出てきたのだから、間違いない。老いていることだし。

「い、いえ。気にするなど申されましても。あの、あなたたちは冒険者チームの方ですか？」

格好は一目で同じ所属だとわかるものだ。しかも、かつこいい。S服、民衆を扇動することにかけては天才的な男が作らせた軍服なのだ。こんな、田舎村にとっては東京すげーなんてレベルではない。

「近いものではあるかもな」

「そ、それなら報酬目当てで?」

「……そうだな、その方がいいか」

「へ? あ、あぁーそれなら、少しお待ちください。今、村にある資金をかき集めてきます」

「ああ、よろしく頼む」

駆けていく村長を見る。危険はなさそうだ。波旬の細胞でもないんじゃないかな……? この藤井連はそんなのに会ったことはないが。

「で、どうするつもりなのかしら。藤井君」

「螢か。あそこでベアトリスと一緒に遊んでいてもいいぞ」

「アレに加わる気にはなれないわね。というか、さっそく仲が良くなってるみたいだけど精神年齢が近いのかしら」

むしろ、ベアトリスが遊んでもらっているとといった感じだ。あの子、ベアトリスが救った彼女は子供にあるまじき微妙な表情をしている。

「それでだ、戒。どう思う? また来るか、あいつらは」

「そうだね、後ろ盾がいる。国と言っていたから、たかだか数十人死んだくらいで怖気づいたりはしないだろう。起きたことを確かめるために軍を派遣するんじゃないかな」

「だろうな」

とはいえ、どうするか。まあ、ベアトリスが救いたいと言うならば協力してやってもいい。……いいのだが、さすがに情報が先か。

「おい、ええと……」

「あ、エンリです」

「ネムだよ」

「こら、ネム」

何ともほほえましいやり取りだ。

「くれてやる。ゴブリン將軍の角笛という。吹けば言うことを聞くゴブリンが現れるはずだ」

しよせんはゴミアイテム。特に考えもなく渡した。彼女のことはこれでいい。でだ、とりあえずは仕方ないから村長を騙くらかして常識を覚えてもらおう。

「それと……村長、どうだ？」

「あ……あの貴重なアイテムまでいただいてしまつて……」

「大して貴重でもない。気にするな。それで」

「は。あの、銅貨3000枚程度しか集まりませんでした。あの、少ないとは思いますがそれが限界なのです。こんな村では貨幣自体が貴重でして……」

何やら言い訳めいたことを言っているが、もちろん相場など知るはずもない。まあ、この言い分では相場より安いのだろうとは思うが。

「まあ、それについてはそれでいい。いや、そっちについても必要ない。情報が欲しい」

「……は？ 情報、などと言いましてもこんな田舎村では冒険者様のお役に立てるような情報などありませんが」

確かに一般常識を教えろと言われて戸惑わない奴はいないだろうし、それを報酬などと言われても不審に思うだけだろう。隠せと言つたところで、諜報の心得がある人間に隠しきれるとは思えない。ならば、不審に思われないような題目を用意すればいい。

「貴方はそう思うのだろうか、実際に聞く9割がた以上には意味がない。情報とはすり合わせるものだ。間違つていたところで恥ずかしいことではないし、それにこそ意味がある。わざと間違えたところで、そこから推測できる背景があるのだ。情報戦というものの基本だよ。1%でいい、陥穽を見つけることが重要なのだ」

あなたに嘘をついてほしいとは思わないが、と言いつつ。探偵ものでよくあるアレだ。相手に何か答えさせて、それ犯人にしかわからないうことですよ？ つまりあなたが犯人だと言うアレ。それを軍事っぽい言い方にした。

「は、はあ。何を言っているのかわかりませんが、あのーつまりは私

の知っていることを話せばよろしいので?」

「そうだ、子供でも知っているような話や噂もな。全てだ。面倒だろうが付き合ってもらおう。報酬として受け取る以上はきつちりと責を果たしてもらおう。金については復興に必要なだろうか? 俺ははした金など要らん」

「はい。では、こちらで話を」

よし、騙くらかせた。煙に巻いたとも言うがーこれで村長はこちらに深い背景を推測するだろう。そんなものないのに。だから、単に常識知らずという真実には絶対にとどり着けない。

……少し開けたところに立っている、他よりはマシ程度の物件に通されて話を聞いた。

当然、色々なことがわかった。戒からあの兵は帝国兵に偽装した法
国兵ということは聞いていた。黒粉のことはしらなかったようだが、
まあ響きからして麻薬の類だろう。火薬というのは文明レベルから
見て考えづらい。

地図と合わせ、導き出されるのは王国は法国と帝国から狙われている。
いや、法国は表立って活動する気はないようだ。とはいえ、滅ぼ
そうと思っていることは確実だろう。知ることができたのは法国、帝
国、そして王国。他の国のことも知りたいものだが。

村長の知っていることはさして多くない。すべて話せと言われて
も歯抜けは多くある。論理的に考えるという教育を受けていない。
だから話は飛び飛びで、要領を得なかった。

「……なるほど、そういうことか。それで」

と、いうわけで最後に意味ありげにうなづいておく。勝手に深読み
させておけばいいだろうーどうせ真実には届かない。

「藤井君、他の兵が来たようだ」

戒に言われ、外へ出る。

「ああ、俺も確認した。装備が不ぞろいだな、非正規軍か?」

「いや、行進は揃っている。おそらく寄せ集めではなく、揃って訓練を
受けた者たちだ。軍人、もしくは訓練されたゲリラ兵の可能性が高
い。どうする?」

「とりあえず、話を聞くしかないだろう。ここで見捨てるのは目覚めが悪い」

「わかった。……バビロンは」

「彼女についてはここにいてもらう。なぜかデス・ナイトが消えないようだしな。お前は帰るか？ あのレベルなら俺一人でも十分だ」

「いや、ここにいさせてもらおうよ。ベアトリスも彼女たちと仲良くなったようだしね」

「……では、村長。村人を非難させてくれ。あなたと俺、そして戒で出迎えるでしょう」

「は、はい」

そして、彼が来た。馬に乗った、か弱い人間たち。とはいえ、他より頭一つ抜けていると近くできるくらいには強い。……警戒には足りない。

「俺は王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフという者だ。横にいる二人は何者が聞きたい」

「俺の名は藤井連」

「僕は櫻井戒という。ここに来た要件は？」

「帝国の騎士が村人を襲っているという通報を受けてここに来た。もしや、お二人は村を助けてくれたのだろうか」

「そうなるな。彼らが狙われる理由に心当たりは？」

襲っていた彼らは黒粉生産拠点とでも思っていたようだが、それならば村人が知らないのはおかしい。で、あるならば王国そのものを潰そうとする理由はそれに違いなく、襲撃の狙いは別だ。例えば、目の前の人物。事件の後にすぐここに来て、関係ないなんてありえない。

「あなた方にないとなると、私でしょう。帝国とは戦争をしていますから、戦力を削る目的があつたのかと。私は、恥ずかしながら私王国最強などという称号をいただいております。王国兵の士気を下げるとのならば順当な手段かと考えます」

「それはどうかな？ あなたを狙うならもつとやり方があると思うが。そもそもこれから統治する民を焼くなど、その鮮血帝とやらは賢

くないのかな。極論、毒でも盛れるならそれが一番だろう。それに、紋章など好きに入れられることだしな」

「……では、この者らは帝国兵ではないと？ 失礼だが、捕虜は」

「全員殺した。残っていない。死体を持っていくか？」

「すみませんが、1つか2つ鎧を持っていかせてもらいたい。最初に見せていただいても？」

「ああ、戒」

放つて投げた死体を部下が確認する。首から上がないだけのきれいな死体だ。

「確かに、この者らが帝国兵かはともかく訓練を受けたもので、村々を襲っていた者たちに違いないようだ」

ガゼフは部下の確認を聞いて馬から降りる。

「ありがとう、君たちのおかげでこの村は救われた。何もできず心苦しい限りだが、賛辞を受け取ってほしい」

深く礼をした。部下がざわめく。王国とはこういうことをしないところなのだろう。そういう雰囲気は村長の話からも見て取れた。傲慢な貴族とは失笑物のテンプレートだが。

「気にするな、成り行きだ」

「それでも。俺にはできないことをやってくれた。あなたたちのような方がいれば王国は安泰なのだが」

「やめてくれ、俺たちはそういうのじゃない」

「失礼した。村長、私たちは少し休ませていただいてもよろしいでしょうか」

「へ……はあ、あの」

「ああ、そうした方がいい。村長、可能なら何か出してやれ」

「わかりました。その、水や焼け残った干し果物くらいしかありませんが」

「あなた方の貴重な食料を奪う気はありません。申し訳ないが、休む場所と水だけいただけないでしょうか」

「それなら、ええと家内に案内させますので」

そして、悲鳴。屈強な騎士の野太い悲鳴が連続する。

「何事だ!？」

「ア、アンデッドが村に多数!」

「なんだとオ」

「心配なさらず。あれはリザが支配している」

「……は？」

あの数を？ そんなことがーいや、もしかして。

「もしや、あなた方はブローラーノーンの手の者か!？」

「いや、違う」

「……そうですか、それは失礼した」

おい、武器を収めろと部下を宥めに行く。村人と一緒にいる以上危険はないのだろう。……そして、本能が訴えている。アレと戦ってはならない。例え1対1でも決死の覚悟をしなければ届かない相手であると。

「やはり、アンデッドは警戒するか」

「はい。そもそも魔法詠唱者の方がアンデッドを支配するなど聞いたこともない話で」

「特に強いわけでもないのだがなー」

「いや、失礼した。部下が先走ってしまい……」

とは言うが、警戒は消しきれていない。ガゼフもまた自分が柄に手をかけていることに気づいていないほど緊張している。

「問題ない。村人たちが望むなら消してもいいが」

「それは。あの方に負担がかかるというのであれば、私どもの方でどうこう言うものでもないのですが。……今は」

「姿かたちは同じ。けれど、アンデッドはアンデッドか」

そう、設定のためか外見は生前と同じだ。村人の外装データをアンデッドに実装したようなちぐはぐさ。ステを見てみると普通にデス・ナイトであるのだが。

「なら、そのままにしておこう」

その方がリザも喜ぶだろう。

「……」

ガゼフは注意深く二人をうかがう。相手は五人、この二人がリ

ダー格ということなのだろうか。だが、見る限りそう強そうには思えない。特に横の青年などは押せば倒れそうに見える。

もつとも、蓮に関しては単に戦術論が異次元なだけだ。超高速移動と転移を利用した首狩り戦術など、この世界にない。けれど、戒に至ってはそう振舞っているだけのこと。実力が下に見られるためには、格上でなくてはならないのだ。同じ剣を扱う者であれば、無意識のしぐさからおおよその実力は見抜けるから。

「ーあの術者」

だから、注目は魔法詠唱者の方になる。そう、こちらは強そうだ。普通に格闘術もナイフの扱いも修めている。とても、分かりやすい実力者だ。だが、体術ができるのに加えてネクロマンサーなどとふざけている。どれだけ強いのだ、あの存在は。

「あまり女の人をじろじろと見るものではありませんよ。もしかして、惚れちゃいました？」

気付いたら近づかれていた。金髪の若い女。間合いまで近い、ここまで接近を許すとは。それに、この立ち居振る舞い……強いあのネクロマンサーよりも。ああ、駄目だ。湧き上がるものを無視しようと努める。この想いは不謹慎だ。ただのわがままでしかない。それは分かっているが。

「あなたは？」

「ベアトリス・キルヒアイゼンと申します。あまりこういうことは言いたくありませんが、あの人はやめておいた方がいいですよ？ 経験が違いすぎます」

「いや、彼女に惚れたということではないんだ。むしろ、あなたに興味があった」

「あら？ 私ですか。私はだめですよ、心に決めた人がいますから」
不敵に笑う。子犬のような笑顔だが、向けられた方としては一蛇に睨まれたカエルの心地だ。なまじ強さを感じられる分だけ恐怖が掻き立てられる。

「それはなんとも羨ましい。だが、そういうことではない。不躰だが、お願いを聞いてもらえないだろうか」

けれど、その恐怖が心地よい。武人とはそういう者、強い奴と戦いたいと常日頃から心を焦がしている。

「うん？ スリーサイズは教えてあげませんよ」

ガゼフはそれを万感の思いととも吐き出す。

「私と、模擬戦をしてほしい」

第10話 模擬戦

広場の中央で二人、剣を構える。ベアトリスは借り物の剣を手に行っている。だが、ガゼフもまた手に持つのは握りなれた剣ではなく、倉庫の予備を引っ張り出してきたものだ。条件は五分と呼べずとも、近くはある。互いに本気を出しようがないという点で。

「——だが、ベアトリス殿は剣を借りたときに振って調子を確かめた。立ち居振る舞いから分かる通り、型もこの上なく流麗だった。彼女は強い。おそらくここが練兵場で、互いに木剣を持っていたら負けるのは俺のはず」

けれど。

（隠すべきだったな、型を。振るときに重心がわずかに下がっていた。たったひと振りでも矯正したのは見事の一言に尽きる。が、これは勝負。弱点があるのならつかせてもらおう）

重心が下がっていたというのは、常はもっと軽い剣を振っていたということを示す。別に借り物が使いにくいとか言うことは期待していない。だが、己が得意とするのは剛剣——生半可な技術など一切合切叩き斬ってしまう。

（ふむむ、彼は弱いですねー。これは、真の姿は解放できませんですね）

一方で、ベアトリスもまたガゼフを品定めしていた。

（彼が実力者であるというのは、部下の反応から見ても間違いはない。村人が言うには王国最強だそうですが、私から見れば弱く拙い。ただの人間としか見れない。こんなんでも最強ならば私一人でも王国を滅ぼせますね。とはいえ、私の知らない“何か”がある可能性もありますし。まさか藤井君に地雷原を歩かせる真似をさせるわけには行きません。とりあえずは私がちよこちよこ歩いてみますか）

「……中々隙を見せませんね、ベアトリス殿」

「ええ、あなたも噂に違わずの腕前。お見事です」

「あなたを前にすると自信を失ってしまいますがね」

「いえいえ。私などはまだまだです。単純な剣の技量も、心の方も」
「謙遜とは。そこまでの力をお持ちでも自戒を忘れない。心技体——
そこまで高められているまど、正直言っただあなたのレベルに到達した
お方がいるとは信じられないほどだ」

ガゼフは額に汗をかく。わずか数分の睨みあい、ここまでの戦いで
は有利もくそもない。けれど、このまま続けば決定的な隙を晒すのは
ガゼフの方だ。

（——心の修練が足りないのは私の方であつたか。しかし、高々10
分程度にらみ合ったくらいで気が削がれるとは。知らず知らず、俺は
五宝物の疲労無効に頼っていたらしい）

苦笑して。しかも、こちらは【可能性知覚】まで使っているのに全
く打ち込める気がしない。どの角度から打ち込もうとも逆襲される
未来しか見えない。

（ならば、こちらから攻める。彼女の主武装は軽い剣、打ち合いよりも
むしろ隙をつくことに適性があるのなら——つばぜり合いに持ち込
めば！）

意を決して踏み込む。負けるつもりなどない。男の意地だ、最初か
ら負けるつもりで挑むなど格好悪いことこの上ないだろうが！

「行くぞォー！」

それはまさに剛の一撃。気を込めた一喝で動きを封じ一息に斬る。
技術は一撃のためにあるのだと、そう喧伝してはばからない強烈無比
な技を——

「…………ふむ。こう来ますか」

ベアトリスはこともなげに受け止め、そらす。

（こうなることは分かっていた。ただの力技の一撃で崩すことはでき
ない。だから、至近距離での打ち合いにもっていく。…………【即応
「隙ができましたよ」

彼女の守りは攻めにつながる。連結する——技の結晶。そもそも
攻めと守りの差異すらわからないほど見事な淀みを知らない川のご
とき剣技。

「う——おお！ 反射】ア」

ぎりぎりでかわしたところから武技による体勢変化。一瞬で攻撃ができる体勢までもつていく。

「……ッ!？」

彼女が驚く。……驚く？ 実力者ならば、そう珍しい武技でもないのだが——ともかく今が好機！

「おおおおおおお！」

一撃一撃に気迫を込める。勝つ術はそれしかないと確信した。技量で負けている。心で負けている。ならば、頼るのは“意地”しかないだろう！

（先の攻撃。武技よりも早い技……そうだ、俺は己惚れていた。戦士長などちやほやされて知らず傲慢になっていった。これこそが、技量を極めた者の戦い方。攻撃や防御が一連の流れになっている。切れ目がないそれは美しい。だが、俺はどうだ？ 武技だよりで物切れの見るにたえないお粗末さ）

「ぬう……おおおお！ 【即応反射】。ぬお——【即応反射】！ 【即応反射】ア！」

（だが、だから負けましたなど言うつもりはない。ガムシヤラに一直線に——それしかできることがないならば、それだけはやらせてもらうぞ！ 素晴らしき武芸者よ）

「ガアアアアアア！」
「……」

ベアトリスは木の葉のように、ひらりひらりと受け流す。この程度か、と言いたげな視線を感じて。

「つく。本当にお強い。あなたは、どこでその力を手になされた……？」

一度引く。正直にやっているのは、ここで手を止めては勝てはしない。けれど、あれ以上続けても無為に体力を消耗するだけだ。

「ふふ。遠い故郷で、上官に嫌になるほどしごかれました」

「なるほど。その上官というお方にお会いしてみたいものだ」

じりじりと、円を描くように移動する。やはり、隙など見つかるわけがない。……けれど。

「戦場のやり方でやらせていただく！」

石。顔面めがけて蹴とばした。

「——見せてもらいます」

剣を傾け、あつかりと弾き飛ばされる。が、欲しかったのはその一瞬。武技というものは隙にしかならない、彼女と戦ってそう感じたら——けれど、俺はずっとそれを積み上げてきた。だから、“それ”にかけるのが男というものだろう。

「武技……【六光連斬】！」

大技にすべてをかける。俺の最高の武技。ガゼフという男の到達点。これこそが“俺”なのだと誇る。

「……ッ！」

彼女の目が細まる。剣気が高まるのを肌で感じる。まさか、全てを撃墜しようとする——

「あ——負けてしまいました、ね」

6つのうち、5を撃ち落とすのちに彼女の剣は弾かれた。

「——ありがとうございます、ごさいます。ベアトリス殿」

これは、きつと勝利を譲られたということ。彼女はその気になっただけ、耐えきれたのだろう。そして、それは大技で隙だらけの俺をどうにでもできたということ。

「いえいえ。勝者は歓声に応えるのが華というものです。皆さん、喜んでらっしゃるようでよかったです」

屈託のない笑み。彼女は全く気にしていないようだ。

「敵いませんな、ベアトリス殿には。……お前たち、少しは静かにせい！ 騒げる元気があるなら復興の手伝いの一つもせんか」

口では怒りながらも、笑みが浮かんでいる。そして、そこに急報が飛び込む。

「——せ、戦士長才天使が。天使が村を囲んでいます。敵が！」

「なんだとオ！」

向こうで見物する蓮に視線を送る。

「帝国軍の後詰めといったところでしょうか」

一応丁寧語で話す蓮。

「いえ、天使を召喚するほどの手練れをこの規模で用意できるのは法
国以外に考えられない」

ふむ、ではー戒が聞き出した話は正しかったのかと納得する。だ
が、蓮は言葉にも態度にも出さない。様子見だ。実は全滅させる気
満々だったNPCたちと違って、蓮はこれといった思惑を持っていな
い。黄昏に害をなすものは殲滅するが、他は決めかねている。

「ー藤井蓮殿。あなたはこの者たちのリーダーとお見受けしてお願
いする。王国に仕えてはくれないだろうか？」

「それは断りますよ。俺たちはどこの勢力にも与するつもりはありま
せんーもちろん、法国にも、帝国にも。あなた方にも」

だから関わりと呼べるものはさける。国というのは裏の顔を持つ
ものだし、それに検討がついている。どういう形でも関係のない他人
が、情報が少ない今は望ましかった。

「……残念だ。しかし、一時的にでも手を貸していただけにだろうか」

「一時だとしても、傘下に入るとはどういうことを意味するかは、あな
たは理解しておられるはずだ」

傘下に入る、とは下になるということ。上だったものが下になるこ
とはあり得ない。雇われたというのは下につく関係になる。つまり、
雇われた事実こそが下だと証明する。彼らの黄昏は王国より下であ
ると。そんなことは認められない。大体、ここで雇われるとは強制徴
用と何ら変わりがない。1度目があれば何度でもが人間の心理とい
うものだろう。

「失礼なことを言った。謝罪する」

ガゼフは無理と諦めた。無理を通しては、むしろ己らがここで全滅
しかねない。……というか、先ほど戦ったベアトリス殿ならば全員の
首をはねることも可能だろう。彼女一人でそれだ、彼らは五人いるの
に何ができるのか。いやー副リーダー殿を人質にできれば……無
理だな。

実際のところガゼフが侮った戒は最強戦力に近い。とはいえ、それ
も仕方ない。弱く見えるのは、実力が隔絶しているからそう見えるこ

とが可能で、彼は泥をかぶるのが好きだからそうした。足手まといを連れないパーティよりも連れているパーティの方が取っつきやすいし、狙うとなれば一番弱い奴だろう。

「いえ、必要ないでしょう。あなたはそういうことを言っただけな立場におられる」

「では、一つお願いが。どうか、この村を守っていただけませんか？

我々はこれより法国兵に突貫する。そのあとどうするかはあなた方の勝手であるはず」

「そうですね。一度救ったものをすぐに見捨てるのも目覚めが悪い。あなたのお願いは聞き入れました。けれど、どうするかは俺の勝手です」

「……すまない」

「いえいえ、勝手にすることですから」

息を吸い、鬨の声を上げる。

「お前たち！ 敵は法国兵！ 敵は天使！ 魔法の武器がなければ危ういだろう。ゆえ、奴らは勝利を疑っていない。だからこそ、鼻を明かせてやろう。――撤退だ！ 敵の中央を食い破り、前方に撤退する。遅れた者は捨て置き。……行くぞ！」

幸いと言えるのか、わずかな小休止で装備の類は外していない。馬に飛び乗れば、それで戦闘態勢は完了する。すぐに隊列を組み、敵へと向かう。

……それを虎のアギトと知りながら。

第11話 ニグンとゾンビパニック

村を取り囲んだニグンは勝利を確信していた。

「ふふ、ガゼフめ。愚かに重ねて愚かな真似を。そもそも無視すればよかったのだ。敵の罠だと知らんほどに脳が足りんわけでもないのだろうにー村人を見捨てられずに5宝物を奪い去られ、拳句の果てには囲まれてやぶれかぶれの突撃か。自らが囷となつてあれらを救おうとでも？ 馬鹿な、口封じするに決まっているだろうに」

一通り嘲笑して。

「さて、貴様ら猛獣は罠にかかったぞ！ 包囲を狭め、天使をけしかけて体力を削るのだ。わずかな傷でいい、積み重ねて動きを止めるのだ。いいか、奴は猛獣ー近づくな、油断するな。この段に至つて失敗はあり得ない。であれば、貴様らの命こそが法国にとって価値のあるものなのだから」

隙のない完全な作戦。……というよりも、ニグンは優秀であり値するだけの兵を預かっている。敵が自分からここまで罠にはまつてくれたのだから、ここで手落ちをすれば無能のそしりは免れない。

「ー行けー」

そして、先頭に行くガゼフに天使をけしかけた。一体、二体……彼は武技による強化で確実に天使を屠ってくる。だが、こちらは天使を補充できる。勝利は最初から決まっているのだ。

見ていると、天使の包囲を突破できたはずのガゼフ以外の兵たちは彼のもとへ集つた。ー天使に有効な技を持っているわけでもないのに。馬鹿め、自分から包囲されに行つてどうすると嘲笑う。それはただの自殺志願に他ならないのだ。

これでこちらの兵が命を失う可能性はほぼ0になつたわけだ。時折弓矢が飛んでくるが、やぶれかぶれのそれを喰らうほど練度は低くない。……積みだな。あとはルーチンワーク、じつくりと作業を続ければいいー

そして倒れた天使が20を数えたころ、ガゼフは膝をつく。まあ、

もった方だろう。天使を20撃墜などそれは英雄の領域だ。惜しいが元からその力は無為、腐敗した王国を存続させて周囲を腐らせる毒に他ならない。

その彼が何やら吠えている。まあ、なんだー遺言ならば聞いてやろう。

「俺はガゼフ・ストロノーフ。王国を愛し、守護するもの。貴様らのような卑怯な手を使う輩などには絶対に負けん！ 貴様がボスなら自分の手で俺の首を取って見ろ。俺は、その他大勢などに取られはせんぞ」

「ふふん挑発か？ それが遺言でいいのかあ？ まあ、ガゼフよー人間は弱い。卑怯な手段でも何でも勝たなければ意味がない。負ければ亜人に虐げられるだけなのだよ。お前のそれは負け犬の遠吠えというものだ。そして、俺は負け犬の首を取るのに手をかまれる危険は犯さん」

「ならばー俺の方から行ってやろうー！」

光がひらめき、30を数えた。

「勇ましいな。英雄の遺言としては中々のものと言えるのではないか。だが、無駄だ。貴様はここにたどり着けんしーあの村を救うこともできない。わざわざ帝国兵を装ったのだ、見逃すわけがないだろう」

そして、ガゼフは地に沈む。人間である以上、血を失いすぎれば当たり前前に立つこともできない。だが、絶体絶命で絶望しかないはずのガゼフが笑っている。それは英雄らしからぬ嘲笑の顔。

「残念だな、あそこには俺より強いお方がいるしー傷一つつけられん村人たちもいる。手を出さん方が身のためだぞ、法国の」

「は、死に様を汚すか。何を頭の沸いたことを、それを信じる馬鹿がどこにいる」

「ふふん、世の中には計り知れんほどの方々がいるということだ。俺には主殿の強さが分からなかったがーおそらく、誰よりも強いのだろうな。貴様の信じる神よりも」

「ふん、英雄の最後は黒粉にでも塗れたか。まあ、いい。安心しろ、た

わごとは聞き流して格好をつけた言葉だけを後世に伝えてやる。――殺せ」

4体の天使がガゼフに引導を渡すために近づいて。

「――消えた。」

「――は？」

誰もが戸惑っている。そして、ガゼフは一点を見つめている。そこを見ると草薙鎌だった。村人の置忘れ？ などとニグンは一瞬思うが、だとしたらなぜここにあるのか。

「「ーオオオオオオオオ」」

頭をかき回されるような多重音声。心臓をわしづかみにするような声が幾重にも重なって響いてくる。……村の方から。

「……ゾンビ、だど？」

それはゾンビだった。見たことがないー腐つてもいない、人の個性を残したゾンビなど。だが、それはアンデッドに違いない。あらゆる生を憎む目があんなにも赤く輝いているのだから。

「馬鹿な。馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿なーなぜアンデッドが発生する!?! おかしいだろう、この村は死体の処理すらまともにできないのかー!」

「はは、貴様らが殺したのだろうに」

「殺してからすぐにアンデッド化するわけがあるか。ふざけているのかガゼフ・ストロノーフ!」

「いやいや、身動きできんしふざけもできんよ。これは、助かったということかな」

「――気狂いめ。もういい、さっさとガゼフを殺せ! そして防御陣形を取るのだ、天使がアンデッドに後れを取るはずがない」

動いた天使は壊される。しかもそれは投げた鍬や棒切れによるものなのだ。

「……っはあ?」

ありえない。天使を一撃で殺せるようなアンデッドなど、それこそただの一体で現れたともエ・ランテルでさえ多くの血と引き換えに倒すような災害と同義。それほど強力な人類の敵。いや

「攻撃力が強いタイプならば防御は薄いはず！ 魔法で攻撃せよ、近寄るな——近よらせるな！」

だが、現実是非常だ。事実はむしろ逆である。ゾンビたちのステはデス・ゾンビ相当……その能力は防御に偏っている。効きやしない。「なぜだ。なぜだア！ 撃つたんだぞ、当たったんだぞ、なんで倒れねえんだ、ありえねえだろ。アンデッドが！ 神聖魔法に！ 当たつてエー！ 倒れないなど、あるかアアア」

「……ふふ」

嫣然と笑う女が向こうに見えた。死臭がする。死神のごとき色気。この世のものではない妖艶に背筋が凍る。

「き、貴様は？」

「ごめんなさいね、うちの子が遊びたいって聞かないのよ」

普通の場所であれば魅力的な笑顔。母性すら感じるだろう。だが、ここでは——

「……奴だ」

確信した。あれこそが

「奴が死霊術者だ！ 殺せエー！」

けれど、天使は動かない。部下は、もう——ありふれたゾンビとなり果てこちらに向かって蠢いていた。

「つひー ひيي。こ、ここここうなれば最高位天使を召喚するしかない。は、死霊術者などいかなるものかよ。怯え、震えて死を待つがいい——」

結晶を取り出し、必死に神に祈りながら使用する。今ほど心の底から願っていたことはほかにない。

「……リザ」

声。だけど、ニグンは気付かない。

「至高天の熾天使だと厄介だな。とはいえ、ここで召喚してくれるなら首を刈れる。リザは動くな、戒、螢フォローを頼む」

そして、召喚。したのだが——声の主、蓮は動かない。

「ふふふ。ははははは！ 見よ！ 最高位天使の尊き姿を！ 威光の主天使へドミニオン・オーソリテイの美しき姿を。畏れ、声も出

ないか。当然だ、魔神すら打倒した最高位天使なのだ。この最高位天使には手も足も出まい。この最高位天使にはなア」

羽を幾重にも重ねた天使。あまり美しくもない単なる化け物……とは、後世の感覚か。リアルにて伝え聞く天使、今や萌えの対象であるそれはキリスト教誕生までさかのぼると無性であるらしい。そもそも人間の形をしていないのだ、であればアレは原初の天使か。

「藤井君？」

動かない蓮に螢が口火を切った。

「いや、第7位階とはな。警戒して損じた気分だ。だが、デス・ナイトたちには厳しい相手だな」

「ならば、僕がやろう」

「ああ、頼んだ戒」

大剣を手にした優男が前に出た。

「ふふふ。剣を手に、どういうつもりだ？ もしや、勝てると思っているのか。最高位天使に。この最高位天使の前に人間の力など通用せんよ」

「さて」

不敵に笑う。

「行け、威光の主天使へドミニオン・オーソリテイよ。ホーリースマイトを放て！」

戒がいた場所に光の柱が突き立つ。後に残るのはチリ一つなく――

「ははは、消し飛んだか。馬鹿め、最高位天使に勝てるわけがないのだよ。ふはははははー」

声が、響く。

『千早振る――神の御末の吾ならば 祈りしことの叶わぬは無し《かみのみすえのわれならば いのりしことのかなわぬはなし》』

不吉な声。そして、その声は先の男と同じそれである。死んだはずの男がどうして、などという疑問を抱く暇はニグンにはなかった。

「創造――許許太久禍穢速佐須良比給千座置座《ココダクノワザワイメシテハヤサスライタマエチクラノオキクラ》」

そこに出現した。そうとしか言いようがないが、実際は気配断ちと体術の組み合わせで視線から逃れていただけだ。ニグンはもちろんガゼフにも見えずとも、もちろん黄昏の面々には見えていた。

「腐り落ちるがいい」

触れた。それだけ、最高位天使は地に沈む。腐食し、虫の息になって――崩れて消える。

「……ほへ？」

ほかん、と口を開けて。ニグンは最高位天使が敗れたという現実を直視できなかつた。視線が明後日の方向に向かう。

「現実が理解できないか。細胞らしいな、お前たちは自分の見たい現実以外見えていない。不快だな、見ていたくもないよ」

「おろ？ うむ。ああ――最高位天使が人間などに負けるわけがないのだ。しかし、一撃では足りなかつたようだな。よし、二発目のホーリースマイルで消し飛ばしてやろう」

と、そのようなことをぶつぶつと言っている。ありていに言っ、精神異常者の有様であろう。

「だから、死ね」

腐食の風が吹いた後、黒色のヘドロが残った。

第12話 冒険へ

あの後、ガゼフにはお帰り願った。そもそも敵は風化して跡形もなくなってしまったのだからどうしようもない。遺体を持ち帰ろうにもそれはただのしみでしかなく、装備など錆がいくばくか残るのみ。……そんなことは指示していない。

というか、ほとんど全てがあいつらが勝手にやったことだ。しようがない……とは言える。そもそも原作からしてあの面々は藤井連の昇華个体、天魔・夜刀の想いに感化されて勝手な行動をしていた。というか、そもそも彼は指示を出せる状態になかった。

——螢がカルネ村に関わることも。

——ベアトリスがガゼフを試すことも。

——リザが敵兵を殺すことも。

俺はまったくもって指示していないのだ。まあ、これが俺の意向だと思っている節はあるし、敵兵から情報を得ることを初めから考えなければ、まあそうしてもらいたい行動だったかもしれない。情報、欲しかったけど。今思えば法国の特殊兵のリーダー格くらいは助けるよう命令したほうがよかった。

ああ、戒が法国の男を殺したのは俺の指示だったかもしれない。邪魔な天使を掃除しろくらいのつもりだったんだが。

だが、情報を探られた。あの後すぐに情報を探る魔法の攻撃を受けた。いや、攻勢防壁が発動したから魔法そのもの防ぐことはできた。——発動したという事実だけでも向こうにわたった。おそらくは結晶の発動に伴う情報収集。どこまで探られたかはわからない。が、警戒するに越したことはない。

少し手落ちがあつたとはいえ、彼らはこの黄昏を——俺たちのギルドがあるセスルームニル山を守ろうとしているのは間違いない。そして、彼らは設定通りに波旬を憎んでいる。波旬……自己愛とかそういうあれこれを感じる相手をせん滅しようとしている。

問題は、俺が藤井連などではないということ。ただのそれっぽく仕

上げたユグドラシルのアバターに過ぎないのだ。アバターの力を持つ一般人では神の資格を持つ天魔・夜刀にはなれない。

「だから、確かめる必要がある」

あいつらは“本物”なのか。俺は偽物から本物へと想いを昇華させた迦楼羅とは違う。妄想にとらわれながら自己に閉じこもるよりも痛みを選べた「考」の犬士とは違う。だから、どうしても——確かめなければ安心できない。

きつと、彼らが本物であるのなら、本物でない俺を殺すだろう。彼らは原作の力こそ持っていないが、COMとは違う。学ぶし、考える自らの力の利用法を知る兵士だ。それこそ獣か機械の反射ならば負けるとは思わない。しかし、俺は負けるだろう。彼らの人を超えた魔人の力に。人を超えた武に。

だから全員をここに集めた。戒、トリファ、螢、ベアトリス、先輩、ミハエル、ルサルカ、司狼、本城、リザを。

「……俺は冒険をすることにした。カルネ村の村長の話では冒険者というものがいるらしい。実態は害獣退治に他ならないらしいが——この世界がユグドラシルと繋がりがあるとわかった以上、ワールドアイテムは我らにとって脅威である。あらゆる情報を集めるため、俺は未知に飛び込む」

宣言した。“藤井連”ではありえないことを。彼は原作者にすら意味が分からないと思われるような神格だ。彼は日常をこそ尊ぶ。昨日と同じ今日を、今日と同じ明日を。いや、違うか——過去は戻らない。ならば、今日をこそ永遠とする時間停止こそが彼の世界。であるならば。

冒険などするまい。

未知など求めまい。

明日など知るまい。

ゆえにこそ、俺はこう宣言した。彼らが本物であるのなら、俺が本物でないことを理解して殺す。……無論、ただ殺される気はない。というか、転移で他に逃げる。あとは、こいつら実はパーティーごとで仲間悪いから仲間割れするだろ。

「——へえ。いいんじゃないかねえか。ま、お前が行く必要はねえと思うがよ。止めなきやならんほど体調は悪くねえんだから、行きたきや行けばいいと思うぜ。俺はよ」

「はいはい！ では、私がついていきまーす。それと、螢もついてきまーす！ 護衛がなしはさすがにマズイでしょ」

「お、いいね、それ。んじゃ、俺も行かせてもらうぜ姉さん」
「……え、これ。私も行く流れ？」

まあ、いいけどーと、螢は小さく笑う。顔は赤くなって。いつも通りヤジが飛んで、喧々囂々と怒鳴り合つて。まだ日数が経つたわけではないけれど、なぜかかけがえのない日常に感じられる。

「ごちやごちや騒がしくなってきたがー言つたもの勝ちだ。先輩もルサルカも行きたがつてるが、この流れを覆せそうにはない。」

「先輩、リザとーあとトリファ。お前たちは商人としてアイテムを調べてくれ。ワールドアイテム以外にも何かあるかもしれない。商うものは素材……金属でいいだろう。倉庫に適当に放り込まれたミスリルやアダマントタイトの山を適当に売ってくれ」

ああ、認められたのだと嬉しく思う。彼らは本物ではない。俺と同じく——設定だけの、偽物。偽物は偽物同士、仲良くやろう。俺は藤井連でなくても、彼らは俺を慕ってくれているのだから。

「蓮君、私は?! 私もついてくれ！」

「悪いな、ルサルカ。お前はここを守ってくれ。ああ、それと頻繁に帰ってくるつもりだから食事を作ってくれ」

そう、食事は欠かせない。あの病毒がはこびるリアルでは味わえなかった至福。それがここでは味わえる。この世界が俺の妄想でしかなかったとしたら、ならば楽しむしかないだろう。

「え？ そ、そう。分かつたわ。私はレン君のお嫁さんとして家を守っているわ。ご飯作って待ってるわね」

きゃー、と顔を赤くしてほほ笑んでいる。

「そうそう、マレウスは家で寂しく待ってればいいんですよ。しよせん、旦那が外で何をやってるかなんて知れたものじゃないんですから。帰りを待ってたらしわだらけなんて、あなたらしいじゃないです

か」

「なんですつって、ベアトリス！ あなたなんて妹に彼氏寝取られとけばいいのよ！ あんた好きあたりから勘違い娘が好みでしょ、カイ君は！ 言っておくけど、勘違い突撃娘度はレオンハルトのが上よ」
「はア!? なんで私に飛び火してるんですか。そもそも兄さんへは家族愛です！ なんで肉親と乳繰り合わなきやならないんですか」
「あなたたちはギャグキャラとして負け犬になってればいい。その間に私が藤井君を貰うから」

いつものごとくかしましくなってくる。ミハエルに助けを求めても知らんぷりである。

「その辺にしろ。話を本筋に戻す。本城、戒は俺たちのバックアップだ。冒険者として活動する俺たちを監視しろ。ミハエル、お前はミラー・オブ・ビューイングを使って黄昏を警護しろ」

ここにいないシュピーネは自由に情報収集するよう命令している。「行動開始だ。各自、メッセージによる連絡を密にしろ」

そして、適当にだべりながらカルネ村の近くの城塞都市エ・ランテルに到着する。俺、ベアトリス、螢、司狼のメンバー。そして、本気で身を隠す本城と戒の存在など衛兵にはわからない。

「ええと……珍しい格好だな？ どこかに所属してるのかい」

「いや。そういうわけでもないが、チームであることは確かだ」

「ああ、冒険者のチームさんかい。なんというか、まあカッコいい格好してると思うが、鎧じゃなくていいのかい」

「問題ない。強度は十分だ。こここの冒険者組合はどこにあるか聞いてもいいか」

「ああ、それは。地図に書いてやるよ、ほら」

「サンキュ」

と、いうやりとりで通された。ぶっちゃけ空港のゲートより簡単に通れたし、身分照会すらなかったんだが。これでいいのか。スパイ入り放題だな。まあ文明レベルが中世なら仕方ないか。

そして、組合へ。

「ようこそ、冒険者ギルドへ」

暇そうにしていた女が言う。いかにもな営業スマイルだ。まあ、こちらの方がいいだろう。藤井連はどちらかというといケメンの側に属するが……一目ぼれなどすれば妹を愛する彼女に何をされるか分かったものではない。いざとなれば恋敵を物理的に排除することもいとわない。

「ええと、商売ですか？」

そんなことを言う。まあ、彼らの服はそうそう見る代物ではない。なんというか、男の子が好みそうな——そんな服だ。しかも似合っているものだから質が悪い。言うなれば、ホストに見える。女たちのそれは、執事風の男装か。

「いや、登録を頼む」

「登録……ですか」

実際のところを言えば、冒険者は貧乏だから始めることがほとんどだ。かの有名な、貴族出身の『蒼の薔薇』ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラは特別な例だ。食い詰め物の集まりにどうにか仕事を与えてまともな組織にしているのが本当のところ。だから、彼らのように身なりの整った者が登録しに来るのは本当に珍しい。ないわけでは、ないものの。

「では、登録料として5銀貨いただきますがよろしいですか」

とはいえ、自分はただの受付嬢。言われたことを事務的にやるだけだ。詮索は——まあ、想像するのは自由だろう。どこかの貴族の子飼いが、箔でも付けに来たのだろうか。規則があるから無理に昇進を求められたりするの勘弁してほしいな、なんて思いながら書類を用意する。

「はい、確認しました。代筆は必要でしょうか。その場合は銅貨5枚をいただきます」

貴族の子飼いで、武官であるなら字を書けなくても仕方ない。しかも、ここは王都から外れた田舎であるのだからなおさら。

「頼む」

だから、彼がそう言ったのも気にしない。違和感なんてない。彼が

異世界出身なんて、妄想にすら思い至ることはない。

「では、登録する名前をー」

そういったもろもろを処理する。彼の対応には好感が持てた。きちんと問いに答えてくれるのだ。普通だと思ふなら、それはどこのお貴族様か。田舎者とはそもそもが語彙が少ない。分かる言葉が赤ん坊かと思うくらいに言葉が分からないのだから、言葉を平易にするにも限度がある。その点、彼は打てば響くように理解してくれているようだ。

「では、最後に。あなた方4人をチームメンバーとして登録しますか？」

まあ、チームということは見ればわかる。一緒に来るだけでなく、同じ服を着ているのだから。しかも、ここまで凝ったもの。

「頼む。チームの名前は……そうだな、トワイライトで頼む」

「はい、了解しました。講習は今から受けますか」

「頼む」

「はい。責任の所在は明確にしなければなりませんからね。冒険者は危険なお仕事です。しっかりと説明をして、死んでも文句の出ないようにしないと」

……

「と、言うわけです。いいですね？」

「つまり依頼料からはギルドが調査料を抜いているものが支払われる。ギルドを通さない依頼は自己責任と。ギルドを通さない冒険者がいるのか？」

「そりやもう。細々とした仕事を頼むのに、一々ギルドを挟むのも面倒でしょう？　すでに信用している者同士なら、ギルドを挟むだけ無駄な時間とお金がかかります。まあ、悪質な依頼者もいるので注意した方がいいことは確かです。そうですね、目安としては何度も依頼を受けた人相手ならばギルドを通さず受けるのもいいでしょう。しかし、初対面の相手の依頼をギルドを通さず受けるのはお勧めしません」

思わず笑ってしまう。責任を押し付けるような響きが所々に聞こ

えるが、注意でさえも責任を取るような言い方を避けている。まるで政治家だ。

「……ええと、何か？」

「いえ。初対面の相手に対して、そんな簡単に信用してしまうものでもなからうに、と思ったんでね」

「いえいえ。あまり経験のない方だところつと騙されてしまうんですよ。ギルドを通すだけお金の無駄とか言っつて。私たちは調査とかしてるんですけどね」

「はたから見てわからない、と言っつことでしょう。で、他に注意点はありますか？ それと、依頼はどこで」

「あそこに依頼書が張り出されています。取っつてきてここで受け付けます。……まあ、もうろくな依頼は残っつてませんし、そもそも依頼を受けられるのは明日プレートを受け取りを済ませるからになります」
「了解した。明日また伺おう」

そして、宿。

「銅貨5枚で相部屋だ」

ハゲたいかにも筋骨隆々の男が言う。とはいえ、冒険者というよりも日雇いの倉庫業の男にでも見えるが、まあああいう筋肉ははったりには向っつているのだろう。筋肉に似合うだけの腕力はあるのだから。軍人として見るならば、ただの食い過ぎだが。増やしすぎはただの重りだ。

「二人一部屋を2つだ」

だが、じろりとねめつつけられる。一般人ではビビりそうな眼光だが、藤井連の記憶として殺し合いを経っつている“藤井連”には通じない。殺人童貞の威圧など程度が知れる。そう、子供だましでしかない。筋肉と同じように。

「プレートは銅。いいか、冒険者は繋がりが大事なんだよ。そんな、こぎれいなお仲間さんごっつこなどではなくっつてな」

「……ッ！」

「やめろ、螢。どうでもいい。それで、店の人。ここでは金を払っつても

部屋は貸してくれないのか？ それなら出ていくが」

「2部屋で銅貨14枚だ。忠告だ、街の外に出たら男女の性など気にしていたら生き残れんぞ」

「この冒険者は意識の切り替えができないほどレベルが低いのか？」

「……ツチ。いいか、先達は敬うことだ。俺は何年もここで冒険者どもの世話をしてる」

「俺は媚でなく実力で認められるようにするさ。部屋は二階だな」

なんて涼しげな顔で受け答えをしている蓮だが、内心ではいつ螢が剣を抜くか気が気ではなかった。司狼はニヤニヤ成り行きを見守つてやがるし。

「……へへ」

歩き出すと、足を差し出す奴がいた。ああ、これがチンピラかと一種懐かし気な気分になる。別にそういう類の人間に会ったことがあるわけでなく、昔の漫画によくいたから。さて、どうしようかと一瞬思案すると。

げし。

螢が一步進んで蹴った。しかも、ご丁寧に生かさず殺さず——関節を破壊しない程度に力を抑えて、だが関節技と拷問技を併用してできるだけ“痛く”。ねじり具合にコツがある。格闘術も知らない彼らには未知の衝撃。

「——ツア。ギヤアアアアアア！」

その熱した鉄串を数ダース刺して抉ったような痛みにとたうつ彼はがしやんがしやんと机を倒しながら呻いて。

「っは？」

ほかん、と一緒にいた二人の仲間がそいつを見つめる。どうしていかかわからないのだ。血をまき散らすわけでないから止血することも、折れているわけではないから固定することも意味がない。ただ“痛がって”いるだけ。

「あら？ 仲間が倒れたのに見学かしら。意外と意地が悪いのね、あなたたち」

ぐい、と螢に顔を近づけられた方はのけぞって。そのまま椅子ごと倒れる。バタン。持ってたグラスがどこかへ飛ぶ。

「つて。てめえ、なにしてくれんだ!」

「やる?」

嫣然とほほ笑んだ。魅力的だが、その実はチンピラの威嚇。かつての仲間だったベイ中尉のような挑発的で肉食獣を連想させる笑みだった。

「……すみませんでした!」

びしり。90度だった。

「じゃ、その二人を片付けておいてね」

その横顔はまさにクールビューティ。だけど中身はチンピラだった。しかも、強い。

「あ。あああああああ!」

そして、女の悲鳴が響いた。衝撃的なことがあって、10秒もたつてから再起動した悲しみの雄たけび。

「あ……あたしの。……あたしの、ポーションがアアアアア。こな……こなこなごこな。あれ、おかしいな。なんで机が青く濡れてんだろ。もつと酒は濁ってるんなのにな。あは」

椅子ごと倒れた男。彼の手から離れ、宙に舞ったコップは彼女のポーションヘジヤストミートした。

「あんた、地獄のような苦しみを乗り越えて、地を這いまわってまで金をためて買ったポーション。弁償してよ!」

勇敢にも。否、無謀にも螢に向かって掴みかからんばかりに言う。これが、本当に掴みかかっていたら腕が飛んでいたあたり幸運ではあるのだろう。

「知らないわね。そんな的のごとく置かれた物なんて。どうせ倒して割ってたでしょう、あなた。それに、私は彼には何もしてないわ。勝手に倒れて、勝手にあなたのポーションめがけてコップを投げただけ。……それで壊されるなんて、ずいぶんとまあ注意が足りないのね」

「……むう。あんた、その倒れたアンタ!」

形勢不利と見たのかそちらの男へ怒鳴りつける。

「金貨一枚と銀貨10枚、払える!？」

その問いに男はふるふると首を振るだけ。まあ、金をためるような殊勝さがある顔ではない。

「ねえ、あんた代わりに払ってよ。現物でもいいからさ。そんな貴族様を買うような服着てんだ。ポーシヨンだって持つてるだろ？」

「私、物乞いは嫌いなよねー」

殺気が混じる。

「ほれ、やる。行くぞ螢」

そして、蓮が腕を引つ張る。止めなければ首が舞っていた。

「待って、藤井君。アレは細胞……」

「そんなことは知らん。騒ぎを起こすな。やるときはまとめてだ。お前はゲリラ兵を一人づつ選んで殺すのか。非効率的で下策だな」

実のところ、殺人を忌避したというわけではない。別にアレを人目につかぬところで殺すならどうとも言わない。が、感情に任せて殺すのはだめだ。改めて彼らの暴走癖を確認した。

「これは潜入だ。細心のとまでは言わんが、行動は選べ」

そういうことだ。殺すにも時というものがある。人間であった頃ならば殺人そのものをやめさせようとしていたかもしれない。けれど、今の彼は異形種だ。付き従う者と同じく。

第13話 初めての依頼

そのあと。

もちろん、酒場の安っぽい料理など食うわけがなく。家に帰った。そこで待っていたルサルカには「あら早かったのね。今からご飯作るわ」と言われたので、先に倉庫の整理を。アイテムをためるのが面白くて大量に集めてーそして、整理していない。集めるのはよくても整理するのは面倒だったのだ。

一人黙々と作業しているとすぐにベアトリスがやってきて「藤井君、螢が作業を手伝うって言ってます」と言ってきた。確かに本人は雑多なアイテムを面白がって眺めるばかりでほとんど貢献してくれなかった。螢曰く「藤井君、姉さんがごめんなさい」とのことだが、気にしてはいない。

そして、ルサルカが作ってくれた食事を食べる。「なんかいいわね、こういうの。お家で帰りを待って、一緒に食卓を囲むの。私にとってはこれが最高の贅沢なのかもしれないわ」なんて。うまいと言ったら泣いて喜んだ。ベアトリスは死亡フラグ乙とか言って、さすがに空気は読みなさいね姉さんと口にザワークラフトを突っ込まれていた。

そして、結局。宝物庫とは名ばかりの別の倉庫の探索許可を与えた司狼が持つてきた翻訳眼鏡をつけてーシヨボイ依頼群の前にいた。やはり最低級で受けられるのは子供でもできるような雑用ばかりである。カッパーなんてそんなもの。

「……これを受けることはできないか？」

ダメもとでシルバーの依頼を持つていく。

「申し訳ありませんが、カッパークラスは上のクラスの依頼を受けることはできません」

「そうか。そう言えば、討伐とかいうのを聞いたな」

「あ、はい。討伐証明箇所を持ち帰っていただければ報酬をお渡しできます」

「……そうか」

ならば依頼などより魔物を倒した方がよさそうだ。RPGでもあ

るまいし、ただのお使いなど面白くない。踵を返して。

「でしたら、私たちと一緒にやりませんか？」

「あなたたちは？」

彼らは実力的には凡百と変わりがない。弱い、という意味での酒場にたむろつていた者たちと同じ。けれど、目の色が違う。あんなどぶ色はしていない。まるで、少年のようにきらきらしていてーああ、その色は少しまぶしい。

「チーム『漆黒の剣』です。2チームあれば割のいい獲物を狙うこともできますから」

「……狙いはそれだけか？」

「あはは。あなたたちは強そうですから。今はあなたたちと共に戦うことでしか強い敵を倒せずとも、経験を積むことで私たちだけで倒すことができます。……あわよくば、そうならばいいかなーと」

「なるほど。まあ、強いと思ってくれるのであれば光栄だがな」

「いえ。プレッシャーを与えるつもりはないんですよ。新人の方だと言いますが、だからこそあなたたちはすぐに級が上がっていくと思うんです。その前に知り合いになっておけばなんて下心もあって。いや、これじゃ更にプレッシャーかけてますか？」

「いや。強さについては人後に落ちるつもりはない。安心してくれ」

「人後……？ ああ、いや。強いということですね。では、少し場所を移しましょうか」

そして、別室へ。

「では、少しばかり自己紹介を。私はペテル・モーク。こちらはチームの目のレンジャールクルット・ボルブ。薬草にも詳しい治療や自然使いのダイン・ウッドワンダー。そしてーこちらはなんとタレント持ちのマジックキャスター、ニニヤ・ザ・スペルキャスターです」

よろしく、と中二的なあだ名の少年だけは恥ずかしそうに返し。

「では、こちららも。俺は藤井連。左から櫻井螢、ベアトリス・キルヒアイゼン、遊佐司狼だ。基本的に俺と司狼が前衛、女性が後衛だ。二人とも魔術詠唱者だ」

前衛は軍刀を、そして後衛は杖を持っている。司狼の得意は銃で、

蓮の得意はナイフだし女性二人も杖は門外漢だが、偽装としてそうしている。そもそもが本来の戦い方とは全く異なる。だからこそ偽装になる。

「……役割を決めてはいないのでですか？ 後衛と前衛というだけで」

「戦い方は多く学んできたんでね。縛ってしまう方がやりづらい。決めてしまうと役割のスイッチもできなくなるしな」

「そうですか。では、その戦い方を勉強させてもらってもいいですか」「ああ、少しくらいなら教えられることもあるかもな。だが、代わりにこのことを教えてくれ。俺たちは異邦人だからな、分からないことが多いんだ」

「なるほど。ふむ、名前の響きからして南方の方ですか？ ベアトリスさんはこちらから南方に渡った方とかだったりして」

「——はいはい！ 質問。あなたたちってどんな関係なんですか」

と、いきなりチャラそうな外見の男が迫ってくる。髪も金髪で、まあ「らしい」。まあ、さすがに椅子に足をかけて顔を突き出すくらい、間合いの内側にまでは行かないが。

「仲間だな」

蓮が返す。何の気負いもなさそうで、ルクルットは安心するがベアトリスが溜息を吐く。螢はよくわかっていない顔。

「ベアトリスさん、螢さん。惚れました！ 付き合ってください！」

螢は絶対零度の瞳を向けて。

「最低ね、いきなり二股をかけようとする男は死ねばいいと思うわ」

一方でベアトリスは。

「あら、モテモテですね。ですが私には相手がいるんです。あなたと違って誠実で優しいイイ男なんですよ」

ニコニコ顔できついことを言った。

「……ありがとうございます！ お友達から始めさせてください」ルクルットはくじけなかった。

「やめろ、バカ。すみません、うちのものが」

「いや、気にするな」

そういうのも悪くない。しつこいし、女性には嫌われるだろうが蓮

はその諦めない精神は嫌いではなかった。無理に間合いを侵しているわけではない。そういうところは冒険者としてきちつとしているのだ。

「では、さっそく準備を——」

ペテルの言葉は組合の女性のノックで遮られた。

「藤井蓮さんに指名依頼が届いています」

とのことだが、読んで字のごとくであるならば心当たりなどない。「あの、藤井蓮という方はどちら様でしょうか……？ カルネ村までと、その近くの森の薬草採取の護衛任務をお願いしたいんですけど」目元を髪で隠した少年が後から入ってくる。女の子であるならば、かわいいかもしれないが——線が細いとはいえ普通に男である彼がそうしても、連には不潔にしか見えなかった。もちろん、態度には出さないが。

「俺だ。あなたが依頼者か、だがすでに契約が成立してしまっているね。一度成り立った契約を覆すのはよくない。たとえ書面を交わしていないとしても」

「ちよ——藤井さん、彼はンファイリア・バレアレさんですよ。彼からの依頼なんて名誉なこと、お邪魔するわけにはいきませんよ」

「だが、有名であろうとなんだろうと契約には誠実であるべきだ。契約の順序に優劣は付けても、契約そのものに優劣などありません。……そもそも彼のこともよく知りませんし」

「ああ、異邦人の方ですからね。けれど、彼はこの街の影響力で一二を争う薬師リイジー・バレアレの孫です。冒険者として依頼を逃す手はないと思いますよ」

「いや、しかし——」

「では、こうしてはどうでしょう？ 僕が二チームお雇いするというのは。言つては悪いですが、カッパーの依頼料はたかが知れていますので……そのシルバーの方と一緒に雇っても大丈夫ですから」

「それなら俺の方に異存はない。魔物を相手にする警護などやったことがないからな。教えてくれよ？ ペテル。それと俺たちを呼ぶのに敬称は不要だ」

実は、魔物以外ならやったことがある。というか、藤井蓮は天魔・夜刀の設定を引き継いでいる。彼の見た記憶の中にはドイツ軍人、ロートスの記憶とてあるのだ。暗殺や要人警護の知識ならある。

「はい。ではよろしくお願いしますね。トワイライトの皆さんと……えっと」

「漆黒の剣です。よろしくお願いします」

「ええー」

握手を交わして。しかし、横のベアトリスは何やら考え込んでいるようだ。

「どうした？ 気になることでもあったか」

「いえ、彼の髪。あれは——」

目を細める。つばを飲み込んで。……なにか、危険なものでも見つけたか？

「萌えませんね。かわいくないです」

「……ベアトリス、オマエな。つか、年下食いの趣味でもあるのか。いや、そう言えばお前はアレか。あれだったな」

「アレってなんですか!?! ひどくないですか。私は若作りババアとは違いますよ。心はピッチピチの18歳ですから」

「……姉さん、ピッチピチって。死語よ、それ」

螢ですらため息をつく。

「ちよ。螢、あなたまで何を言い出しますか!?!」

「ま、若作りしようとしてアレな言葉言っちゃうアネさんはほつとして。依頼主さんよ、出発はいつからだい?」

司狼がスルーしてまじめにかかる。

「できれば今から。遅くても明日には出発したいです」

「あいよ、了解。こっちはすぐに荷物をまとめられる。ペテルさんよ、そっちはどうだい?」

「狩りの準備はしてあるので、半刻後には」

そして、馬車にのって手綱をとるンファイリアを8人の護衛がのんびりと足を進めている。とりあえず、連としては大した事件もないの

に随伴が死んでは冒険者としての評判が最悪になるということで殺さないように仲間を説得した。

「そういえば、ニニヤはタレント持ちだとか。タレントとはどういうものなんだ？　すごいものだとか言っていたな」

「ええ。ニニヤはタレント持ちで、それが自分に合っている珍しい例なんですよ。このタレントは半分の時間で魔法を覚えられることなんですよ。もちろん魔法詠唱者としての才能も普通以上にありますよ。そういうタレントを持ってはいても階位魔法をほとんど使えない人だっているでしょうね、きつと。だから神様の贈り物なんだって思っています」

「やめてくださいいよ、ペテル。神様の贈り物なんてたいそうなものじゃないです。それに、神様なんてなにもしてくれませんよ」

「いやいや。ニニヤはきつと大物になるさ。すぐに第三位階魔法も覚えて俺たちの手の届かない立派な冒険者に……ぐすつ。たとえ離れ離れになっても俺たちはずっと仲間だと思っているぞ。……ぐすぐす」

想像したのかぐすぐすと泣き出してしまっている。涙もろい奴だ。

「ちよつと。それは本当に洒落になってないです。もし第三位階を覚えられたとしても出て行くつもりはありませんよ。約束したじゃないですか、漆黒の剣を探すって」

あわあわと慌てて。そう、微笑ましいというやつだ、これは。

「……ニニヤ。そうだな。ああ、そうだった。絶対、見つけ出すって誓ったもんな。俺たちで」

仲間の絆は永遠——だとか言うことでペテルは感動して泣き出してしまう。そして黄昏の彼らはそういう仲間の絆というものが好きだ。なぜなら波旬には存在しえないものだから。

「……漆黒の剣とは？」

「ああ、藤井さんは知りませんでしたか。おとぎ話に出てくる伝説の剣なんですよ。十三英雄、八欲王——伝説は伝説に過ぎないと言われますがね、ロマンですから」

「……いや、お前たちならきつと見つけることができるさ。諦めなけ

れば、きつと夢は叶う。——だが」

「はい？」

首をかしげたペテルの肩に女性陣に話しかけてはすげなく無視されていたルクレットが、急に顔を真面目にして、ペテルの肩に手を置く。

「……敵だ。オークもいる。あいつらたくさんいやがる。……襲ってくるぞー！」

敵が来た。丘の向こう——魔法が届く距離ではない。少なくとも、50mというのはこの世界では射程距離内がない。

「数は20ほど。まだ来るぞ」

ルクルットは地に耳をつけて聞いた。

「オーガ種は4体。ゴブリンが10体、ウルフは8体だけど、14体が後から来るわ」

螢は地に耳すらつけず、ただ普通に足音を聞いただけで種すら把握する。戦闘経験が違いすぎた。まあ、もつとも「彼女」は魔物と戦うのは初めてだ。異業種というくりではギルド戦があつたものの、初めてで、だがしかし設定が彼女に英知を与える。……もしかしたら、それは既知感と呼ばれるものかもしれない。

「オーガ種は右が3体か。そちらは俺たちが相手をする。ペテルたちは左を頼む」

連は特に気負うこともなく歩き出す。三人もそれについていく。レベルが違いすぎて警戒するとかそういう次元ではないのだ。寝首をかかれようがダメージが入らないのに、真面目に怖がるなどできない。しない。

「ああー！」

漆黒の剣の面子は力強くうなづいて準備にかかる。畏、そして魔法によるバフ。生存確率を上げることは何でもやるのが真の冒険者だ。くすぶっているような人種とは違う。

「あの程度ならば、そうだな一度斉射。後に前衛が突撃して掃討だ」

だが、ここにいる黄昏はそんなのとは次元が違う。そもそもが強すぎてどこまで手加減すればいいのかが分からない。そして、冒険者と

しての戦い方もできやしないのだ。だから、戦い方はおのずとこういうものになる。

蹂躪。

オーガどもはマジックアローに貫かれ、勢いをそがれ——そのまま前へと出た蓮と司狼に斬り殺される。軍刀の一撃でおしまい、怪我でひるんでしまったモンスターを屠殺のごとく殺していく。

そこには冒険などなかった。ただの作業だ。殺すことに何の感慨も抱いていない。

「——すごい」

それを見たペテルたちはわけがわからず、そう言うのが精いっぱいだった。けれど、彼らとて冒険者。死なないためにきちんと動く。まず、ダインがドルイド魔法で先行するオーガを止めた。

「行くぞ、オーガ！」

すかさずペテルが剣で斬りつける。間合いが広すぎる——がそれでいい。殺すための剣ではない。そこまでの技術も、筋力もない。だが、仲間を信じる心はある。ほんの少し動きを止めた。それだけでは1秒後に殴り殺される。けれど

「いい感じだぜ、ペテル。あいつらビビってる！」

ルクルットの放った矢が当たる。オーガは貴重な時間をさらにロス。痛みを耐えてチャンスをつかむような知能はない。こつこつとダメージは積み重なる。だからこそ、彼が間に合った。

「……マジック・アロー！」

ニニヤの放った魔法がオーガの頭を潰した。

「うむ。オーガさえ倒せば後はたやすいのである」

ダインがゴブリンをこん棒で殴る。こちらの担当は二体だけ。ウルフたちも腰が引けて、どうしようもない。

「よし、あとは弱い奴だけだ。油断せずやるぞ！」

担当分を終えた黄昏は彼らを生暖かく見守る。戦術も能力もお粗末で、まるで子供の遊びでしかない代物だったが——彼らは真剣だった。

けれど、だからこそ連携がある。彼らは彼らでしかなく、替えが効

かない。誰かが欠けたから補充、などというわけには行かないのだ。拙い連携だからこそ、気心が知れて阿吽の呼吸でないと役割は果たせない。

それは黄昏にはないものだ。黄昏の連携はパターン化された工場規格品のようなもの。しかも超人だからこそ拡張性が高い、どの役割を任せられようとしてきてしまうのだ。誰がどこを担当しても変わらない。

「いい連携だった。だが、連携が決まりすぎていて下手にいじると動きが悪くなってしまうな」

「そうですか？ けっこう臨機応変にやっているつもりなのですが」「ダイーンが足止め、ペテルとルクレットでダメージを与えてニニヤがとどめ。雑魚も基本は変わらずペテルとルクレットがとどめを担当するということもあるだけだ。上を目指すならば地力が足りないし、それを前提に置いた作戦ではどのみち強敵は倒せない」

「……強敵。オーガ以上の、ですか」

「レベルを上げ、装備を上げる。やはり一番早いのはそれだ。仲間を増やすという選択肢もあるが、連携に余計なものを入れても逆効果であることも多い。まあ、足手まといの期間さえ超えれば何とかかなるだろうがな」

「レベル……装備、仲間。あの、レベルって何ですか？」

「レベルの概念がないのか。いや、言うなれば筋力を上げろと言うことか……？ そういうわけでもないな。あの宿屋みたいな筋肉があれば剣の威力が上がるわけでもないしな」

「……ええ!! そうなんですカー筋肉って、あればあるほど強くなれるんじゃない」

「そういうわけでもない。まったくついていないのは論外だし、俺たちの特殊な訓練を受けているから細いが。でかければいいというものでもない。剣術家に聞け、でなければ剣を振り続ける。重いものを持ち続けたところで筋肉が膨らむだけで強くなればしない」

「なるほど。勉強になります……!」

そんな風なことを話す。彼らの回復が終わると、カルネ村への道を

たどっていく。漆黒の剣いっつは死闘であつた、が冒険者ならば当然だ。一々疲れてなどいたらやつてられない。だからこそ、先駆者の話をよく聞く。より強い敵を倒すために。

第14話 決別と出会い

王国戦士長が去ってから一日が明けて。

「——リザさん」

エンリが村の大人たちをつれてリザの前にいた。その表情は思い詰めている。さらに後ろには、変わらず赤い目を爛々と光らせる村人であった者たち。今はもうリザのアンデッドと成り果ててしまった彼らは変わらないうめき声をあげている。

「なにかしら、エンリちゃん」

悠然と微笑む。彼女としてはベアトリスたちが認めたエンリに手を貸すのはやぶさかではなかった。それに、アンデッドにした彼らもそれを望んでいる。……やはり、リザは生者に興味を持ってないのだ。エンリが死んだらベアトリスに悪いと思うから助けるが、それ以外の村人は死のうがどうでもいい。自分が手を下すというのは——そもそも判断して責任を負うこと自体したくないからやらないが。

つまり黄昏の彼らはリザを含めて一人残らず、人のカタチはしていても異形であるのだ。人間ではない……その空気を村人たちも感じている。同情や感傷などとは程遠い存在、確固とした強者である。きつと、神のごとき力を持つ彼らは自分と同じ目線には立っていないのだと。

「皆で話し合ったことなんです」

目線がブレブレで、恐怖している——というより恐縮していると云った方がいいか。それでも、しっかりと前を見据えて、想いを言葉に乗せる。エンリがエンリたる由縁、ベアトリスの試験を潜り抜けたのは偶然ではないのだ。

「そう。話し合うのはいいことだわ。それで、何を話し合ったのかしら？」

「——私は。私たちは。いえ、パパとママは」

「ええ、ゆっくりと話しなさい？ 待っていてあげるから」

「それは、怖いです。森の賢王のおかげでこの村が襲われることはなかった。けど、騎士に襲われて、もうここが平和だなんだと思うこと

はできなくなりました」

「そうね」

「リザさんが生き返らせてくれたアンデッドの皆さんは頼りになります。パパも、ママも——きつと私たちのことを心配してくれてる。彼らがいれば帝国が攻めてきても、きつと大丈夫なんだろうって思います」

「まあ、聞いた話だとそうなるわね」

「でも、パパとママはパパとママじゃないんです。姿は同じ……けれどもどちがう。違うんです。生きていたパパとママじゃなくて、死んでいるパパとママは死んでいる」

「……それで」

「こういうことを頼む筋合いではないと思います。私たちはあなたに感謝するべきで、こんなことを言っているいい立場にはない」

「そんなことはないわ。私たちは反論を力で潰して他人の話を聞かない、そもそも他人というものを認識できないアイツとは違う。けれど、話は聞くけれどどうするかは私たちが決める。あなたの話にただ従いはしないけれど、聞いてあげるとはするわ」

「……死んでしまった皆を開放してほしいんです。きつと、アンデッドとしてここにとどめ続けるのは間違っている。確かにパパとママは私の命令を聞いてくれる。けれど、それは——そういうことでしかないんです。命令を聞くだけ。失ったものが返ってきたわけじゃない」

「そうね。私はただ彼らをアンデッドにしただけ。この空では真なる太極が開くことはない。理を塗りつぶす理が存在しない。彼らの魂を私の空太極に取り込むことはできなかった。だから、彼らに残っているのは——ただの残滓なのでしょね」

「アンデッドがここに残っているは、きつとパパとママは天国に行けない。魂がここにずっと縛り付けられてしまう。だから……」

「……あなたは信じてるのね」

まぶしいものを見るような目。もちろんエンリには天国などというものを信じられる人間というのが愚かしくもまぶしく見えるリザ

の気持ちなど分からない。それも、まっとうに生きていたら天国に行けるなんて思いこむようなお目出たい人間の思考は……もはや想像することさえ遠い日のことに思える。

「お願い、します」

頭を下げた。それしかできないから、とかそういう打算的なものではない。心から、そうするべきと思ったからするだけだ。そして、その純粋な想いは、やはりリザには遠くて。

「ええ。分かったわ。彼らの想いを捻じ曲げてまで現世に縛り付けることが正しいことだとは、私も思えないもの」

だから、リザはエンリを羨ましいと思う。まぶしくて目を細めてしまう。

「この子達の偽りの生はここで終わり。黄金ですらない真鍮の黄金錬成を終わらせましょう」

それは一瞬のことだった。ぼうっと、紫の燐光が光ったと思ったらアンデッドたちは砂に帰り……一陣の風が吹いた後には何も残らない。

「ありがとう、ございました」

瞳に一杯の涙をためて、それでもエンリは気丈にお礼を言った。

リザは黄昏に帰還する。けれど、エンリたちの物語はどうしようもなく続いていく。村を守護するアンデッドは消え、働き手の多くを失った現実がカルネ村にのしかかってくる。

「……お金が必要でしょうな」

村長が重い口を開いた。事件の連続でもはや彼に村人を率いていられるような気力は残っていない。すっかり老け込んでしまった彼は何うようにエンリを見る。

「え？ はい。確かにそれがなければ冬は越せませんね」

「……薬草をエ・ランテルに卸してこなければ。彼らは報酬を受け取らなかつたが、村に残った金はそう多くない」

「そうですね。それで、私ですか……？」

ちよつと偉い人、というよりも専門職を持つ者とエンリが集まって

行う会議だ。エンリは何も知らない村娘であるが、何も知らない村人という点では他の者も変わらない。このために呼ばれたのか、とエンリは思うが実情は違った。

エンリが選ばれたのは女子供なら労働力にはならない、なんていう卑しい思惑ではない。村を救った彼らがエンリには何かを期待していた。それを感じたからこそ——エンリならばなんとかなるかもしれない。そんな淡い希望を込めた視線が集まっている。

「お頼みします」

村長が頭を下げた。

「ええ!? そ、そんな——頭を上げてください。誰かがやらなきゃいけないことなんですよね。だったら、私やります。藤井さんにいたっていたアイテムもあります。……だから、ネムのことはお願ひしますね。きつと、シヨックがまだ残ってる」

「ああ、もちろんだ。エンリがエ・ランテルに行っている間はわしの家で面倒を見ていよう」

「はい。では、出発は明日の早朝に」

夜、というのは論外だ。そもそも道が見えない。だが、昼は昼でモンスターが活発に動く時間帯だ。夜行型もいるが、やはり一番多いのは昼に起き出してくるタイプ。だから、その時間帯を避けて、けれど暗くてもだめだ。

それでも、それは——モンスターが出ないというわけではない。「ううっ……いー」

怖い。エンリは慎重に馬車を動かしていた。スピードを出しすぎて薬草の入ったツボを壊すわけにはいかない。というか、そもそもエンリにはスピードを出してもうまく操る術がない。

「……ひゃあー」

がさがさと草が揺れて。大げさに動揺したエンリは何秒かそこを見つめて、やっと風のいたずらと納得して安心する。

「ひいー——」

あたりはまだ薄暗い。完全に明るくなるより先に森の近くを抜けてしまったかった。もらった笛はしっかりとつかんでいる。

「ああーふわあつ！」

「ふう、と風が鳴り……たまらず笛を吹いてしまった。そして現れるは

「ゴブリン軍団参上しやした！ エンリの姉さん」

19体のゴブリン。けれど、“違う”。モンスターではない。厳密にはどうあれ、こちらを襲うあれらとは違う——外見からして。

「ええ!? なに? 何が起こったの?」

ハテナマークを浮かべる。村娘だったのだ、わけがわからなくて震えるのは当然であると言える。

「——どうしやした?」

恐慌状態に陥っても不思議ではない。泣き出して、わめいて童女のように前後不覚に陥いるほうがむしろ一般的であるといえよう。気絶して垂れ流すのはまだマシで、無駄に敵対行為を取るのもありえた。

「えと、あなたたちは藤井さんのくれたマジックアイテムで来てくれた人、ヒト? なの」

けれど、エンリは異形種を受け入れる。人間を信じられなくなったというのもあるが……それが彼女の本質、包容力の表れだった。

「その藤井さんという方は分かりかねますが、そのゴブリン將軍の笛で呼び出されたのは間違いありません。あなたのためならこの命も捧げますぜ」

「え、ええ——」

とはいえ、まだ幼く経験も少ない彼女には戸惑うことしかできない。軍事活動、のぐの字ですから知らない彼女に軍団の指揮などと言われても、浮かぶのはハテナマークだけである。

「で、エンリの姉さんはこれからどうするつもりだったんで?」

「あの、これからエ・ランテルまで薬草を売りに行く途中で。その、風が怖くて使っちゃったんだけど」

「なるほど、分かりやした。つまりはエンリの姉さんを護衛すればよろしいので。では、道を教えて下せえ。そうするのは全然わかりやせんの」

「あ、はい。お願いしますー」

受け入れて、エンリを乗せた馬車は進んでいく。後に『鬼姫のエンリ』と呼ばれることになる彼女の覇道の資質……その一欠片である包容力が現れていた。

そして、さらに数日後。王城——ガゼフ。彼は“嘘”をついていた。虚偽の報告を王の御前で行ったのだ。本来ならこういう腹芸は得意ではない。……が、現実には下手な嘘より悪質で。そうするしかないと思っただ。

村人の姿をしたアンデッドにこの国を滅ぼさせるわけには行かない。

そう考えてのことだった。ガゼフが村を去った時にはまだアンデッドたちは村にいた。後に『黄金姫』ラナーからアンデッドは消えたという話を聞いて安心するが……それまではなんとしてもカルネ村に対し、“何か”をさせるわけには行かなかった。王国の腐った貴族たちでは物事を悪化させることしかしないと、いやな信頼があるのだ。

「……は。カルネ村に着いた時には帝国騎士の姿をした者たちに村人たちが襲われていました」

「我々はそれを撃退。捕えようとはしましたが、天使の襲来を受けて断念しました。我々は天使の包囲網を潜り抜け、帰還した次第です。ニグンと呼ばれた指揮官を排除しましたが、こちらも被害は甚大。何かを持ち帰ることもできず、こうして参上した次第です」

と、そう言うしかなかった。嘘をつこうにも、そんな現実を捻じ曲げてなおかつ整合性を持たせるような器用な真似はできない。だからこんなことしか言えない。とはいえ、悪いジョークのような現実よりはよほどリアルだ。

そして、偶然とはいえこの嘘に優位な状況は整っていた。いかに中世じみた世界観とはいえ諜報の類はある。戦士長を監視する目は広い。けれど、カルネ村のあの時に限ってはそれがなかった。ニグン率いる漆黒聖典が消していたのだ。だから、嘘を嘘だと言える——その

場を見ていた人間がいなかった。あとからやってきて状況から当時を推察するしかない。……カルネ村の人間が証言するはずもなし。

あの後、ガゼフは他の村の保護をさせていた仲間と合流して王都へと帰還した。慣れない嘘をついたと言えど、それを嘘だと見破ったところで何を言えと言うのか。ただ、それでも貴族は持ち前の人間観察術によって何かあることは察したものの、何かあるというのは貴族社会にとつての常だ。ガゼフがそれをするとは多少珍しかったけれど、ただそれだけで気にされることもなく。

「なるほど。戦士長殿は村をむぎむぎ見捨てて逃げ帰ったと。これはどうするべきですか」

「いえいえ。帝国騎士に逆襲できなかつたこと自体が問題ではないですかな——」

だから貴族たちの認識は先の言通りに隠密行動をしていた帝国騎士に負けて逃げ帰ってきた、というものだ。ガゼフの嘘は成果を上げていた。貴族は嘘を信じ込んでガゼフにねちねちと攻撃を加える。それに満足してカルネ村をわざわざ調査しようなどとは思わない。

ガゼフを責める文盲ばかりが続く。王の覚えめでたく、平民のくせに成り上がったガゼフの味方は本当に少ない。

——ここで、天使という話を聞いて法国を思い浮かべないのは想像したくないからだ。現実には自分の思い通りに動くと思っっているからこそ、法国が介入してきて困るこの現状では法国の介入はあり得ない、だってそんなの困る。そもそもその可能性を議論する気すらないのだ、この腐れ貴族どもは。

「——やめよ」

王が言う。彼はガゼフがむぎむぎ負け帰ってきたとは信じていない。何かあったはず、と考えて——けれどラナーではない彼には中身はまるで見当がつかない。

「帝国騎士の中身を持ち帰ることはできなかったのだな？」

「は。私の力不足です」

「だが、彼らの包囲網を突破できたのだろうか？」

「それは——はい。その通りです」

「ならば、もうこの話はよい。次の議題を」

周りのブーイングを無視して王は別の話へと移る。もう話すことはない。ただ無駄にぐちぐち文句を言ってるだけなのだ。だから会議を先に進めることができる。というか、こうしないと本当に会議が進まないくらいに貴族は腐っている。文句を言うしか能がないのだ。

そも、隠している内容も分からずに話しても何も意味がない。とはいえ、王は個人的にはガゼフの味方だ。最後にフォローだけ入れて、追及をこないようにすることしかできなかった。これにガゼフはさらに忠誠心を高める結果になるが、そこはただの蛇足だ。

そして、後にガゼフは別室で王に事の顛末を説明するわけだが――
厳密に王と完全に二人きりになることなど不可能だ。メイドや衛兵の類は必ずいる。ゆえに盗み聞きをした者がいる。もちろん実行者は別だが、それによって知るべきではない事実を聞き及んだ勢力は三つ。

――レエブン候

――ラナー

――そして、八本指。

彼らはとてつもないネクロマンサーの出現に頭を悩ますことになる。しかも、その行動は死者の言うことを聞いてのものである可能性がある。主人はいると言うが……”そこ”を見ていないものには、それだけの化け物を操る存在など想像できない。

このままでは全てが滅ぶことになる。死者は生者を妬む。ならば、死者の言葉を聞くネクロマンサーに人類の庇護を期待することなどできるはずもない。

ゆえ、彼らは独自に行動を始めるのだ。

第15話 カルネ村の新たな装い

「——もうそろそろのはずです」

御者台に乗ったンファイリアが言う。

「そうですか。結局戦闘は一度だけだったな」

「……そうですね。けれど、トワイライトの皆さんを雇って正解でした。生半可なチームでは襲ってきたモンスターにやられてしまったでしょうから」

「そうですね。本来ならあれほどの群れは出てこないはずですよ。運が悪くて、半分か——更にその半分と出くわすと言ったところでしよう。あれから警戒はしていましたが」

「とはいえ、もう出てこないだろう。村まで近い」

「そうですね。やっとなつきました。……エンリに会える」

「ほほう。ほうほう、ちよつと聞かせてもらってもよろしいですかね、ンファイリアさん」

耳ざとく聞きつけたルクルツトがいやらしい笑みを浮かべて馬車に近づく。

「ええ!? いや、ちよつと。これは言葉の綾というものでして——」

「いやいや。俺には見えますよンファイリアさん。あなたの恋に燃える瞳が」

「いや、そんなこと——」

「それくらいにしておけ」

「……あ、見えてきましたーよ?」

ペテルの言葉が詰まる。見えてきた村には、弓をつがえる男がいた。

「な!? これは、なにごと……」

驚いたのもつかの間。

「動かないでくれませんか? 話ができるなら、そちらの方がいいもんで」

ゴブリン。囲まれている。見えているだけで8、まだいるだろうとペテルは考える。トラップを仕掛けるほどの知能が高いモンスターだとしたら勝ち目がない。もつとも、蓮は隠れているのは5、残り6は村の方か——と、見通してしまった。経験値が違う。

「……俺たちは怪しいものじゃない。俺たちは冒険者で、この人は雇い主のンファイリアだ。彼はこの村に何度か来たことがあるそうだから、確かめてほしい」

黄昏の面々は動揺することもなく、武器すら構えていなかった。ゴブリンは油断せず、目配せして。

「ラッチモンさん……ちよつとこちらへ」

「ああ——いや、ちゃんと見えた。ンファイリア君だ、剣を下ろしてくれ」

「それはようござんした。……そちらの兄さんたちはともかく、姉さんもいるそちらさんとは争いたくなかったもんでね」

「ああ、俺たちもただ守ろうとしているだけの、意思疎通ができる者を虐殺するのは目覚めが悪い」

「……はは。恐ろしいこつて。ただ、それでも一つ言っておきやしようか。俺らの主に手を出すことだけは絶対にさせやせん。無謀でも、無理でも——そいつは絶対ですぜ」

「……なるほど。お前らはいいやつだな」

注目を自分に向けさせようとしているのは分かっている。頭を狙うのは、そいつが弱いからだ。強者であるなら、そんなものは関係なく無礼を働いた方に危険が行く。

「——っはあ!? ちよつと、やめてくたせえよ。照れちまうぜ、そんなまっすぐに言われたら」

「で、お前たちの主はそいつか」

連はその子を見る。目を引くように弓を絞っていた男、それから少し離れて隠れるように何人かのやはり弓を持った者たちがいる。その一人を。

「え……あ、はい。あの……あなたは——」

頭の中にもやががかかったような。そう、この人はどこかで見た覚え

があるのに思い出せない。

「え、エンリじゃないか！　なんで君が弓を持つているんだい？」

「あ、ええ。ンファイ。えと、久しぶりね？　色々あったのよ、ほんの数日前の話だけど」

「それ、聞かせてもらっても？」

「いいけど、あの……この人たちは」

話の勢いに飲まれて既視感は忘れてしまう。

「ごっちはトワイライト、そちらは漆黒の剣だ。ンファイリアさん、俺たちは薬草採取の前に少し休ませてもらってもいいかな？」

「え？　あ、はい！　よろしくお願いします」

「ああ、ではラッチモンさんだったか。ちよつと案内してもらってもいいか」

去り際、ベアトリスがぽんとンファイリアの肩を叩いて。

「この子、中々大物になりますよ。好きなら、どーんと直線で行くことです。経験豊富なお姉さんのアドバイスですよ」

囁いた。

「……ふわあ。きれいな人。あの人、どこで知り合ったのよンファイ」

少し小突いて……エンリの表情に浮かぶのは憧れで、そういう関係になれるのはまだまだ先のようだ。少しくらい嫉妬してくれても——とは、ンファイリア自身でも高望みだとは知っているけれど。

「藤井君、リング・オブ・デイスインディヴィジュアルの指輪の効果はちゃんと効いてるようですね」

「そうだな。あまり頼るとタレントか何かに痛い目に会わされそうだが、まあ使う機会を選べば問題ないな」

指輪の効果はたくさんいるモブの一人として認識させる能力。前に会ったとしても思い出せないし、後で詳細な顔を思い出すこともできない。顔を特定できないのだ。

「ねえ、藤井君。これでいいの？」

「問題ない。順調だよ——少しは我慢強く作戦を進めることを覚えておけ、螢」

「つまらないわ。もつと、こう……ばーんと何かできないの?」

「ふふ。螢は藤井君に甘えてるんですよ。相手してあげてください」
ベアトリスはニヤニヤした顔で螢の肩を抱く。

「ちよつと、姉さん。変なこと言わないで。誰が甘えてるって言うのよ」

無然とするが、振りほどかないあたりはまだまだ姉に甘えている。

「そりゃ、螢ちゃんだろ? ちよつとわがまま言っただけ意識してほしいとか、かわいいところあんじゃねーの」

「遊佐君、本当に怒るわよ? そんなんじゃないって言ってるのよ」

これには螢もキツイ目を向けた。というか、女性陣は遊佐のことが嫌いだ。なぜなら、自分が一番蓮のことを分かっているという顔をしているから。

「そうか、螢は甘えてくれているわけじゃなかったのか。残念だな」

ぽん、と頭に手を乗せると螢は真っ赤になる。可愛らしい反応にっい顔を緩めてしまう。

「べ。別に……藤井君がしてほしいって言うのなら、しないこともないけど」

「……螢」

「え? な、なに……そんなに見つめられると……その。あのー」

「やっぱりからかうと面白いな、お前」

「くっつ藤井君!」

さらに真っ赤になって怒鳴った。

「で、エンリちゃんとは進展したんすか?」

「やめろ、ルクルツト。すみません、デリカシーがなくて……」

「いやいや。いいんですよ、まあ進展はなかったんですけど」

「ちよつと話を聞いたんですけど、帝国騎士とやらに攻めてきてやられてしまったと。彼らのことは不幸だと思いますが、想い人だけでもエ・ランテルに招くことは考えなかったんですか?」

こっそりと、囁くように。この状況では大切な人だけ連れて逃げるのも、指をさされることではない。安全などもうなく、人は少ない――

—そもそも集落を維持可能な人数が残っているかすら。今は足りても、これから先はどうなるか。冬が来るのだ。

「それは——怒られてしまいました。覚悟もないのにそういうことを言うなって。同情なんて余計なお世話だそうです。僕はそういうことを思っただけだったんじゃないんですけどね。下心、見抜かれましたかね。……ハハ」

「ンフィーリアさん、あなたは本気ではなかったのか？」

連は厳しい目を向ける。彼にとつての日常が崩壊しかけている。崩れかけた日常を取り繕うために不感を装うのはいいが——これは、ただ気付いていないだけだ。隣に地雷原があて好きな人がタツプダンスをしているのを見逃してしまっている。

「え？ 藤井さん。どうしたんですか」

その“本気”にたじろぐ。黄昏はいつだつて余裕そうで、それとは程遠い在り方をしていたから。

「本気なら、引き下がらないはずだ。なにかを失うかもしれないと、ただ退くばかりではどうにもならない。それは勇気ある撤退などではなく、ただの保留だ。怖いから現実から目をそらしているだけだ」

「それは——そうかもしれない。でも、やっぱ僕は藤井さんや皆さんとは違いますから。……勇気なんて、とても出せないんです」

「勇気か。そんなものは俺も知らない。俺はただ、やらなければいけないと思ったことをやっただけだ。勇気があるとは思っていない、状況がそうだったというだけの話。そして、ンフィーリアさん。この状況は……人が半分になり、男もほとんどいないカルネ村はその状況にないと思うか？」

「え？ それは……そうです。エンリが明るく振舞っていたから大して深く考えなかったけど……たしかにえらい事態だ。うん、村が滅んでもおかしくなかった。いや、助けてくれた人たちは去ったつて言っていた。でも——それは、これからの助力は期待できないってことで。あれ？ これ、え……」

もちろん、蓮は食糧援助くらいはしてやるつもりだ。何か大変なことが起きればマジックアイテムでどうにかしてやろうと思っている。

ベアトリスの試練に通ったのだ、それくらいはする。けれど、それは本人たちにはあずかり知らぬこと。現実には、ゴ布林將軍の笛だけ置いて行って姿を消した。

……まあ、ゴ布林將軍の笛だけでも、この世界の価値に換算したらとんでもないことになるのだが。

「なら……どうする？　恋に悩む少年」

「……でも、エンリは首を縦には振らない。ここで生きると言っていた。なら、僕は……僕は。どうするべきか……」

たつぷりと考えて。

「今は、仕事をよろしくお願いします。先立つものがなければしょうがない。ここには薬草を取りに来たんです。そのあとでちゃんとエンリに気持ちを伝えます」

「いい決意だ。俺たちも手伝わせてもらう。……契約だからな」

「はい。まあ、料金は仕事をしてくれたと思うので、あまり頼みづらいのですが」

「気にするな。何が出ても切り伏せてやる。護衛だからな」

「そうです。微力ですがお手伝いさせていただきます」

「うむ、男子が勇気を出したというのなら応えねばなるまい。このダイン、少しは薬草を見分けることもできるのである。全力でやらせていただく」

「そーそー。俺がいるから安心して採取してくれていいぜ。あ、ベアトリスちゃんと螢ちゃんも安心してくれていいぜ？」

「そうです。モテない男のたわごととはともかく、応援しますよん

フイーリアさん。経験豊富なお姉さんに任せなさい」

「ええ。素敵ね、ロマンチックだわ。視界に入れるのもうっとおしいゴミとは違うわね。何かできることがあったら手伝うわ」

「ま、そんなわけで気合い入れていきますか！」

「なんで、あなたが仕切ってるのよ。遊佐君」

やる気満々で森に入っていったのはいいのだが。

「……あら？　なんで潰れてるのかしら」

根っこを握りつぶして汁が四散する。

「嫌ですね、螢。こういうのは丁寧に抜き取るものですよ？」

ぶちぶちと茎だけ引きちぎる。

「……………すまん」

黄昏の面々は全く持って戦力にはならなかった。薬草を採取するということがなぜか全くもってできやしない。やろうと思つて握つた瞬間には記憶が飛んで、残骸になり果てた薬草だけが残る。

「あはは。えと、皆さんは護衛なのでモンスターの警戒をしてもらえれば……………」

これにはインフィーリアも苦笑いだ。ああ、この人たちにもできないことがあるんだな——と親近感を覚えてしまった。まあ、初めからそれを期待して雇つたわけでもないのだ、本当に悪く思つてはいない。ただ、不思議だなと思うだけで。

「はっはっは。女の子はできないことの二つや二つくらいあつた方が可愛いもんだぜ。だから気を落とすなつて、な？」

ルクルットが白い歯を見せて笑う。…………この時代に歯の矯正なんてないからちよつと歪んで、しかも少し汚れていた。

「…………ち」

螢は盛大に舌打ちを鳴らす。負けず嫌いだ、薬草に負けたとでも思つているのだろう。

「ああ、そういうおしゃべりはいいんで。私たちが周囲の警戒をするのでルクルットさんも薬草を探してくださいね？」

ベアトリスは怒気を込める。やっぱりこつちも機嫌が悪かった。

「…………なあ、蓮」

遊佐と蓮は小声で話す。

「ああ、こちらの世界に来た影響か。ダイン以外も採取できることを見るに、これは転移者ならではの現象かな」

「条件を満たさないと装備できないアイテムがあるのと似たようなもんかね。ただの村人ならともかく、目立って“これ”があると見つかる危険があるぜ」

「そうだな。伝説にはプレイヤーらしき影も聞く。おそらく、プレイ

ヤーの特性は知っているとこころでは知っていると考えた方がいい」

「後手に回るとやべーんじゃねえかな」

「隠せない特徴があれば転移者を探すのも容易。……すでに特定されたとして考えた方がいいだろう」

「ますます情報が欲しくなってきたな。だが、蓮」

「ああ、その前に対処するものが来たようだ」

子供らしく不機嫌を顔に出していても、螢もベアトリスも魔人である。"それ"に気づいて顔を引き締めた。いくら弱かろうと油断はしない。自分はともかく、これは護衛……一瞬の気のゆるみがターゲットを殺す。

「ンフイーリアさん。私たちの後ろに。なにか、大きいものが来ます……！」

強力なモンスターが襲来した。

第16話 森の賢王

全員が警戒態勢を取る。すさまじいものが来る——そんな顔を漆黒の剣の面々がしていたので、黄昏の彼らも一応顔を引き締めておく。実を言うと、彼らはどんな不意打ちが来ようがンフィーリアのもとに届かせるつもりはなかったし、それが可能だ。この程度ならいくらでも反応出来るのだ。

「くつくつく。ここまで森に深く入り込まれるのも久方ぶり。まさか、数を頼みにしているわけでもあるまい……?」

不気味に声が何重にもなって響く。すぐ近くにいるのに気配が辿れない。声の方向が後ろからも前から。とはいえ、やはり黄昏にはそいつは前にいるとわかつている。

「ペテル、ンフィーリアさんを連れて下がれ。司狼、ベアトリスについて行ってやれ」

蓮と螢が前に出た。

「ほほう……? 仲間を下がらせるとは、なんとも義侠心にあふれていることでござる。だが、逃すつもりはないのでござるよ」

「ござる? と首をかしげる蓮。

「へえ、言ってくれるわね。やれるのなら、やってもらおうじゃないの」

螢がさらに前に出る。

「ちよ——螢ちゃん、マジックキャスターなのになんで前に」

ルクルットが慌てて引き留めるが、前には出ない。……出れないのだ、そのすさまじい威容を前にしては。ちゃんと立っているだけでも褒めてほしいところだったが、前に蓮が出ているからということを目覚めているからあまり言えない。

「問題ありません。さ、先に帰りますよ」

ベアトリスが後ろを向いて、背中を押す。あつけらかなとした態度——まるでひ弱なゴブリンでも相手にしているような。

「敵を前に隙を見せるとは、なんたる蒙昧!」

さつと影が走った。

「やらせると思う？」

螢が杖で弾いた。漆黒の剣には何か動いたと思っただけ大きな音がした、という程度の認識しかない。レベルが違いすぎてバトルを認識することもできない。

「さ、行きますよー！」

連はこれが契約である以上、ンフィーリアをモンスターに殺されるような羽目にならないよう行動している。これが人間の魔法による暗殺なら、そこまでは契約に含まれていないと言うがモンスターからは守る。

ゆえ、これが最善手だと思った。ここでアレの相手をするのは一人でもよかつたが、それだとあつちが納得しない。モンスターを相手にするときは不意打ちを最も警戒すべきだ。罠を張り、追い込み殺すだけの知能がないのだから。

こんな不確定要素が満載のところからはさつさと退散するべきなのだ。その結論を出したことはベアトリスも分かっていて、だからさつと逃げるべく行動している。

「でも——この気配、相手は森の賢王です！」

「そうだ、いくら藤井さんや螢ちゃんが強いつて言っても荷が重すぎるぜ」

「問題ない。この程度なら倒せる」

「それは……できるならやめてください。彼のおかげでカルネ村はモンスターの脅威から守られているんです」

「分かった。ならば、適当に相手して逃げることにする。そのために早く引いてくれ」

「……分かりました！ 無事で」

ンフィーリアと漆黒の剣は司狼とベアトリスに守られ、森の入り口まで戻っていく。

「さて、こちらは——」

「ふふふ。中々やるでござる。隙あらば、と思つたのでござるが——な」

「そつちこそ、姿を見せたらどう？ それとも焼き出した方がいいのかしら……」

「酷いことを言うお方でござるな。まったく、そんなことしたらそつちもただではすまぬでござろう」

「別に私たちは困りはしないけどね」

「ゲリラを見つけるのに使う枯葉剤ではあるまいし、そこまで目立つことはさすがにさせない。森の賢王だったか、さつさと出てこい。木ごと輪切りにするくらいならやりかねん女だぞ、螢は」

「なんか、そつちの男の方が話がわかるでござるな」

「ちよつと、人を話を聞かないチンピラみたいに言わないでくれない？」

「それは、ちよつと済まんてござる。お詫びに姿を見せるのでござる」
「……それでいいの？ あなた」

出てきた森の賢王は。

「——ハムスター、か？」

「あら可愛い」

警戒心0だった。というか、気が抜けた。

「螢、適当に追い返してくれ」

「いいの？ 藤井君。こんなんでも、一応始末しておいた方がいいと思うのだけど」

「別に構わんだろ。ンフィーリアさんからも生かしてくれるよう頼まれたしな。ここで始末する必要もない。ああ、それにだ。エンリとか言う娘にも迷惑がかかるんじゃないか」

「……それもそうね。適当に痛みつけておきましょうか」

「中々の自信。それがしの攻撃に耐えきれるか、お手並み拝見と参ろうぞー」

「ま、適当にやることにするわ——」

森の賢王はけして容易いハムスターではない。そもそも人語を解することからして知能が高い。書物を読み解くなど貴族か商人くらいのこの世界においては、200の年月を経た彼よりも賢い人間がどれだけいるか。

ハムスターそのものの外見に相手を油断させる効果はない。強力な爪、強靱な四肢——そして、蛇の尾。先の一撃はこれによる不意打ち。この世界の人間にとっては恐るべき魔獣であり、他の何物でもない。正々堂々など、野生に生きる彼にとっては素知らぬこと。武士みたいな口調とは何の関係もなく、不意も打てば足手まといを狙ったりもする。

——野生の生き物だ。勝てば正義。勝つことだけが全てで、負ければ何も残らない。

「……っふー！」

尾の一撃。

「遅いわね」

ひらりとかわして、懐へ。

「それで、勝ったつもりでござるか？」

三発。正拳をきれいに打ち込んで……弾かれる。

「あら？ ザクロにしないよう手加減したんだけどーしすぎたか」

「手加減など、それがしには不要でござる！」

爪。鋼鉄すら引き裂く爪が走る。

「で、そんなノロイものが何だと？」

回避した。

「いつまで避けられるのでござろうかな!？」

「いや、別にいつまでも避けていられるしー」

身のこなしが違う。獣のそれではなく、洗練されつくした殺人技術。軍人の最高位は伊達ではない。

「何を、強がり——でござる！」

「とってつけたような語尾」

「このー… このこのこの——」

すべて避ける。これがガゼフならば五宝物を使ってやっと受け止めきれぬ連撃。受け止められる、だ。避けるではない。

「尾。そして爪。これだけかしら」

「……ならば、からめ手を使わせてもらおうでござるよ。チャームスピースへ全種族魅了」

「ああ、魔法も使うの」

「ば、ばかな。……でござる。なぜ、通用せんでござるか！」

賢王は動揺を見せる。動揺など、戦場においては致命的な隙だ。螢はそんなことわかりきっているから、単にただの獣かと唾棄するが——それは違う。単にこの魔人のレベルが高すぎるだけ。冒険者ならもつとつまらない油断をするし、すぐに動揺する。

「レベルが違うもの。魅了対策なんて怠っていたら、何もできないわよ？」

「ぐぐぐ——だが、それだけで勝ったなどと」

「ああ。もういいわ——活動」アツシヤ

賢王の隣の木が縦に避けた。螢は何もしていない……いや、賢王にはわかった。魔法を使ったのだ。だが、それは——

「……は？」

木が倒れる音が響く。大人でも抱えきれないような大木が鮮やかに切断されて左右に折れ倒れた。

「さつさと終わらせようかしら。でも、殺してはいけないんだったわね」

「あ……ああああ——」

がくがくぶるぶると震えている。ハムスターが震える様はなんとも愛くるしいものではあるが、本人——本ハムスター？ はシヤレではない。魔法であることはわかった。だが、何をしたのかすらわからない。

攻撃系の魔法？ そんなことは分かっている。だが、隣の木は大木——縦どころか横にすら切れるようなものではない。賢王にも、何度も攻撃してようやく倒せる。それをまるで卵のように気楽に。

動物だからこそシンプルに理解した。

「降参でござるよ。焼くなり煮るなり好きにするでござる」

すなわち、勝てないと。彼女がその気になれば、先の男の言通りに輪切りになる。縦か横かは彼女の気分次第。

「ううん、でも私が似ても焼いても炭になるだけだし」

「螢、料理の材料にするな」

蓮はやれやれとため息をついて。

「あー。言うことを聞けば助けてやるぞ?」

「そのく野生として実力を知らない人に従うのはちよつと……」
「……」

もう一つ、木がバラバラになった。

「ーヒイ! ナマ言つて申し訳ないのでござる!」

「いや、それは別にどうでもいい」

「それがし、一生殿についていくでござるよ!」

「……ん?」

「それがし、役に立つでござるよ。この森の南を縄張りとしているでござる。すべて殿に献上するでござるよ」

「いや、待て。なぜ俺がお前を配下に置くようなことになっている?

別にカルネ村を襲わないならそれでいいんだが」

「殿ほどのすさまじい力を持つお方に仕えることこそ武人の誉れでござろう」

……武人?

「……別にいらないんだが」

「そんなく。頼むでございよ。木の実とか、薬草とか探せるでござるよ」

「螢、こいつ飼うか?」

「藤井君がいいならいいんじゃない? 放し飼いにするなら餌代は要らないでしょうし」

「特に飼いたいわけでもないんだがな」

「そうケチなこと言わずにく。とのく」

「ええい、うつとおしい。まあ、いい。配下にはしてやる」

「ありがとうでござるよ」

「あ、いや。待て。お前を連れて行くとカルネ村にモンスターが襲つてこないか……?」

「む。カルネ村というのは、村のすぐ近くにある村でござろうか?」

「そうだとしたら、それがしがいようといまいと関係ないと思うでござる」

「……どういうことだ？」

「なにやらとてつもない何かが歩き回っているでござる。……おそろく、逃げ惑ったモンスターの一部が森から出るかと」

「ああ……なるほど。ならばーいや、あとで考えるか」

どうせ連れて行かなければうるさいことになるのだ。説得するにしてもンフィーリアに任せてしまえばいい。

「……本当にやり遂げてしまったのですか」

「これが——森の賢王。すごい気迫だ」

と、目を輝かせるのだが。黄昏にとってはこんなハムスターがねえ、という感想しかない。担がれているのではないと知っていても、担がれているような気分だ。

「あ、そうだ。螢、乗ったらどうですか？ 騎獣みたいでカッコいいんじゃないですかね」

ぷぷ、と笑う。螢がハムスターに乗るかわいらしい場面を想像したのだろう。

「ちよつと姉さん。何を変なこと——」

「それはいいな。乗ったらどうだ」

「え、そんな。藤井君まで何言いだすの？」

「そんじゃ姉さんは街までコイツに乗っていくつーことで。ところで、コイツの名前何よ？」

「そう言えば、決めてなかったな」

螢の方を見てみる。

「そうね……クレインティエレ、なんてどうかしら」

ドイツ語で小動物。

「仰々しい名前だな。ハムスケでよくないか？」

「では、これからそれがしはハムスケと名乗るでござる」

「いや、俺が言ったんだが、お前はそれでいいのか……？」

「殿に名付けてもらった名前、大切にすることでござるよ」

「そうか。で、それはどうでもいいとして。コイツの話によるとモンスターが生息圏が変わって森から出ているらしい。それはハムスケ

がいても変わらない。どうする？　ンファイリアさん」

「え、僕ですか？」

「俺は別に置いて行ってもいいと思ってるしな。それで、どうする？」

「コイツをカルネ村の守りにしてもいい」

「それは——いえ、いい話だと思いますが、そこまで頼ることはできません」

「……そうか」

そして、カルネ村で休息をとる。一日過ごしてからエ・ランテルへと帰還する。その合間。

「……エンリ。真剣な話があるんだ」

「えと……なにかしら？　エ・ランテルへっていう話だったら断ったはずよね」

そして、それをデバガメする者たちもいる。一応は隠れている者と、無駄に高い身体能力を活かして遠いところから見守る者。

「僕は話がうまくない。だから、そのまま言うよ」

「ンファイ……？　なんで、そんな……」

真剣なの、という言葉は闇に消える。雰囲気飲み込まれてしまっていた。常のンファイリアでなく、混乱する。

「エンリ。僕は君が好きだ」

「え……？　本気、なの——」

「本気だよ」

「でも、そんなこと。今まで、そんなこと言っただけじゃやない」

「恥ずかしくて、ごまかしてしまったんだ。けど、藤井さんに言われて気付いた。この村は年を越えることができないかもしれない。……エンリも」

「……ッ！　それは——」

反論はできなかった。そう、はたから見ればカルネ村は冬を越せるかどうか怪しい。次の年を見られるか、住人でさえ不安に思っているのだ。

「だから、後悔しないために一步を踏み出そうと思った。エンリ、好き

だ！ だから、僕と一緒にしてくれ」

いつものおどおどした態度とは違う。思い切った、というよりも思い詰めた態度。だからこそ、それは真実なのだと分かる。こんな深刻そうに言う彼を、からかいだなどと疑うことはできない。

「う——それは……あの……」

とはいえ、そういうのは全部からかっているだけか、ちよつとした粉かけとしか思っていないかったエンリだ。答えは出せない。

「……また来るよ。だから、答えはその時に聞かせてもらえないかな？ エンリは、ここを離れるつもりはないんだろう」

「え、それは。そうよ、お父さんとお母さんが眠ってるここを離れたくないもの。ンファイと一緒に行った方がいいのは分かっている。ンファイがそう言ってくれるなら、ネムにもいい暮らしをさせてあげられる。……でも」

「わかってる。エンリはそう言うよね、いつも決めたことを曲げなかった君なら。だから、僕は君と一緒に居られるようおばあちゃんを説得するよ」

「それ……は。本当にいいの、ンファイ。そんなことをしたら、都会の暮らしが……」

「元々僕は都会の流行に乗るなんかより、薬師の研究の方が楽しいんだ。おばあちゃんもそうだから、きっと質の良い薬草が手に入るこの村に移住することだって許してくれる。説得するさ」

「ん……分かった。待ってるね、ンファイ」

その次の日、ルクルットとペテル、ベアトリスにニヤニヤされながら小突かれまくったのは言うまでもない。

第17話 魔女の散歩

「さて、集まったか」

どことも知れぬ闇の中、六人の人影がささやく。

「ふん——随分と弱気なことだねえ、ボス。野良のネクロマンサーが帝国兵を惨殺したくらいのことでは何を大騒ぎする必要があるんだい？」

声には自負がある。己たちこそが、この王国の“裏”を支配する闇の住人であると。決闘じみた真似こそ苦手であるが、英雄……最強の代名詞であるガゼフだろうと暗殺する自信はある。

「ガゼフが決して矛を交えてはいけなと言った相手——だから何だど？ ネクロマンサーもマジックキャスターなら本人を狙えばいい。ガゼフと言うのは実直でつまらない男さ。隙なんていくらでもある。そいつが恐ろしいなんて言ってもねえ……」

ゆえ、ガゼフが恐れたと聞いても特に思うことはない。確かに部下たちで歯が立つまい、けれど——闇の住人たる自分たちにはいくらでも手段はあるのだ。

「そうか、エドストレーム。だが、実のところ俺は頭も足りず大して強くもない奴にいつまでも六腕を名乗らせておくのもどうかと思ってるんだよ」

息をのむ音が連鎖する。最強はゼロ……この男が不要と判断されたら自分は処刑される。今更六腕の地位を降りることなどできはしない。ならば、席を空かせるための手段は一つしかない。隣に座っている者が自分を助けてくれるとは思わない。いざというときになれば誰につくかはわかりきっているのだから。

「へへ。なるほど、さすがはボス。ガゼフを恐れさせるほどのアンデッドならいくらでも使い道はありますぜ。弱点も、こちらでカバーすればいい。そうすりゃ——」

真つ先に追従したのはサキュロント。この中で一番弱いものは誰かと問われれば彼だと口をそろえて言うだろう。だからこそ、この男

はゼロの腰ぎんちゃくだ。いかようにもできる駒を処分するとしてから最後だろう——そういう方法で生き残ってきた。

「出現したというネクロマンサー。彼女がアンデッドだということはいいのか……？」

「あんたが口を利くなんて珍しいね、デイバーノック。恋人でも欲しくなったかい？」

会議の流れを握ろうとエドストレームは口を動かす。

「話聞くほどの力を持つマジックキャスターならば会ってみたくも思っただけだ。そして、不死でもない若い女が果たしてそれだけの力を持ちえるものかと疑問を呈したに過ぎない」

「なるほど、お前の言うことももつともだ。完全に確かめたわけではない——さすがに見てわかるようなら話が来ないのはおかしいが、そいつがわざわざ言う必要もなかったとも考えられる」

「へえ、ならカルネ村の奴を人質にとるってのはどうだい？ わざわざ守るってことはそいつらにご執心なんだろうさ。化け物を相手にするには準備しなくちゃいけないからねえ」

「——は。ご執心、ねえ」

「おいおい、エドストレームよ。耄碌したか？ まさか、そんなことを言い出すとはな——」

犯罪結社の人間というものは仲間意識なんて持たない。そして、一番輝くのは誰かを攻撃するときだ。だからこそ——失態を演じた彼女をいたぶるのは楽しいらしい。

「……な、何が言いたいんだよーッ！」

「エドストレーム、貴様の頭の中は空っぽか？ そんな化け物が一人人間の生死を気に掛けるとでも思っているのか。すでにそいつの姿はカルネ村にはないのだぞ」

「……ぐ。ゼロ……ッ。うぐぐ……」

呻き声を上げる。この場は不利に傾いている。

「ふむ。では、そいつを見つけたら六腕の一人と戦わせるのもいかもしれないな。真にふさわしいのがどちらかわかる」

「おお、そりゃいい。やっぱり、アンデッドは持ち物としてカウントす

るんで？」

「当然だろう。ネクロマンサーなのだからな」

その話を聞いたエドストレームは戦慄する。何もこの会議だけで進退が決まると思っっているわけではないが——もし相手をするとなれば、アンデッドをすでに召喚された状態では勝ち目がない。……自分分は『踊る三日月刀』、操る剣をすべてアンデッドの体で受け止められてしまえばもはやなすすべはない。

それを考えたのか、他の三人も少し顔が引きつっている。どこことなく嬉しそうなデイバーノックは、常から組織からの離脱を疑われていたが——その線が濃厚になってきた。

別の議題がゼロから出て、話はネクロマンサーからずれていく。結局、彼らにはネクロマンサーの仲間なんて目に入らなかつたし、考えもしなかつた。多少ずれた結論を下し、モンタージュすらないのに探し出して決闘のまねごとをさせようなんて馬鹿なことを。しかも、それは決定事項ですらないのだ。

しよせんは王国の貴族どもと同じ穴の貉だ。自分たちは彼らを支配する闇の王などと思っっているのだろうが、目先の対処するべき危機すら見えていない。自分を大きく見せかけようと必死になって視野が狭い。それはずっと世界にあったのに、ずっと目をそらしてきた。

そう、彼らにとっては“世界の敵”などどうでもいいことなのだ——

留守を仰せつかったルサルカは——正直、暇を持て余していた。

「あー。お嫁さんみたいに食事を作って待つのもいいけど、暇なのよねー」

そう、やることがないのだ。防衛はマキナの担当だから、手を出したらむしろ邪魔になる。一応は軍人として基礎知識はあるものの、自分分は魔女だ。あの軍人の究極系を相手にしやしやり出る愚かさはよく知っている。基礎しかなくとも、もっとも厄介な敵は無能な味方だと知っているのだ。

……むろん、魔導においては誰にも引けを取る気はないが——誰が

主導するかということだ。そして、それはすでに蓮が決めているから横紙破りなどできない。変なこととして怒られるのは誰だつていやだろう。

「むーむーむー。でも、本当にやることないのよねー」

時間のかかる料理を作ることにはできる。けれど、料理はスキルなために無駄に時間をかけまくるということができない。1時間で終わるものは1時間で終わるし、2時間で終わるのなら2時間だ。錬金術じやあるまいし、1日も2日もかかることはない。

「あーもー。どうしようかしら。暇すぎて溶けちゃう。掃除するにしてもねーうん」

与えられた部屋の一角でクツシヨンに顔をうずめる。掃除——やろうと思えば広大な、しかも空間が歪んで拡大化されている場所もあるから時間は潰せる。しかしそれには大変な労力を伴うだろうが、ここにはチリ一つすら落ちてないのだ。ここは時間が止まっている。ならば、掃除しようにも無駄……いくら雑巾を走らせようが白いままだ。そんな徒労を楽しむような被虐趣味はない。

「……あー」

クツシヨンから顔を上げる。いいこと思いついたーとご機嫌な顔。

「ふふ。主婦のやることと言えば、料理にお掃除……もう一つあるじゃない。ご近所挨拶！」

ちなみに洗濯が上がっていないが、掃除と同じ理由で却下だ。それも、外に出ても魔法の服だから汚れない。

「ええと——聞いたことがあったわ。確か、ニホンでは隣の人にあいさつしに行くときソバを持っていくのよね」

ちよつと間違いだが、まあ元々の設定としてルサルカの出身はヨーロッパだ。ソバは引越しを手伝ってくれた人に振舞うもので、出前じゃないのだからそもそも汁物を外に持つてくなく——などという反論は何でも入る袋と言う反則で黙らせられる。

「さて、じゃあ外に出ていきますか」

行先は森。実際のところは関係の改善というよりも、勢力の確認に行くのだ。だから、まだ誰も行っていない森の方へ行く。

「あらあらー静かねー」

と、歩きながら言うが、実はそれは彼女自身のせいである。彼女は弱く擬態している。本性の姿は別にあり、今の姿では本気に程遠い力しかもっていないのだ。

……けれど、それは周辺のモンスターと比べてという話ではなく。レベル30が英雄と言われるこの世界ではルサルカは神か悪魔なのだ。そんなものが出歩いていては、その強さの一端を感じた生物は死ぬ気で黙る。見つければ死……それが自然界の法則。

「寂しい森ねえ。集落とかないのかしら、まあシユピーネの話じゃこの世界の人間は弱っちいみたいだし森の中じゃ生きていけないのかしらねえ」

適当に歩いていく。作ってきたソバは異空間にあるから冷めないのだ。まあ、モンスターに出すような奇特な人間でもないのだが。

「……あ、見つけた」

目立ってしまった、強力なモンスター。森の一角を支配下に置く英雄すら圧倒できるスペックの持ち主——なまじ強力なばかりに魔女に目を付けられた。

そして、その道中にいる不運なモンスター、生物を攻撃するという本能に支配された哀れなゴミクズは適当に焼却されて死骸をまき散らされる。

「ふふ。こんにちは、やな天気ね。もつとこう——薄暗い方がいいと思わない？　なんかこの辺は特にカラッとしている気がするわ」

“それ”は通常よりも大きなトロール。分厚い革鎧、ルサルカの伸長を超えるほど巨大な魔法の剣を装備した特殊個体『ウォー・トロール』。その威容は人に絶望を与えるには十分である。もし、これが人の世に出るようなことがあれば、目も覆いたくなるような惨禍は約束されている。

「なんだ——ガキか。名前を言ってみろ。俺様の名前はグだ。東の地を統べる王である、グ、に名前を名乗ることを許してやる」

周囲には配下のトロールやオーガたち。話に聞く帝国の四騎士では討伐は難しいだろう。あるいは配下の血を代価に払って対抗法を

見つけ出すことはできるかもしれないが。その時には、軍そのものの壊滅という代償を払うことになるだろう。

「ふふ、威勢のいい子ね。でもね、残念——私は面食いなよ。あんたなんかブサイクは眼中にないわ。名前だったわね……私はルサルカ・シユヴェーゲリンよ」

「くつく。ふははははは——」

大笑いした。

「ええ？ 一体なにごと。そんな面白いことがあったとは思えないんだけど」

「ふふ。面白いこと、だと。なんだその貧弱な名前は。長い名前は臆病者の証——メスらしいな。なんだったか、ルサ……えー、ルサルカ・シユベベベー？」

「ルサルカ・シユヴェーゲリンよ。いやまあ、勇者なんて言われたら背筋が凍るからある意味正しいのかもしれないけど」

「で、臆病な人間のメスよ。貴様は“ふくろ”にするには足りん。体つきも貧相だが、まあせつかくだ——食ってやる」

「うーん、でもさすがにルサルカちゃんでも化け物のお相手は嫌かなー。ま、ストリートチルドレンの食べ歩きとかしてたから、ゲテモノでも食べちゃうと言われたら反論できないんだけどねー」

「？ 馬鹿なことを。臆病なメスからは臆病な戦士しか生まれん。筋張って固そうだが、煮て喰ってやると言った」

「あ、そっち？ うん、そっちもあるけど——人間ってマズイわよ」

「そんなもの、知らん」

「ま、そうね。私も味もへったくれもない食べ方をしたもものね。……こんなふうに」

ルサルカが笑みを浮かべる。捕食者の、“魔女”の笑みを。

「つぐおとおおおー！」

グの横にいるトロールの足が消えていた。少し先には、もぐもぐと血肉を咀嚼する影が。

「ほう、やる気か。だが、臆病なメスの相手など偉大なる王はしない。そいつを八つ裂きにしてしまえ！」

真つ先に飛び掛かっていったのは足を食われたトロール。顔を真つ赤にして飛び掛かる。この程度ならばすぐに再生する。トロールとは通常種であっても金級冒険者でなくては歯が立たない。それほど強力なモンスターがずらりのこの状況では、冒険者の最高位アダマントイトでなければ生きることすら不可能だ。

「元気のいい子ね。そういうの、好きよ。だから——いただきます」けれど、この世界の人類にとつてはとつもないモンスターも、黄昏から来た彼女には赤子同然。影が変形して起き上がる。そして、ずらりと生えそろった牙で一口で食った。手足が転がる。

「ううん。やっぱりコレだと味は感じないわね。ま、マズそうだからよかったけど」

あつけらかんとした態度。彼女の表情は先と変わっていない。ものを知らぬ童女と同じ……殺すときですら。

「おおおおお！」

こいつはヤバイと理解したトロールやオーガは我先にと襲い掛かる。こいつは狩られるだけの獲物ではない、反撃を許せばそれだけ仲間が死ぬ。仲間などどうでもよくても、それで自分が死ぬ可能性があるので。そして、彼らが持つのは蛮勇——恐怖を感じたら突っ走らない猪。

「あらあら、私ってば人気者？ でも、列を無視はルール違反よ——少しお黙りなさい」

影が地を覆った。そして、トロールにオーガは“動けなくなる”。不動のデバフ……これも位階魔法だ。

「ぬうううううん！」

だが、王を名乗るグは無理やり己の体を引きちぎるように拘束を解いた。

「あらあら。がんばるのねえ——」

相も変わらぬサルカには童女のような笑みが浮かんでいる。虫の胴体を引きちぎっていつまで生きていられるか観察する、無邪気な残酷さを宿したそれ。

「貴様——殺すッ！」

その巨大な大剣を小枝でも振り回すように振り落とし、叩き切る。技術など一切ない、純粋な膂力によるモノ……それだけにシンプルで強烈だ。

「ふはは。臆病なメスなどこんなものだ——」

どすどすと何度も抉り、刺す。再生しているように見えるから、丹念に何度も振り下ろしてぐちゃぐちゃにする。切るだけか潰すだけが中間のような暴風のような暴力にさらされた彼女は肉塊の細切れになって四散する。

「どうだ、思い知ったか!? これが偉大なる王、グ、の力よ——!」
高笑いを上げて、その声が拍手の音で凍り付く。

「いやあ、すごいわねえ。仲間をそんなにできるなんて。まるで赤い花が咲いたみたい。芸術家の才能があると思うわよ、あなた」

「きさま——ルサルサ! 殺したはず……!」

「ルサルカ。殺したってそいつのこと?」

「何——? これは……ダシ! なぜ、お前は——」

「なぜって、さつきあなたがぼっこぼこにしてたじゃない。ほら、あなたの剣に血がついてるわよ」

「な……こーこれは、ちがう。俺はダシを殺してなど……」

「いいえ、殺したじゃない。ふふ、勇敢で素敵だったと思うわ」

「……ボ、ボス——」

動けず見守るしかなかった者たちの非難の目がグに刺さる。まさか、敵を差し置いて味方をぐちゃぐちゃにするとは思わなかった……あれほど凄惨に、執拗にまで。幻覚はグにしかかけていなかったから、本物の光景を目の当たりにした。

「ち、違う! 違うのだ、俺が殺したのはメスで——その目をやめろオ——!」

オーガの首を叩き落した。

「ヤメロと言っている!」

悲鳴が上がる。動けない彼らに正気を失った王の剣が振るわれる。

「はあはあはあ——死ねえ、メス! 貴様さえいなければ」

数匹の首をはねて満足したのかルサルカに向き直る。他の部下は

目をそらすことも目を閉じることすらできずに早く悪夢が終わってくれと祈っている。

「あは。怖い怖い。誰かの陰に隠れてしまいたいわねえ？」

「——ツジャア！」

振り下ろした大剣は途中で止まる。トロールの肉の壁によって。

「つきサマー！」

「あら？ あ、ごめんね。つい手ごろな盾があったから」

トロールは半ばまで両断されかかっている。再生が開始するが遅い……魔法の大剣の効果は毒。そもそも臓器が断たれ皮でつながっている状態だ。それでも生きているとはさすがトロールである。

「けど、アレね？ 再生能力って、火に弱かったりするけどあなたはどうなのかしらね」

「ふぎげ——」

「ちよつと試してみるわ。『チェイン・ドラゴン・フレア／連鎖する龍炎』」

竜の形をした炎がアギトを広げる。グは呆然と見上げることにしかできなくて。喰われた腕が消し炭になって、大剣が地に刺さった。

「あ。ああああ——」

後ろを見ると、森の一角が焼失している。あれの一撃は、わざと外されていたのだと知って——

「ひいひいひい——」

逃げ出した。

「あら？ 追いかけてっこかしら」

グは心臓を握りつぶされそうな恐怖の中、必死に走って……後ろを見ることすらできずに。ズガン、だかズゴン、だかの音をひしやげた聴覚で聞いた。

「お、大当たり……ルサルカちゃん、十点」

彼女はトロールを投げたのだ。砲弾と化したトロールは衝撃で爆発して四散して……

「ひい。ひいひい——」

ばらばらになったグはその再生能力で即座に這いずる程度にまで

は再生して。

「あれ？　まだ、十点が動いてる」

身体の中身がぐちゃぐちゃなまま、耐えきれぬ恐怖に突き動かされるようにすぐさま走り出す。必死だった。これほどの恐怖を感じたことは生涯なかった。抑えきれぬ恐怖が身体を勝手に動かす初めての体験。グの心は今にも弾けそうなほど張り詰めて。

「あは、まてまて——」

着弾。6回も繰り返し返したら、もうグはピクリとも動かなくなった。けれど、腕は助けを求めるようにわずかに伸ばされて。

「あれあれ、動いてくれないとツマンナイゾ。それ——」

10回くらい当てて、腕が地に落ちた。

「動かなくなっちゃったオモチヤに興味ないわ」

残りの弾／＼トロールを影で喰らい、同じ魔法で今度こそ完全に焼き尽くした。

第18話 蜥蜴人たちと恐怖

そこには明らかに異形と分かるものがいた。人間では表情の判別すら容易ではあるまい。蜥蜴人……リザードマンと呼ばれる種族は人型のトカゲとも呼べる外見をしている。それはどことなく蛇に似通っている。

「……ザリユースさん、族長が呼んでます」

声をかけられたのは氷を切り出したかのような剣を持ったリザードマン。湖のほとりに立って何かをまいている。魚たちが顔を出してそれをばくついている。

「何事だ？ 兄貴が俺を呼び出すとはーわざわざ人を使いに出すんだ。重要なことなんだろうな」

そう、この男の兄は族長だ。しかし本人の地位は高いわけではない。風習上、一族から外に飛び出した旅人の地位は低いのだ。それでも、その貴重な知識を頼りに呼び出されることはままあること。

あの厳格な兄だ。家族間のつまらないことで人を使いに行うことはないだろうと、少し誇らしく思いながら。

「それが——なにか出たらしくして」

「何か？ アンデッドか」

「いや、人間のメスみたいなんですけど。なにかおかしいらしくて」

「……人間か。これは厄介かもしれないな」

この部族——というか、リザードマンは一つのところにとどまって暮らしているため、しかもそれがトブノ大森林なんて魔境に居を構えているから人間を見たことがない。このザリユースは外の世界で見たのだ。そして、強い人間は強いのだと知っている。

ザリユース自身もかなりの使い手である。そんなじよそらの冒険者相手にも引けを取るつもりはない。構えるリザードマンの至宝『フロスト・ペイン（凍牙の苦痛）』は伊達ではないのだから。

「でも、一人ですよ？ そんな、祭司長や狩猟頭まで連れてきて何を話すのやら」

「……祭司頭や狩猟頭まで？ 兄者が集めているのか」

「ええ、でも——」

「急ぐぞ。兄者が危急だと判断したのだ、生半可なことではない」
「戦争が起きるんですか？」

「——兄者ならば、最善を尽くしてくれるさ」

そして、集落における一番大きな家の扉をくぐる。呼んできたものがついてくるのはここまでだ。ここに居るものは一定以上の階級の者、そして旅人の知識を期待されるザリユースのみ。

「よく来たな、ザリユース」

「ああ、こうして会議を開くくらいだ。大事なのだろうな、兄者」

「……そうだ。我らが部族の未来に関わることだ」

「何が……」

「少し待て、皆がそろってから話すことにする」

そして、小声で。

「ザリユース、お前の魚を——ああ、なんだ」

「養殖だ。育てて食べる、もう少しでうまい魚が食えるぞ兄者」

「そう、その養殖だ。今引き上げて……どれだけ喰わせることができる？」

「それは、兄者。もしやここを捨てる事態を想定して……」

「そうなるやもしれん——」

しばし話していると全員がそろった。

「では、会議を始めよう。この者が人間が東を統べる巨人を倒すところを見たのだ」

「へい。確かに見やした。あれは……悪魔です。人間とは、あれほど恐ろしいものだとは——」

見れば、彼は会議に出席するにふさわしくないほどにボロボロだ。外傷がないところを見ると直接狙われたわけではなく、命からがら逃げ帰ってきた——

「奴は、東の巨人を——」

そして、彼が見た一部始終を話す。それはグに同族をぶつけて殺す遊びだった。背筋がぞつとする、などといったレベルではない。そも

そもが怪談ですらたしまない彼らのこと、もはや悪鬼羅刹かそれ以上に思える。そんなことをしようと思うような悪辣さだけでも恐ろしいのに、その気になればこの部族ごとき踏み潰せる強さを持っている。

「で、どう思う？ ザリユース。俺たちは人間を見たことがない。お前だけなのだ、知っているのは」

「旅人などに聞かずとも、祭祀頭に聞けばよいのでは？ 祖霊より受け継がれた知恵を持っている方々の方が信用が置けるだろうて」

「私が知っているのは人間もまた位階魔法を使うということ。そして、私が使えるのは第二位階までだが、人間は第三位階まで使える者もおるらしい。だが、第三位階では東の巨人は殺せまい。その人間が使ったという魔法が何だったかと言うのは見当もつかない。これ以上は実際に人間と関わったザリユースに聞きたい。……そのような人間が存在するのだろうか」

「……それは、難しい。一人で東の巨人を打ち倒せる人間など見たことはない。俺が見た者ではどうあがいても不可能であったと思う。だが、人間の中でも英雄級——アダマンタイトと呼ばれる強者ならば」

「それができる、と？ ザリユース」

「分からん、兄者。トロールを投げて殺せるような存在など、それこそおとぎ話に聞くドラゴンくらいのものだ」

「だが、この者はそれを見たと言っている」

「——ほ、本当ですぜ。あつしは本当にこの目で見やした。あの悪魔のような人間が笑みを浮かべてトロールを投げるところを！」

「その彼女は今、どうしている？」

「それで緊急に集まってもらった。今、その人間のメスはここに向かっているらしい」

悲鳴が満ちた。

「静まれ！ 仮にも率いるべき頭がうろたえてどうする。部族のため、これからどうするのかを決めなくてはならん」

「……兄者。俺に行かせてくれ」

旅人が何を——という声が上がる。

「お前を死地に送れと言うのか、この兄に」

「だが、適任は俺だ。人間は血筋を重視する。族長の弟ならば地位は兄に次ぐ位置だと思ってくれるだろう。決して不快な思いはさせないはずだ」

「だが……」

「逆に聞くが、俺以外にできるか？ 人間の風習を知らない者が知らないうちに無礼を働いたとして、さらに火に油を注がないなどと誰が言える」

もちろん、ザリユースは人間であれば風習は同じというわけでないことは知っている。上の言葉は自分にも当てはまる。けれど、他者が行くよりは。

「……ッ！ 分かった。族長として命じる。ザリユースよ、その人間のメスの相手をせよ。族長の印籠を与える。飲める要求ならば全て飲んでしまえ。俺はここに居る。要求されたならばすぐに通すんだ」

「兄者、それは——」

他からも非難の声が出る。

「ならば、要求を突っぱねろと言うのか？ 危険なのはザリユースだけではない。機嫌を損ねたならば、玉遊びの玉には誰になる——もしかすると、小さなものの方が持ちやすいということはあるかもな」

場がざわついた。小さなものとは、それはつまり……

「異論はないな？」

ねめつけた。静まり返る……これ以上の案など誰にも出せなかった。

「やほー。こんにちは」

手を振る少女。だが、ザリユースはこの少女が東の巨人を屠ったマジックキャスターだと知っている。

「ああ、こんにちは。……へは何の用で？」

内心の恐怖を押し隠す。それはお世辞にも上手とは呼べない代物ではあるが、種族が違う。顔色など、そうそう読めはしない。……魔

女が相手にさえなければ。

「……ふふ」

ぞろりと唇を舐め上げる。たとえ相手がトカゲであろうが、知能を持つならば恐怖を嗅ぎ分けるのは容易だ。弱い部分を抉ることこそ魔女の最も好むものなのだから。

「——答えていただきたい！　ここはトブの大森林と呼ばれる場所。冒険者であろうが大した用がなければ、いや用があったとしても部隊を組んで搜索するはずのところである。なぜ、あなたはここに来たのか」

詰問するような口調。だが、彼とて虚勢を張らねば立っていることさえできないのだ。一見、いたいけな少女に見えても己を縊り殺すことなど容易と知っている。そんな相手に平常心など保てない。

「あは。心配しないでよ、そんな顔をされるといじめたくなっちゃうわ。私はただあいさつに來ただけなの」

言葉を反芻する。

「あいさつ——とは。あの、あいさつか」

「ええ。引越しそばも持ってきたの。でも、ここで開けると砂が入りそうね」

「そ、そうか。では、俺の家へ案内しよう」

「んー。あなたってオス？　それともまさかまさかのメスだったりするのかしら」

「いや、普通にオスだが」

「あら、もしかして私若いオスと一緒に部屋に閉じ込められちゃう？」
「……確かにあなたは人の価値観では美しい方なのだと思う。が、俺としては鱗のないメスにそういう感情は抱きにくいというか……その、謝った方がいいのだろうか」

「そこで謝るやつは女の敵ね。いらなと思うわ。で、あなたのおうちはどこ？」

「ああ、こっちだ——」

しばし、歩く。ふんふんと物珍し気に家々を見ている彼女。もしかして、観光気分なのか？　と思う。

「ここだ」

「うーん、なんかどこも変わらないっていうか。壁はあるけど清潔感はないわね。ま、ゴミが転がってないから及第点にしましょうか」

一応はかなりいい部屋である。族長の弟と言うことで融通してもらえた、とザリユースは思っているが、実際には強いオスがいい部屋を取るのは当然といった考えからだ。ゆえに族長に次ぐ家を与えられた。

「ああ、気に入ってもらえたようでよかった。泊ったことはないのだが、話に聞く限りでは高級宿泊施設はすごいというのを聞いていてな。合わなかったらどうしようかと」

「ま、ボロという点ではどこも同じよ。クーラーも冷蔵庫もありやしないらしいわ」

「クー？ れい・ぞ——」

「いや、気にしないでいいわ。そう言えば、自己紹介もしてなかったわね。私の名前はルサルカ・シュヴェーゲリンよ。マレウスと読んだら殺すわ」

「あ、ああ——俺はザリユース・シャシャ。 “緑爪” 族長のシャースーリユー・シャシャの弟だ」

「そう、ところで名前で長いと偉いとかあるのかしら？」

「いや、ないが」

「ならいいわ。じゃ、おそばね。はい」

テーブルの上にドンと置かれた。待て、今出したあれは噂に聞く最上級のマジックアイテム、インフイニティハヴァアサクではないのか。というか、なぜ湯気が立っているのだこれは。まさか魔法の力とでもいうのか。というか、お椀自体が価値のあるものだぞ。冒険者の宿では当然食事は器に盛られて出されるが、こんなきれいな形はしていない。というか、なんでこんなに色鮮やかなのだ。いやいやまて。これをどうしろと。食え、と？ この真っ黒い汁につかった細長い灰色の物体を。——ザリユースは混乱の極みにあった。

「ええと、こういうのって私も食べた方がいいのかしら」

相手を見ると首をかしげている。なんとというか、聞きかじりの知識

で行動した子供だ。予定を決めずに気分次第で適当になにかやっている。

「これがソバと言うものですか？ 見たことがありますね——この二本の木の枝は一体？ これも食べるのでしょうか」

「あは。やあねえ。おはしは食べないわよ。こうやってつまむの」とりあえず自分も食べるようにしたらしく、汁の中から枝を使って器用に細長いものをすすする。うんうん、この味——とうなづいてる。

「……………ううう……………」

背筋に冷や汗が流れる。そう、彼は部族全ての命を背負ってここにいる。この「箸」というもの、うまく扱えなくて機嫌を損ねてしまえば——

「く……………ぬぐー」

慎重に爪に箸を乗つける。普段であれば気性の温厚な彼であっても箸を地面に叩きつける。箸の扱いと言うのは意外と難しい、しかも彼の指は長く、鋭い爪がある。不可能とすら思える難事、剣を持つ方がよほど簡単だ。

「ふううう……………ッ！」

神経を集中させ、箸を折らぬよう親指と人差し指で挟む。恐る恐る汁の中に突っ込む。ザリユースは今、全神経を集中させて箸を使おうとしていた。

「ぐ——おおっ!？」

だが、現実是非常だ。持ち上げようとしてツルリと滑った。わずかに液面から持ち上がったそばは汁の中へと落ち、かちやんと音を立てて汁が飛び散った。顔を蒼くして恐る恐る彼女の表情をのぞき込む。

「……………ぷぷっ」

笑っていた。

「あは、ごめんねえ。あまりに真剣だから面白くって。はい、フォー。そうね、箸って使うの難しいわよねー」

「あ、ああ。ありがとう」

最初から出せ、などとは思わない。そんなことよりも安堵の方が心

の大半を占めていた。これなら使ったことがある。

「……」

だが、心の余裕ができると一気にこのソバとかいうものに対しての恐怖心が湧き上がってくる。変なものを食べる、というのは実は人間も蜥蜴人もあまりしない。まずかろうといつも食べている方を食べてしまうのだ。それこそ何でも食べて、食えないならば毒抜きしてまで食べるなんてものは日本人くらいのものである。

「——はむっ！」

だが、やはりここで引くことなどザリユースにはできはしない。普段生魚をそのまま食べていて、熱なんて通さないからこういう熱いものは苦手だ。だが、やらなければならぬ。口に入りきらなかったそばが歯で切られてつゆに落ちる。

「これは……」

あまり口には合わなかった。というか、味が濃い。変な匂いがする。黒いのは醤油だが、そんなものは聞いたことすらもないのだ。

「あら？　口には合わなかったようね」

「い、いや。それは——」

「ま、別にいいわ。やってみただけだし」

「そ、そうか」

とりあえずは大丈夫だったかと安どする。しばし、笑いあつて。

「——気が変わったわ。始めはあなたたちを始末するつもりだったの。ほら、近くに変なのがいたら掃除したくなるでしょ？」

「はっ！」

気楽に、世間話のようにお前らを皆殺しにするつもりだったと言われて目が点になる。雰囲気にもまれて流しそうになるが、氣力を奮い立たせる。忘れかけていたが、この女はグを遊びで虐殺した魔女なのだ。

「だけど、8日待つてあげる。その間にあなたたちが生きるに値するものを見せてくれたら、あなたたちを波旬とは違う“人間”だと認めさせてあげるわ」

席を立つ。

「ふふ。ああ——そうそう。私がここに來たのはアレを見ていた子が走つた跡を追つたの。偵察は、むしろ情報さえ得られればいいのだから処分すべきだったわね。エージェントならよく使う手よ？
用済みの味方なんて足手まといだもの、敵に情報を奪われるくらいならむしろ爆弾で追手ごと消すとかね。それだと役立つし」

気楽に最悪な作戦を言ってしまう。そんなもの、盗賊ですら考えつかないだろうとザリユースは思う。

「お、お前は——」

「頑張りなさい。それすらしないのなら、拷問して殺してあげる。自分が好きすぎると努力しなくなるのよね、ありのままの自分が好きだとかなんとか。あの小娘が言っていたように、もしこの世界があれの法の下にないのならできるはず。でないと、この森から消滅させるわよ。あなたの部族も、他の部族も」

さらりと言ってしまうのは先と同じ。だが、視覚化するほどの殺意がザリユースに吹き付ける。憎んでいる、およそ考えられないほどの憎悪を煮詰めたような漆黒の気配。……ここまで何かを憎むことができるのか？ この底知れぬ怨嗟を前にザリユースごときが何を言えるのか。

「我らが部族、そして他の部族までも手にかけると？ リザードマンを絶滅させる気なのか、あなたは——ッ！」

それでも、気を失いはしない。偉大なる祖霊にかけて、彼の後ろには愛すべき家族が、同族がいる。

「ふふ。うふふふ——」

黒い渦が彼女の背後にできる。突風が吹いたと思つたら、彼女の姿はすでになかった。

第19話 蜥蜴人の男たち

その日から8日。様々な出来事があった。嫁を得たり、嫁とイチヤイチヤしたり。

それと他の部族、“朱の瞳”と“竜牙”を説得して戦線に加えた。朱の瞳には脅迫を、そして竜牙には族長との一騎打ちでもって共に戦うことを納得してもらった。そして兄者が“鋭き尻尾”を説得した。あとは宴会だ。リザードマンの四至宝の一つ酒の大壺で杯を交わし、親交を深めた。

さらには村の守りを強化し、避難民の準備を始めた。守りは祭司たちを率いて嫁が、避難民にはそれぞれの族長が采配を振るった。

戦うための準備を、時間が足りないながらも賢明に。

ーそれが正しいかと言うと、ルサルカが求めるものかと言うと少し違う。求めたのは波旬とは違うという証拠。けれど、そう勘違いするのは仕方ない。彼女はグの一味を虐殺している。むしろ魔女の手管に飲まれた、というのが本当のところか。言い訳になるかは怪しいが、リザードマンの価値観は強いことに重きを置く。

「――我ら戦士に7部族の祖霊の加護を！」

原始的な宗教儀式を行い、鼓舞して戦うための心も決めた。彼らは魔女との戦いに部族の垣根を超えた種族の絆をかけて挑もうとしていた。

「……さて、答えを聞かせてもらおうかしらね？」

声が響く。不気味な声……心を犯すように頭の中に響き渡る。魔法……そうは分かっているけど、やはり恐ろしい。一人一人に声を届けるなど、祭司頭が何人いようと不可能だ。

「俺たちは戦う！ 家族を、そして友を守るために」

ザリユースが雄たけびを上げた。

「そうだ、貴様がどれだけ強かろうと言われるがままに滅んでなどなるものか」

「生きて帰るわ、ザリユースと」

「てめえなんざ怖くねえんだよ、かかってきな！」

兄の、嫁の、そして実力を認め合った友の声がする。……負ける理由などあるものか。かつてはいがみ合っていたもの同士。だが、今や心がつながっている。背中を任せる友がいる限り——

「決して負けはしない。そうだな、お前たち!？」

応、と答える声。緑爪だけでない、4部族全てがここに力を合わせるのだ。

「……ふふ。かわいらしいわね、力を合わせれば何とかなると思っているところが、なんとも——愚かしくて目障りよ」

太陽が消えた。

「な、なんだ——」

「ザ、ザリユースさん……!」

「おい、お前ら——うっ……! か、体の自由が利かない」

世界は薄暗闇に閉ざされて、指はピクリとも動かない。

「た、助けて——」

今まで意気高揚としていた戦士たちが、まるで子供のように震えている。地獄のようだった。せつかく上げた熱気に冷や水どころか、文字通りに凍り付いた。

「おい、こりやどうなってるんだよ——」

「あの女の仕業だ……おそらくは魔法だろう……ッ! ゼンベル、なんとか動けないか?」

「力、入れてるんだが何とも——な」

体が金縛りにあってはとうしようもない。皆を落ち着かせることもできずに皆が心くじかれ、絶望に瞳が閉ざされるのを見守ることしかできない。

「その程度の力で誰かを守ろうと思ってたの? 笑わせんじゃないわよ。それで守れるものなんて、何一つありはしない」

響く声。悲鳴が上がった。

「……どうした!？」

「牙が——闇の中に牙が! 喰われる!」

「ひい! 口が、影に開いた口が俺を食おうとしてやがる!」

視界にさつと何かが横切った。確かにあれは牙だったような。

「落ち着け！ 誇り高きリザーマンの戦士たちよ。魔法には効果時間がある。抵抗を続けるのだ！ いつかは“これ”も解かれるはず！」

そう、神のごとき所業だが法則には則っている。これも位階魔法だ……位階がどれかは想像したくもないが。

「そうね。いつまでもは続けられないわね」

影が淀むようにして、ルサルカが降り立った。

「貴様、ルサルカ・シュヴェーゲリン……！」

「偉い偉い、ちゃんと名前を憶えていてくれたのね」

「ぐ……！ ぬおおお！」

この事態を引き起こした元凶が目の前にいる。なのに、体が動かない。動け動けと口の端から血が流れるまで奥歯を噛み締めても、一步を詰めることすらはるかに遠い。

「ねえ、あなたたちが守りたかったものってアレかしら？」

「くい、と指示した方角は——避難民が向かった先。」

「やめ……！」

愉悦の笑み。残酷な笑み。……虫の羽をもぐような無邪気な悪意の奔流に飲まれ、指一本動かすこともできずに戦慄する。

「ばいばい。恨むなら、守れなかった弱い仲間にしてね？」

手を振って、火柱が上がった。

「ああ……！ ああ、ああああ——」

不可能などとは思わない。この魔女ならば鼻歌交じりに“やる”……今のうちに。

「あれあれ？ どうしちやったのかな、ザリユースちゃん。トカゲの顔って表情よくわかんないけど、泣いてるのかな」

彼女はとても、面白そうに顔を歪めて。

「おおおおお！」

憎しみが身体を動かした。無理やり筋肉を動かして、どこかしこにも痛みを感じるがもう気にならない。

「貴様ア——！」

「あら？ 氷の剣ね、部屋に置いたら涼しそう」

冷気を発する冬牙フロスト・ペインの苦痛の特殊能力を意にも返さず、そのささくれば見え見つかからない白魚のような指ではじく。武技で強化したゼンベルの爪すら上回る強度。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜエー！」

「巨躯がルサルカを後ろから殴りつけようとして。」

「そんな大ぶりの攻撃が——」

「こ、こつち……いつぱい。ゆうりー」

「こちらも族長。四至宝の一つ『白竜の骨鎧』を装備したキユクー・ズーゾーが大きな体を使って逃げ道をふさぐ。」

「私たちの未来、あなたに閉ざさせはしない！」

白い彼女……クルシユ・ルールの口から血が垂れる。戦士職ではない彼女は術から逃れるため舌を噛み切った。そして、愛する男に渾身の支援魔法をかける。

「そうだ！ 俺たちが力を合わせる限り——決して負けんのだ！ 全ての力……今ここで開放する。三連——『氷結爆散！』アイシィーバースト」

冷気が爆発し、ルサルカを氷の棺に閉じこめた。

「——やったか!？」

「これで、倒せてなければ……」

攻防は一瞬とはいえ、死力を絞りつくした渾身の一撃だ。肩で息をする。これで、効いていないようであれば。

「倒せると、思っていたのなら相当おめでたいわねえ」

バキリ、と氷にひびが入り砕け散った。無傷の彼女が冷たい笑みを浮かべている。

「この私に傷をつけられると思ってんの？ お前らごときが——トカゲごときが。爬虫類だからって手心を加えてあげたのに。それすらも理解できずにべらべらと。傷なんかつかない。私は永遠。彼の愛が守ってくれてるのよー」

いきなりキレた。

「ぐ……こいつは、ちとヤベエか？」

「だな、ゼンベル。まだやれるか」

「たりめえだ。植物系モンスター、そつちはどうよ？」

命が終わるのなら、せめて彼女のぬくもりを感じたい。全てが終わるのなら、君と。

「くっ！」

手を、伸ばした――

「……がはっ！　ぐーここは……っ！」

見れば、同じ場所にいた。手に感触が。クルシユだ。クルシユと手をつないでいたらしい。固く握り合っていて外れそうにない。

「ふん、そんなもの見せられちやる気なくなるっての。あー甘い甘い。ブラックコーヒー飲みたくなつたわ……」

恐ろしい彼女は木の根に腰かけてふてくされている。

「俺たちは助かった……のか……？」

理解が及ばない。

「ま、そういうことね。これ、あげる」

ルサルカはひよい、とその辺に剣を刺した。

「な――あ。これは……」

とてつもない力を秘めた炎の剣。もしかしたら氷の剣の対ということで選んだのかもしれないが――明らかにランクが違う。これに比べてしまえばフロスト・ペインなど爪楊枝に過ぎない。

「ああ、あの炎は幻術だから」

「……へ？」

「だから、助けに行った方がいいんじゃないかしら。びっくりして心臓止まってるかもしれないわね」

理解できないことが続いて頭がゆだる。横で気絶している仲間たちが羨ましい。つまり、幻術の炎とは剣のことではなく避難民のことらしい。

「じゃーね。あなたたちのラブラブっぷりに免じて、なんかあったら助けてあげるわ」

前回と同じ、黒い渦に入って姿を消した。まあ、なんだ――

「とりあえず、生き残れた――のか？」

そういうことらしい。

第20話 盜賊団

エ・ランテルの中でも指折りの高級料亭、黄金亭にその姿はあった。
「——まずい」

深層の令嬢、という言葉にふさわしい美少女が侮蔑をあらわに冷たい視線でもって周りを睥睨する。少し胸の豊かさには欠けるが、氷のように美しい彼女のこと——それはずいぶんと似合っていた。

「テレジア、あまりそういうことは思っても言わないものですよ」
父親らしき男が少女をたしなめる。人を安心させるような朗らかな笑みは、少女がゴミを見るような目を向けても微動だにすることはない。いや、じつと見られていると少し涙目になった。

「まあ、その人の言葉はともかくとして……悪くはないと思うわ。あまり贅沢ばかり言ってはダメよ、玲愛」

一見、男の擁護をしているように見えるが実のところ黄金亭も男もけなしている。「ここ」は貴族が使ってもおかしくない。贅沢をするところ」なのだから。

「私は部屋にいる」

彼女はすねたように席を立った。家族のように見えるが、目立つ彼女たちは有名だ。美しさだけでなく、濃厚な金の匂いも立ち昇らせているのだから当然と言えた。そして、噂というものはどの時代でも民衆に好かれている。彼女たちの一挙手一投足はすぐに噂になり皆の知れるところになるが、それによると少女は父や母と呼んだことは一度もないことは誰もが聞いている。そんな、微妙な関係を下世話な好奇心で見つめる目は多い。

「……………」

母のような彼女がぼそぼそとウェイターに注文する。それを部屋まで持ってきてほしいということだが、それを聞いたものは誰もが残念な思いをすることになる。それは、キムチと梅干しをパンにはさんだもの——

「よろしくお願いしますね」

につこりとほほ笑むリザの姿は見ている者に癒しを与えた。ただ、これから彼女に持っていられる”もの”を食べようと思う人間はいなかったが。

実は、玲愛はリザの實の娘説、義理の娘説があつて派閥争いが続いている。いや、彼女たちが来たのは数日前なのではあるが。實の娘説では、血がつながっているのに抉れているのはおかしいという者や、ロリだからこれから育つんだよ。義理の娘では少女の憂いに満ちた表情がたまらない、とかNTRキタコレとか言う声が上がっている。とりあえず一番最後を言ったものはすさまじい気配を感じて股間を濡らし、汚名を着ることになった。

玲愛はリザとともにベッドの上で辛いんだが酸っぱいんだか、ぼそぼそしているのかべとべとしていいるのだからわからない物体を仲良く食べている。母のような彼女は無作法だと思つたが、付き合うことにしたようだ。……甘やかしすぎである。そこに諸々の後処理を終えたトリファが入ってくる。

部屋の中、雰囲気が一変するということではなく穏やかな家族の団らん雰囲気満ちている。ここにいる三人は互いを信用している。打算でもなく、ただ思いやって。けれど、それは家族構成としては酷く歪だ。

「……で、愚かなゾウリムシどもは釣れた？」

和やかな雰囲気のままの彼女の発言。さりげなく自分の隣に腰を下ろそうとしたトリファを蹴り落とす。

「順調みたいね。ボーン・ワルチャーに気づいた様子もない——諜報対策なんて、言葉の意味ですら知らないのでしょうかね」

ボーン・ワルチャーの……というか、召喚魔法を使える人間自体がこの世界では貴重だ。警戒するのはせいぜい盗み聞き程度が限界である。それも、特殊部隊でもなくただの夜盗であれば高いレベルを期待する方が間違っている。

「しかし、それでも新進気鋭の盗賊団ではあるようですし。シユピーネからの情報ですが、帝国にすら噂が流れるということは相当ではないでしょうか」

やはり、父代わりのこの男も玲愛のことを甘やかす。けれど、裏では多くの策謀を巡らす。人間の汚さというモノを熟知していながら、己はそれすら上回る悪辣さを身に付けざるを得なかった『邪なる聖人』。

「警戒すべきは未知の事象。『武技』とかいうものの性質を調べなくてはいけない」

さも当然、といった態度だが、玲愛の立場は相変わらず首領代行……立場では蓮を除いて一番偉いのであった。まあ、その蓮が自由に歩いている以上有名無実となっているのが実際であったが。

「位階魔法のアップグレードというものも警戒する必要があります。実際に生活魔法と言ったダウングレード版が存在する以上、その存在は否定できるものではないでしょう」

「けれど、私たちはレベル60以下の攻撃はそもそも通らない。あなたに至っては最低限70はないとお話にならない。……そもそも人間に6位階が限度である以上、警戒は必要かしら？」

「やれやれ、元々はあなたはレーベンスボルンの出——戦場とは異なる場所にいた以上しかたありませんが、油断は即座に死を招くのが兵の鉄則です。かの副首領閣下のことを思えば、相手を侮るなど愚かな行為と思いませんか？ たとえ、彼がすでに踏み潰された後としても」

「……水銀の残した仕掛け。ないとは言いきれない」

ひどく顔を歪める。彼を嫌っていなかったのはどこを探しても黄金と黄昏以外にあり得ない。実のところ彼らに仕掛けがあるはずがないとはいえ、記憶にある以上は警戒せざるを得ない。

「そうです、テレジア。特にあなたはゾーネンキント、魔城の核となつたあなたに何らかの要素が埋め込まれていないとも言いきれず——そこに作用する何かがあった場合は致命傷にすらなりえる」

「結局のところ用心するしかないのでしょうか？ 用心して事に当たり、悪い可能性を潰していく。ええ、安心して——人体神秘の解剖には慣れているわ」

リザはさらりと言つてのける。レーベンスボルンは研究施設……

そして、それは人体実験であるのだ。実のところ、カルマ値など関係なく設定で与えられた戦争による歪みが彼らには存在している。人を劣等と蔑み、腑分けして殺す感性。

「藤井君が私たちを心配してくれるのは嬉しい。でも、この世界の人間^{波旬}どもなんて皆殺しにしてしまえばいいのに……ッ！」

玲愛の雰囲気が変わる。少女のそれから、悼ましい化け物のそれへ。全てを憎む怪物の目。彼女には戦争の記憶がない。ただ、育ての親に生贄として捧げられただけだ。だからこそ、酷く純粹に——よくわからないまま核ミサイルのスイッチを押ししてしまえるのだ。

「だめですよ、玲愛。藤井君が慎重に対処すると決めたのよ。それに、ベアトリスが認めたのも。考えなしに殲滅していいわけではないわ」

けれど、それは主の意向には沿わないとリザが諫める。実のところ、彼女も殲滅に異論はないのだ。人間がいくら死のうと関係ない——ただ自分の手で実行するのが嫌なだけで。

「私、そいつのことよく知らない」

ふい、と顔をそむけた。玲愛はこの二人以外とはあまり絡んでいない。物珍しさで他メンバーから少し接触されたことがあるが、ただそれだけだ。大事な生贄を傷つけるような真似ができない以上、特に興味も持たれない。壊すのは黄金への裏切りであるのだし。

「キルヒアイゼン卿は信頼に値する方ですよ。ただ、まあ——思い詰めると一直線な愚かさはレオンハルトに通じるものがあります」

トリファはかつての聖槍13騎士団、黄金が率いていた彼らで現世に残留した組の首領代行の真似事をやっていた。最も他メンバーと関わりがあり、個々の性質を知っている。

「ああ、あなたにいいようにしてやられたものね、彼女。真相に見当がついたとき、正直引いたわ。まるきり水銀の手管よね、アレ——」

「ちよちよちよ……待ってください。リザ、確かに悪辣極まりないと言われても仕方のないやり方だったとは思いますが！ それでも——副首領閣下のやり口とか言うほどではないでしょう！ 大体あの方がやっていたら仲良く一緒に聖遺物の中に居ることもできません

でしたよ、絶対。だから断言させていただきます……あれほどではない、と」

「でも、愛する二人を引き裂いて、弱みを握って殺し合わせるなんて水銀のしそうなことだと思うけどね」

「へえ、トリファア何をやったの？ 相当恨まれてそうね」

「ああ、恨まれてるわよ。死人になつてまで恨みを忘れずに、私の制御を外れるくらいにその思いは強かった。……トリファア、なんであなたまだ殺されてないのかしら？」

「そんな——いや、だって仕方ないじゃないですか。キルヒアイゼン卿は元々裏切るつもりで動いてて、完全に粛清される流れでしたよ。確かに私が戒を矢面に立たせて偽槍に魂を吸わせましたが……流れとしては、私、居てもいなくても変わりませんよね？」

まあ、やったことは粛清だ。血気盛んなメンバーを止めて、裏切り者と恋仲にあったメンバーを妹をネタに脅して殺させたという話。そして、恋仲の彼は一度戦えば死ぬことも聖餐杯にはわかっていた。

「ひどいね、トリファアは酷い。恋する女の敵だよ」

玲愛が軽蔑の目でトリファアを見る。

「そ、そんな。テレビアまでそういうことを言うのですか。私はただ、愛のためにできることをやっていただけなのに」

「ごめん、それ本当に気持ち悪い。私、あなたに孕めとか言われたの覚えてるからね」

「いや、今のは男女の愛とかでなくてですね。というか、トチ狂っていた時のことは堪忍してください、はい。何度でも謝りますから、水に流していただけると大変助かると言いますか」

「トリファア、あなた普段からもしかしてと思ってたけど、本当に——」

「いやいや、何を言い出しますかりザ。もしかしてとは何ですか。私、別に普段からそんなことは決して思っていないですよ!? あのときはなんというかアイデンティティの確保のためにですね」

「そう、あなたのアイデンティティのために私はトラウマを植え付けられたの」

「あああ、もう！ 勘弁してくださいー」

トリファは泣き崩れた。

そして、家族団欒をよそに薄暗闇に潜む男たちが密談をかわす。
「へへ、あの商人どもの様子はどうだい？」

薄汚れた姿の男がニヤニヤとした笑みを浮かべている。よくある下種さだ。特に何かが並外れてるわけでもなく下賤なだけ。強さも特筆することはないただのクズで、それだけの男。

「あいつら、好き放題やってますぜ。金があるからって、なんでもかんでも——」

対する男は下卑たへつらいを浮かべている。こいつも変わらない。

「は。景気のいいこつたな。ミスリルを大量に流したんだっけか」

「へえ、そういうことらしいです。まったく、別の国からやってきたつてらしくて知り合いはいないんだそうで」

「はっは。だから好都合なんだろう？ いなくなっても誰も気づけやしねえさ」

「へえ、へえ。分かっておりやすよ。あつしはあいつらが出発したときにお知らせすりゃいいんでしょ？」

「そういうことだな」

「心得ておりやすぜ。それと、旦那……お楽しみにやあつしも混ぜてもらえるんで？」

「まあ、な。だが、あれほどおっぱいでけえ女は見たことがねえ——あんまり期待しても後悔するぜ。あれはすげえからな、大人気だろうぜ」

「あつしはむしろ、小娘の方をめちゃくちゃにしたいんですけどね」

「はは。あの貧相な女か。変な趣味してるな、お前」

「だって、あの苦労してなさそうな顔、思い切り歪めてやりたいじゃねえですか。思い切り甘やかされた金持ちの娘なんてろくなもんじゃねえ——」

「ま、いいさ。お前は仕事をちゃんとやってくれりゃあお前はおこぼれを貰えてハッピー。俺らも仕事があつてハッピーだ。……いいな

「？」

「へい——」

その晩、彼女たち一行は急に出発を決める。玲愛がこの町にはもう飽きたと言い出したために。

他と比べても一等豪華に思える馬車をザナツクが引く。もちろん、この男が盗賊団の男と密会していた人間だ。自分で引いていてもここに来る前の御者は——などと考えないのが下等な犯罪者である。

「——」

十分街から離れたところ合いを見計らって、かちかちとランプのシェードを外して合図を送る。

「おい！ その馬車、止まってもらおうか」

大声がかかる。ザナツクは打合せ通りに馬車を止める。

「——さてさて、夜にこんなところを通るのは危ないぜ。商人さんたちよ」

ぞろぞろ出てきた盗賊の男たちは無遠慮に扉を開け、中を睥睨する。

「……このゾウリムシ、不快ね。どうせ武技なんて使えないだろうし、殺していい？」

玲愛は目を閉じ、虫でも出たかのように顔を歪めている。

「いいえ、ゲジゲジだろうと実験には使えるもの。人的資源を無駄にするのは共産主義者のやり方ね。私たちは資本主義でしょう？ 使えるものは使わないと」

一方リザは温和な顔で……人体実験の内容を考えていた。個体差があるから、適当にやっても意味がないのだ。条件が厳しいと、やたらめったら決め打ちではかすりもしない。そして盗賊なんかやるような男では、レベル5という条件すら厳しいものがある。

「まあ、現地人の中でも犯罪者です。まともに教育を受けられもしなかった下等民の言動などこんなものですよ。サルでも相手にしていると流すのが賢いというものです」

トリファも実に酷いことを言っている。さすがにここまで言われ

ると思っていなかったから、盗賊の男たちも罵倒されたということすらわからずに目をぱちくりさせる。というか、この商人たちは普通だったら悲鳴の一つでも挙げているところだ。それをこうも……まるで虫がでてきたような気楽さで。

「お前ら、俺が怖くないのか?」

あまりにも彼が見てきた人間たちと彼らはあり方が違いすぎて。ぼかんとあつけにとられてこんなことまで聞いてしまう。

「……まさか」

一番年幼い少女は未だ目を閉じている。恐怖しているわけでもないのに。

「さて、あなたたちの本拠地を教えてもらいましょうか。隠すためになりませんか?」

男、立つと背が高いのがよくわかる。見上げるほどの巨人にわずかに後ずさって。しかし、こんな優男に負けるかよと考え直す。

「ああ!? やるか、てめえ!」

舐められては仕事にならない。というか、怒鳴りつけるくらいしか仕事のやり方を知らない。

「ああ——実に惜しい。あなたも父と母を、そして血のつながった兄たちを持った一個の人間であつたはずなのに。今や、誰かから食べ物を奪つて糊口をしのぐしかない日々。同情しますよ、確かに税が重くて不作が重なれば長男以外の居場所などない」

その男の言葉は心にすつと入ってくる。そして、心の深いところをやすりで削るのだ。

「う——うるせえ! お前に何が分かる!?! 俺は……俺だつてな、こんなことやりたくなんざなかつたさ。でも、やらなきゃどうにもならねえんだからしょうがねえだろ!?!」

まくしたてる。この男にとって、長男と言うのは憎悪の対象だ。なぜなら、長男以外は口減らしのために二束三文で売られるから。売られずとも、大事なものは長男だ——親には労働力としか見られていないのは知っていた。愛を、そして十分な食事を与えられたのは長男だけだつた。

「ええ、わかりますとも。あなたの苦悩、あなたの憎悪。しよせん、あなたの人生などどこにでも転がっているありふれたものに過ぎない。少し運がよくて盗賊として成功したに過ぎない小物だ」

「だ、だから——なんだと」

あまりにも異常な気配の前に威勢を張ることすらできなくなる。

「さて、もう一度聞きます。あなた方の拠点はどこですか？」

常識的に考えれば言えるはずがない。言ったとわかれば後で“お仕置き”を喰らうからだ。

「そんなこと、答えるわけが……」

べき、と音がして——両腕の感覚がなくなった。

「あなた方の拠点はどこですか？ 別に、言わないのならお仲間さんに聞いてもいいのですよ。でもですね……あなたが彼らを助ける必要などないでしょう。あなたはすでに逃げて、ここに行きついた。他人がどうなるうとかまわないから盗賊なんてやっている」

断言されて、うなづくしかない。腕を握られて、完全に動かない。すでにうつつ血して掴まれた周辺が紫色になっている。さらに力を籠められれば砕ける。

「答えないのなら拷問します。あなたが苦しむ様を見て、彼らが自主的に教えてくれるまで苦しみを与え続けましょう。……けれど、そこまでして彼らをかばう義理などないのでは？ どうせ、彼らとてあなたが本当に求めたものを与えてくれたわけでもないのだから——」

「——ッー」

選択肢は一つしかなかった。

「さて、心優しい彼が本拠地の場所を教えてくれたので、皆さんはどうぞご自由になさるがよろしい。……この森から出れるのであれば」

そう声をかけられたのは、どうしていいかわからなくてまごまごしていた盗賊団の仲間の皆さんである。どうせろくな訓練を受けたわけでもない、隊長が失敗すれば、というか不利な状況に陥ったとしても——何をしてもいいかわからないから何もできない。見ていることしかできないのだ。

「……え。あれ」

声を出したのは誰だったか。

「赤い、光……？」

ちらほらとそれに気付き始める。

「なあ、何か居ないか？」

横の仲間に話しかけたつもりのもその顔がこわばる。そう言えば、仲間はぼろぼろのフルプレートなど着ていたか……

「あ……ああ!? ス——スケルトンだ!」

彼らには知識がないからわからないが、スケルトン・ウォリアーは彼らよりも強い。特に戦術とか武技も知らない彼らには敵しすぎる相手である。単身で打ち取れるなら犯罪者などならず冒険者をやっている。

「さて、何人生き残れるかしら……？」

リザがつぶやく。彼女の召喚したアンデッド……とはいえ、デス・ナイト以外は専門外のようなものではあるのだがレベルが低すぎるから問題はなかった。

「リザ。アレはいらぬよね」

顔を出した玲愛はザナックへ向く。

「ひ……！ なん——なんなんだ、てめえらは。お前らみたいなの、なんて見たこと……」

「うるさい。こちらを向け」

「……ッあああああ!」

そこにあつたのは玲愛の瞳。そこにあつたのはおぞましいまでの極彩色の『力』であつた。“それ”は悼ましく、呪わしく……悲劇的なまでに煮詰まった憎悪の発露にして竜王すら問題にしない究極たる断崖。すべてを焼き尽くしてなお止まらない黄金瞳。

「ああ……目が！ ああ——」

宇宙的なまでの恐怖。それを目の当たりにしてしまったザナックは当然、逃げた。彼の精神は宇宙を飛び出し、涅槃へと到達する。“それ”から逃れるため、肉体は死を選択した。残るのは、見開いた眼を虚ろに向けた絶対的恐怖の欠片すら残す存在そのものが悼ましい死体。

「つまらない男」

一瞥し、中へと戻った。

「じゃ、玲愛……いい子にしててね？ 私たちはあっちへ行くから」

リザは山の奥へと赴く。未だ実験は完了していない。

「うん。……待ってる」

玲愛はいい子にして馬車の中で待っているのであった。

第21話 ブレイン・アングラウス

即座に二人はここに来た。盗賊団の人間は全員殺したが、仮に走って向かったとしてもまだつかない時間。ゆえに静かだ——見張りは立っているが気が抜けた顔をして適当におしやべりを続けている。

「では、リザ——どうしますか？」

「出入口は二つ。私とあなたで順番に潰して行けばいいでしょう」

「ならば、そうしましょうか」

リザは魔人となる前は研究者であった。そして、その研究内容は超能力の研究——この世界ではありふれているかもしれないが、元の世界ではナチスの時代であろうと眉唾でしかなかったそれを証明し、アーリア人の優等を示す研究。結局のところ、化け物は化け物であるということを実証するに終わったが。

今回の処理……実験にはその手管が使われている。人間は危機的状況に陥ると今までになかった能力を出すことがある。超能力の発生手段を武技の習得実験に転用した。追い詰める、という行為を効率的に行う拷問法をいくつも実行した。

「けれど、彼らには武技は使えなかったみたい」

彼らは死の間際、そしてアンデッドに頭を何度も殴りつけられて力尽きられるまで何も特殊な何かを用いた形跡はなかった。もつと別の条件かと疑い、そうだとしたら望み薄かなと思う。実験に使う施設がないし、黄昏に彼らを連れて行く気はない。聖地である、下賤の類を入れる気は一等穏健なりざであろうともありえない。

「けれど、試す価値はあります。ほら、彼らにも強さの差というものがある。このような組織のボスは強さでしか地位を維持できないでしょうから」

「確かにね。けれど、武技というものが門外不出の国家機密だとして、その辺の人間に使えるはずがない。藤井君が見たというのは王国戦士長なのでしょう？」

「油断は禁物と言ったはずなのですがね。万一の何かがあれば藤井さんに顔向けできない。それにテレジアに危険が及ぶ可能性すらある

のです」

「ああ、手抜きするわけにもいかないものね。ならば、十中八九無駄であらうと丁寧にやらないといけないわ」

「そういうことです。千のからぶりがあるうと一の成功を狙う。軍人もそういうたぐいの任務に就くことはあります。大抵はスパイなどといった任務ですが、研究も似たようなものでしょう？」

「やるわ。やればいいのでしよう。まったく、私は玲愛と過ごせればそれでいいのに——」

「なに、厄介ごとを片付けたらそうしても文句は言われますまい。私としても、混ぜていただければそれに異存はないので、がんばりますよ」

「え。あなた——玲愛と一緒にいるつもり？」

本当に不思議そうな顔で、厚かましい男を見る目でトリファを見た。

「酷いですね、リザ！」

気の抜けるようなセリフ。けれど、そのセリフこそが血と肉が舞い踊る残酷な殺戮劇の始まりの狼煙であるのだ。

そして、リザは血まみれの通路を歩く。

「つひー！ 化け物——」

見えた男に、ついさつきこと切れた、四肢を切り落とした男を投げつける。

「つぎやー！」

そいつは気絶したから奪った剣で首を切り落とした。

「やっぱり、いないわね」

リザがやっている実験は至極単純、火事場の馬鹿力のようなもので武技は使えないだろうかという実験だ。己自身で相手を死ぬような目に合わせ、その結果を観察している。さっきの男は四肢を切り落として命が失われていく状態ではどうかを調べたものだし、投げたのはそれが失敗に終わったから巨大なものを投げつけられた反応を調べる実験である。

「別にマレウスじゃないんだし、苦しませるのを楽しんでるわけでもないのだけど……」

盗賊団が使っていたこの場所はまるで地獄のようなありさまだ。死なないように殺す、という拷問をして回っている強力なネクロマンサーがいればそれも当然。もつとも死霊術はまだ使っていないが。

「——は。とんでもねえな。あんた」

声がかげられた。その声に恐怖は混じっていない。純然たる感心……それも武力に向けたもの。その残酷に怖気づくどころか興味もないと言った有様。この男の名はブレイン・アングラウス。己の強さを鍛え上げることにのみ、その生涯をささげた男である。

「あら？。あなたはこここの人の仲間かしら」

「いや、雇われの護衛だよ。まさか、あんたみたいな化け物が来るとは思わなかった。相当、腕が立つな」

「……力任せに切っているだけよ？。もう5本目だしね」

「だが、そんなナマクラで人を両断できる。難しいな、どうにも。素人どころか冒険者にだって難しい。それは力に任せてぶん殴るように使うようなお粗末な代物だ。力技で殴ったら折れるぜ。それで斬る——名のある剣客とお見受けするが？」

「ああ、それは昔取った杵柄と言うやつね。あいつに対抗するため色々やってきたから。でもそんな名声なんてないわ。まあ、私が相手していた彼女にはできたけれど」

「だが、それでもあんたは三流だ」

「……？」

「武人ならば、命を預ける相棒は選ぶ。なのに、あんたはそんなナマクラを持っている。そんなものを使うなんざ恥だ。だから三流だ」

「まあ、武人を志したわけでもないしねえ——」

「は、謙遜は似合わねえぜ。三流でもそんなすごい腕をしてるんだ——ちよつと、ここで腕試しでもしてかねえか？」

「腕試し、ねえ——あまり興味はないのだけど。ねえ、あなた武技って知ってる？」

「はは。あんたほどの使い手が一つや二つ、使えないはずがあるまい

よ。ここの盗賊団の奴らも、平はともかくボスクらいは使えるぜ。
……それとも、俺の武技『瞬間』の噂でも聞いたのかな。秘密にして
るわけじゃねえんだが、使う相手もいなくてよ」

「……そう。じゃあ、見せてもらおうわ。駄賃代わりに、一度や二度は剣
を振ってあげる」

「へへ、話分かるな。ああ、見て学びたいってことだろ？ 俺もそう
さ。あんたの技を受けて、体験して強くなりたいんだ。経験を積むの
は、やっぱり早道だよな。もちろん、それで日々の修練をおろそかにし
ていいってわけでもねえがな」

「そうね、私も昔は毎日剣を振っていたわ。あいつに負けなかったために。
ああ、懐かしいわね……風邪ひいても休まなかったから指導教官にま
で怒られたんだったわ——」

リザはひびが入った剣を捨て、新しい剣を取り出す。そこらへんに
転がっている盗賊から奪った剣の質は正直、最悪と言っている。二束
三文でたたき売られるような代物で、ろくに研いですらいない。

「へへ。話せるね、あんた。そう、剣を振るのを怠れば取り戻すのに三
日はかかる。鍛錬の積み重ねなんざ、言うのは簡単でも実行できる奴
は多くねえ。それができる奴は有名になっちまって、武者修行なんか
立場が許さねえから俺も挑めねえ」

ブレインはすでに武技を発動させている。『領域』、己の間合いに入
るものすべてを知覚する。さらに『瞬間』を超えた『神閃』——ここ
らはただ一度の敗北を糧に生み出した究極の武技……実戦投入は始
めてだからあえて言わなかった。

「見せてもらおうわ、あなたの武技」

そう言って、無警戒に歩を進める。

（いや、違う——隙が無い。これは、武技……なのか？ だが、性質は
領域と同等……！ ただ歩いているだけに見えて、どこから攻撃しよ
うと迎撃できる構えなき”構え”）

領域の超感覚でも、おそらく隙を見つけることはできまい。彼女は
無遠慮にどんどん近づいてくる。……様子を見るような時間はない。
（ならば、真向からのぶつかり合いと行こうじゃねえか……！ 俺の

神閃と、あんたの剣。どちらか上か——)

そのまま、彼女の足がブレインの間合いへと到達する。

「……………(ぎゃー)！」

(領域の超知覚でもって敵のわずかな筋肉の動きすら読み取り、その予知でもってガゼフすら手を焼く瞬間を超越した『神閃』で敵の急所を射抜く。……………これこそ)

「秘剣『虎落笛』……………！」

抜き離れたれた剣が最速で対象の首を狙い、領域の超知覚により敵の反応を感知。敵の剣、そのルートは剣を叩き落すコースへ。その結果は、両者の武器の破壊……………！」

「——ツシィー！」

己の剣をコース変更。首狙いから、剣を狙う。

「……………あら？」

結果は予知した通りに移行。ブレインの刀はリザの剣を真つ二つにした。が、追撃には少々時間がかかる。無手で制圧するような隙は与えなかったが、その時間でリザは後ろに引いた。

「あらあら。剣の軌道を変更されたわね……………そういう武技かしら？」

「違うな。あくまで武技は知覚と抜刀速度の強化のために使ったに過ぎない。剣筋を変えたのは俺の技術だよ」

「……………そうなの。でも、そんなに簡単に自分の使う技を教えてもいいの?！」

「かまわん。知られて対策できるような技なら、その程度と言うこと。そして、俺はいつまでも変わらんままでいるつもりはない。強くなる。聞いた話を鵜呑みにしては己の窮地を招くぞ……………！」

「そう、それは男の誇りと言うやつかしら。私にはどうにもわからないわ、そういうの。でも、お返しに一つ教えてあげる……………私の持つてる剣はあと3本あるわ」

奪った剣の三本を見せ、空中のどこかへとしまう。もちろん、蓮からもらった剣がほかにもあるのだがそれは使わない。

「あと三回で俺を倒さねば後がないということか?！」

「いいえ、あと三回は付き合っていると仰っているの。武技、見せて

もらったしね。でも、剣でなくても他にやり方はあるもの」

ブレインはくく、と吐息じみた笑いをもらす。なるほど、挑発か——と。三回が終わったら逃げるつもりなのだろうと考えた。そもそもただの護衛である自分に懸賞金などかかっていないから、やるだけ無駄というのは納得できる話だ。

「ならば、あと三回などと言わずに次で終わらせてやろう」

「ええ、そうして頂戴——」

とん、と跳んだ——そう思った瞬間に反応が来た。領域は稼働し続けている。それが敵の反応を感じたのなら、ブレインの体は意思など関係なく動く。そう鍛え上げた故に、秘剣をもう一度放つ。

「……ッー」

やられた、と思った瞬間にはからぶつっていた。先ほどのは一歩で距離を詰める武技だと予想出来て、そして一瞬間合いに入った後に即座に離れた。……秘剣を無駄打ちさせるために！

「注意力散漫ね——」

剣先を立て、突き……間合いが離れているが致命傷、フルプレートなら防げる一撃も動きが鈍くなることを嫌って付けていない今は関係ない。すぐ手当すれば助かる傷も森の中では絶望的。

「負け……だと思おうか!？」

だが、秘剣『虎落笛』の本領はただの一度の空振りで終わりはない。一瞬よりも短い刹那で刀は鞘に納まる。必殺にして無敵のカウンター技、使い終わったら隙ができる技などが最強であるものか。

「あ——」

剣は根元から斬り捨ててしまう。そして。

「我が刀は三度、敵に喰らい付く！」

計、三連撃……これまでが秘剣の全て。ただの一度のそれを見て油断したならば、一撃目をかわしたとしても、二撃目が武器を殺し、三撃目が命を断つ。

「おっと」

だが、これも防がれた。二つ目の剣という犠牲を払い、リザは二度目の後退を。

「……反応速度が。これは、強化というよりも……事象としてスキルに近いものかと思っただけで、物理法則が……魔法に近い？ いえ」
リザは彼を見る。

「そう、あなたは強いよね。なら、私も少し本気を出してみようかしら」

影が走った。

「……っ!？」

そう思った瞬間には別のところに立っている。先の跳躍じみた“長い”一步のトリックなどではない。純然な速さ——彼女のいた場所からわずかに上る煙が脚力で無理やり高速移動しただけなのだ。教えてくれる。

「どうかしら？ 剣士などと言っても、始めから目で追えないような生物の前には無意味——見えないものに刀を当てられるはずがないのだから」

勝ち誇る。しよせん、武人の誇りなどない……圧倒的な速さがあるから、ただ技術など関係なく——ただのステータスの力でお前を潰す。と。

「……そう思うか？」

ブレインは目を閉じる。あてつけ、というわけではない。目が無意味なのは先的一幕で証明されたから、無駄に視界に神経を割く愚を避けたのだ。

「それは無抵抗の証とでも？ それとも、勝てると思っっているのかしら。この期に及んで、何を無駄なことを——」

「御託はいい。来るなら来い。来ないなら帰れ」

ブレインは微動だにしない。その精神は凧のように静かだ。それが、彼にとつての刀を振るうということ、その意味。

「……へえ。いいわ、ならお望み通りやってあげる」

瞬間、後方で空気の割れる音がする。

（——音も聞かん。感覚は全て不要、『領域』にのみ神経を費やせブレイン・アングラウス……！）
ただ、見分けろ——領域の中、敵を見据えて刀を放つ。それだけだ。生涯を武にささげた。ならば、積み重ね

た武を裏切るなよ俺……！)

極限まで集中した神経、領域の中を通過する諸々を無視する。石……そして死体のもげた腕など、体にあたろうが凧のような心には波紋一つ浮かばない。ただ、敵を見据えて斬るのみ。

「……ッ！」

そして、それを感じた。

(掴んだぞー！ ガゼフ——)

確信できた。己の刀はこの一瞬、限界を超えて鞘走り結果は相手の死だ。小さな神にでもなったかの気分だ。この『領域』の中ならば、なんでもできる全能感が神経を麻痺のように焼いた。

(強かった。お前は強かった、名も知らぬ物の怪よ——そこまでの力を持ちながら、なお剣の道に進んだお前のことは忘れん。さらば、わずかな時でも好敵手であったお前よ。俺はお前と言う壁を乗り越え、ガゼフを……)

粗末な剣をバターののように切り裂き、リザの喉元……殺すに十分なだけの切り込みをしっかりと刻んで通り抜けるはずだった刀が止まった。

「……はあ？」

意味が分からない。熱に浮かされた思考が冷や水を浴びせられてどこに着地していいかわからなくなってしまった。

「ああ、ごめんなさいね。私にはレベルの低い攻撃は通じないの」
申し訳なさそうなりザの顔をまともに見れない。

「それと、もう一つ。本気を出すと言ったけど……それも嘘」

轟音を上げて、手のひらがブレインの顔に迫る。それは狂気を相手に戦う部下をどかせるような優しい撫で方であったが、同時にフルプレート製の鎧ですら粉碎するに足る一撃である。

「……あ」

その瞬間、ブレインが思ったのは。

(いやだ、死にたくない……！)

「あら？」

なんで頭がはじけなかったのだろうと疑問に思うリザの目の端に投げ捨てられるように舞う刀がちらりと目に入った。よく磨かれて
いる……きつと、彼にとつては命よりも大事なものだっただろうと
感傷に浸ったその瞬間。

「……………ヒィー！」

木の葉のように吹っ飛んだブレインが壁に着地する。死の恐怖が
アダマンタイト級すら超える身体制御を可能にした。そのまましゃ
かしゃかとゴキブリのように全力で逃げ去ってしまう。

「……………ええー！」

アレ、命よりも大事なものを捨ててってよかったのかしら……そんな
風に思った一瞬の気の迷いはブレインの逃亡を許してしまった。

第22話 ブレインVSガゼフ

ガゼフは王都の街を見回っていた、巡回警備だ。本人としては民とも触れ合える、日頃の貴族と関わることで生まれるストレスを癒す機会にもなっていた。

もつとも、それには政治としての裏がある。王国は帝国と戦争状態にあり、率直に言えば負け続けている。決定的な敗北を喫することなく、負けて負けて状況は悪くなり続けている。

これには民もうんざりしているのだ。重税を課し、働き盛りの若者をよりにもよって収穫の時期に奪い去り、拳句の果てには帰ってこないこともある。鬱憤はいつ爆発してもおかしくない……そのガス抜きがガゼフの巡回の目的である。

「——む？」

薄暗闇の路地に変な視線を感じた。確かにガゼフを疎む貴族は多いし、お前のせいで息子が死んだと憎しみを向ける者もいる。が、基本的には庶民から王のそばまで至ったガゼフを英雄視する声が強いの。そのどちらとも異なる空虚な視線があった。

「どうしましたか、戦士長」

無論、巡回だ——子飼いの兵を連れている。というか、子飼いでないと貴族の息がかかった者が何をしでかすかわからない。騎士が民衆を守るのは昔の話……今は貴族の私兵となり果てた。戦士長の名誉を地に落とすための無差別殺人と言うのが笑い話ではないのだから——笑えない。

「いや、あそこに何か——」

注意を向けると、それが誰なのか分かった。

「おお、ブレインじゃないか。お前、今まで何してたんだ——？」

近づくにつれ、その酷い有様があらわになった。頬はこけ落ち、服はボロボロの泥まみれ……王都にふさわしいような恰好ではないが、スラムは年々広がっている。そんな恰好をしても路地裏では目立たないことも事実だった。

「ひどく衰弱してるじゃないか！ お前、剣も持っていないのか。いや、まあいい——食事にしよう。腹に食い物を入れれば元気も出るさ」

「でも、戦士長。部外者を王城に入れるわけには……」

「おお、そうか。ならそこらの食事処にでも入ることにしよう。お前らの分も奢ってやるさ。なに心配するなよ、こう見えても戦士長なんかやらせてもらってるんだ、金はある」

「おや、ありがたいですがよろしいので？」

「王城で食えばタダだしな、うまいところ知ってるか？」

「それなら、あそこにしましょう。安くて量も多いところを知ってますんで」

「よし、行くか」

なれなれしく肩を組んだガゼフを引きはがしもしないで、ブレインは小さくすまんなど

だけ言った。

「なあ、ブレイン。あの御前試合の後はどうしていた？ 俺には色々なことあった」

食べながら、話して聞かせる。どうにもこういうのは苦手だ。いかに鈍感なガゼフとて、ただならぬブレインの様子を見ればなにかあったことくらいは分かる。

とはいえ、簡単に聞いていい話でもないだろう。なにせ、武器の一つも持っていない。それでもエ・ランテルから王都までこれたのはさすがと言うほかないが、そもそもどこにいたのかもガゼフには知る由もない。

「……ガゼフ」

飯を腹に詰め込んで、それだけでも血色が多少がよくなってきたブレインがぼつりとつぶやいた。

「なんだ、ブレイン」

茶を飲んで、続きの言葉を待つ。

「……お前は、生きる意味が失われたことがあるか？」

もう一口、飲む。

「俺は王国戦士長……王をお守りすることが役目だ」

「ああ、聞いた」

「最悪の事態が起きたとき、どう王をお守りするかを考えたのだ。そう、一生懸命——当の王ご自身に風邪かと心配されるくらいに考えて、考えて……どうしたと思う？」

「……お前のことだ、修行して技を編み出したとかだろ？」

「そう、できればよかったのだが……いかんせん、武技の一つや二つでどうにかなる事態ではないんだ、これが」

「……それは、もしかして——」

「英雄と呼ばれようと、人間ではどうしようもないことがあるものだよな——ブレイン。互いに大変な思いをしたものだ。本当に」

二人は奇妙な共感を覚えていた。今まで生涯をかけて挑んできて積み上げた武が、砂の城だと思いきや知らされた。もつとも、それを与えた女が同一人物だなどまでは夢にも思っていないのだが。

「これがな、なあんにも思いつかん。自分という存在下どれだけ矮小か思い知ったよ。だからな、俺は決めたよ」

「……なにを」

「その時になったら全力を尽くすのみ。どうにかできるかなど知らんし、可能性を議論するなど性に合わんと忘れていた。だから、もう何も考えていない」

ガゼフはむしろ穏やかな表情で言い切ってしまった。

「……………はっ」

ブレインはそれだけを言うので精一杯だった。

「だからな、どんなに考えても無理なのだ。どうしようもないものは、どうしようもない。無理に突破法を考えることさえできないのだ。だから、考えても無駄だ」

「諦めると言うのか？　英雄と呼ばれるお前が——」

「そうかもしれん。だが、その状況になったとしても俺は剣を置く気はない。ただ、やれることをやるだけやただけだ。この身は王へ捧げた身……最善を尽くすのが俺の義務だ。そして、無理でもやれるだけやりましたなどと言いつつ訳する気はない。やらなければならんなら「やる」さ」

相変わらず方法なんて想像もできないけどな——と笑うガゼフを見て、ブレインは（ああ、この男に俺は負けたんだ）とストンと納得できた。今まではまぐれか何かだと思っていた気がする。だから、あれは間違いだったのだと自分に言い聞かせるように剣を振るい続けて。けれど、違うのだ。これがガゼフであるなら、自分ごときは勝てるわけがない。

「……あれ？」

目に熱いものを感じた。そして、それはとめどなく溢れてくる——「今は泣け。そして後で王国戦士団に入ってくれると俺は嬉しい」

ぼろぼろと涙を長し続けるブレインに、ぽんと肩を叩いて彼は店を出て行ってしまった。代金を多めに払い、彼をそっとしてしておいてやってくれと店員に言い残して。

「ああ……ああああ」

涙が止まらない。視界が歪んで、自分さえも分からなくなってくる。

「——ッ！」

よくわからない。けれど、確かに何か熱いものが心を焼いて……

「ガゼフ！ 俺と……俺と勝負しろオ！ ガゼフ・ストロノー
フウウウウウ！」

叫んだ。

「いいとも。ついてこい」

そして、この男はそれを受けるのだ。断る理由ならいくらでもある。戦士長が負けては、どころか苦戦しても侮られる結果になる。けれど、勝ったとしても何にもならないのだ。だが、そんなことは関係ない。

「お前が使うのは刀だったな、受け取れ」

そう、差し出してくる刀を。

「いや。刃を潰したやつを貸してくれ。模擬刀でもいい」

辞退した。それは殺し合いに使うものだ。そして、命の取り合いの覚悟……それも他ならぬガゼフの命を狙いに行くのは……なんというか、そう。違う気がした。そこまでの覚悟がブレインからは消え失

せてしまっていた。

「なるほど。ならば、アレフ……悪いが倉庫から訓練用のもを持ってきてくれ。二本な」

ニヤリと笑って、部下にそう命じた。

「……感謝する」

「いや、俺のことを気遣ってくれたのだろうか？ 気にするな」

ガゼフはこういう男だ。別にブレインは武器を模擬用にしてくれなどと言っていない。ただ自分が本物を使うのはどうかと思っただけ。けれど、ガゼフは当然のようにそれに付き合ってくれるのだ。

「——行くぞ」

「ああ、全てを出し切るがいい。——来い！」

そして、両者がぶつかる。

「おおおおおお！」

それは剣舞のようなものだった。二人ともが完全に剣筋を見切っていてかわし続けている。

「ガゼフ……俺は、俺は自分のことを最強だと思ってた！ それをお前が打ち砕いた！」

「俺も同じことを思っていたよ、ブレイン！ 俺の前に敵はいない。居るのは雑魚ばかり——戦いにもならんような弱者ばかりと自惚れていた！」

「だか、俺はお前に負けた。ああ、何かの間違いだと思ったよ！ だからこそ、俺はフリーで剣の腕を磨き続けた。間違いを正すためになア——」

「お前がいた！ お前が俺に弱者ばかりではないと教えてくれたからこそ、俺は人を見ることができた！ それまでは、取るに足らぬと見てさえいなかったんだ——」

「それは違った！ ああ、違ったさ——俺がうだうだやっている間、お前は国のことを考え、部下を育て……立派な人間になっていた。お前はすごい！ 俺なんかとは違う、尊敬される人間じゃあないか！」

「部下を育て——だが、俺自身はどうだ？ お前は強くなった。腕を

磨き続けて……なあ、気付いているか？ 俺が活ガントレット・オブ・ヴァイタリティ力の籠手を使っていることを！ ああ、強いなあ……お前は！」

「人は強くなれる。誰かのために戦い、誰かのために命を賭す。人間はそのために生きられることをお前が示してくれた！」

「人は強くなれる。人の身にありながらどこまでも力を磨いていけることを俺はお前に教えてもらった！」

そう、相手を傷つけるつもりなど毛頭ないのだ。相手を信じているからこそ、これくらいはかわしてくれろと信じるからこそ全力の一撃を放てる。模擬刀でもその重さと頑丈さは容易に人の命を奪える。けれど、そんなことは怖くない。

「——だから、お前が羨ましい！」

本当に怖いのは相手の期待を裏切ること。これくらいはかわしてくれろと信じてくれるから舞ってくれるのに、当たってしまった情けない。相手が失望することはないだろう。それでも、自分が自分に失望する。

「俺を導いてくれ、ガゼフ・ストロノーフ……ッ！」

「俺に力を貸してくれ、ブレイン・アングラウス……ッ！」

このぶつかり合いは儀式なのだ。例えて言うならば河原での殴り合い……全力で本音をぶつけるからこそ、無二の親友となれる。そう、今この二人は全力で友達になろうとしているのだった。

「だって、お前は強いから！」

剣がぶつかった。折れて、そばに突き刺さる。

どちらからともなく、握手をして。それを見ていた戦士団の者たちも歓迎する。感動して涙ぐむものでさえ。

「よろしく頼む、ガゼフ」

「ごちそうさ、お前の力を当てにしている。ブレイン」

ここに友情の契りがかわされた。

そして、それを滝のような涙で見る者たちがいた。誰にも気づかれずに立つ人影は6名。

「うう……ッ！ いいはなしですねえ」

もちろん、涙を流しているのはベアトリスだ。彼女は特にこういう話に弱い。

「かか。いいノリじゃねーの。思い出すぜ、お前とのケンカを。なあ、蓮」

皮肉気な笑みを浮かべているが、付き合いの長い蓮には言葉の端に隠しきれない憧憬が察せられた。

「アレはお前が一方的に突っかかって来たんだろうが。だが、理解はできる。本音をぶつけりゃ、そりゃさっぱりするさ」

「いや、一昔前の青春漫画って感じ？ 読んだことないけど、ああいうのだったら悪くないね。まあ、この世界にはないんだけど」

本城は司狼に比べたら素直だ。女であるゆえに、ちよつと共感はしづらいようだがそれでもいいものだと感じている。

「いや、あるぞ。データ化された漫画がライブラリに残っている」
「え？ それマジで、蓮君」

「マジだ」
「では、藤井君。ちよつと一週間ばかり休暇を頂いても？」

「あのね、ベアトリス姉さん。あなた一人休んでいいはずがないでしょう。どうせ、疲労、眠気無効の指輪があるのだから夜にでも読んでいればいいじゃない」

「いやいや、それだと玉のお肌が痛んじやうんですよ。螢も、女の子ならお肌の管理はきちつとやらなきゃいけませんよ」

「いや、別に劣化するわけではないからいいじゃないの」
「ちよつとそこに座りなさい、螢。女の子のたしなみというものを教えてあげます」

「おやおや、説教されてやんの」
「まあ、それはいいとして——蓮君。首都をせん滅するあの作戦のこ

とだけで」
「ああ、あれか。戒」

作戦、と言われても戒、螢、ベアトリスの三人で王都を滅ぼしてき

ますと要約できるような作戦を言われたただけだ。始めは戒一人である

気で、しかしベアトリスが首を突っ込んできた。言い出せなかった

が、蓮には初めから採用する気はなかった。

「延期だ。期限未定の延期だよ。大体、ここにプレイヤーが居たらどうするつもりだ？ 危険だし、それに——あの戦士長なら殺すことはないだろう」

「それもそうだね」

一瞬だけ殺気を放っていた戒は沈黙する。殲滅した方が危険はないと思うが、これは蓮の決定だ。逆らいはしない。

「……帰るか、俺たちの家に」

蓮は踵を返す。家が恋しくなった。もちろん、今の蓮はリアルのことなどほとんど忘れてしまつて“藤井蓮”の半ば記憶に食い潰れた状態。それでも波旬と人間の区別はつく。

あの剣舞は決して、独り相撲ではなかった。自分が信用するお前なら問題ないと言う傲慢な思想波旬ではなく、相手に信用される自分であり続けるために剣を握った彼らを滅ぼしたいとは決して思わない。

第23話 エ・ランテルの惨劇

黄金亭よりランクが低い、しかし中級と呼べる中では上位に来る食事処で一団がテーブルを占拠している。

「いやあ、ありがとうございます！」

ビールを片手にはしゃぐのはエ・ランテルに知らぬ者はいないンフィーリアだ。祖母のおまけ、と言う形だが腕の良い薬師として知られている。だが、こうも騒いでいるのは酒の力だけではないだろう。「いえいえ、おばあさんを説得したのはあなたですよ。私たちはちよつとリイジーさんと話しただけで」

恐縮しながら、しかし奢りは受けている。漆黒の剣のペテル、彼は人の好い笑みでンフィーリアを祝福している。

「そうっすね。いやあ、男らしかったですよンフィーリアさん。あやかりたいものっすね」

ルクルットも笑う。嫌味な笑みでなく、明るい笑み。嫉妬ではなく、本当に祝福して、次は自分もと意気込んでいる。

「それなら誠実であることね。二つも三つも追いかけては結局何も得られない。エンリさんを追いかけておばあさんを説得したンフィーリアさんにあつて、あなたにないものはそれね」

「そんなあ、螢さん。少しくらいいいじゃないっすか。こんだけアタックしてるんだから、ちよつとくらい、うなづいてくれても」

「それは私が許しません。で、やりましたねンフィーリアさん。人に言われるがまま、ではなく目的をもってやり遂げる。ええ、よほど男らしかったですよ。頭を下げることをいとわず、それでいて利益を示して見せて説得して見せたあなたのやり方」

「……でも、僕が勇気を出せたのは藤井さんのおかげです。エンリがいなくなってしまうかもしれないなんて、言われるまで全然気づかなかったんです。気付かないままだったら、きつと祖母に言われたままの人生を送っていた。だから、あなたのおかげです。ありがとうございます」

「礼は受け取るが、やり遂げたのはあんただよンフィーリアさん。気

付いたってなにもできない人間はいる。自信を持って。……ま、それはそれとしてこいつは楽しませてもらうがな」

そう、これはンフィーリアの祝勝会だが、協力してもらった漆黒の剣とトワイライトに対してのお礼であるのだ。祖母であり、店長でもあるリイジーにカルネ村への転居を納得してもらった記念である。支払いはンフィーリアが持つ。

酒と食事、盃を飲みかわしながら食事に舌鼓を打つ。こういう雰囲気は格別なものだ。

食べて、飲んで——満足した後にそれぞれが別れる。街の中、危険などないと愚かにも信じて。もはや護衛依頼は当の昔に終わっていた。カルネ村への転居の際に護衛をしてもらった話については、それは未来の話だ。その間に女が滑り込んだ。

「いやー、他人の幸せそうな顔を見るとさ、潰してやりたくなんない？ てめえら、どうせクズのくせにこの瞬間だけはいい気な顔をしようがってよ、つてさ」

女……黒装束の女はするりと懐に入り込んでくる。警戒などできないほどの素早さ。

「はわ？ ええと、なんなんですか。あなた——」
ンフィーリアは酔っている。さほど酒はたしなまない性質であるが、今日は別だった。酒に飲まれて、少しふらふらとしている。それでも、家に帰れないほどではない。

「私、酒に酔えないんだよねー。だってさ、酔うと反応が鈍るでしょ。教育を受けてるからどうにも身体を拒否反応を起こしちゃってさあ、他人が酔うのを見ることしかできないんだよ。それで見てると、ホントこつちのこと放って気分よくなっちゃってくれてさ。私の身にもなっつて見ろつっの」

「はあ。それはお気の毒です——ね？」

頭がふわふわとしている。さりげなく路地裏に誘導されても鈍った本能では危険を察知できない。彼女の歪んだ笑顔もよく見えない。「でも、私にも一つだけ酔える」ものがあるんだよねー。手伝って

くれない?」

「はあ?」

何の意味もない返事だ。それを予測できたわけでもなく、その言葉を聞いて何かピンク色の期待をしたわけでもない。よくわからない、何かを推測できるほど頭が働いていない。はあだ。

「はい。いいお返事いただきましたー」

女は笑みをきゆう、と釣り上げて。顔をぶん殴った。

「あが——ぐっ! えっ? な——は!」

灼熱の痛み、意味が全く分からない。

「酔いがさめた? ふっふー、いい気味。いいリアクションしてくれるね。次はもっと痛いのいつてみようか」

どす、と腹に拳をうずめた。

「つかは——ぐ!」

息ができないほどの痛みを襲われて、声も出せずにあえぐ。

「にやふふ。いいね、君。いいよ——やっぱり手も足も出せない相手をいたぶるのつて、サイ……ツコウ……!」

この期に及んでやっと危険を理解したンフィーリアは路地裏から出て助けを呼ぼうとして。

「あれあれー。こんな美人を差し置いてどこに行こうつてのさ、ンフィーリアちゃん。こつちでいいことしようぜー」

「……え?」

名前、なぜ?

「これからンフィーリアちゃんは自我を失っちゃうからさー。せめて思い出にとつてもいいことをしてあげたいなつて。だいじょうぶー天井のしみを数えてる間に終わるよー。あ、ここ天井ないんだつた」
悲鳴を上げようとして、苦痛が口を開かせない。

数時間後、日が落ちて完全に深夜となった時期に鐘が鳴り響く。漆黒の剣とトワイライトは孫が返つてこないとリイジーに相談を受けている最中だつた。

「まさか、これは敵襲……じゃと?」

リイジーは呻く。孫がいなくなったこの時期に——と最悪を思つて。しかし、実のところそれは最悪ではなかった。

「ンフィーリアさん、関係あるかもね」

「それは、どういうことです。螢さん」

「だって、彼のタレントはマジックアイテムの使用制限無視……普通に帝国の騎士の電撃作戦や魔物の突発的襲来だったらそうでもないけれど——もし違うならば彼の特異な力を利用した可能性が高いと思う」

「そうだな。まずは状況の確認か」

とはいえ、蓮には見当がついていた。他国の兵士、魔物の襲来だったら連絡が来ている。そして、ンフィーリアの他に特異な力を持つ人間なんてものはエ・ランテルにない。情報統制のレベルが甘いこの町では、人の口に戸を立てることなどできやしない。

〈藤井君、潰してこようか？〉

連にだけ聞こえる声で囁かれる。本城の声——誰にも知られることなくエ・ランテルに潜み続ける彼女の声。首を横に振ってこたえる。

「今の状況だと既に後手か。漆黒の剣はリイジーさんを避難所に送り届けてほしい。そのあとは状況を見て避難所の守りに着くか、冒険者組合の方に行つてほしい」

「藤井さんは……？」

「俺たちは門の方に行く。魔物なら殲滅する。これが国同士の問題なら、関わり合いになることじゃない。お前たちと合流してンフィーリアさんを探すさ」

「わかりました。ご無事で！」

漆黒の剣もトワイライトの実力は分かっている。そして、リイジーをここで一人にできないことも。不安に駆られる老人を一人残すなど人としてどうかだし、火事場泥棒の問題もある。ならば、ここでそちらを担当するのは自分たちだと。

「行くぞ、螢、ベアトリス、司狼。何かあったのなら、名を高めることにも繋がるかもしれん」

そして走り出した彼らは騒ぎの場所、墓地へとつながる門に到着した。そもそも死者がアンデッドになるこの世界では、墓地は街に併設されるように門の向こう側に作られる。今にも決壊しそうな圧力が向こう側から放たれている。死者の暴走、管理されているはずの死者が一気にアンデッドとなつて街を襲つたのだ。

「なるほど。これなら、名を高めることにつながるか。さつさとプレート位の位を上げたいからな。まずは門の近くのアンデッドを一掃する」

お前ら、カッパーが何の用だ危ない真似すんなどの声を無視して走り、跳んで門を越える。

「司狼、アンデッドには斬撃が利きにくい！ 螢、ベアトリス。俺たちがアンデッドをまとめたところを焼き払え！」

命令、だが本当に言いたかったことは裏の方だ。つまり、持った軍刀で戦えと言うこと。そして、そのレベルを他の二人にも要求している。第三位階以下でやれ、ということだ。さらには隠密の二人は手を出すなという含意まで。

「了解、頼りにしてるわ藤井君」

「あとのことは私たちに任せてください！」

そして、数分でその作業が完了する。

「な、なんという実力なのだ。まさか、君たちのようなカッパーが実在するとは——なア!? なんだ、あれは」

蠢く人体で形作られた巨人。ネクロスウオームジャイアント。

「司狼、俺は左腕をやる」

「オツケー、俺は右腕な」

言うが否や、そのふとつた男の腹ほどもある腕が落ちる。そして、二人の魔法詠唱者によるファイヤーボールが焼き消した。

「……俺は、伝説を見ているのかもしれない……！」

衛兵の彼らを見る瞳はもはや英雄を見るようなものになつていった。

「あんたはここで門を守っていてくれ。螢、お前もだ」

「…………え？」

「ベアトリスは反対側の門を頼む」

「ちよつと待ってください、それだと藤井君の方が危険です」

「いや、危険なのはお前たちの方だ」

唇だけを動かす。読唇術なら、トワイライトのメンバーは誰でも使える。……使えないのは玲愛くらいだ。

「敵の本拠地に行くのはあなたたちの方でしょう」

「あくまでこいつらの強さはこの世界基準だ。ボスが待っていても、俺たちならば危険はない。だから、ここで事態を利用するものを釣り上げる」

「三手に分かれて誘うの？」

「そうだ、戒は蜚に、本城はベアトリスについてくれ。危険を感じたならば、かまわん——後ろから仕留めてしまえ」

「了解した」

「了解よん」

「……では、オペレーション・ベアトラップを発動する」

「ヤヴオール」

連と司狼は墓場の奥に進んでいった。

目障りなアンデッド、門での一幕と違い物語的なシーンを演出する必要性が薄い以上は一々潰して行く必要はない。適度に踏み潰して進み、元凶とも対面する。

「ほう……たかがカッパーがここにたどり着くか」

「へえ……イキのよさそうな男じゃーん。いい悲鳴、聞かせてねー」

骸骨のような老人、そして狂気の笑みを浮かべたマントの女が手招きしていた。

第24話 現代チート

「ねー、こじやあまり派手にもできないしきー。向こうでやんない？ 私、包容力の強い男の人が好きー。なんちゃって、あは——」

女が濡れた笑顔で誘う。マントを羽織っているが、体のラインはむき出しで女という自己主張を隠さない。顔は隠れて見えないが、それだけ見ても女としての魅力は十二分。まったく劣情を催さなかったンフィーリアはさすがと言えよう。

「いいだろう、ついてこい」

蓮は背を向けて歩き出す。

「へえ——私のこと、なめてる？ 後悔させてあげちゃう」

彼女はためらいもなく従った相手に侮られたと憤る。殺意を込めた目で睨みつけ、ベロリとステイレットを舐め上げながらついていく。

「んじや、俺らは俺らで始めようか。あのおっぱいでけー姉ちゃんはいいつが連れてっちまったしさ」

残されたのは司狼と元凶らしき老人、そして彼の弟子たち。実はこの老人は老けて見えるが40に届いていなかったりする。

「ふん——カッパーにあるまじき不遜な態度。いや、身の程知らずには似つかわしい態度であるかもしれないな。どうやって墓地を抜けてきた？ カッパーごときに突破できるはずがない」

「いやあ、普通にかっこしたただけだぜ。見栄とかにはこだわらないタイプ你若者なんだ」

老けて見える彼とは対極に、若々しい姿を保つ司狼は設定上8000の時を超えて生きていたりするのだが。

「はん、最近の若者は怖いもの知らずじやの。儂の若いころは恐ろしいものには近寄らんことが身のためだとわきまえておったものじやが」

「昔語りとかやめてくれよ、寝ちまうだろ。そんな与太話にや興味

ねーよ。そういうのはキャバクラの嬢ちゃんに金払ってやってくれ」
「……まったく、どこまで愚かしいのか。多勢に無勢と言う言葉すら知らんカブキ者め。まさか、一対一でやってもらえらると思つたわけでもなからうな」

「えー。ほら、ハンデくれよ。せつかくここまでたどり着いたんだしさ」

司狼はニヤニヤと笑っている。彼のそんな姿はカジツトの目には世の中を舐めた若者とししか映らない。

「馬鹿め。そんな与太話は地獄でするがいい。……やれ」

許しを得た弟子たちが杖をかがける。魔法、いかに早い戦士とて5歩分の距離はそうそう稼げない。詠唱中に間に合つたとして、倒せるのは一人か二人。敵の数は10……放射状に並ばれてはどうしようもない。

「……で？」

轟音、一つ。気付けば弟子のひとりの頭が破裂していた。

「な、なんじゃとオ——ッ！」

魔法。マジックアイテム。見たことがない上に強力すぎる。ひるませるくらいならともかく——いや、カッパードぞ？ たとえ一発だろうが、人を気絶させるレベルのアイテムですらありえない。

「おいおい、爺さんよ。まさか、” 相手が知らないマジックアイテムを使わないと思つたわけでもなからうな”？」

「き……貴様」

つまりは完全に皮肉だ。さつき言つた言葉をそのまま返された。

「ええい、やれ！ やるのだ——如何にマジックアイテムとて二発目を放つには時間がかかる！ その間に——」

轟音。

「時間がなんだって？」

司狼は煙が立ち上るマジックアイテムを掲げ、タバコを吸っていた。

「連続でやれはせん！ 今のうちに」

連続音。 5発。

「連続で……なんだって？」

「ひ……ヒューーマジックアロー」

やっとのことで一人が発動に成功する。

「は。ノロいんだよビビリども！」

突っ込んだ。

「お、お前らもやれ——」

指示され、生き残りの三人もマジックアローを放つ。

「ハッハ——！」

飛び込み前転の要領でかわす。前から来るものはしやがんでしまえば当たらない。そして魔法の追尾機能は折り返すころにははるか先だ。

「追尾くらいじゃ俺にや当たんねえんだよ！」

そのまま走って、一番初めにマジックアローを放った奴に蹴りをかます。

「がはー うぐぐ——」

弟子たちは戦闘は不得手だ。そもそも老人自身が気狂いではあるものの研究者の類で、周りは助手だ。そうそう戦いの術を学ぼうとは思わないし、魔法が使えたから困ったことがなかった。

「え？ ひ——や、やめてくれえ！ その、魔法を止め……」

蹴られ、胸ぐらをつかまれた彼は思い出した。そう、止めようにも自分でさえ己の放ったマジックアローを止める術は知らない。今、向かっているマジックアローの術者たちも、それは同じ——

「うお……ファグフ！ よけ……」

名前を呼んでも、かわせるわけがない。4人分のマジックアローは、冒険者でもない男を血と肉の前衛芸術に変えるのに十分だった。

「そんな——」

如何に非道を旨とするスーラーノーンであつても、仲間殺し、しかも恨んでいるのでもなく先ほどまで隣にいた仲間を殺してしまったとなれば放心する。

「お、おい。俺は止めたぞー！」

などと、全くもって速さの減衰すらしていなかったのに「俺がやつ

たんじやない”と言い出す者まで。

「ふぎけんな、あいつをやったのはお前のマジックアローだろ!」

「なんだとオ——」

つかみ合いになり。

「はい、お休みさん。見苦しい言い訳は閻魔様の前でやってくれや」

銃弾の前に、責任を押し付け合っていた三人は仲良く屍となった。

「さて、残りは爺さん一人だ。投降するかい？」

「ふ。ふふふ——なるほど、アンデッドの群れを突破してきたのは伊達ではない。だが、このスーラーノンの十二高弟が一人、カジット・バタンテールの名も伊達ではないと見せてやろう。ぬおおおおおお！」

目の色が変わる。目の前の敵がカッパーだとかとは次元の違うと理解した。だが、この身とて、そのレベルで語れはしないと自負している。掲げた漆黒の玉から漏れ出す悪意の波動が地下の神殿を染め上げる。

「ほーん、スーラーノンねえ……」

のほほんとしている司狼をよそに骨が組みあがる。人間のものではない。体長は数倍、そして鋭い爪と牙を備えたそれは。

「見るがいい、マジックキャスターでは決して打倒できない大いなるアンデッドの姿を！ 出でよ『スケリトル・ドラゴン』」

ふむ、と司狼は考える。いや、これ物理武器だから魔法無効じゃ意味ねえんだけどな——と。

「怖いかな？ 怯えて声も出ぬか。零落した姿とてドラゴン、人間になうはずもない！ やるのだ、あの小賢しいわっぱを八つ裂きにしろ」

カジットは司狼の持つ銃を魔法武器だと完全に勘違いしていた。

「はは。とりあえず、やってみますか——うお！」

振り下ろされた爪の衝撃に驚く、ように見せるが単におどけているだけだ。何十回やったところで喰らわれない。何発か、撃った。

「グルオオオオ！」

ダメージは受けた。微小に、ではあるが——

「ば、馬鹿な。スケリトル・ドラゴンには魔法の絶対耐性があるはず！」

「悪いね、お爺ちゃん。これ、実は刺突属性なんだわ」

「し、刺突……？ ふは。ふはははは！ 驚かせおって、刺突属性ではアンデッドには有効なダメージは与えられぬ。そして、さらなる絶望を知れ『レイ・オブ・ネガティブエナジー』、『アンデッド・フレイム』、『マインド・オブ・アンデス』、『リーンフォース・アーマー』。さらにもう一体のスケリトル・ドラゴンだ！」

「あつそ——」

その二体の威容を前に司狼はひるみもしない。というより、強化したところでレベルは14。司狼には怯える要素など何も無い。ガンナーのバレットにしても、無限に使える何の効果もない弾丸があれだ。

「貴様を殺し、エ・ランテルの住民を皆殺しにすれば使った負のエネルギーも少しは回収できるだろうよ！ さあ、死ぬがいいクラス詐欺の冒険者よ！」

余裕で返す。

「じゃ、見せてやんよ。俺の力を」

そして、もう片方のクレマンティーヌはというと。

（おいおい、どういうことだよ。このクレマンティーヌ様が全然隙を見つけられねえ、油断したところをぶすりと刺してやろうと思つたのに）

「……ここでもいいか」

向き直る。

「うん、いいんじゃないかな。お前の死に場所なんて、どこでもさー」

一瞬で人類の持ち得る最高速度まで加速する。英雄の実力を持つ狂った殺人鬼、それがクレマンティーヌなのだから。彼女が人体の急所を誤ることなどありえない。吸い込まれるように向かった剣先は。

「……ッ！」

抜いた刀に叩き落される。。

(「こいつ、速い——」)

交差した瞬間、即座に離れる。両者ともにスピードタイプで、一撃による必殺を狙うのが得意なもの同士。決着がつくとしてたら一瞬。

「……武技、か」

「アハ——どこまで強化してんのか知らないけど、このクレマンティーン様についていけるとは思わないことだ……ね！」

加速。二合、三合。本来なら合わさるはずのない剣劇が交差する。

(コイツ、生意気——私を薙ぎ払うように狙って。確かにカジっちゃんには味方じゃない。負傷するわけには行かない以上、万一にでも相打ちを貰うわけには行かない)

だが、攻略する方法はないわけではない。狂った笑みをさらに深める。そう、実力の高い冒険者を屠るのは麻薬にも似た快感。趣味の拷問とは訳の違う、脳内麻薬がドバドバ出る悦楽。それを想像すると楽しくてたまらない。

「うふふ——面白くなってきたあ。どんな殺し方がいい？ 刺殺、絞殺、失血死……考えただけで塗れちゃうわあ」

悦楽の炎を瞳にくゆらせ、発情したように舌をちろちろとのぞかせる。

「さて、では轢死で行こうか」

「……あん？」

「そのプレート。ハンティングトロフィーと言うやつか。程度が知れるな。たかが10や100を殺したことを誇るか、ただの殺人鬼」

クレマンティーンのマントはすでに落ちている。高速戦闘には邪魔でしかないのだ。

「あんたのプレートも一緒に飾ったげる。ううん、それだけじゃ足りないね。食べちゃおっかな、お肉」

情人なら発狂するレベルの狂気を受けて、蓮はそよ風でも受けるようま冷めた視線を送る。

「狂気が薄い。愛が足りない。愛を求めるならば狂うしかなかった狂獣と比べては、お前はずいぶんと人間らしいよ」

男でも女でもない彼に比べては、そう「まとも」にすぎない。

「……なんだと、テメエ」

轟音、聞きなれぬ爆音が響く。

「もとは軍用バイクだ。だが、持ち主がこれで殺し続けたせいで別の“モノ”に変わっていてな」

出現したのは異形の馬。鉄と鋼でできた車輪を組み合わせた悪魔。

「……なんだ？ おまえ、それはどういうものだ？」

まったくもって見たことがない。車輪を啜えた鋼の馬にも見えるそれ。そして、それは例えようもないほどおぞましく、呪わしい。

「ハンティングトロフィーなど、集めていては世界が終わる。それほどに殺しに秀でたアレにはフロースウィニトルの名が与えられた。狼が喰らった人間、その数は」

それは視覚化して見えるほどの怨念が渦巻いている。そう、別のモノになったとは比喻でも何でもない——あんなものがマジックアイテムでさえあるものか。

「——18万だ」

鋼鉄の馬が、吠えた。

「……つうおとおおお!!」

突っ込んでくる。馬とはケタ違いに早いそれが。

「ぎ、けんな——ッ！」

武技を重ねが決してさらに加速。その直線状から逃れる。

（あんだけ速いならろくに制御は効かないはず。もう、さっさと逃げちまえば——）

轟音、後ろから。

「——つばー！」

（馬鹿な！ 早すぎる！）

飛びのいて、かわす。見ている先で、あれは“跳んだ”。

（は、墓石を蹴り砕いて方向転換してんのかよ！）

「ち、ちくしょ——」

腕を引きちぎれそうなほどに酷使して、飛ぶ。筋力で無理やり跳び箱の要領で墓石の上を飛び越えた。

「……はん」

蓮が嘲笑した、ように見えた。

「う、うわ——」

轟音、轟音。鋼の馬もまた飛び、クレマンティーンを轢こうとして。
(轢死、私の知らない殺害法。……こいつか！)

そんなのは御免だった。目的も果たせず、こんなところで朽ち果てるなんて——

(絶対に……そんなことは認めない！ ねえ、神様。祝福なんていない。後で殺してやるから力をよこせエ——)

ブチブチ、と筋肉が千切れる音が聞こえてくる。それでも足りないから。

「動けつつってんだよオ——！」

そんなものは気合いでどうにかした。跳び箱の上で方向転換。腕を壊すつもりで己を射出する。

「ぜえ、はあ——そんなもんかよ！ それじゃあ、このクレマンティーン様は殺れねえ！ 終わってたまるかよ！」

口汚く、罵った。

「つぐ、ふう——。来いよ、鋼の馬使い。＂それ＂で18万人殺したつうんなら、その記録は私で終わりなんだよ。殺してやるから向かって来いよ。ああ、テメエなんざ怖くねえ。本当に怖いのは……」

無理やり動かした腕は内出血で紫色にはれ上がっている。こんなところで至近距離のバイクの突進を受け続けたものだから、飛ばされた小石にあたって体はもうボロボロだ。いたるところで出血していて、無事なところを探すが難しい。寝ていたら死体と間違われるだろう。もしかしたらアンデッドに見間違られ討伐されるかもしれない。

(怖いのは目的も果たせず、何の意味もなく散ることだけ)

瞳に力を失いはしない。諦めることなどありえない。

「勝負しようかア！」

満身創痍の体で吠えた。

「いいだろう」

轟音、一つ。まっすぐに向かってくる。

(速い。私よりも速い。今までの私より。だから)

「一瞬、一瞬だけ超えてやる。そうすれば」

(速いモノがぶつかったら両方がダメージを受ける。それは、遅い方でも。豆腐を頭にぶつけて殺すには、豆腐の方に高速で頭をぶつけてやればいい。今回はミスリル製のステイレット——たとえばドラゴンの頭蓋骨だろうが貫くに決まってる)

『疾風走破』そして、さらに先の境地——」

開眼する。死の瞬間、走馬燈が見せる間隙のさらにその隙間に“それ”を見る。

「見えた！ 明鏡止水の一滴。絶技開眼……窮極武技『人理超越』！」

世界がコマ送りになる。走馬燈よりもさらに早く、そして己だけがその時間の中を動く——

「殺った！」

ステイレットは狙い変わらず蓮の頭に向き、そして蓮は自身の速度で串刺しになる。

(ぶつかってただで済まないのは豆腐も同じ。でもな、んなこと知ったことか——！)

そして、止まった。

「え？ ……………なにそれ？」

無事では済まないはずの両者が冗談のように無傷だった。

「悪いが、お前の攻撃は無効化されるんだ。レベルが低すぎてな」

「……………あはは。なにそれ、ジョーダン。うける」

「現実を理解することを拒んだか。まあ、いい。お前には、コイツの本当の姿を見せてやる」

奇しくもそれは同時。司狼が“それ”を出すのと同じ時だった。

「形成——『一暴嵐纏う破壊獣〈リンググヴィイ・ヴァナルガンド〉』」

空気が引き裂かれた。あまりの速さのために空気は潰され、真空状態が発生したのだ。空気そのものは水に手刀を入れてもなんともないように、また元に戻る。けれど、水に振り回される人間はたまったものでではない。

「くは。轆き潰してやんよ」

体当たり。ただそれだけでスケリトル・ドラゴンは骨へと帰る。呆然とした一瞬、いやクレマンティーヌではないカジットにはいくら集中したところで見えはしない。腕と足を撃ち抜かれて転がる。

「終われ」

ただ翻弄され、抵抗を諦めた二人が見たのは——轟音を上げて回転する車輪だった。

第25話 ミスリル昇進

エ・ランテルを襲う襲撃の中、漆黒の剣はレイジーを避難所へと送り届けた。だが――

「おい、なんてこったよ」

「まさか、こんな奴が――」

コツ、コツと蹄の音が聞こえる。……スケルトン・ライダー、強敵だ。『クラルグラ』のような強力な冒険者チームならともかく、彼らにはきつい相手と言える。いや、真っ先に逃げ出すべきだ。

「だが、逃げるわけにはいかないのであるな」

「そうですね、ダイン。アレがここに現れたのは偶然ではないでしょう。アンデッドは生命を憎む、避難所の人々を狙ってここに現れたはず」

「きつと、金級や銀級の皆さんは門で戦って湧き出るアンデッドたちをせき止めてくれているのでしようが」

「こいつは速いから取り逃がしたってわけだな？ ペテル」

「おそらくは」

馬の機動力、そして皮鎧くらい楽に貫いてしまう槍。実物は口ばかりの大きさに、骸骨がまたがって木の棒にボロボロの刃をくくりつけただけの簡素な槍にすぎないが――彼らの命を絶つには十分。遠目に見れば怖くなくとも、目の前に居ればその圧迫感は全てを捨て去って逃げるに余りある脅威である。

「いいですか、皆。ここで倒します」

ペテルはここでこの大敵を倒すことを決意する。

「当然である」

「おうよ」

「ええ、やりましょう」

三人、快く応える。彼らはまだ駆け出しに毛の生えたレベルだ。逃げ出しても、同じ冒険者なら非難することはないだろう。時間を稼いで死ねなんて言っても、それに意味があるかもわからない。人々の盾

になったところで、助けが来なくてそのまま全員あの世行きも十分に得るのだ。

「ダイン、馬を！」

「了解である。『トワイン・プラント／植物の絡みつき』」

「……これで馬を倒したらこちらのものだぜ！」

だが、ルクルットがフラグを立てた。いや、初めから低位階の魔法など、それほど大きな効果を期待するようなものでもない——

「……」

ニタリ、と骸骨が笑った気がして。絡みついた植物から足が引き抜かれる。それこそ、走っている最中に当てなければ倒せもしない。しか、それには問題がある。

（先の魔法は走っている相手には当てられないのである……！）

「いや、効きはするんだ！ ルクルット、死ぬ気で足止めするぞ！」

「ニヤ、後ろで詠唱を！」

「お、おう！ 行くぜ、ペテル」

前が出る。

「……オオオオ」

膿んだ憎しみのような這いずる声。悪寒が背中を駆け巡るが、そんなことにひるみはしない。勇気を持つ彼らは逃げない。

「イチ、ニー——『要塞』！」

ペテルが槍を武器で受け止める。タイミングを合わさなければ碌に使えない、ガゼフはあれで人類の究極クラスだから早々呼吸するように武技など使えはしない。

「グオ……」

こしゃくな、とそいつが顔を歪めて。だが、馬の蹄の振り下ろしには対応できない。先の武技にペテルは全神経を費やしてしまった。

「わき腹がから空きだぜ！」

どす、と弓矢が刺さった。大きなダメージではない。が——

「もう一度である！」

また足を縛られる。効果など、ないと学習しないのかとそいつは憤る。

「グオオオオオ！」

吠えた。

「ビビリなんか、するもんか！ 行くぞ『斬撃』」

つい目を話したペテルの武技。わき腹の骨が砕けた。肉のない体から砕けた骨の欠片が飛び散って。

「あ……」

粗末な槍がペテルの肩を貫いていた。アンデッドには痛みなどない。ここまで近づいてきた獲物を貫くのは容易だった。

「……ペテル！」

「ニニヤ、動くんじゃねえ。魔法を！」

ルクルツトが叫ぶ。そして、弓矢を捨てて突撃する。

「俺だってやってるさ！ うおおお」

「ならば、ともに行くのである」

そのアンデッドは馬鹿な獲物どもが向こうから来たとほくそえんで。

「やらせると——思うなよ！」

槍を引き抜けない。ペテルが抑えていた。

「グオオオオ！」

いらだちに馬が足を踏み鳴らす。

「どりやあああ！」

「ぬうううん！」

二人が全力の一撃を叩き込んだ。

「ブルルルル……ルル」

狙ったのは馬。機動力を殺さなくてはニニヤの魔法を当てられない。

「終わりだ、スケルトン・ライダー」

バランスを崩した瞬間、ペテルは槍を引き抜いて無事なほうの腕を使って組み付く。さすがに肉がないだけあって瞬間的な力はない、押さえつけられる。

「やるんだ、ニニヤ！ 私ごと撃てえ！」

「そ、そんな。ペテル、あなたを撃つなんてこと僕にはできない！」

「力を込めるにも限界がある。その前に！」

「でも——」

ばたばたと暴れるスケルトン・ライダー。砕いたはずの馬の足が戻ってきていた。

「ここでやらかなきやコイツを倒すことはできない！ やるんだ、二

ニヤ！ ……頼む」

「……ッ！ わかりました。死なないでくださいね、第三階位魔法——」

第三階位、それは人類にとつてのトップレベル。二ニヤは使える、とは言つても本当に発動させることはできると言うレベルだった。それこそ呪文を唱えている間は目をつむって無防備にしていたし、真ん前に飛ばすことしかできない。相手が少しでも動けば外れる、そんな冒険で使おうと思う方が間違っているレベル。

「皆が稼いだ時間、ペテルの働き……無駄にしてたまるもんか。行けえ『ファイヤーボール』」

けれど、仲間がいれば別。仲間を信じ、詠唱だけに神経を集中して、そして今や敵は止まっている。弱点たる火属性の第三位階がアンデッドを滅ぼした。

「ぐ……うー」

ペテルが倒れこむ。アンデッドほどではないとはいえ、人にとつて火なんて耐性を持っているものではない。巻き込まれて重度のやけどを負っている。質のいいポジションがなければ、後遺症はペテルから冒険を奪うだろう。そして、少なくとも今は自分で動ける状況になり——

「……え？」

軽い蹄の音。さつき聞いた、この音は。

「嘘だろ、一二つ……？」

絶望が鎌首をもたげた。二体のスケルトン・ライダーがここに生者を刈るため姿を現した。

「……門の方の冒険者の奴ら、何をやっているんだ」

そう、ルクルットがこぼす。

とはいえ、言い訳させてもらえば門を守る者にとってはスケルトン・ライダーと最弱のワイトなんて区別できないのだ。もちろん姿は見分けられるが、強さについては最弱と弱さに差がつけられない。とりあえず一体か二体くらいならフライパンでも投げてれば何とかなるだろうと思つて、かなり見逃していたのだった。……特に妹の方は。

そして、その後ろで四苦八苦して冒険者の者たちは機動力が高いア宁德ッドを完全に抑え込むことができない。後ろで見ている分には強力な力でア宁德ッドを粉碎出来てはいても、殲滅までは行かない。魔法で戦っているのだ、手数が絶望的に足りない中で自ら死地に踏み込んで敵を減らしてくれる。文句など言えない。

「寝てるわけにもいかないようです」

ペテルが起き上がる。足がふらついている。……一歩でも動けばそのまま倒れこみそうな有様で。

「ニニヤ、あなたは邪魔です。あの二体が相手ではあなたは役立たずです」

冷たい言葉を絞り出した。肩の負傷ではない、別の痛みで顔を歪めて。

「……え？ そんな、ペテル。何言つてー」

「だから、役立たずだから消えてくださいと言いました。とつとと冒険者組合の方にも行つてください。あれの相手は私たちがします」
絶句するニニヤの肩にルクルツトの手がおかれる。

「まー、確かに？ いても仕方ねーしなー。ほら、お子様はとつととあつち行つちまえ」

ぐい、と組合の方角に押し出した。

「そんな、あなたまで。なにを、ルクルツト……」

「ニニヤ、彼らの想いを汲んでほしいのである。それに、ニニヤが冒険者組合に行つて応援を呼んでくれれば助かるかもしれないのである」

「……ダイン」

ありえない。そんなことはニニヤにもわかつていた。あの強さのスケルトン・ライダーが二体……盾役が足りない。そして、唯一の盾

役は歩くことすら。これでは未来は分かりきっている、けれど精神力を使い切つてふらふらなニニヤは魔法の一つさえ撃つのは難しい。

「行け、ニニヤー！ ここにお前の居場所はない！」

ペテルの声が震えているのが分かってしまう。だから、ニニヤは涙をぬぐつて走り出す。

「あー。ペテルがキツイこと言っちゃまったけど大丈夫かな、ニニヤ」

「はは、後で謝れたら……なんて贅沢ですかね」

「いや、贅沢などであるはずがないのである。きつと、ニニヤも分かってくれたであろう」

そして、一人が欠けた漆黒の剣はその絶望に顔を向ける。そいつらは生者の浅知恵を嗤うようにカタカタと頬のなくなつたあごを揺らしていた。

「お前らなんて、トワイライトが何とかしてくれるんです——そして、私たちがいる限りここから先を通してもらえらと思わないでください」

ボロボロの足で一步を踏み出した。

「グオオオオオ！」

スケルトン・ライダーの馬が一步を踏み出す。人間の機動力をはるかに超えた騎兵の前にペテルたちは何の反応もできず、しかし彼らは砂と消えた。

「……は？」

拍子抜け。そして安ど感で足が崩れた。

「はは——」

「と、あぶねえぜ。ペテル。怪我してんだからさ」

倒れるペテルをルクルットがキャッチする。

「あー、これが女の子だったらなあ」

「ニニヤの方がよかつたですか？ ルクルット」

「いや、あいつのことは今更女の子にやあ見えねえな。頼れる仲間だからな、あいつ」

「ええ、頼れる仲間でした」

「過去形じゃねえだろ。トワイライトが何とかしてくれたんだ、謝っ

て元通りさ」

「その通りである。まったくあの方々には頭が上がらないのである」
彼らはトワイライトが事態を解決したと、知っているのではなく確信しているのだった。あの人たちが向かったのだから解決するはず。そしてアンデッドを消したのは彼らだと、無邪気に信じている。

「あ、光が……」

「夜明けである。なんと、感無量であるな」

「やっべ、これ俺モテモテじゃね？」

「それはない（のである）」

光が夜を駆逐する。朝が来た。アンデッドの時間は終わり、人の時間へ。笑い合い、これは宴会だな、と未来に希望を溢れさせて。

トワイライトが事態を収めた、それはその通りだった。

「あー、やっぱデジャヴるなこれ。壊しちまったけど、やっぱトラップとかあつたんだろーな」などと言いながら司狼は壊したアンクレットを眺める。ンフィーリアに付けられた、第7位階を発動可能にするアイテムであり、エ・ランテルを地獄に変えた元凶。それはクレマンティーヌが法国から盗み出した秘宝だった。

実のところ、トラップと言えば装着者の精神崩壊という一つだけだった。司狼にそれが分かっていたかと言うと、それは違う。予知の類ではないのだ。常に“あれ、これ見たことがあるな”とか“やったことがあるな”とか思ってしまうだけで役に立つものではない。事前に何かを知れるわけではないのだ。

だから、ここで司狼が秘宝を第9階位魔法に相当する魔弾で効果無効化しつつ壊したのは、“水銀”のやり口を知っているからだ。アレが相手ならば取った瞬間に超位魔法での爆破、もしくは人質を触媒に使った召喚魔法——それよりもっとエゲツない手を使ってくる。と確信しているからこそ、慎重策を取った。

のちにペテルは見慣れぬ赤いポーションによってやけどを回復してもらい、漆黒の剣はスケルトン・ライダー三体分の報酬を受け取ることになった。そして、トワイライトはズーラーノーンの侵攻から

エ・ランテルを守った功績でミスリル級へと上がったのであった。

「皆、お疲れ様だった」

黄昏の彼らは本拠地で王国の料理と酒を並べていた。ずいぶんとみずばらしいと言えるものだったが、豪華さは彼らにとってあまり好むものでもなかった。

「あは、大活躍だったみたいね蓮君。ライブで見たかったわ
ルサルカが真つ先にしなだれかかる。」

「そうだね、大活躍。でも、私は武技とか言うの調べてきたよ……ほめて」

対抗して玲愛も。

「ほら、前が開いていますよ。どーんと行くべきです、螢」

「いや、前とか意味わかんないから」

螢はその戦いには参加しないようだが。

「楽しそうね、良かったわ」

さらつと娘に手柄を横取りされたリザはうふふと笑っている。

「そこです、テレジア。胸を押し付けるのです。ああ、いや——そんなもの……ありませんでしたっけ」

壁に埋められたトリファも楽しそうにしている。

「うん……この世界の調理レベルは低いみたいだね」

ちよつと離れて料理人みたいな顔で評論しているのは戒だ。標的を螢から変えたベアトリスに酒を飲まされ始めた。

「あつはつは。モテモテね、蓮君」

本城がニヤニヤと女に囲まれる蓮をからかい。

「やっぱ女っていいもんだよな。俺はたたねえけど」

司狼は本城のケツをなでている。

「……」

そして、マキナは黙々と料理と酒を交互に口に運ぶ。彼らの宴は夜まで続いた。

帝国、某所。

「ふふ、ふふふふふふふふふふ——」

一つの指輪をまるで神器のようにあがめ、片膝をついている男がいる。この男こそ、急速に闇社会に蜘蛛の巣を広げ、有形無形の影響力を及ぼす闇の住人の中でも一等深い闇に潜む男。

10年を準備に費やし、広げたアギトでもって闇すら喰らったと称されるその男こそロート・シュピーネ……藤井連の配下であった。

「ああ、あなたたちはそれでいい。土台、私に女としての歓待などできるはずがないし、戦いの領域では真の魔人などと言えはしない」

シュピーネは仲間を信用していない。特にトリファなどはいつ牙をむかれてもおかしくないと思っているし、別の者にされたとしても驚かない。宴会にしても、蓮から直接誘われたが行かなかったのだ。忘れられたわけではない。

「私は、あなたたちとは根本からして違う」

蓮からの信頼は厚いとは言えない。というか、マイナスだった。敵対し、幼馴染を脅迫の材料に使ったのだからそれも当然。どのルートをとたどろうが彼は藤井連に殺されている。とどめを刺したのは別人だが、似たようなことだろう。だが、彼本人に言わせてもらえば蓮に牙をむいたのはトリファの罠で、水銀の策略だった。

「が、彼こそ真に使えるべき方だと私は悟った。ええ、彼が仕えるべき方と言うのは同意見です、その理由が合致することはないでしょうが」

黄金や水銀は化け物すぎた。シュピーネは常に恐れていたのだ、何をするつもりだこの化け物どもめと。だが、蓮は違う。あれらに比べれば理解できる範疇で、今は輪をかけて「親しみやすい」。

「だが、私は彼からこの指輪を頂いた。この物理無効Ⅲ、魔法無効Ⅲの効果が付いたこの指輪。そう、彼からの祝福“時の鎧”を纏うことを許されたのだ。聖餐杯よ、あなたも手にしていないそれを！」

トリファが持っているのは別のスキルだ。もちろん、そこまで蓮は考えていなかったのだが——低レベルでも使える装備で、そういう効果というのは多くない。低レベルがつけられるのは低レベルな装備なのだ。そんなことまで考えていなくても、蓮が苦勞して探し出した

というのは本当のことだった。

「彼の隣にはあなた方がいればいい。盾には最適でしょう。ですが、彼が最も信頼するのは。信頼するようになるのは……ふふ。はは——」

信頼がマイナス？ そんなものは積み上げてプラスに変えればいい。彼こそ第二次世界大戦の戦後にて大犯罪者でありながら表も裏も支配するに至った“経済の魔人”であるのだから。人間関係などお手の物だ。なにせ、今までとは違い“化け物相手”ではない。

「最後に勝つのは、この私。ロート・シュピーネなのだア——はははははは——」

笑い声が響いた。

第26話 カルネ村襲撃

エンリはンファイリアと結婚していた。電撃婚にもほどがあるが、カルネ村に明るいニュースをもたらすためには必要なことだった。その結婚にしても墓前で誓いを立てるだけの簡素なものだったが、村人は祝ってくれた。

そもそも村娘にとつて恋愛婚などと言われても訳が分からないのだ。その感想を聞かれたら、“都会つてすごいのね”とかになるだろう。エンリ自身も好きになった人、ではなく両親が選んだ人と結婚することになるのだろうと漠然と思っていた。

村から出るつもりはなかったが、彼の方から村に来てくれたのであれば首を横にふりたくなる気持ちもなく。村長からも頼まれたから結婚した。だが、その結婚生活は――

(よくわからないな。結婚つて、こんなものなのかな……)

ンファイリアは奥手すぎてキスもできていなかった。エ・ランテルの事件があつてから1週間だが、ンファイリアがカルネ村に来たのは2日前で引越し当日の1昨日は忙しすぎて二人とも泥のように眠ってしまった。

昨日は少しは余裕があつたし、ネムも別の部屋で早々に眠りについてしまったから内心では不安だったのだが――何もないとそれはそれで肩透かしなのであつた。一応、覚悟は決めてあつたのだが。

ンファイリアはエンリの家に住むことになった。これも村長からお願いだ。“一緒に住んで、本当に家族になったことを村の皆に教えてもらいたい。遊びではないと示してほしい”なんて言われたら断れなかった。

(ううん、朝。ね――)

朝ご飯を作らなきゃ、と寢床から出る。

「ほら、ンファイリ君。起きて」

「ううん――」

「ネムも起こしてもらえない？ 朝ご飯もうできたから」

「あ、ありがとう。エンリ」

「ううん、お嫁さんだもの」

そして、粗末な食卓に着いてごはんのみそ汁、あとは漬物だけの粗末な食事をとる。

（ンファイ、都会の方だとこんな食事は食べてなかったんじゃないかな。こんな粗末なので大丈夫かな）

実のところ、ンファイリアが有名人だと言うのは最近聞いた。だから少し気後れしてしまっている。こんな田舎——と。だが、一方でンファイリアの方は。

（エンリの手料理、おいしいな）

と、満足していた。そもそも彼自身は贅沢を喜ぶ性質ではなく、好きな人と結婚出来て、その人が作ってくれた料理と言うだけで大満足なのだ。酒や魚が貴重品？ 確かにエ・ランテルならば毎日飲めたし食べれたが、興味もなかったのだ。

「今日、ンファイ君はどうするの？」

「うん、まだ工房を稼働させるための準備がたくさんあるからね。今日もゴブリンさんたちを借りるよ」

「ん、お願いしておくね。……リージーさんは」

「おばあちゃんは、ね。多分、まだエ・ランテルで大忙しだよ。あの事件があつてから、冒険者の人たちも効果の高いポーションを欲しがっているんだけど、それ以外にもたくさん用事があるみたいで。僕がここで暮らせるようになったのもおばあちゃんが支店を出して、本店の補給をできるようにしたいって言うてくれたのが偉い人に通ったからなんだ」

「なら、あの人はエ・ランテルで暮らすのね。ンファイ君は寂しくないの？」

「そんなことないよ。どうせ数日中に街の方に行かなくちゃいけないんだ。それに、僕が工房を稼働させてポーションを卸し始めたら定期便が通るんだ。エンリだって気軽に街に行けるようになる」

「そう——よね。うん、そう」

「……………」

状況が目まぐるしく変わったためにエンリはついていけないのか……漫然とした不安が残る。

カルネ村は来年が迎えられるかどうかの危機的な状況にあったのに、ンファイリアが来てからは全てが変わってしまった。とんとん拍子で話が進み、蚊帳の外で話がまとまって街の方から支援が来た。

なにか落とし穴があるんじゃないかという気持ちが消えない。

それはかわいそうなどというあやふやなもので決まった支援ではない。冒険者組合は事件を受けて、準備を始めた。起こってから始めるのでは遅いが、世の中はそういうものだ。冒険者の間でのみ有名であったリイジーの重用、そして質のいい薬草を提供するカルネ村への支援。

ンファイリアがここにいることだって、ただの政治的な事情である。人々の不安を避けるため彼が事件にかかわっていたことは闇に葬られた。街なんかにいるより安全だろうと、とカルネ村への移住も認められた。これについては四六時中護衛を付けるような金などどこからも出てこないし、地下牢に閉じ込めておくことはリイジーの手前できなかつたからという消極的なものではあるのだが。

不安はあるとして、働かなくてはならない。襲撃があつた後は物資がないからできることは少なかった。だが、いざ支援として馬車に満載された物資が届けられるとやるべきことが増えてしまったのだ。

「そう。これはそっちですカイジャリさん。パイポさんはそちらに」

エンリはゴブリンを使って荷物の配達作業をしている。とりあえず馬車から降ろして倉庫に入れたが、物資は腐らせては意味がない。

「ええと……次はー」

ガンガンと鐘の音が響いた。……敵襲を知らず鐘の音。

「……ッ！ とにかく、柵の方へ」

二匹のゴブリンを引き連れて今にも倒れそうな塔に向かう。敵が恐ろしくてとにかく建てたはいいが、いつ倒れるかわからないので補強に補強を重ねてぐちゃぐちゃになっている塔。

「エンリの姉さん。まづいでませ」

先に来ていたゴブリン・リーダーが苦い顔を見せる。すでに塔に上って状況を確認していた。

「……敵が来たの?」

「そうみたいっすね。数が多い。あんな柵じゃ止められない」

木で作られた柵は人間が蹴つても壊れそうなもの。一応ゴブリンの知恵で先を尖らせてはあるが時間稼ぎもまともにできそうにない。「そんな……」

戦える人間は少ない。ゴブリンたちが村人を鍛えてくれたと言っても付け焼刃。的にすら当たらない弓が何の役に立つと言うのだから。

「とにかく、人数を集めないと話になりやせんぜ。弓を使える方も、一応集めて下せえ」

「でも、あの人たちがじゃ当たらないわ」

「とにかく撃つたことが相手にわかりやいい。何よりやらないよりかはずっとマシですぜ」

「……エンリ君! なにが起こったと言うのですかな」

村長がいいタイミングできた。

「村長さんは戦える人を集めてきてください。そのあとは戦えない人の避難をお願いします」

「では、エンリ君は」

「私はゴブリンさんたちと戦います」

毅然と前を見据えている。この村の実質的な村長は彼女だ。村長と呼ばれた彼は村人たちの意見を集めてエンリに報告し、エンリのこと言っただけを周知させるいわゆる管理職のようなものになっていた。今や彼のことを村長と呼ぶのはエンリ一人である。

「分かりました。ここはお任せします」

走っていく。決断するということに耐えられなくなったとはいえ、全てをエンリにまかせて素知らぬ顔ができるほど恥知らずではない。できることはやる。

「パイポさん、敵は見えますか?」

「オーガが10、ゴブリンもいる……ウルフは数えきれない——」

「どんな感じですか？」

「どんな感じってえと、怯えている……のか？ 逃げている、って感じだ。でも、間違いなくこっちに来てる。踏みつぶされてちまわ——」
「話し合いができればいいんですけどね。とりあえず、落ち着いてもらわないことにはどうにもならないようですね」

「——エンリ！ 敵はどうなっているんだ」

「ラッチモンさん、それに他の人も弓を持ってきてくれたんですね。とにかく、大声を出しながら弓を射かけてください。前に飛ばせれば十分ですから」

「お……おおごえ？ いや、考えがあるのは分かるが」

「あまり大した考えでもないですよ。何かに怯えて逃げてきたのなら、大声を出せば向きを変えてくれるんじゃないかと思って」

「な、なるほど。了解した。私は村の者と弓を引こう。掛け声は“お”でいいのかな」

「はい。なんでもかまいません」

そして、敵が見え始める。ここまで来たら目と鼻の位置だ。近代戦なら銃の掃射が始まっている。けれど、ここにはそんなものなくて、レベルが高い者もない。

「よくやるものつすね、エンリの姉御。戦争童貞は使い物にならないんですが、大声を出すことに集中させればブルってなにもできなくなることもない。居場所を知られるのはそれこそ今更つすから」

「え？ いや、そんなつもりじゃ——」

「エンリ様！ ご指示を。ゴブリン隊はあなたの指示で死にましよう。あんたこそ従うに足るお人だ」

「は、はい！ キユウメイさん、チヨウメイさんは前に出て注意を引き付けて下さい。他の方は離れて攻撃を」

展開されるのは文字通りに実に低レベルな戦いだ。棒で殴って、へろへろの矢がぼすんと当たってうめき声をあげる。ぼこぼこになってもそうそう死にはしないし、矢は肉を貫くほどの威力はない。

とはいえ、オーガの攻撃力は凶暴で、しかしゴブリンアーチャーの矢は痛い。泥沼の消耗戦、いつ死人が出てもおかしくない戦いだっ

た。

「……どうしよう」

エンリは後ろに下がっている。下がるしかない。誰も前に出ろなんて言わないし、むしろ言ったやつがいればゴブリンたちが殴る。けれど、彼女自身は己の無力がはがゆかった。

「皆、よく戦ってくれてる。でも——このままじゃ……」

多勢に無勢、というのがよくわかる。ウルフは何匹も地に転がっているが、まだまだいる。地味にうざったいのだ。

「なら……私も戦います！」

我慢できずに前に出てしまった。

「待ってくださいえエンリの姉御！ 今、あんたが出ていかれたら——」

最悪の判断で、それが下策だと言うことは戦術論ではどこでも習うことだろう。もつとも、そもそも「習った」ことすらないエンリにはそれを知りようがない。ただ、心の赴くまま前に出てしまった。

「ぐはははは！ 大将首か！ 大将首だな、貴様」

大将首を取ると言うのはどこの文化圏でも手柄である。ゆえ、将自らすら引き寄せられる魔力を持つ。

「俺の名はアーク。部族を率いる者なり！」

「わ、私はエンリです！ 戦いをやめてください」

「そんなことができるものか！ 大将首、もらった——ツ！」

「姉御、伏せて！」

掛け声を聞くやエンリはうずくまってしまう。それはまるであの時、ただ騎士たちの暴虐に震えるしかなかったあの時と同じように。

「勝負を捨てたか！ 人間のメスよ。だが、大将首はもらっていく——な!? ……っが——」

矢が膝を貫いた。大将たるアークも当然後ろの方にいて率いるオーガたちに囲まれていた、だから矢など当たらなかった。しかしエンリが前に出たことにつられて彼も前に出てしまい……

「一騎打ちでは、なかったのか——」

ぐらりと膝が崩れる。ゴブリンたちは大将を見逃さず、最大の攻撃を叩き込んだ。

「おおおおおー！」

さらにゴブリン・リーダーのジユゲムが決死の突撃——アークを地に沈めた。

愚策、そう確かに愚策で“やるな”と言われる他ない奇策ですらない下策。けれど結局は仲間を信じたエンリが勝った。ただ力に従うだけの彼らは、ボスが倒れたらどうしたらいいのかわからなくなつて

——
「ボスが、死んだ？ 逃げろオ」

「冗談だろ？ うわああ——！」

散り散りに逃げ始めた。

「待っててくださいー！」

それを、エンリの声が止める。

「皆さん、カルネ村に着ませんか？ ンファイー君に傷薬も用意させますから」

そこにエンリが手を差し伸べた。

第27話 人類の守り手

前人未踏のトブの大森林に我が物顔で歩く侵入者がいた。

「……ふん。無駄じゃな、これは」

二人の青年、女性、そしてもう一人……年老いた老女が鋭い目を周囲に配る。リーダー格は呟いた彼女だ。だが、その恰好は一言で言えば奇異である。露出の多いチャイナ服、それは公害的な意味で目の毒であった。

「それは、ここは関係ないと言うことでしょうか。カイレ様」

彼らは侵入の痕跡など隠そうとさえしていない。それは何をも恐れず、襲ってくる者がいるならば返り討ちにしてやるとの自負だった。ここに居る四人はそれぞれ人類最高峰の実力を誇っている。

「否。関係はある——不自然じゃ。気付かぬか」

戦闘、という点で言えば老いているのは弱点しかならないが彼女のそれは一種の厚みと呼ぶものを得るに至っていた。要は経験だ。

「確かに不気味な静寂ではあります。トブの大森林において、このようなモンスターの少ない山があるとは。それに、ここには山などなかったと地図にはありますな。占星千里、本当にここが予言の場所か」

青年は首をかしげる。鏡のような盾を持った男……見た目通りにブレイン役ではないのだろう。

「いや、私にはどこが予知の場所かわからないんだって。推理するのは私の仕事じゃないでしょ。そもそもそこに来たって何かわかるわけでもないし……」

女性はまるで踊り子のような恰好をしている。街行く男が居たら視線は彼女に釘付けになるだろう。もつとも、二人の男を見て逃げていくだろうか。

「ここはただの森林の一部じゃった。しかし、突如にして山が出現した。復活が予言されたカタストロフ・ドロゴンロード捜索において、重要視されておったのだ。地図の間違いなどはない」

「しかし、少し歩いただけで何がお分かりになったと言うのですか？

この山をくまなく探索するべきでは」

最後の一人はじやらじやら鎖を巻き付けて歩いてる。そんなでもまったく木に引つ掛けていない。この4人は相当の実力者である。……痕跡を隠せるのにやらないのは、する必要がないからだ。

「ああ、だから無駄じやと言ったのじやよ。これは、ただの偽装じや。それも秘密の通路が隠されているのでも何でも無い、ただあるだけの空っぽの家——儂にはわかる」

「……なんらの痕跡も残っていないと言うのですか？」

「それを狙って調べる者の無駄足を狙ったものじや。怪しいところに普通の家を立て、何もしない。何も無いのじやから、何も出なくて当然。じやがな、何か成果を欲して探し続けてしまう——貴重な時間がどこまでも無駄になる。……そのようなトラップじや」

「足止めを狙った罠。カタストロフ・ドラゴンロードはそれほどまでの知恵を。いいえ、奴は“山”すら偽装のために作ってしまったと言うのですか？ それは、そこまでの脅威は——」

そう、恐ろしい。山すら作るとは、人知の範疇にない。まさに“神の御業”と言えた。

「隊長であれば山くらい蹴り飛ばせるじやろうが」

そんな一種馬鹿げた妄想——だが、そんな常識外など見飽きたとといった風情の老女は傲岸に断定する。

「いや……まあ、それはそうです」

「探すべきは周辺。この山の周りをくまなく探するのが良いじやろうな。しかし……」

「カイレ様、カタストロフ・ドラゴンロード搜索は急務とはいえ陽光聖典搜索の件もあります。あまり時間は」

「ああ、やれやれ……まったく、仕事ばかりよこしておって。この老骨を少しはいたわってもらいたいものじやな」

「それで、どうなされますか？」

「陽光聖典の方を先に片付けることにしようかの。大森林が絶滅したところで問題はない。目覚めたばかりなら楽に任務ができるとも限らぬ。ならば、急ぐべきはそちらじや」

「では、魔封じの水晶が発動された地点の近くにあるカルネ村へ行き
ますか」

「……では、待たせてある馬車の方へ戻りましょう」

四人、まったくトラブルもなく馬車へ着いた。馬車の男たちはいわゆる“裏”に属する者たちではあるが、実力が低い。殺すならば簡単だったそれが殺されていないと言うことは、ただ何も起こっていないからだと安心した。してしまった。

そして、彼らは“それ”と出会う。

「前方、難度200超えが2体！ それに、え？ なにこれ——難度3？ いや、ちがう………どうということ。どうということよ!? こんなオーツ！」

占星千里が悲鳴を上げた。彼女の感知能力は難度を調べることができる。もつとも、感覚的なものだから比較対象がないとそれがどれだけ大きいかわからないという欠点があるのだが。しかし、その特異な感知能力から生まれる予言は重宝されている。

「御者、馬車を反転させよ！ 二体相手は避ける！」

カイレが責任者として矢継ぎ早に指示を下した。己の身は法国にとつて重要な意味を持つ、そして占星千里の予言も。“隊長”のいな
い状況で難度200超えとの突発的遭遇など冗談ではなかった。

「まあ、お待ちください。少し、話をしようじゃありませんか」

そして馬車が揺れて全員の視線が“そこ”からずれたとき、見知らぬ男が馬車の中にいた。漆黒の軍服、それがどこの国のものかはわからないが上質の。そう、“遺産”を除けば、もしかして法国のものよりも。

「こ、こいつ——こいつが難度200超えの……」

占星千里が額を抑え、血涙を流して呻く。一瞬で移動したとしか思えなかった。感覚器官が混乱している。度を過ぎた脅威が目の前にあつては吐き気をこらえるのに大変だった。……にげださなくてはならないのに、そんな余裕もない。

「まさか、『テレポーション／転移』なの？ 移動する馬車の中に、

なんて馬鹿げてる……」

コイツの実力、それは漆黒聖典四人が気付かずに馬車の中に現れたことから明確で。

「……ッ！」

その瞬間、巨盾万壁が馬車が砕いた。御者を放置して散開する。

「おっと、中々に思い切ったことをしますね。自ら足を破壊するなんて」

その男、トリファは柔和な笑みを浮かべて周囲を見る。壊れた一瞬に神領縛鎖が放った攻撃など意に介してすらいない。

「珍しいところで会うこともあるのね。ここには人間は入ってこないって聞いたのだけど」

少し離れた場所に彼らが乗ってきた馬車が止まる。だが、“それは引く馬すらない異形だった。彼らの世界ではジープと呼ばれる”それ”。

「……なに、ただの通りすぎりですじゃ——」

カイレは言葉を転がす。4人、それぞれとりあえず距離は取った。御者は腰を抜かしているが、戦力にならない以上は数に入らない。

「カイレ様、違う。そいつら、人間じゃない！」

占星千里が叫んだ。

「……ほほう？　なぜ、それを」

柔和な笑顔の彼の雰囲気が変わった。

「ならば——潰れるッ！」

「死ね！　異形種！」

彼らは探索を主とした構成、けれど戦う力はある。そして“彼女たち”は貴重なだけに絶対に守らねばならない。その男たちが我が身を犠牲に相討ったとしても。

「潰れる？　死ね？　我が愛しのテレジアにそれを言いますか。ええ、しかしそれらしいと言えはそれらしい。ああ、カテゴリを分別してそれで死ねと言うのは実に人間らしいですね。私もやりましたね、そういえば。ふふ。……はははは。ああ、実に人間らしいとも——」

衝撃波も、高速で飛来する鎖も彼には通じない。ただむなしく弾か

れ、髪すら揺らすことはない。彼が歩を進める。

「ぐぐぐ……い！　ここで」使えば「後がまずい！　まずい、が——仕方あるまい。使わざるをえぬ！　使うぞセドラン、エドガール……奴の動きを止めよ」

カイレが叫ぶ。並々ならぬ決意とともに。

「その程度で誰の動きを止めるといいますか？」

トリファは囲むように展開された盾をこともなげに拳で粉碎するが、その隙に飛んできた鎖に囚われる。けれど、すぐに砕いてしまう。その程度の力で拘束しようなど愚かと嗤いながら。

「人類の敵よ。今こそ六大神の遺物の力を見よ。『ケイ・セケ・コケ』よ、今こそその神々しき絶対なる力を顕すがいい——！」

チャイナ服が光る。龍の召喚、大きくアギトを広げトリファを飲み込もうとして。

「ふむ、少しばかり厄介そうなので回避しましょうか」

その力をトリファはやすやすとかわし……

「甘いわ！」

そのまま馬車へと突き進む。

「な——テレジア！」

トリファは戻ってきて盾になる。……カイレの予測通りに。回避するかもしれない、もしくは防がれるかもしれない。宝物の効果をかかせずとも洗脳が完了する前に自身がやられては意味がない。

——だから、馬車を狙うふりをした。年老いて身体が衰えた代りに経験を得た。“敵を殺す”そのための方法を数多学んだ。彼が馬車を気にしていたのは分かっていたのだ。異形種だろうと心はある。ゆえ、そこを突けば力に劣ろうとも嵌めるのはたやすい。

「……トリファ！」

馬車から少女が出てくる。占星千里を見ると首を横に振る。彼女も異形種だ。

「さあ、我がしもべよ。まずはその二人を肉塊に変えてしまおうがいい！」

ケイ・セケ・コケ……それは相手を支配するワールドアイテム。同

種の守りがなくば防ぐこと敵わぬ究極の力。ここにヴァレリア・トリ
ファが敵の手に落ちた。

「なるほど。リザ、テレジア。私は君たちを殺さなくてはならないら
しい——」

トリファは変貌する。それはまさに世界を終わらせる天魔。すべ
てに滅びをもたらす“街すら踏みつぶす”絶望的な巨大な、規格外と
いう概念すら逸脱する山のごとき海坊主。

第28話 天魔大戦

トリファが真の姿を現した。けれど、玲愛の本体は遠く、リザは躊躇した。悩むのが好き——自分でそういう彼女だが、やはり戦いの性はない。ブレインを逃した、あれも他のメンバーではありえなかった醜態。

「まあ、決着はつまらないものと言いますし」

異形の馬車を、そして巻き添えの何本もの木を砕くに足る巨大な手が振り下ろされる。彼女たちはそれを見上げるしかない……

「カ、カイレ様——あれは、もしかや」

「カ、カタストロフ・ドラゴンロードであつたのか……？」

「いや、違う。違う、はず——」

「だが、なんて大きさ。こんなもの、いくらなんでも“隊長”でも……」

「じゃがな、今は我々の手にある。もう一人の難度200越えも、あつけなく倒れ……」

「う〴〵おえ〴〵え〴〵え〴〵え〴〵！」

「ど、どうした占星千里——」

「ち、力が。ありえない……ッ！ 恐ろしいものがまだ——」

安堵に気を抜いていた漆黒聖典の面々が顔を見合わせたその時、その声が響く。恐ろしいほど冷たく響く断罪の声。

「二——太・極——二」

今、国すら焼却する力が解き放たれる。

「二——かじりかむい神咒神威・むげんしょうねつ無間焦熱二」

「二——かじりかむい神咒神威・むげんきようかん無間叫喚二」

ここに語ることすらおぞましい最悪の異形種が姿を現す。

「二ここで散れ、聖餐杯」

すべてを焼き尽くしてなおとまらぬ滅びの炎……クトウグア。

「黄昏に背を向けた罪、その身を持って償うがいい」

あらゆる生けとし生けるもの、そうでないものですら滅びに導く

クアチル・ウタウス。

「二——滅べ」

その山のような腕をはじき返した。

「おやおや、螢、ベアトリス、戒までおそろいで。困りましたねえ、私
はりざとテレジアを始末しなくてはならないのです。そこをどいて
いただけませんか」

「断る。あなたに手は出させない。ここで仕留める」

「仲間を手にかけるおつもりですか、ベアトリス。あなたもそうだ、
戒。ここに居ることは命令に反するのではないですか」

「……問題ない。聖餐杯、貴様は僕らが勝手にここに来たど？」

「それは——」

声が響いた。世界を侵し、自らの欲望のままに歪める神の業。誰も
がそれを耳ではない別のところ、もしかしたら魂と呼ばれるそこで感
じ取る。

——時よ止まれ 君は誰よりも美しいから——

「まさか、これは……」

「ええ、バビロンが何もしなかったわけじゃない。もう知ってる
のよ、彼は」

世界が止まる。

「Atziluth
Res novae — Also sprach Zarathustra」

世界が変革される。理が書き換えられる。……“そこ”は穢土の
領域。これこそが世界の終焉。時が凍り、未来は閉ざされる。そこに
は停滞したデジャヴがあるだけだ。

「まさか、あなたまで来られるとは。なんともお恥ずかしいところを
お見せしてしまったものですね」

「トリファ、お前がそうだったのはその傾城傾国が原因か」

睨みつけてくる彼は。

「ウロコ……ナーガか!？」

「その最上位種、カドウケウスだよ」

「——むう!? これは、まともに動けるのが儂一人じゃと!？」

他のメンバーは瞳を動かすのが精いっぱい、その様ではどうすることもできない。赤子同然だ。

「ワールドアイテムはワールドアイテムで無効化できる。どうやら知らなかったようだな。残りの連中も中途半端に対策してあるらしい。知らなかったのか？ 時止め相手に中途半端はもつともやってはいけない。動ける時点で破壊不能オブジェクト扱いから外れるからな」
「……なにを、言っている貴様——」

ああ、つまりは神の御業を理解しようと思うからどうしようもなくなる。見るがいい、止まった世界では生命の息吹など消え去った完全たる静寂に満ちている。

「つまり、呪いが利くと言うことだ。人間ども。そこでゆっくりと死んでいけ。俺の刹那に手を出して無事で済むと思うなよ」

「ぐぐ……ぐぐぐぐー」

カイレはあくまで“ワールドアイテムを使う”人間だ。それこそ今でも英雄級の実力はあると思っっているが、全盛期には遠く及ばない。すでに“使って”使用条件を満たさなくなった今、できることなど何もなかった。

「死ね」

「くたばれ、聖餐杯」

激しい攻防が周りを巻き込んで、大森林その物さえ消し去ってしまったような大戦が起こっていた。けれど、木々は葉っぱの一枚ですら燃えることはない。空中で静止していた。

「ああ、まるであの時のようだ。けれど、たったの二人で勝てますか？」

「私たちは三人よ！」

「貴様は……貴様だけは僕の手で！」

第10位階を応酬する戦場はとつくにカイレの理解の範疇外だ。
プレイヤー
神を切望する法国の人間であった彼女だが、実際にその戦いを目にするにただ恐れおののくことしかできない。真の強者の戦いは、弱者には理解すること能わない。

「いや、違う。こいつら、どうして——なぜ、仲間と戦える!? たとえ

実力伯仲した者であろうと、仲間を相手にしては2対1に1が勝つ。仲間であつたのだ、そう簡単に殺せるはずあるか。洗脳された者は良心のタガなどない。そう、負けるはずがないのだ……!」

カイレは身を襲う毒の苦痛にもがくなか希望を見出す。それが傾城傾国を使って破滅させていった亜人種の姿とは皮肉である。なぜなら、それを使ったことで、今彼女はもがき苦しみながら殺されているのだから。

「おおおおお!」

腐敗を纏う剣が縦横無尽に炸裂する。

「はあああああ!」

炎熱纏う剣が防御という言葉を嘲笑うように空間全てを斬撃が埋め尽くす。

「はは……これはこれはー」

トリファは防戦一方。この三人のステータスとはそういうものだ。トリファはタンクで、他の二人がアタッカー。トリファは攻撃が苦手で、まともにダメージを与えられない代わりにまだ体力が残っている。

トリファの能力は時間を稼ぐと言うのが本命で、次点は敵を引き付けること。敵を倒す役割を負っていないのだ。援軍を待つ、というのが“ユグドラシルにおけるトリファ”、このNPCの役割だ。

だから当然、状況はじり貧以外の何物でもない。

「いい加減、しつこいのよ!」

「死ぬ、聖餐杯。貴様だけは許さない」

そして、相手の二人はまったくもって油断はない。苦しませて殺すと言う余裕も出さない。ただ、必ず殺すために殺意を込めて剣を振るう。

「ああ、困った。これでは命令を実行できない」

トリファにこの状況を覆す手はない。そういう“ビルド”ではない。だから。

「ああ、戒。そういえば、彼女に手を汚させて良いのですか?」

これでとどめ、と二人が意気込んだ瞬間にその言葉をすべりこませた。

「——ッ！」

戒の剣先がぶれた。

「ツ兄さん、何を——」

わずかなブレが彼女の剣をずらす。待っていました、とトリファは最大の攻撃を行う。そもそもが、二人が必殺を確信したのはトリファに隙ができたから。その一撃を放つための隙。

「砕けよ」

全開の第10位階魔法が二人を吹き飛ばした。

軍人とはいえ、否——軍人という側面を持つからこそ仲間殺しほど忌避すべきものはない。櫻井の一族は少し事情が異なるが、それでも戒はベアトリスが気高い軍人だと信じていたからこそ、それを許せない。家族に闇に落とさせない。泥をかぶるのは自分の役目だ、その渴望が戒と言う人間なのだから。

「——ふふ。ははは。……すばらしい！ 素晴らしいぞ、ヴァレリアン・トリファ……世界を滅ぼす魔神よ。そいつらを殺し尽くしてしまおうがいい！」

カイレは苦痛にあえぐ中でなお哄笑する。そう、この魔神を手中に収めた自分は——世界の王にだってなれる。

「そう思うか？」

「ふふ。王たるナーガよ、貴様の最強の兵はこの儂が頂いた。貴様らなど、もはや恐れるに足らぬわ」

「だから……俺たちが何もしていないと、本当に思っていたのか」

「なに？ 貴様らは儂らを監視していたのでは」

「それが必要だと思っっているのなら、自分の価値を測り損ねているぞ。

貴様らに危険などない。——アイシフアウスト・スケルツォ死想清浄・諧謔」

トリファが遅くなる。藤井連の持つもう一つの創造……ではあるが、ユグドラシルでのそれはバフにアイテムを重ね掛けする弱体化魔法だ。そもそもターゲットがアンデッドに限らない。“死人を許さない” 本来の渴望とは関係のないシロモノ……

「ああ、これは——なるほど。詰みましたか」

ではあるが、1対複数において弱体化をかけられたと言うことは、不利などという一言では済まない決定的な一手。

「戒、螢、ベアトリス。最大威力で焼き尽くせ」

蓮は命じる。すべて自分の決定だと言う意思を込めて。仲間を殺した——その事実から目をそらすまいと。

「兄さん、譲ることはできない。だから、いっしょにやりましょう」

「……そうか。藤井君の命令だからね、仕方ない」

二つの超位魔法があとかたもなくトリファを破壊しつくした。

「さて、一つ聞いておきたいことがある」

連は復活し、レベルダウンしたカイレらに問いかけた。カイレは復活の際にぼやけて霞が買った思考の中で、こいつら何が目的だと考える。復活などと言う貴重な魔法をかけてどうするつもりだ？ と。

「お前の使ったワールドアイテム、他に何がある？ 法国はどれほど所持している？」

「く……かか。答えるはずがないじやろうが」

死んだ。

「質問、覚えているか？」

「くたばれ、異形」

死んだ。

「……」

「死ね」

死んだ。

「さて、もうそろそろ蘇生限界か。ルサルカ」

「はいはい。『ドミネート／支配』」

「ワールドアイテムのことを教えてもらおう」

情報を引き出したが、大した情報は得られなかった。漆黒聖典の使う武器のことは多く知っていた。けれど、『傾城傾国』のレベルは大神官ですら一つ以上は知らない。カイレもまた、己自身の使うモノ以外は。

彼らはレベルダウンで灰化するまで殺され続けた。
求めた情報は手に入らなかった。

第29話 古典的推理トリック

八本指はまったくもってネクロマンサーの居場所を掴めていなかった。そもそも顔すらつかめていないのだから、事件を追うしかないのだが——その事件そのものが起きないのだからどうしようもない。

よつて、〃 することがありません〃では済まされない彼らは、六腕の一人を最初に彼女が確認された場所に派遣することを決めたのだった。もちろん、成果を期待してではなく組織の内部でもやりましたというポーズが必要なだけだったのだが。

組織の内部で管轄が分かれて分社化しているゆえの弊害だった。やらなくてもいいことを建前上、やらなければならぬのだ。

「……くそ。なんだって俺がこんな田舎に——」

猛禽のような顔がけだるげにゆるんでいる。はたからもまったく乗り気でないことがうかがえる始末だった。そんなどうでもいい仕事をやらされるのはもちろんサキュロントである。

「いえいえ。これもちゃんとした依頼なので」

「そうつす。俺ら下っ端なんかにはできない仕事なんで……へへ」

追従しているのは部下である。さすがに王都から来たため馬に乗っているが、相手を挑発しないようにと言うことで馬車などの使用は制限されていた。実際には無駄金使うなということなのだが。こういうところでも軽んじられていた。

「ああ、もうさっさと終わらせちまうぞ。こんな木っ端仕事」

田舎ではお楽しみも何もない。さっさと終わらせて帰ろうと、気乗りしない足を無理やり動かすのだった。

彼ら三人はカルネ村に着き、冒険者と偽る。身分はシルバーの偽プレートを用意した。

「ああ、あんたが責任者で？ ええと、ゴブリンどもを従えてるっていう……」

内心、ああ部下ども死ぬかね。まあ俺は全員殺せるからいいけどな——などと考えている。人に慣れていようがモンスターはモンスターだ。同じ部屋にいると思うとぞつとしない。しかも目の前のこいつらは野生のとは毛色が違う、困めば連れてきた部下くらいなら殺れるだろう難度が見て取れる。

「え？ ああ、はい。ゴブリンさんたちには、その。……協力、してもらってます」

「へえ、腕のいいティマーだな、嬢ちゃん。ここまで忠誠心の高いのは、この稼業長いがチト見たことないね」

「はあ……」

責任者とか言われて連れてこられたエンリは正直場違い感に身をさいなまされていた。村長に変わってもらいたい——そう思うが、すでに村人の認識では彼女が村長なのだった。

「エンリちゃん。お茶つてあれ使っちゃっていい？」

「あ、うん——アンナちゃん、お願いね」

かちやかちやとお湯を沸かす音が聞こえる。サキユロントは商売柄、外で出された飲食物には毒を注意する。

（ま、もつともこいつもあの村娘も、ただの田舎者。警戒する必要なんざねえとは思わがな——）

「俺らが来たのはネクロマンサーのことについて聞くためだ。王都の冒険者組合では、ここの近くにズーラーノーンの支部があるんじゃないかって話になってな。それで派遣されてきたんだ」

「は？ ええと、ズー……」

「ああ、そいつはな——」

手早く説明する。もつともきちんとした説明などしてやる義理はない。交渉はもう始まっているのだ。だから、この説明は思考を誘導するためのもの。恐ろしげな噂を垂れ流して、口を開きやすくするだけの証拠もない中傷。

「はい、お茶はいったわよー。どぞー」

そして、出された茶に手を付けるつもりはなかった。だが、話している。

「ねー。ねーねーねー。お茶飲まないの？　これ、とつてもいいものなんだから。もしかして、味が変わった？」

暇そうにエンリの隣に座っていた彼女は、いきなり手を伸ばしてサキユロントの前に置かれた茶を一口飲んで、「おいしいじゃない、これ」などと言つて首をかしげている。エンリは困った顔になった。こどものやることとはいえ、失礼な行為というのはさすがにわかる。（しつげのなつてねえガキだ。だが）

人間、讓歩されるとこちらも讓歩しなければという気分になる。ガキのわがままを聞いておけば、この先の交渉が有利になると考え、出された茶を口にした。

（見てたが、毒を入れた様子もなかったしな）

飲んで見せてから、毒を入れて暗殺する。毒見役がいるからと安心した貴族はこれで簡単に殺せる。が、そんな手にひつかかるほど六腕のサキユロントは甘くない。

「ああ。確かにこりやうまいな、嬢ちゃん」

でしよでしょー、と何も考えてなさそうなガキは笑う。

「ああ、それでだ。エンリさん。本当にネクロマンサーのことは知らねえのかい？」

「はい、知りません。あの方は彼らを天に返して、どこかに行つてしまいました」

「行先に見当が付いたりしてねえか」

「まったく。あの方がどこから来て、どこへ行くのか。何も話してくれませんでした」

「騎士を殺し、この村を救つたつて聞いているが」

「はい、あの方のおかげで村は救われました。けれど、あの方自身が何を思っていたか私たちには見当もつかないんです」

サキユロントは舌打ちする。この女は結果を言うだけで何も情報を渡さない。確信犯かと思うほどなにもしゃべらない。……種族や性別すら言わない。

（だが、嘘はついてねえ。村娘ごときが俺の目を欺けるはずもねえ。けどな、何もわかりませんでしたじゃあ格好がつかねえんだよ……

！)

「おい、嬢ちゃん。本当にわからねえのか？　なあ、何か隠してんだろ？　ここで隠すと最悪、王への反逆罪に加担することになるかもしれないぞ」

ゆえ、威圧することにした。

「……え？　いや、そんな……」

当然、エンリはビビった——ように見える。普通に男に迫られるといたたまれなくなるような年頃の女の子だ。怖がっているのは本当だ。ただ、恐怖と呼べるほど深くはないだけ。

「なあ、姿は見たんだろ？」

「うう——はい。でも、それはなぜかあいまいで……」

「なら、思い出せ……今すぐだ」

後ろで控えていたゴ布林リーダーが不穏な空気を感じて前に出る。

「あんたねえ、お話しじゃなかったんですかい？　これは、まるで——」
脅迫、とは言葉が出なかった。

「——ツシイ！」

頭狙いの一撃……鞘走り、抜かれた剣をやつとのこと弾けた、そう思った瞬間。

(え？　感触が——ない)

彼の、ゴ布林の手には剣を弾く硬質な感覚は伝わってこなかった。

「死ね、モンスター」

サキユロントは『幻魔』、幻を織り交せて戦う軽戦士。その一撃は“軽い”。それでも心臓狙いの一撃は殺すには十分すぎる代物。頭を狙われたと勘違いしたゴ布林の心臓はがら空き、つまり必殺。

(お前が一番難度が高い。ここで殺しておけば後が楽そうなんですね) そう思った瞬間、視界がぶれた。世界が反転する。筋肉が溶ける。

「つぐー… うがあ——」

肩を抉られたゴ布林リーダーがエンリをかばって下がる。

「え!?!　もしかして、敵だったの」

エンリは促されるままにドア近くまで下がる。この位置では人質にとるのは少々難しい。あのゼロならともかく。いや、それ以前に……

「こ、これは。これは——」

サキユロントは視界が滅茶苦茶になって立っていることすら難しい。これには覚えがある。自身にされたこともあるし、他人にはもつとした。

「毒……か！」

“動けば回る”タイプ。毒は心臓が激しく動くほどよく回るものだが、これは格別。しかもあの一瞬、暗殺者の嗜みとして心臓はローギアから一気にトップギアまで持って行ってしまった。だが、いつの間に盛られた——

「あつはつは。マヌケ面ねえ。こんなの初歩の初歩のトリックじゃない。なんで見抜けないのかしら？　あなたたちって、もしかしてギャグでギャングやってたりするのかしら。ギャグだけに。ねえ……六腕の『幻魔』さん」

「……なぜ、知ってー」

「知ってるわよ。というか、そのネクロマンサーに仲間がないとでも思ってたのかしら。思ってたのでしようねえ。カップの縁に毒が塗ってあったことも知らずに飲んじゃったお馬鹿さん？」

「カップの……縁……！」

つまりはあの女が飲んだところだけ毒を塗ってなかった。しょんべん臭いガキとの間接キスなんて御免だったから、そこに口づけるはずもなかった。見れば残りの二人も机に伏せている。立ち上がろうとしたところで毒が回った。

「そうね、ゲームでもしましょうか？　あなたたちもヤクザなんだから、ギャンブルでカモを身ぐるみひとつ残らず剥いで海に沈めたことくらいあるんでしょ」

「……ゲーム、ね」

サキユロントには客を湖に沈めた覚えなどなかったが、そういったギャンブルも守備の範囲内だった。むしろそっちが本領と言ってい

い。接待もイカサマでの巻き上げもお手の物……王都の裏の顔ともいえる犯罪組織のトップは剣の腕だけではやっていけない。

『パンゲア・ゲーム』。積み木崩しなんて侮らないでね、これはかつて世界が一つであった頃の超大陸の名を冠するゲーム。侮れば、魂まで食いつぶされるわよ」

リアルでわかりやすく言えばジエンガだろう。三つずつ互い違いに積み上げられたタワーをテーブルの上に置いた。

「……いいだろう。と言いたいが、こんな身体では」

「あら、体の調子はいはずだけど？」

「……これは。いつの間に」

毒が消えていた。むしろ体の調子はいつもよりいい。

「——ッ！」

だが、異常がもう一つ。剣が軽くなっていた。……粉々になっていた、柄だけを持っていたのでは軽く感じて当然——だが、そのような真似ができる人間などアダマタイトにも知らない。

「ギャンブルだもの。まず、賭けましょう。あなたたちが勝てばこれを上げる」

金貨の山を置いた。重みでぼろいテーブルが崩れかける。おっと、と言って床の上に投げってしまった。こぼれた金貨が光を反射して部下の二人が息をのむ。

「けれど、あなたたちが負けたら——その時点で命を貰う」

彼女の影が動き、槍を形作って心臓の場所に上ってきた。

「使うのはこの777個のピース。これを順番が変わるごとに抜いて、置いて行くの。ピースは最上段を抜くのは禁止だけど、他は自由よ。触ってから一分以内に崩れたら負けよ」

ああ、言うまでもないけれど外から順番外が触れたらそいつの負けだから。と付け足して。

「最上段を抜かないのは当然として、他には」

「ええ、そうね——このピース以外のものをタワーに触れさせても負けね？」

「了解した。では、やろうか」

サキュロントは己の身の程をわきまえていた。先ほどのゴブリンリーダーとの一幕で幻術を見せた。ならば、このネクロマンサーの仲間を相手に勝ち目などないのだ。幻術使いだからわかる、己の心臓のそばの影の槍は決して夢幻ではなく現実のものなのだ。

（だが、逆転してやる。二人、組織に引き入れたなら手柄はでかい。もし六腕からこぼれたとしても、こいつに取り入れればいい——）

サキュロントは強さなんてものに価値を置かない。絶対的な強さがカリスマを生み組織を引っ張ることは認めるが、それだけではどうしようもないのだ。交渉に恐喝、ときにはなだめすかしたり妥協したりすることも肝要……腕つぶしだけでできることなど、実はそんなに儲からない。

「うーん、あなたたちは三人でこっちは二人。不公平ね？ だからエンリちゃんは一回だけセーフってことにしてもらおう」

三日月の笑みを浮かべた魔女は絶対者の余裕でサキュロントたちを睥睨する。ゼロと同じ目……弱者をいたぶるのを楽しむ目。けれど、サキュロントはいつだってこんな風に大物ぶる奴らを食い物にしてきた。

「かまわねえぜ」

鷹揚にうなづいた。むしろ、こういうゲームは剣よりも十八番だった。

第30話 パンゲアゲーム

くじを引き、順番を決める。1. エンリ、2. アンナ、3. 部下A
4. サキユロント、5. 部下Bとなった。

そこからは、一本づつ抜いて、最上段に置く。20週はして、それでもタワーのバランスは全く崩れていない。この分だったら何日も続きそうだった。

(ギャンブル、よく言ったもんだぜ。これは普通のギャンブルとは違うが、根っこは同じ。ようは相手をどう蹴落とすか、だ)

単調な動きは全員が慣れるため。少々長く続いたのは、負ければその瞬間に命が失われる恐怖は指を震えさせ、タワーを崩すからだ。エンリは慎重、というか攻める性格はしていない。ルサルカは不気味な笑みで周囲を見渡している。

犯罪者どもがアイコンタクトを取った。

「じゃ、そろそろ行かせてもらうぜ。嬢ちゃん、アンナ……だったか？」

「ええ、ルサルカでも構わないわよ」

濡れた笑みを浮かべる。最上級娼婦ですら上回るほどの色気……間抜けな部下どもが一瞬で骨抜きにされ、頭をぶんぶん振っているのが見える。

(順番が俺でなきゃ終わってたぜ、てめえら)

サキユロントは理性を保つ。一応とはいえ、六腕——この世の贅は味わった。魔法でもない”それ”に引っ掛かりはしない。

「では、遠慮なく抜かせてもらうぜ。このルール……いくら抜いてもいいってのは失敗じゃねえかな」

ためらいなくどんどん抜いていく。次に上に二つづつ置いて行けば、抜けるピースなどなくなってしまう。

「あらあら」

ルサルカが楽しそうに笑った。

「だが、ルール違反じゃあねえよなあ」

ルールの悪用。イカサマをやるよりもこっちの方が儲かるのだ。サキユロントは筋肉馬鹿とは対極にあたる痩せた男で、頭を働かせるタイプの悪党だった。

「うーん、これは困ったわねえ。エンリちゃん、できる?」

「え? ええ。えええ——」

抜かれまくってすかすかになったタワーを涙目で見守る。それしかできないエンリは順番を回され、ええと、ええと——と、手をあちこちでさまよわせる。このゲームは初めてで、いくつかバランスを修正すれば抜けそうなどころはあるが、それがわからない。

「あ。ああ……ああーと」

やけになったのか、そこは無理だろという真ん中を抜かれたピースの片方を引つ張ろうとして。

——PiPiPi

音が鳴った。一分を知らせる音。これからは自然に崩れてもエンリの負けで、例えば地震が来て崩れてもエンリの負けになってしまう。音が鳴る前ならばサキユロントの負けだったが。

「……きやー!」

手が跳ねて、タワーを崩してしまった。

「あ、ごめんなさい。アンナちゃん」

「いえいえ、気にすることないわよ。一回目はセーフだし」

「じゃ、次ね」

魔女は彼女の敗北を気にしている風でもない。次の順番は1. アンナ、2. 部下A、3. エンリ 4. サキユロント、5. 部下Bとなった。サキユロントは内心歯噛みする。

(順番が悪い——このゲームは後ろの奴を蹴落とすのが本質。だが、俺の後ろは部下Bじゃねえか。しかもその次は野郎、エンリって奴は俺の前。これは、仕掛けられねえ)

「ねえ、あんたら。悪いことするのって楽しい?」

ルサルカは言いながらずばずばとピースを抜きまくっている。

「なんだってんだ、面白いに決まってるだろうが」

「いや、そういうのってさ。俺は裏切られたんだーって奴が大半なの

よ。私にもやんちゃしてた時分があつたのよ。その時はあんたらみたいのと付き合ってたの。そこで付き合いがあつた奴らは皆、誰かに裏切られたと思つてたわ」

そして、どしどしとピースを乗せていく。一回目の単調なゲームが嘘のように、タワーはぐらぐらと安定を保てなくなつてしまった。

「あんたの言うことは正しいのかもしれない。……けれど、俺は悪いことをしているなんて思つたことはねえ。俺がここに居るのは負け組になりたくないからだ。俺は勝ち組になる……勝ち組で居続けるんだよ……！」

部下Aが危なっかしくピースを抜き取る。おい、てめえといいかけるがそんなことをしたらパニックになつて崩すかもしれない。睨むにとどめておく。

(こいつら、変なこと言われたからつてボロ出さねえよな)

エンリはそつと抜き、上において普通に手番が終わつた。サキユロントが何か手を打てば部下Bに直撃することになる。崩さないようにそつと手番を終わらせて、部下Bも終わる。ルサルカがバランスを崩したタワーが、さらに安定を悪くさせて彼女の番に戻ってきた。

「勝ち組つて何なのかしらねえ。他人を見下せる地位に就くこと？」

けど、しよせんそれつて自分が偉いと言うより、自分より偉くない人が居るだけよねえ。しかも、すごい自分なんてどこにもないのに」

一手目とは裏腹に、スパツと抜いてパンと置いた。タワーがぐらりと揺れる。

「俺は……ちがう。俺は、八本指の中でも出世頭で、女も金もうなるほど持つてて。もうすぐ部下だつてたくさん……！」

震える手は今にもバランスを崩してしまいそうで。

「おい！ 止まれ！」

タワーからピースを抜く手が止まった。揺れる、揺れる——このまま乱暴に引き抜いていたら倒れていた。

「あら、良かったわね。あなた、死ぬところだったわよ」

さらりと言うルサルカに、心臓にまたがる影の感触を思い出してしまい——全員が慎重に手番を終わらせ、また一周が回つた。

ルサルカが乱暴に置いたピースのせいでグラグラ揺れている。自分が崩しかけたあの時よりも揺れている。これ、もしかして待っていれば崩れるんじゃないや……そう、部下Aは期待して。揺れるタワーを見つめ。

音が鳴る。

一分が経った。部下Aは仕方なくタワーに手を伸ばそうとして、しかしタワーは目の前で崩れ落ちた。

「あ——」

彼の最期の言葉はそれだけだった。崩れたタワーをさらに崩し、テーブルの上に崩れ落ちた。それはあつけない死のカチチだった。

「さて、次ね」

ルサルカが指を鳴らして、気を取られた一瞬にテーブル上にあった血はぬぐい去られて死体は消えていた。さつさと進めてしまう。次の順番は1・部下B、2・サキュロント、3・アンナ 4・エンリだった。

ルサルカが何かすれば直撃するのはエンリだ。けれど、ここに来てサキュロントはもう一つの事実気付いた。

（このゲーム、ガキの方が有利じゃねえか……！ エンリとか言うガキ、ああ見えて重要な場面じゃビビらねえ、突っ込んでくる。だとするのなら、純粹にゲームの腕が重要。だが、タワーを揺らさずピースを抜き取るには“指が細かい方がいい”——）

ルサルカは2回目と同じくタワーのバランスを崩してくる。そう来たら、仲間の死にブルってる部下Bが最も危なかしげであった。

事実、彼の番だけ一分を超えることこそないが時間がかかっている。別に一分で手番を終わらすルールはないが、2回目はそれで部下Aが死んだだけに忌避感が強い。

部下Bは慎重にやっている。己の命がかかっているのだ。だが、その事実こそが彼の精神力を削り、体力を奪う。

「ぐぐ——うぐぐぐ……！」

ここで部下Bまでやられてしまうのはサキュロントにとって都合が悪い。このゲーム、1対2になってしまえば片方が攻め、片方が

フォローと集中砲火に近いことになる。

「ううう……ッ！」

部下Bがすぎるような目でサキュロントを見つめる。

（さっきと小娘をやっちなまえてか？ もう仕掛けてはいるんだよ。だがな、エンリを落とそうにもその前にアンナの手番、奴はタワーを一手分だけ整えて渡しちまう。修正不可なレベルで崩しちまうと、万が一ののがれた場合に落ちるのはテメエだぞ——）

ルサルカが何を考えているのかはわからない。けれど、エンリは友達の手番でずいぶんと余裕が出て来ている。

（くそつ。部下Bが持ち直すのを待つか？ それとも一か八か——ええい、あいつは回復するのかなのか）

連れてきた部下は一応顔見知りだ。だが、それだけでギャンブルで窮地に立たされて持ち直せる男までかは知らなかった。

（うぐぐぐぐ……動くべきか、動かさるべきか）

だが、サキュロントは動けなかった。ルサルカが動いていない。サキュロントが崩したバランスの修正に必死にも見える。しかし、いずれにせよゲームの流れは崩し修正する単調な動きから外れることがなかった。

「うう……うおおおおおお！」

限界まで追い詰められた部下Bの精神はついに焼き切れた。

「ああああああー！」

バン、と机をたたき。ルサルカに向かって掴みかかる。

「……つこの、馬鹿野郎がー！」

サキュロントはギャンブルで“気が触れた”人間の姿を多く見てきたが、今回ばかりは気付けなかった。我が身可愛さに視野が狭窄した。

「はい、負け。机を揺らして崩すと、もちろん負けよ？ 順番外で触れると負け、机だったなんて間抜けな言い訳はよしてね。……死人に口なし、だけど」

「いや、うちのルール違反だろ。こいつは」

不利だ。目の前が真っ暗になるくらいには絶望的状况、けれどサ

キュロントは余裕の笑みを浮かべて見せる。

(ギャンブルはビビった奴が負けだ……！)

「やっぱりそうよね？ うふ、もしかして勘違いさせたかと思って焦っちゃったわ。ほら、主催者側が勝手にルールを捻じ曲げたなんて、それはもはやゲームじゃないでしょう」

「ああ、男としてギャンブルに嘘はつけねえ。あの阿呆がルール通りだなんて主張はできねえよ」

もちろん、これが嘘である。普通に嘘はつく。とにもかくにも、4回戦。順番は1. エンリ、2. アンナ、3. サキュロント。

(よし、最上の組み合わせだ)

ほくそえむ。2対1になってしまったが次はエンリ……ルサルカの3回戦で見たタワールのバランス調整は使えない。使っても有利になるのはサキュロントの方である。

「——質問だ。ピースは全部使わなきゃダメかい？」

「ああ、取り置きね。うーん、本家の方ではアリだったんだけど、そっちは使い切らせる前提があったのよね。でもそれは私たちのゲームにはない。それだと一番が有利……あなたは不利になるのだけど」

「単なる疑問だよ。深く考えてくれるなよ」

そう、不利だ。“4回戦”では。揺さぶりをかけるのが目的だし、万が一採用されたらそれはそれで5回戦への布石になる。最後の次は始め、ジnkクスだがこういうのが馬鹿にならないとサキュロントはわきまえている。

「じゃ、一本だけありにしておいてあげるわ。二本残して手番が終了した場合は負けね」

「お、そうかい。これはもうけたのかどっちなのかね」

「さあ——これからの勝負次第じゃないかしら」

第4回戦、始め。

「サキュロント、あなたはお金さえあればいいって人間かしら？」

「金だけじゃ駄目だね。権力がないと意味がねえよ。金で買えないものはたくさんあるんだぜ、嬢ちゃん」

今回はアンナがタワールのバランスを崩していき、サキュロントが整

える形となる。

(そうとも。こいつは前哨戦。精神つっ—のは“使えば”減る……ちよつと貯めておかねえと5回戦は生き残れねえ。4回戦に勝つだけじゃ意味がないんだよ——)

勝負に負けてギャンブルに勝つ。組織はその手を使って愚かなギャンブル中毒から金を巻き上げる。一回や二回勝ったところでトータルで負けていれば、金は尽きる。この勝負も似た類、ただ一回負ければ死ぬというだけ。

「金と権力、けれどそれを目的にした人生に何の意味があると言うのかしら」

「この世の全てが手に入る。それ以上に必要なことがあるかい？」

「そうね。……愛、とか」

「はっはっは！ 夢見がちな嬢ちゃんだ。愛なんてものはしよせん、女が男にすり寄る方便で、男が女を抱くときにうそぶく方便さ。そんなものはどこにもありやしない」

「あら、そうかしらね——」

エンリにウインクする。そこで彼女は気付く。

(あれ？ 悪いことをするのがどうとか、大切なことが何かって——もしかして私に言ってるの、アンナちゃん)

戸惑いは無視されて、タワ―はどんどん揺れていく。

「さて、ちよつと勝負に出ますか」

サキユロントがバランス修正をやめて、さらに崩した。

(これは、崩れるのを待っててはだめね)

勝負師ともいえる才覚、エンリはサキユロントの自信を嗅ぎ分け、一分で崩れるはずがないとその可能性を一蹴した。もしかして、と淡い期待に己が焼かれた部下Bとは裏腹に。

「…………ふー」

深呼吸して、ピースを抜いた。一分待つことはしなくても、己が落ち着くための時間はきちりと使う。必要なことを、あわよくばという期待に惑わされずに実行する——理想であるが、中々できることではない。

「ふふ。さて、どうするのかしらね。サキュロント——」

ルサルカはこともなげにピースを抜き、さらにバランスを崩した。そのタワーはもはや10秒後にはバランスを崩すどころか空中崩壊しそうに思える。

「——は」

けれど、サキュロントもまた待つことはしない。ギャンブルにおいて、逃げれば殺られる。それを分かっているからこそ、そして闇の住人を自認するからこそ“突っ込む”。

「こいつでどうぞだ」

ピースを置いた。……抜くことなく。

「え？ ピースなんて、どこに」

「いいや、ずっとテーブルの上に置いてあつたぜ？」

幻術で隠していた。それだけではない、置いた“振り”をした。エンリは彼が取ったピースの数を確認していたが——わずかに浮かせてピースを叩き、揺らした。ピースは袖の裏に隠し幻術により見えなくした。一度触れたピースは絶対に置かなくてはいけないというルールはない。もちろん、1週や2週前のことではない。13週前にやったことだった。使えるかもな、と準備しておいたのだ。

「あ——」

揺れるタワーはどこに手を付けていいかわからない。触れれば崩壊するバランス、サキュロントは上に置くだけだったからできたのだ。

「うう……うみゆみゆみゆ……！」

手を、伸ばして——そう、エンリも引けば負けということを実感的に察していた。けれど、手がピースに触れた瞬間にタワーは大きくかしいで……

「ほい」

ルサルカが横からタワーをぶん殴った。

「私の負けね。最終戦、頼んだわよエンリちゃん」

けらけらと笑うルサルカは立ち上がる。え？ え？ え？ と——崩れたタワーとルサルカを見比べながら愕然としているエンリを

置いて。

「あ、アンナちゃん。えっと、私一人なんて、そんな——」

何ごとかを囁いて後ろに行く。彼女たちが賭けているのは金貨。根が村娘なエンリには、それだけの大金が自分の責任でどぶに捨てられるのには大きな責任を感じてしまう。

あのネクロマンサーには恩を返せていない。なのに、今度は不義理を働くような真似——

賭けにはルサルカが巻き込んだから、実際のところ負けようがエンリに責任がないのだが、本人はそう開き直れない。

「おい、ちよつと待ってくれねえか」

とはいえ、腑に落ちないのはサキユロントも同じ。むしろ流れが向こう側に行ったのを感じた。まるでおぜん立てされた決して勝てない勝負の匂い。

(まずい。この流れは良くない。何を囁いた？ 必勝法、だと言うのなら。崩したのも奴の狙い通りだとしたら)

「ルール変更を提案してもいいかい？ このルールは二人でやるんじゃない面白くねえだろう」

だから、変える。なんとしても流れを引き戻す。

「へえ……いいわ。言ってみなさい」

「俺はギャンブラーとしてサイコロはいつも持ち歩いてる。どっちが番かはこれで決めないか？」

「そうね。ええ、いいわよ。じゃ、奇数はエンリで偶数はあなたね」

あつさりと通ってしまった。

(いいのか。……これでいいのか？ これも、奴の思い通りでは。だが、サイコロならば——)

一手手をくじで決め、それ以降はサイコロ。相手の目論見は崩したはずだった。だが、気付けば手が震えている。サキユロントはここで勝てば生き残れる——が、負ければこれまでの勝利など関係なく命が無くなる。

「始めは私ですね」

そう言うと、エンリはいきなり多くのピースを抜き始めた。

(……な、何を考えているんだ。こいつ——まさか、これが必勝法……!?)

だが、積みあがっていく様を見るとそれほどバランスがくずれていない。いぶかしげに思うが、崩れるまで抜いても次に自分の番が出たら終わるのだ。そうそう崩壊まで行けはしない。

(そうとも、あのサイコロは俺が用意したもの……! イカサマなど、できるわけがない)

次の手番はエンリだった。また、抜きまくって積み上げている。タワーはほとんど揺れずに立っている。

(くそ、考えが読めねえ。だが、小娘なんかには負けるわけがねえんだよ。この俺様は『幻魔』のサキユロント様なんだからよ……!)

次の手番でサキユロントの番になった。とはいえ、バランスが崩れていないとはいえ歪になっている。抜きまくれば崩れる可能性があった。

(様子見だ。様子見——イカサマがばれねえようにな……!)

わざとバランスを崩して、番を回す。次の手番に自分を出した。

(コレは俺が持ってきたサイコロだ。目は自由に出せるんだよ)

そして、バランスを微修正して相手に回す。悔しがる振りなど必要ない。無意味だ、その程度の小細工は。言っただが、この小娘は部下どもよりよほどギャンブルの才能がある。何回やつても勝てないだろう。だが、己は別だと不敵な笑みを浮かべる。

「んしよ……えと」

どうにも攻め手にかかる雰囲気です。10週した。

(仕掛けるぜ)

修正不可能なレベルでバランスを崩し、相手に渡す。サイコロで手番を決める場合、〃次で絶対に崩れる〃ほどバランスを崩せないが——手番を自由にできるなら話は別。次に相手を出せばいい。

「へへ。ギャンブルに勝ちましたようだな」

ニヤついた笑みを見せる。勝った、と思つて。それは打算ではなく心からの笑みだ。闇の住人として己の命はかわいく、金は好きだ。

「まだ、そう決まったとは限りませんよ」

エンリが慎重にタワーに触れ、引き抜いた。二本。そして、一本を手元に置く。これまでであれば絶対に崩れていたバランスだった。

「ち——」

(こいつ……まさか、「練習」してやがったとでもいうのか！ 最初の二回で入れ替えまくったのはそれが目的——最終回でそんなものをやるだと……なんて糞度胸だ、コイツ。ここまでのギャンブラーは知らねえ……)

サイコロはサキュロントの手番を出した。

(二回目で出やがったか。流れはあつちにある。だがな、テメエの前に居るのはこのサキュロント様だ。そう、しよせんテメエは“二番手”なんだよ——ツ！)

タワーはエンリの手番で若干安定していた。二本抜き、一本置く。相手がやるなら自分も、というのが人間だ。エンリに使わせないために使わなかったが、使われたなら遠慮することはない。

一本手元に置いてしまえば勝負は膠着する。二連続で当たらない限り、保険がある。

(——くそっ！ くそくそくそ……あの時に決まっていたら)

サキュロントは正真正銘、命を賭けている。賭けさせられている。だが、向こうに賭けているものなど何も無い。賭けているのはあくまでルサルカの金だ。

(楽しそうにしゃがって……！ こっちは遊びじゃねえんだよ)

何週も何週も周り、手番は100を超えた。もはやサキュロントは自分がサイコロを振ると必ずエンリの番になることさえ自覚していない。

「……」

けれど、エンリは気付いていないのか楽しげにピースをもてあそんでいる。出し抜けにくう、とお腹が鳴って恥ずかしそうにする。

「あら、エンリちゃん。お腹が空いちやったのね。クツキーあるけど食べる？」

「え？ そんな高価なもの、もらえないよ」

「いや、私さつき村娘じゃないってネタ晴らしたわよね？ 特に貴

重でもないわよ、私にとってはね——遠慮なんて必要ないわ」

「そう？　ありがとう」

「あなたもどう？」

「食えるか、このアマ」

誰が毒を盛った奴の菓子など食うか。

（だが、この雰囲気腹を鳴らし、なおかつ菓子まで口に……。わかつちやあいたが、いよいよもって本物だ、コイツ——）

「はい、ごめんなさい。サキユロントさん、お待たせしちゃって」

「……構わねえよ。さっさと打ってくれや」

「ええ——」

そして、また何週も。何週も、何週も。まだ日は沈んでいないが、何日もぶっ続けて賭け続けてきたような重い疲労がのしかかっていた。エンリもまた、多くの汗を流している。

「ううう……うぐぐぐ……！」

サキユロントは追い詰められていた。ピースを動かす手が重い。サイコロのイカサマも調子が出なくなってきた。これは微妙な振り方を調整して目を出している。体調が悪いとすぐに使えなくなる。剣などよりもよほど繊細なのだ。

「ぐぐぐ——」

対して、エンリは余裕そう。

（もう、どうにでもなっちまえ——）

しびれを切らせた。滅茶苦茶にピースを抜き、滅茶苦茶に積み上げる。もうどう見ても崩れる一歩手前。

（こいつで次にお前を出して終わりだ——）

張り詰めた神経を絞りきって、サイコロを振った。出た目は1だ。

「今度こそ、俺の勝ちだ！」

緊張が切れて、叫んだ。

「——」

けれど、エンリはただ申し訳なさそうにこちらを見て。

「……え？」

サキユロントがただ無心に空気を求めて胸を上下させていると、ぐ

らぐら揺れるタワーがかしいでいく。時計を持っているわけではなかったが、40秒ほどしか経っていない。

「ま……い！」

崩れた。

「47秒。1分以内に倒れたからあなたの負けよ、サキユロント」

心臓に灼熱を感じて。

「ほら、言ったでしょ？ 力を抜けば勝てるって。どうせあげちゃったところで後で取り返すから、どっちでもよかったのね。でも、おめでどう。勝者のエンリにはこの金貨を贈呈するわ」

「ええ!? そんな、こんなもの受け取れません」

「お金も権力も、あったところでむしろ自由を縛られるだけの重りではない。私の言ったことを分かってくれて嬉しいわ。そんなもの目標にしたって虚しいだけだもの。じゃあ、後で料理を作ってきてあげる。村の皆で食べれるようなもの」

「え？ いいんですか。でも——」

「気にしないでいいわよ。色々アイテムがあるし、実を言うと暇なのよね」

「そう？ それなら、嬉しいけど——」

そんな言葉を聞きながらサキユロントは最期に思う。

(結局、俺は“重さ”に耐えきれなかったただけなのか……)

第31話 ツアレニーニヤ

玲愛一家は王都に来ていた。エ・ランテルでの調査は終了した。あれだけの騒ぎが起きてても何も起こらなかったことから、実力者も出せる切り札もないと判断した。漏れたアンデッドによつてかなり被害を受けていたのだ。それでも切らない切り札なら、滞在を続けたところで発見は難しいと切り捨てた。

……その関係でトワイライトは動けなかった。実のところ、民が不安がっているので離れないで下さいと言われて、街を出る選択肢が消えることはないのだが——民衆を味方につけておくと便利なのだ。「やれやれ。あのお方は死んだばかりの私をこき使いすぎではないでしょうかね」

「仕事をもらえただけでも感謝するべき」

「玲愛の言う通りよ。あなたが洗脳されてたと知っても、誰も藤井君にあなたの復活を願い出なかつたのだもの」

「はは、皆さん薄情ですねぇ。ですが、あなた方はもちろん藤井君に願いしてくれましたよね」

「……」

母娘そろつて明後日の方向を向いた。

「え？ まさか、あの——見捨てようとした。わけではありませんよね……？」

「藤井君は多くの反対にもかかわらずあなたを復活させたの。彼の慈悲に感謝してキリキリ働きなさい。このゾウリムシ」

パリン、と割れた音がした。

「……トリファにあなたが泣いたこと、知られたくないものね」
こそつとりザが玲愛の耳元に囁いた。

「泣いてない」

赤面してそつぽを向いた。

「はあ——これは成果でお返しするしかありませんか。ごく潰しの父親がいる娘など、藤井さんとして娶りたくはないでしょうし」

とは言つても、任務はあまり進んでいない。というより、着地点が見つかからない。強者の搜索——だが、ガゼフ以外にこれと言つて見つからないのだ。サブの任務であるこの世界独特の魔法の調査はスクロール購入で進捗はあるのだが。

「まさか、六腕とか言う御大層な肩書を持った方々が、見分けがつかないほど弱いとは思いませんでしたよ」

トリファは気配というものが分かる。遠くにいる者の気配を感じられるし、強さもおおまかには分かる。問題なのは、六腕がいる場所にもかわらず気配を判別できなかつたことだ。50歩100歩だから、どれが誰か分からない。

「しかしまあ、六腕の調査は意義があるはずです。どれだけ弱いか調べられれば王都のレベルのほどが分かります。まあ、ガゼフ・ストロノーフがああ程度である時点で他の方々は無視してしまうかもしれない」

「藤井君だけは知りたがつた。調べる意味はあるよ。でも、彼は殲滅するなど言っていた——あんな奴らを生かしておく意味が分からない」

「玲愛は一貫して全滅主義者である。とはいえ、戦略も分からずただやつつけてしまえと言っているような状態だが。」

「目立つのを嫌つただけでは？ 法国という敵もいる。情報収集を行う一方、こちらの戦力を悟られるような真似は慎むべきだ。戦争は始まった時には勝負は決まっていますから」

「そうね。トリファを操つた奴ら、あいつらは私たちの敵。黄昏を壊そうとする波旬。倒さなければ——」

物音が聞こえてきた。何かを捨てる音。

——タスケテ。

そんな声が聞こえた気がして、玲愛はそこに向かう。そこにあったのはかつて人間だつたずた袋だつた。見る影もなく打ちのめされ、果てに捨てられたもの。

「あなたは、生きたいの？」

男か女も分からない“それ”……かつて人間だつた尊厳などはぎ

とられて、今や汚らしくうごめく肉塊と化しているそれに玲愛は触れる。

「……そう」

玲愛はうなづいた。きつと、この感覚は誰にもわからないのだろうと思う。この人は自分と同じだ――

「玲愛、何を見つけたの？」

「リザ、治してあげて」

「……でも、役に立つのかしら」

「それは私が判断する」

ポーシヨンは藤井君のものだからあまり乱用したくはないのだけど、と言いながら一本をふりかける。レベルが低いから、下級ポーシヨンの一つでことたりた。

人間らしい輪郭を取り戻した彼女はすやすや眠っている。

「帰るわ」

彼女と分かるようになった女を担いでさっさと行ってしまおう。リザとトリファは顔を見合わせ、やれやれと彼女について行った。

（あの目、決定的な破滅を予期しながらもただ日常に浸っていたかったあのころ。私は同じ目をしていた。いつ壊れるかわからない、薄氷の上でただ大事な人を待ち続けた。……藤井君、あなたの目に私はどう映っていたの？）

トリファを叩き出し、風呂で徹底的に洗われて美しい見た目を取り戻した彼女はベッドに寝かされている。それを玲愛はじっと見守る。（……けれど、私は何を考えている？ あそこでこの娘を救う必要などどこにもなかった。この娘を黄昏に連れていく……そんなことできるはずがない。あそこは聖地、女神の加護なき者が入ることは許されない）

……自分の心がよくわからなかった。けれど、分かっていたことなどあったのだろうか。穢土で藤井君の愛に抱かれていたときはそんなことはなかった。彼への愛と波旬への憎しみ、それ以外を想う余裕などなかった。

「ううん……」

彼女が目を覚ます。

「あれ？　ここは——」

周囲を見回す。ぼかんとした顔だった。元から顔立ちが良いのか、そんな表情でさえも似合っている。あのボロ雑巾がこうなるとは。

「ゾウリムシ、名前を言いなさい」

「……はい？」

「ないのね。なら、あなたの名前は今日からくま〇んよ」

「へ？　いや、私の名前、ツアレニーニヤですけど……」

「そう、贅沢な名前ね。今日からツアレね」

「は、はあ——」

よくわからないのが来た、というのがツアレの本音だ。この時点では訳が分からなさ過ぎて何がどうか考えることもできなかった。

「あら、起きたのね」

リザが扉を開ける。偶然のように言っているが、単に気配の察知など容易なだけである。

「そう。名前はツアレ。今日から飼うことにしたから」

「捨ててきなさい。と言いたいところだけど」

まるで拾ってきたペットの話をするノリだった。

「……えっと、あのー」

ツアレがおそるおそる手を上げた。

「ああ、玲愛が突飛なこと言って悪かったわね。なんでこんな子に育っちゃったのかしら……あなたもこの子と仲良くしてくれると嬉しいわ。おかゆを作ってくるわ。食べるでしょ？」

答えも聞かずに行ってしまった。

「リザは人の話を聞かない」

やれやれと首を振るが、誰のことだと聞いてやりたくなる。

（似て……る？　でも、親子っぽい。のかしら。とても、こんなに大きな娘がいるような年には見えなかったけど……）

訳が分からない、としか言いようがない。状況はひたすら意味が分からなくて。けれど。

（私……いい人に拾ってもらえたのかな？）

その後、とてつもなく貴重なポーシオンを使ったと言うことを聞いて、顔が青くなったり、この人たちが誰でも知っているような常識が頭から抜け落ちていてびっくりしたりと色々なことがあった。

……次の日。

「へへ、お宅にツアレニーニヤが居ると聞きましたね。あの娘はあつしの店の従業員なんでき。返してもらわないと困ることになるんですよねえ」

いかにも悪人、といった風情の男が家に来た。

「さて、そのような名前の娘は知りませんが。どなたかと勘違いしていらつしやるのではないでしょうか」

対応に出たのはトリファ。いかにも優しそうだが——身長がでかい。見上げる巨軀に男は少しビビリ気味である。

「だがね、言いたくはないんだがラナー王女が発布した奴隷禁止法の関係で他のところの従業員を拘束しているとみなされた場合、犯罪になることがあるんだよ」

「さて、それはどうでしょうか。まあ、そこまで言うなら仕方ない。ツアレを呼んできましょう」

そして連れてこられた娘が人間だったのを見て驚くが、おくびにも出さない。何らかの手段で回復させたのだとすれば……金になるとほくそえんだ。

「……ほら！ やっぱりうちの従業員だった。返してもらいますよ。それと、あなた方が彼女を拘束した分、うちに損害が発生してるんです。そっちの方も補填してもらわないとねえ」

「おやおや、このようなことを言っていますが——ツアレ、彼に見覚えはありますか？」

「……いえ。その人のことなんて知りません」

びくびくと、やつとのこととでそう言う。

「ああ!? 俺の顔を忘れたとは聞き捨てならねえなア！ こつちを見やがれ。覚えているから見れないんだらうがよ」

「醜い奴。殺してもいい?」

付き添いで来ていた玲愛は、なぜか目を閉じている。

「ああ、それはやめてくださいテレジア。こういうのは殺すとゴキブリのごとく湧き出るものです。一つ一つ潰して行くのもそれはそれで面白いのですが、正直そういうのは飽きましたしね」

「あ、そう」

玲愛は興味なさげにそっぽを向いてツアレのことを慰め始めた。

「それで、ええと——ツアレニーニヤさんと言う方でしたか？ その方を探すならば別を当たっていただければ」

「あんた、俺が誰なのかわかってねえようだな。俺は八本指直属の娼館を預かる幹部なんだぜ。俺の一言だけであんたらは表を歩けなくなる。……まさか、裁判で争えば正義は勝つとか思っただろうな？」

「勝つのは強い方でしょう。負ければすべてを奪われるだけだ。魂すら投げ出し捧げたとして、負ければそいつが悪いんですということになる。ええ、我々はそれを目の当たりにした」

彼のいた世界で一番ナチスを弾圧しているものがあれば、それは生まれた故郷であるドイツだろう。それは目の前の男にとって知りようのないことで、どうでもいいことだ。

「……分かってるんじゃない。いいか、ツアレニーニヤは返してもらおう。それと損害分の金貨500枚を用意しておけよ！」

捨て台詞を吐いて去ろうとして——

「こちらを向け」

玲愛の言葉、本能的に逆らうことを避けた男は“それ”を見る。極大の恐怖に飲み込まれ、正気を失った彼はわけのわからない言葉を叫びながら走り去るところを王都中の人間に見られ、最期は川に浮かびどこに流れていったのかは誰にもわからない。

トリファはやれやれと肩をすくめる。玲愛は冷たい視線を虚空へ投げかける。

「これが王国の真実。王は民に優しい治世をしている——けど、それは目をそらしているに過ぎない」

「そうね、玲愛。ただ好きなようにさせるのは愛じゃない。それは“他人が勝手にやっているだけ”で自分は関係ないと言う責任逃れ。

優しさの本質は相手を傷付けることを恐れて何もしないことじゃない

「ええ。誰も彼もが目をそらしている。このままじゃいけない思いながら、しかし何もしない。力がないから何もできないと言うのは仕方ないとはいえ……ねえ」

「その王自身ですら力がないと思っっている。誰もがこの状況を変えられないと思っっているが、その実として悪くなる一方と言うことに誰一人として気付いていない。何とかしようとも思っっていない」

「今まさに戦争をしているというのに、その事実を誰一人としてわかっていないのではねえ——。併呑してくれるほどやさしい相手じゃなかったら、残された不毛の地で賠償金にあえぐだけ。無抵抗主義のお優しいお国など、本質的にはあり得ない。それはただの売国奴と言う」

「魔物がはこる流通レベルの低い世界では、経済から立ち直ることも不可能でしょうね。基本的な経済破綻の立ち直り方は各種税金の撤廃による産業活性化だ。それはこんな世界ではできるようなことではない」

「——この国は終わる。あの王に何かを変える気はなく、貴族たちは己が腐肉に群がる寄生虫だと気づいていない。腐肉を食いつくす前に捕食者が現れることを知っっているが意識していない。なら、私たちが滅ぼしたとて構わないじゃない。ねえ、藤井君」

「……勝手なことやめておきましょう。こちらは相手の対応をゆるりと待てばいい」

大変な事態に巻き込まれたとわかったツアレは、この人たちが何を言っているか理解することもできず、ただ頭を抱えることしかできなかった。

第32話 裏社会崩壊の足音

王国の裏社会を牛耳る八本指。その重鎮たちが緊急に集まっていた。

「——喧嘩を売られたわ」

麻薬取引部門長、ヒルマが切り出す。かなり攻撃的な言葉遣いだつたが、内容を考えればそれも当然と言える。

「昨日今日の話だから売り上げに影響は出てない。でもね、これからは急落していくでしょうね。しかも、アンデッドが大量発生するかもしれない——」

人命ではなく、失われる金を考えて頭を抱える。その顔は憎しみで人を殺せるならば血の惨劇が起きそうなほど凶悪に顔が歪んでいた。「分かるように説明しろ。また蒼の薔薇に黒粉の生産工場を潰されたか？」

「その程度の話じゃないわ、ボス。黒粉に致死毒が混ぜられていたの。この手口、絶対に奴らじゃない。他の何物かが裏で手を引いてる」

蒼の薔薇の襲撃は単に生産拠点の一つや二つを潰されるだけ。生産量が落ちるだけならば別に補填の仕方はいくらでもある。けれど、流通させる麻薬に毒を混ぜられてしまえば——異物混入どころではない風評被害だ。

「ふん、そいつらのことも分からないまま俺たちを呼んだか」

「……うぐ。で、でもこのままじゃ確実にまずいことになるわ。毒を混ぜられたって言っても、黒粉のせいにされて軍が動くかもしれない」

実際、率先して金をばらまかなければ貴族の一人や二人が寝返るところだった。この機会にと脅迫を企む貴族はそれこそ何十人というだろう。

「確かにかがせる鼻薬の量が多くなるのは問題だな。で、いつまでに解決できる？」

「そ、それは——わからないわ。あまりにも手口が鮮やかすぎて、だれ

もそのことに気付かなかつたもの。死人が大量発生して処理がパンクしたところでようやく私も知ったくらいで」

「流通させる黒粉が致死毒を混ぜられたものかどうかなど、試してみればわかることだろう」

「そうでもないの、ボス。この毒はもはや芸術的って言ってもいいくらいの毒なの。こんなものを作るなんて、王都一の錬金術師でも荷が重いわ」

懐の絵を見せた。それは犠牲者を描いたもので——眠るように死んでいた。

「まず、外見からは一切異常が見当たらない。自覚症状もまったくない……ただ服用から10時間から16時間くらいで急激な眠気に襲われるわ。遅効性だから試してから売るなんてこともできない」

「では、治療することは可能か？ 治療可能なら大したことがないと言ひ張れる。鼻薬の処方も少なくて済むな」

「それは無理。自覚症状が出た時点で手遅れで市販の毒消しもポーションも意味がない。こいつは自覚するころには、すでに体の中身を徹底的に破壊し尽くされた後なの。だから自分の体が壊れたことに気付かない。警報を鳴らすところから真っ先に壊されるから」

「なるほど。思った以上に厄介なようだ。警備部門を雇うなら安くしておいてやろう。これは八本指の運営にかかわる事態のようだからな」

「そ、そうね。それなら麻薬の集積地点をまとめようかと思うわ。大規模な集積地点を決めてそこを実力者に守らせる。狙われやすくなっちゃうけど、それで確実にしつぽを掴むわ」

そこで奴隷売買部門長のコツコドールも手を挙げた。

「ちよおつと待ってよねえ。喧嘩売ってきた奴ならうちのほうにもいるのよん。ヴァレリアンⅡトリファって奴がうちの娼館の館長を殺しちやっつてねえ」

男である。その有様ははっきり言って醜いと言っている。女になり切れるまで徹底するならばともかく、遠目に見たところでそいつを女と見間違えるはずがない。そもそも気の処理すらしていない。

ボーボーだ。

「それは街の警備兵を使えばいいだろう。罪など後からいくらでもねつ造できる」

「それがあ。なんかあ、死体が異常らしくってえ、みいんなビビって手出しできなくなっちゃってるのよねえん」

「ふん、そっちは後回しだ。娼婦を奪われたのだったか？ だったら適当に後をつけてさらえばいいだろう」

「ああん、いけずう。分かったわ、警戒はしてるみたいだけどお。ふふ。裏のオンナの攻めはねちっこいのよおん」

消えたサキュロントのことは誰も話題に上げなかった。

そして三日後に集まった彼らは一様に苦い顔をしていた。

「死にすぎだな」

ゼロが怨嗟の坩堝のような顔をして切り出した。黒粉の常用者の3割が死ぬ事態に陥っていた。軍隊の全滅の定義は3割削れることというからには、それは致命的なレベルで大きい数字となる。

「関係部署への根回し——出費が痛いわ……」

ここまでの状況になってしまったからには隠し事などできるはずもない。死者が増えて墓地がパンクしたことで方々から苦情が来ている。街中でのアンデッド発生がもはや秒読みの段階に入っている。「だが、一向に敵の姿が見つからん……！ 敵は煙か何かだとでもいうのか」

ゼロは憤っていた。もちろん服用者たちの死にはなく、組織の利益が目に見えて目減りしていくことに大きな怒りを感じて、そいつを八つ裂きにできない今の状況がもどかしくてたまらない。

「しかも、どれだけ調べても毒かどうか分からねえ。ディテクト・マジックの術者を雇っても分からねえなんて相当だぜボス」

10時間も放っておいたら、保管しておくうちに毒を混ぜられてそいつが本当に毒が混ぜられていないのか分からなくなる。そうやって大量死させてしまったこともある。八本指が安全を保障したら中毒者が押し寄せてきて、すべて死んだ。

「だが、必ず見つけ出して八つ裂きにしてやらねばならん……！ いや、王都でギロチンにかける方がいいか。罪もなき一般人を殺戮した狂人として歴史に残るだろうよ」

「ああ、黒粉をばらまいているのはあくまでハッピーになってもらうため。かわいそうな民衆を毒牙にかけて殺し回ってる奴は正当な裁きを受けてもらわなきゃな」

「けれど、ボス。痕跡を見つかるタレントを持っている冒険者組合の秘蔵っ子まで駆り出しても何も見つからない。相手は人間なのかい？」

「なに？ エドストレーム、今何と言った。人間、か——そうか。相手が人間でなければ可能かもしれないな」

「それは、どういうことだい。いや、まさかネクロマンサーが？」

「ここに来て、真実らしきものに近づいた。いや、実行犯はルサルカでリザは何もやってないが。それでも同じ一派にたどり着いただけでほめるべきかもしれない——まあ、単なるあてずっぽうだが。」

「可能性はあるだろう。帝国騎士を殺せるほどの力を持っているならば、不可知化できるアンデッドを召喚できても不思議はない」

「なら——」

「どこにいるか、それが問題だ」

「そう、犯人っぽい奴をみつくろっても、そいつの居場所がわからなければどうしようもない。そいつは正体がわからずとはいえ、八本指の情報網でも影すらつかめない相手だ。」

「ああ、そうだ。ボス、サキュロントの奴はどこ行ったんでしようね」「ふん、奴など六腕の面汚し……道草でも食っているのだろうよ」

「でもさ、ボス。考えてみなよ、あの村に向かったあいつがまだ帰っていないってことはさ。もしかして、ネクロマンサーはまだ村にいるんじゃないか」

「……可能性はあるな。ここまで顔に泥を塗られたんだ。六腕、全員で行くぞ——カルネ村を攻め落とす」

「ヒルマの「あのうー。うちのところの娼婦、全然外出しないんですけどうー。しかも、外に出てくるのはノツポの男だけだしー。さら

えないんですけどうー」という言葉は無視された。

そして、7日が経つ。六腕……今はマイナス1だが、彼らは超VIPであるので最速でカルネ村まで来て、来ようとして——行くことができずにヒルマの待つエ・ランテルに戻ってきていた。

「——どういうことだ!」

黄金亭の人払いした一室でゼロが空けた杯をテーブルに叩きつける。粉々になった杯を見て、5人は未来の自分の姿を想像して蒼くなってしまう。

「魔法だな」

デイバーノックが言った。彼はアンデッドだ……が、知性があるし人間社会についても理解がある。怪しい集団の一人、としてなら潜むことも可能だった。もつとも、彼の前に置かれた酒や料理には手が付けられる気配がないが。

「知っているのか?」

「いや、そのような魔法は見たことも聞いたこともない。だが、貴様らが揃って地図を見間違えたなどということがあっても思えない。ならば答えは一つだろう。本人に会って聞いてみたいものだ」

「ぬけがけ」は許さねえぜ、デイバーノック。しかし、この事件解決の手柄を出したなら帝国の魔導本の一つや二つは都合つけようじゃねえか」

もちろん、ぬけがけとは裏切りの暗喩——八本指を裏切ってネクロマンサーにつくならば殺すという意味合いだ。

「ほう、それは興味深い。だが、すまん。私の習得しているのは死霊系や攻撃系であって、探索系でも妨害系でもないのだ」

「専門家に話を聞きたいところってか。だがな、そんなものはすでに考えた。……うちにいるマジックキャスター以上にそれ系に詳しい奴は居ねえよ。それこそ帝国ならともかくな」

「……ボス、帝国に話を通すのは論外なんじゃ」

「当たり前だ。だが、このままじゃあ罅が明かねえ。……おい、ヒルマどうなってやがる?」

「え？ ええ……と、あんたらがカルネ村に行ってる間に私が直接情報を集めておくってことになったのよね」

「おい、なんだ。てめえは自分の仕事を忘れるほどトンマだったのかよ？ そんなトボケた頭ならいらねえと思うんだがどうよ」

ゼロの気分はすこぶる悪い。戦闘の心得を持つていないヒルマには針の筵である。

「か、確認しただけよ。でも、ほとんど何も話を聞けなかったわ。そのカルネ村ってのは騎士に襲われる事件があつた前は質の良い薬草の産地で、よくこの町に卸していたみたい。その関係で組合の方が支援物資を送つたつて話なんだけど、その時行つた人間の話だと人数が少なくなつた以外は普通の村らしかつたわ。少なくとも、迷うなんてことはなかつたつて」

「おい、ヒルマ。てめえ俺たちを何だと思つていやがる？ 泣く子も黙る八本指だ。この期に及んで裏で手を引いてる何者かが居ねえなんてお花畑を思うやつがいると言つてんのか」

「……ひ！ ち、違うわよ。ただ、六腕に喧嘩を売られた時期から今までエ・ランテルはカルネ村と関わつてないから、ここからだと調べようがないの。誰に聞いても、前は普通の村だつたつて言うし」

「つまり、何者かが俺らに喧嘩を売つて。で、その何者かさんはあいつらが危なそうだと思つてかばつたわけか？ 妙な魔法か何かを使つて——」

「だ、断言はできないけど。騎士を殺したつていうネクロマンサーが全てを仕組んでから、うちに喧嘩を売つたつてのが筋が通つていと思うわ」

「……そいつはおかしくねえか。なら、そのネクロマンサーはカルネ村に侵入不可にする“何か”をして、貴様の言うところの芸術的な毒を製作し、さらに精鋭が護衛する中でまんまと黒粉に毒を仕込んで逃げおせただど？ 大がかりに過ぎる——そいつらは組織か何かか」

「あ！ ボス……エ・ランテルにはアンデッドが起こした事件があつたわ」

「知っている。ズーラーノーンの仕業だろう。だが、簡単に止められ

る程度の襲撃など、下っ端の暴走以外の何物でもない結論したはずだが？」

「そうじゃなかったら？ 事件は連続している。むしろ無関係と思う方が間違っていると思うの。その事件は下準備に過ぎないとしたらどうかしら」

「……ほう。面白い視点だ」

「ええ、そう。……そうね、例えば毒を製作する副産物をごまかすため。下っ端を殺して事件を終結したことにすれば、どさくさに紛れて“それ”を処理しても何も怪しまれない」

「見えてきたな。ならば、その事件を解決した冒険者チーム、トワイライトは——」

「ネクロマンサーの仲間。そのネクロマンサーは騎士を殺した実力から見て相当なレベル。12高弟か、もしくは——盟主だと思われるわね」

「そして、トワイライトはその直属の部下か。なるほど、死霊術ではなく戦闘技能に優れている——噂じや戦闘系マジックアイテムさえ持っているという話だったか。12高弟よりも、むしろ直接戦闘に秀でた強力な配下と見るべきかもしれんな」

「……でも、彼らは民衆の支持を得ているわ。八本指が彼らを暗殺したなんて知れたら、それこそ暴動が各地で起こるかもしれない。私たちと通じている貴族に抑えさせようとしても、さらなる暴発を招く公算が大きいわね」

だって、あいつら馬鹿なもの。と付け加える。

「くつく。くつく——」

「どうしたの？ ゼロ。手を出せない状況で……あの」

狂ったか、とは口に出せない。

「は、いやいや。違うさ、ヒルマ。なに、面白いことを考え付いたんだよ——」

声を潜め、口に出す。

「冒険者は冒険者同士で食い合ってもらおうじゃねえか。……てな」

第33話 善意と悪意の境界

冒険者チーム「蒼の薔薇」はリ・エステイゼ王国の第三王女、ラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフに招かれ王宮に入っていた。

「ラキユース以外とはお久しぶりですわね。楽にして構いませんことよ」

助かる、と言つて本当にくつろぐ面々。リーダーのラキユースは苦い顔をする。

「ふふ、本当に気にしなくてもいいのですよ。私と皆さんの仲じやないですか、うるさい侍女もいませんしクライムもこちらへ座りなさい？」

「いえ、私は——」

「座つちまいなよ、童貞。椅子が一つ空いてると変な気分になつちまうだろ」

「へ？ あ、いや……」

「ほら、クライム」

ラナーが隣の席をポンポンと叩く。それでは失礼して、とガチガチに緊張しながらクライムは座った。借りてきた子犬みたいな態度だった。ほどよく筋肉のついている少年ではあるのだが、どこか覇気のない印象だ。

「で——なんか、とんでもないことになつてるみたいだな」

遠慮なんて文字、辞書そのものを破いて捨てたかのごとき傍若無人のガガーランが言った。鬼のような女である。もしくは岩か。

「あれは、エグイ」

「まさに芸術。モンスター対策に持ち歩きたい」

忍者姉妹が言う。こちらも気後れなどしていない。黄金姫と呼ばれ、国民から大きな支持を集めているラナーの前であつても緊張とは無縁な様子だ。

「はい、今日はそのことについて皆さんとお話ししようかと」

沈痛な顔をする。それもそのはず――

「八本指がばらまく黒粉に毒が混ぜられた、という話ね」

多くの被害者が出ている事件だ。黒粉もゆつくりと人を殺すものではあるが、これはそんな悠長なものではない。%でくれる人口がわずか一週間のうちに死んでいる。

「はい。犠牲者の方たちは、八本指にとっては、その……」
「養分」

「金を貢いでくれるゾンビ」

「ちよつと、ティア、ティナ。その言い方はないでしょ」

「いえ、正しいとは思いますが。そんな彼らに、八本指が毒を盛るような理由はないと思うのです」

「ええ、同意見よ。私たちもアレは外部の組織がやっていることだと思ってる。でも、目的は何？ 八本指を倒そうと言うには……あまりにも回りくどい」

「はい。現に暴動が発生しているわけではありません。本当に八本指を倒そうと言うのであれば、民衆に暴動を起こさせるというのは戦術としては有効ですが……」

「多くの犠牲が出てしまう。それに多くの貴族が巻き込まれて、国として立ちいかなくなってしまったら元も子もないもの。その手段を取るわけにはいかないってことは前に話したわね」

「はい。毒を混ぜた組織の目的が八本指の打倒ではないことは明白だと思っっています。もしくはあくまで副産物でしょう」

「でも、ラナー。八本指打倒が目的ではないと断定するのは早すぎないかしら？ 情報が出てきてないだけで、何か事情があるかもしれないし」

「そうですね。では、そこは保留にしておきましょう。ラキユースは本当の目的があるとしたら何だと思えますか？」

「ううん……黒粉に毒を混ぜる目的かあ……。あ、そうだ黒粉自体を王国から消そうとしてるって言うのはどうかしら。八本指が居なくなっても黒粉を売る犯罪者が出たとして、それが絶対死ぬ薬だったら誰も買わないじゃない」

「確かに売り上げはがた落ちしたと聞いていますが……それは違いますよ、ラキユース。黒粉を買うのは人格の問題ではないのです。黒粉はリピーターになるのではなく、“させる”。あれの薬効は頭をおかしくさせることです。そんなことで取り締まれるのなら、帝国で規制する必要はありません。規制などなくても誰も買いませんから」

「帝国……そういえば、むこうにも黒粉が流れてるんだっけ？」

「はい、鮮血帝様はカンカンだと聞いていますよ。麻薬は国力を落としますから、服用した者も持っていただけの者も全員死罪……というのは冗談ではなくなるかもしれませぬね」

「じゃあ王国の国力と八本指の勢力を同時に削るために帝国の秘密部隊が毒を仕込んでいったとか」

「……さすがに、それは妄想の域ではありませんか？」

「ま、そうよねー」

お手上げ、と手を挙げて。

「ズーラーノーンが関わっている可能性はあるのか？」

ずっと黙っていたイビルアイが口を開いた。

「あら、その方たちですか。エ・ランテルで事件を起こした以外にその名前は聞いていませんが」

「黒粉に毒を混ぜる意味。お前らは八本指の勢力を削るためと予想していたな。では、私が新たな推論を提示してやろう」

偉そうなイビルアイは、もちろん帝国の裏工作など数に入れない。それこそ回りくどくて効果が実感しにくいにもほどがある。

「——死体を増やすため。合理的な理由のもとにそれを行ったのなら、これこそがふさわしい。ズーラーノーンならいくらでも有効に活用できるだろう」

「なるほど。盲点でしたわ」

などとラナーは驚くふりをするが、この会談の前にそれには気づいていた。クライムの前で自分からそれを話すのはどうかと思ったので誘導しただけである。

「そうか！ 死体が増えれば処理が追い付かなくなって負のエネルギーが溜まる。いえ、どううまく処理したとしても負のエネルギーの

増加を防ぐことはできない——」

「なら、エ・ランテルはただの狼煙？」

「被害を受けた人たち、踏んだり蹴ったり」

「いえ——それも策略でしょうね。この状況では民の皆様は不安になつてしまいます。……それが一番いけないことなのだと知らずに」

「ええ、確かにこの状況がズーラーノーンの仕業だとしたら、それは避けられないといけないわね。暴動が発生して人死に出れば、どこまでも騒ぎが広まつてしまうかも……！ 全てが負の方向に傾き、際限のない戦乱を呼ぶ——それが目的ね!？」

「だから、私は蒼の薔薇に依頼します」

「依頼？ もしかして、冒険者組合を通して」

「はい、これはむしろ知られてほしいことです。……依頼内容は村々を巡って民の皆様の不安を鎮めることです」

「……任されたわ」

蒼の薔薇の面々はにやりと笑って引き受ける。実入りが少なく冒険者に敬遠さえる類の依頼だが——正義感の強い彼女たちはこういう依頼は好物だ。……イビルアイの表情は仮面で隠れているが。

もう少し雑談をして、ラナーの用意したお茶とお菓子に舌鼓をうつてから意気揚々と引き上げる。蒼の薔薇はやる気満々だった。元々力のない犠牲者たちをターゲットにした毒の混入は、八本指にダメージを与えていたとしても許せるものではなかったから。

けれど、ラナーは。

（まあ、毒を混入しているのがズーラーノンなわけないのですがね。やっぱり、愚かで可愛らしいですわね私の親友）

語ったことは嘘八百だった。

（そもそも負のエネルギーを貯めたかったら、あんな殺し方をするはずがないでしょう。無惨に飛び散ってもらった方がそれっぽいし、不安も煽れます。目的は第三のものが正しい）

ラナーはその洞察力により、実地に動いている八本指以上に推論を進めていた。

(彼らは麻薬と言ったものを憎んでいる。単純に目障りだから殺したのだ、虫を殺すように。やれやれ、八本指と言っても人間を人間と考えている。馬鹿馬鹿しい、そんな発想だから己がアダマンタイト級なぞと言う法螺話を簡単に吹けるのよ)

(普通の捜査など無駄でしかない。八本指がそれをして駄目だった以上、王国ではそれ以上の手を打ちようがない。できるとしたら、それこそ有名人を巡業させて民の不安を発散する程度のこと)

(この段階では彼らのことは分からない。だが、確実に“居る”。人知を超えた何か——かの王国戦士長の口をも封じる“何者か”。それが件のネクロマンサーからは知らないけれど、あなたに罪もない民を苦しませて殺す度胸もないのなら——)

「クライム」

「は、何用でしょうか。ラナー様」

「ずっと隣に座っていてくれてもよかったのに」

「……申し訳ございません」

奥手などころもかわいいわね、私のクライム。そう思つて。

(利用してあげる。私とクライムの未来のために)

ラナーは己の才覚でつかみ取る未来を想像してほくそ笑むのだった。

第34話 善意のすれ違い

蒼の薔薇がその男と会ったのはエ・ランテルに入ってからだった。それはズーラーノーンが事件を起こした場所ゆえに、決して巡業から外せないその街に入ってきたときだった。

「お願いします。あの悪魔どもを倒してください——」

そう言われては詳しい話を聞くしかない。ひどい怯えようで、盗み聞きされないようなところに入るまでそのことを言わなかった。

「冒険者のトワイライトと言うチームを知っていますか？」

「あれはなんとも恐ろしい光景でした。トワイライトのベアトリス・キルヒアイゼンと言う方、知っている方であれば気さくで親しみやすい人だと皆が言うでしょう」

「けれど、それは上っ面だけで、奴は恐ろしい本性を秘めている。私は見てしまったのだ、あの光景を。それは、悲惨に醜怪でおぞましいほどに狂った儀式だったのです。ああ、今でさえ目の裏にあの光景が映る」

「アレは、墓地で儀式をしていた……！ 黒粉をやって死んだ奴らであふれかえった墓地を散歩でもするかのよう気軽に——」

「ああ、あれはなんだ。光る、濡れた赤い光があいつの手に集まっていく。ああ、いやだ！ 俺はまだ生きている！ 連れて行かないでくれ！ 嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ——」

頭をガシガシと血が出るまでかき続ける。……演技などであるものか。本気で恐れ、畏れるがゆえに心を壊した男の姿。

「いや、そんな！ あの手は何だ！ 窓に！ 窓に！」

……気絶した。

「……ティア、ティナ。外に何かいる？」

「何もいないね。ボス」

「そう、私の勘違いでなくて良かったわ。でも、この人——」

「嘘は言ってない、ね」

「『トワイライト』のベアトリス・キルヒアイゼンか……」

「でも、こいつの言葉を全部信用するのは危険。……危険だけど、調べる価値はあるかも」

「……いや。でも、そんな仲間を疑うような真似は——」

「八本指の傘下の冒険者だっている。こいつもそうでないとは限らない」

「こいつも——とは、目の前で気絶している男のことであるが。信用ならないのはむしろこちらの方ではあるのだが……」

「そうね、一度会ってみないことには」

疑念を募らせながら組合に行つて取次ぎをしてもらおうと、簡単に会えることになった。

よろしく、と握手をしてからテーブルに着く。組合が何か勘違いをしたのか、交流会のようなことになっていた。

「ええと、今日はお話の機会を貰えてありがとう」

「いや、実は街を出れなくて暇してたんだ。気にしないでくれ」

印象はぶつきらぼうだけど優しそうな人。あの男の話だと、おそらくベアトリスが13高弟の一人で、他は戦闘に特化した部下だと予想できたが。とはいえ、リーダーを名乗るのは目の前の男性なわけだ。

……これでベアトリス本人が盟主だと言う可能性は消えた。とラキユースは思う。盟主なんて大物が誰かの下に着くはずないな、と。「とはいえ、何を話せばいいのかわからないわね。組合の人もここまですっかりとした場を用意してくれなくてもよかったのに」

「んじや、俺から聞いていいか。スケリトル・ドラゴン二体を倒したつて聞いているが、そいつは4人でやったのか？」

恐れ知らずのガガーランが聞く。

「いんや、俺一人がやったぜ。逆に俺も聞いていいかい？　いつから冒険者は亜人種でもなれるようになったのかね」

大胆不敵と言うより失礼な司狼の言葉だったが、返しの「俺は人間だ！」という言葉で場が和んだ。

「じゃ、私も女の子二人に質問。彼氏いる？　それとも彼女？」
ティナが聞いた。

「ふふ。私には心に決めた男性がいます。あと、螢にもいますよ——
もちろん別人で、この子の方は片思いですが」

「ちよつと姉さん!?! 何言ってるの。そもそも言う必要ないでしょ
う、そんなこと!」

「照れちやつて、かわいいですね」

「つち! コブ付きか。残念」

「お、それ聞いていいのか。なら、お前らつて童貞?」

「おいおい、それ聞いちゃいますか? と言うか、あんたは求められる
タマじゃなくて、食い散らかすノリつぽく見えるぜ」

「ふふん。当たり前。とだけ言わせてもらおうか」

「あー。いや、まあやったことはねえ……かな。ちなみに蓮は童貞だ」
「てめえ、司狼。要らんこと言うな。もう一度病院送りにしてやろう
か? 次は俺が勝つぞ。肉弾戦用の装備があるからな」

「んな!? ズつけえぞ、蓮。自分の拳だけで勝負しやがれ」

「……はん。俺はお前と違って痛いのも折れるのもごめんなんだよ」

「インポなだけにつてか? 笑えねえよ!」

「ふふ。この話題だと私は優越感を感じますね」

「嘘だろ、万年蜘蛛の巣姉御」

「遊佐君? 昔にゴールデンクラッシュヤーと呼ばれていた私の腕前、
披露してあげましようか」

「あー若いころの武勇伝を誇っちゃつて。これだから婆ちゃんはやだ
やだ」

「上等です。表に出なさい」

「あれ? 怒っちゃつた? 凶星差されたからつて大人げないぜ?」

「やめろ、馬鹿」

連が司狼のテンプルを吹っ飛ばした。意識が一瞬途切れたところ
にベアトリスが腹にいいのを当て、螢が後方に蹴り飛ばして捨てた。
「悪いな、いつもこんななんだ」

連の表情は苦勞人そのもので。

(うん、こんな良さそうな人たちがズーラーノーンなわけないよね)
などとラキユースは思ってしまった。ズーラーノーンの一員では

なくとも、事実として黒粉に毒を混ぜて麻薬中毒者を殺しまくっているのはこいつらなわけだが。

「うん、今日は楽しかったわ。あの動きを見る限り、あなたたちは近いうちにアダマンタイトに上がりそうね」

「そうなたら嬉しいがな。未開地域や未知のモンスターの調査なんかは面白そうだ」

そんな感じに雑談を締めて、今回の顔合わせは完全にただの息抜きになってしまっていた。

蒼の薔薇ではズーラーノーンの事件を再調査しよう、なんて話になったからいったん組合によると。

「どういうことですか？ 私たちがトワイライト討伐の依頼を”すでに受けている”だなんて——」

「いや、そうは言われなくてもシステム上そういうことになっているんです」

受け付けの人は困った顔をしている。

「でも、あの人たちを倒す？ 別に決闘で負けさせとか言う話じゃないのよね。なら、組合では扱えない依頼のはずだわ。こんな犯罪行為」
「えと、私たちの方でもトワイライトさんたちと戦ってもらっても困るんですが」

はつきりしなかった。思い出したように手紙を渡してくる。「そういえば、依頼書に開封不可の宛先がない封筒が挟まっていました」と言つて。それは無関係じゃないのか、とか怪しすぎるだろとかいう突っ込みは置いてそれを見る。

『トワイライトはズーラーノーンの偽装身分。蒼の薔薇が討伐しない場合、エ・ランテルは街の住民ごと殲滅される。それを忌避するならば失敗は許されない —— 八本指より』

ラキュースは一瞬だけ顔を歪めて。

「なるほど、そういうことね。この依頼は私たちでうまいこと処理しておくわ。だから、誰にも言っちゃだめよ」

唇に人差し指を当ててウインクして組合を後にし、宿に帰る。

「——どうしょよ」

頭を抱える。ラキユースは政治の話ができるほど頭がいいが——
こういう事態には弱い。

「八本指にはこの町の住民自体が人質」

「でも、そううまく行く？　今は八本指も勢いが弱い。これをきつかけに組織そのものが維持できなくなるかもしれない」

忍者姉妹が現実的な見解を述べる。

「だがよ——それでも、この町くらいなら滅ぼせる。そして、組織が崩壊するときは王国も崩壊するって前に姫さんが言ってたんだろ？　それはまだ変わってねえだろ」

ガガーランがやぶれかぶれはマズイ、と危険を述べた。守るべきは“民”だ、悪を倒すと言う“正義”ではない。悪を許さないだけでは犠牲は増え続けるのだ。

「だが、時間の猶予はそれほどないぞ？　……監視がついている」

イビルアイは相変わらず仮面だが、声に苦いものが混ざっている。

「そうね、下手なこととはできない。ここに帰ってきたのはセーフでしょうけど」

「トワイライトへの相談などできるはずもない」

「あいつら、人質の使い方を分かっている」

「どうということだ、ティナ」

「さらって人質にするのは相手に判断を間違わせたいとき。あとは身代金目的のものくらい。ここで言う“間違った判断”は蒼の薔薇がトワイライトに突っ込んで全滅すること。けれど、今回ののは誰かをどこかに監禁してるわけじゃない」

「……そういうことかよ。監禁してるわけじゃないから助け出せない。八本指と言う勢力が存在している限り脅しは有効ってか！　ちいと猶予があるだけは救いだがよ」

「そういうこと。ガガーランにしては珍しく飲み込みがいい」

「でも、それならどうすれば——」

一日、悩んで終わった。

「お昼、食べに行きましょうか」

何もしていなくても、それでもお腹は空く。そこそこのランクの食事処へ行つて、パンを食べている時にそれを見つけた。

「……え？ 紙」

ちぎったパンの中には小さな紙片が入っていた。そこには「黄金姫」とだけ書かれてあった。底知れない八本指の組織力——その一端がまざまざと示されていた。

「ラナー……」

それだけで十分だった。脅しなのだ、暗殺するぞと言う。悲しいことにクライムには六腕の暗殺を防げるほどの腕はない。そして、王都の警備に“それ”を期待するのも馬鹿げている。疑いようもなく、無理だ。実力的にも、政治的にも。

「やるしか……ないのね……」

そして夜に出かけるトワイライトをつけ、墓地に入ったところに声をかけた。

「あなたたちはズーラーノーンの一味だと疑われているわ」

そう言つて、武器を向ける。

「心当たりがないな」

蓮の返しには全く動揺が見られない。あらぬ疑いをかけられた動揺も、剣を向けられた恐れさえも。

「そう。でも、私たちはこうしなきゃいけない理由があるの」

「……そうか」

それでもなお、トワイライトは剣は抜かない。

「どういうつもり？」

「抜く必要がないだけだ」

「……そうー」

蒼の薔薇とトワイライトがぶつかる——いや、それはぶつかると言つていいのか。子供をあやすように適当に受け流す。……実力差は明らかだった、というより元々の実力ですら劣っているのに、雑念だらけの遠慮しまくりのラキュースが居ては傷を負わせられるはずもなかった。

しかもガガーランは仲間の盾になろうとするあまりに攻撃を邪魔

していた。攻撃委より防御に回った方が気楽とはいえ、やりすぎれば連携の邪魔だ。イビルアイが魔法を使おうとしても、直線状に仲間が来るように並ばれる。4対5ではあるが、実質的に4対3だ。

「……なんだと」

そんな茶番を10分ほど続けて——そのとき、蓮が動きを止めた。

「馬鹿な——マリイが？ 彼女がこの世界に生まれることなどありえないはず……」

それだけ言って黙り込む。実力なんて出せなかった蒼の薔薇はやはり、この異常にあたって何もできなかった。隙があれば突くということができなかつた。

「殺せ」

蓮が口に出した。

「……つくー」

ラキユースは剣を構えるが、攻撃は来ない。

「はいはい、行くの？」

後ろからズタズタになって死んでいる男二人をひきづる女が現れた。……あれは尾行していた男？

「証拠を残すべきではないと思うけどね」

もう一人。青年だ——ため息をついたと思ったら女が抱えた男二人の死体は消えていた。血痕さえも。

「竜王国に向かうぞ」

蓮はもはや興味はないとばかりにこちらを見ない。

「待ちなさい！ 何をするつもり？ もしズーラーノーンに関係のあることなら……」

「うるさい、黙れ。お前たちはこいつらと遊んでいるがいい。『サムン・スパイダー・6th／第6位階蜘蛛召喚』。お前はこいつらを死なない程度に足止めしてろ——」

行ってしまう。残されたのは、魔神のごとき威容の蜘蛛……

「くつく。はっはっは！ 超越者の至る第6位階であろうと使い方を誤ればこんなものだ！」

ハイになったイビルアイが足のない体で大笑いする。足止め、だから足がなければどうということもない。突っ込んでわざと足を吹っ飛ばさせたイビルアイが至近距離から魔法を放ちまくることですとその化け物を倒せた。

「無茶しすぎだぜ、イビルアイ」

ガガーランが抱える。

「待った。その役目は私がやるべき」

「いや、お前に任せると怖いぞティア。ガガーラン、このまま頼む」

「イビルアイ……私が弱いから——」

「おいおい、大げさだなラキユース。別に私が死んでもお前には蘇生魔法があるだろう。それに足が二本無くなったただけだ、墓地にでも置いてもらえればすぐに治るさ」

「でも、でも——」

死人が出なかったことは奇跡だ。これは召喚された蜘蛛が手加減がうまかったのではなく、イビルアイが危険を冒してまで早めに終わらせたから。でなければ、誰か死んでもおかしくなかったほどの実力差である。

まあ、ズーラーノーンの盟主かもしれないと思われる相手に対して、第6位階を警戒さえしないのはうっかりだろうが——挑む前の蒼の薔薇は全然覚悟が決まっていなかった。歴戦と言う言葉をどこかに置き忘れたかのような失態。

「これで追えなくなった」

イビルアイの苦り切った声に沈黙が下りた。